浜松城跡17

Hamamatsu Castle
The 26th・35th・43rd excavation report

浜松市教育委員会

2023年3月

Hamamatsu Municipal Board of Education,March,2023

浜松城跡 17

HAMAMATSU CASTLE

The 26th·35th·43rd excavation report

Hamamatsu Municipal Board of Education

2023

浜松市教育委員会

本丸北東隅石垣検出状況（北東から）

巻頭図版２

１　本丸北東隅石垣の詳細（北東から）

２　北面石垣構築状況（北東から）

３　石垣崩落痕跡検出状況（北西から）

二の丸・本丸・天守曲輪の景観（43 次調査：南東から）

巻頭図版４

１　二の丸御殿跡検出状況（東から）

２　礎石・雨落ち溝検出状況（南西から）

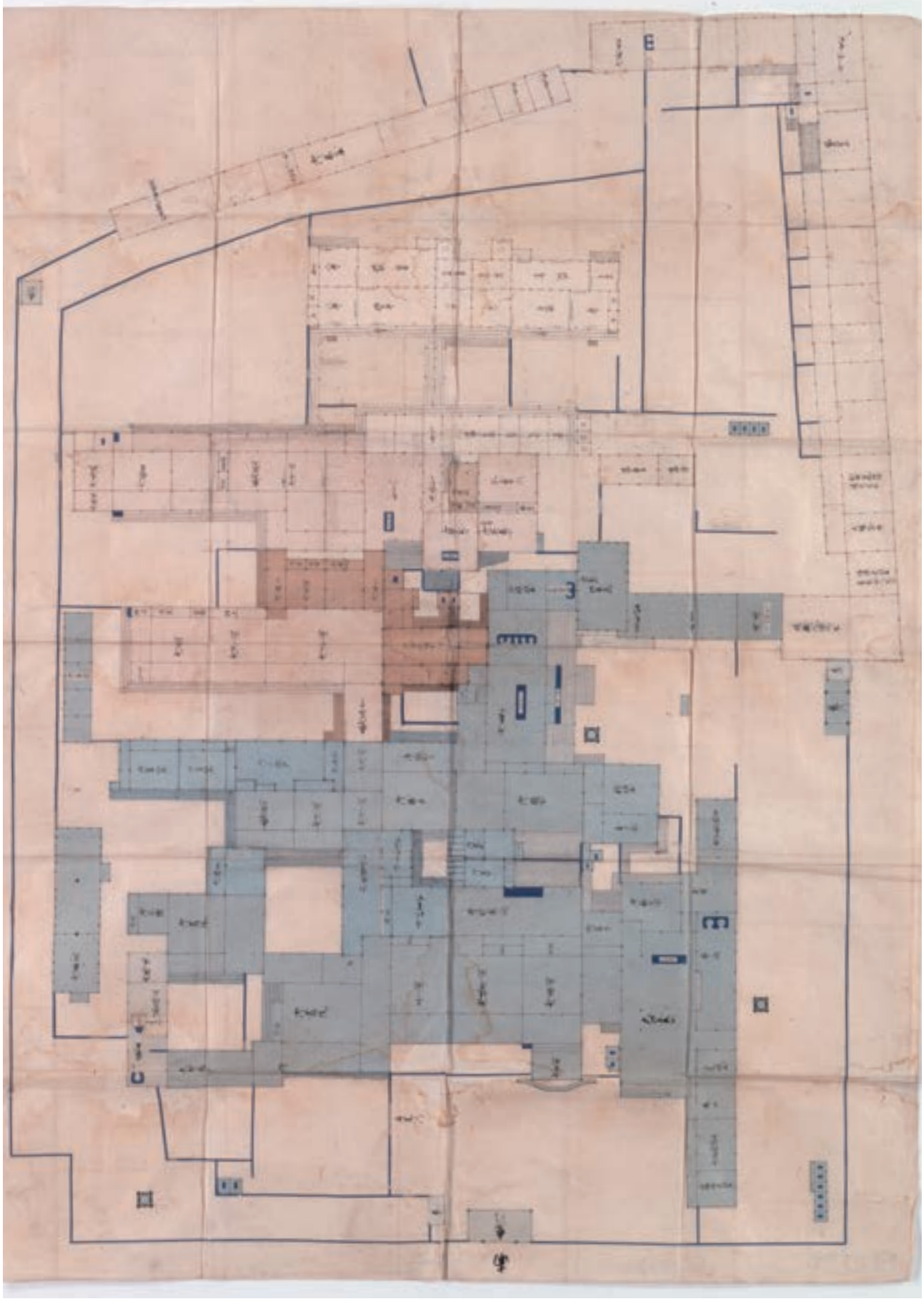
３　礎石据付穴・下層遺構検出状況（南から）

二の丸御殿跡　庭園遺構検出状況（北東から）

巻頭図版 6

1　庭園遺構検出状況（南西から）

2　庭園下層遺構検出状況（北西から）



浜松城二の丸絵図

巻頭図版 8

1　主要出土家紋瓦

2　出土磁器（延宝様式：384）

例　言

1　本書は、浜松市中区元城町 102 番地の 1 に所在する浜松城跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、浜松城公園長期整備構想に基づき旧元城小学校跡地における今後の活用方針決定の参考とするため、遺跡の有無や残存状況について情報を得るための確認調査として実施した。現地発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業は、浜松市都市整備部緑政課の依頼を受け、浜松市教育員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、浜松市から委託を受けた株式会社フジヤマが実務を支援した。調査に関わる費用は浜松市が負担した。

3　浜松城跡における対象地の確認調査は３年間にわたり実施した。年度間に中断期間が生じたため、年度毎に調査次数を付し、令和元年度調査を 26 次調査、令和２年度調査を 35 次調査、令和３年度調査を 43 次調査とした。

4　発掘調査にかかわる面積と期間は以下の通りである。

26次調査　調査面積　2,000 ㎡
　　調査期間　令和元年（2019）６月 20 日～令和２年３月 19 日
35次調査　調査面積　1,500 ㎡
　　調査期間　令和２年（2020）６月１日～令和３年３月 19 日
43次調査　調査面積　1,088 ㎡
　　調査期間　令和３年（2021）６月１日～令和４年３月 18 日

5　発掘調査は、和田達也（浜松市市民部文化財課）指示のもと、26 次・35 次調査を坂下俊介、43 次調査を長谷川敦章（株式会社フジヤマ）が実務を支援し、宮崎勝好・渥美賢吾・杉山佳奈（株式会社フジヤマ）が補佐した。

6　本書の執筆は、第１章・第４章を和田、第２章１・３（１）（２）・５（１）（２）（３）を長谷川、第２章のその他の部分と出土遺物を坂下、第３章１・２・３をパリノ・サーヴェイ株式会社、第３章４を楠賢司、三須寛希、竹林知大、酒井瑞帆、佐竹凌汰（静岡大学）が行った。現地写真撮影は、和田、坂下、長谷川が行い、遺物写真撮影は、和田、坂下、白鳥嶺（株式会社フジヤマ）が行った。編集は和田の総括のもと、実務を長谷川が行った。

7　調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

凡　例

1　本書で用いる座標値は世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海抜高である。

2　遺物番号は遺物の種別にかかわりなく、連番を付した。

3　土層・土器の色調は『標準土色帖』（農林水産省水産技術会議事務局監修）に準拠した。

4　本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りとする。

□ 土師器・土師質土器、■ 須恵器、■ 陶器、■ 磁器

5　本文中の引用文献等の表記については以下のように略す。

教育委員会→教委

（財）浜松市文化振興財団→浜文振

浜松市博物館→浜市博

6　現地調査及び本書の作成にあたり、以下の方々からご協力・ご指導を賜った。（敬称略、順不同）

磯田道史、大石泰史、加藤江莉、加藤理文、金子健一、河合修、北野博司、楠賢司、熊谷葉月、坂井清春、酒井瑞帆、笹原恵、佐竹凌汰、渋谷啓一、千田嘉博、高瀬要一、滝川重徳、武田寛生、竹林知大、中嶌茂、堀内秀樹、松井一明、三浦正幸、三須寛希、溝口彰啓、宗田好史、山下信一郎、山村亜希

浜 松 城 跡 17

目　次

巻頭図版
例　言
凡　例

第１章　序　論 …… 1
　1　調査にいたる経緯 …… 1
　2　調査の方法と経過 …… 2
　3　浜松城跡をめぐる環境 …… 5
　4　浜松城跡の調査履歴 …… 12

第２章　調査成果 …… 15
　1　調査の概要 …… 15
　2　基本層位 …… 17
　3　本丸の調査 …… 20
　4　御誕生場の調査 …… 36
　5　二の丸の調査 …… 38
　6　御城米蔵の調査 …… 69
　7　御城米蔵西の調査 …… 83

第３章　分　析 …… 111
　1　二の丸御殿庭園遺構における池内堆積土分析 …… 111
　2　三和土の組成分析 …… 123
　3　浜松城跡出土遺物のＸ線写真撮影 …… 133
　4　本丸石垣石材の採取地推定 …… 136

第４章　総　括 …… 155
　1　発掘調査の成果 …… 155
　2　調査の意義と今後の展望 …… 159

遺物観察表 …… 161

図　版

図　版　目　次

巻頭図版

1　本丸北東隅石垣検出状況（北東から）
2　1　本丸北東隅石垣の詳細（北東から）
　　2　北面石垣構築状況（北東から）
　　3　石垣崩落痕跡検出状況（北西から）
3　二の丸・本丸・天守曲輪の景観（43 次調査：南東から）
4　1　二の丸御殿跡検出状況（東から）
　　2　礎石・雨落ち溝検出状況（南西から）
　　3　礎石据付穴・下層遺構検出状況（南から）
5　二の丸御殿跡　庭園遺構検出状況（北東から）
6　1　庭園遺構検出状況（南西から）
　　2　庭園下層遺構検出状況（北西から）
7　浜松城二の丸絵図
8　1　主要出土家紋瓦
　　2　出土磁器（延宝様式：384）

図　版

1　本丸北東隅石垣（北東から）
2　本丸北東隅石垣　石垣崩落痕跡検出状況（北西から）
3　1　本丸北東隅石垣検出状況（北東から）
　　2　北面石垣の詳細（北から）
4　1　石垣背面構造検出状況（南西から）
　　2　石垣隅角部構築状況（北から）
　　3　石垣隅角部構築状況（東から）
　　4　北面石垣構築状況（北東から）
5　1　石垣崩落痕跡検出状況（西から）
　　2　崩落痕跡上かわらけ（2）出土状況（南西から）
　　3　瓦集積 1（SX18）検出状況（東から）
6　本丸東側調査状況（35 次調査：北東から）
7　1　本丸東堀跡（SD01）検出状況（南東から）
　　2　本丸東石垣崩落痕跡検出状況（南東から）
　　3　本丸東石垣崩落痕跡検出状況（南から）
8　1　本丸東堀跡（SD01）検出状況（北東から）
　　2　御誕生場・二の丸間の段差検出状況（南東から）
　　3　７次調査検出井戸（SE01）再検出状況（南西から）
9　二の丸御殿跡検出状況（北東から）
10　1　二の丸御殿跡　調査区全景（南から）
　　2　礎石・雨落ち溝検出状況（南西から）

11　1　二の丸御殿跡　礎石検出状況（南東から）
　　2　礎石及び土層堆積状況（東から）
　　3　礎石据付穴 1 検出状況（東から）
　　4　礎石据付穴 11 検出状況（南から）
12　1　雨落ち溝・瓦集積 3（SX19）検出状況（南東から）
　　2　瓦集積 3（SX19）検出状況（北西から）
13　二の丸御殿跡　庭園遺構検出状況（北東から）
14　1　庭園遺構　枯池内遺物出土状況（南西から）
　　2　庭園遺構検出状況（南東から）
15　1　庭園遺構　景石検出状況（北から）
　　2　庭園遺構　護岸石組み痕跡検出状況（東から）
　　3　庭園遺構上面　瓦集積 5（SX16）検出状況（北から）
　　4　庭園遺構　下層遺構（SD04）検出状況（南から）
　　5　庭園遺構　下層遺構検出状況（北から）
16　小穴列（SA01・SA02）検出状況（北東から）
17　瓦集積 15（SX09）検出状況（北東から）
18　1　瓦集積 7（SX13）検出状況（北西から）
　　2　瓦集積 8（SX03）検出状況（南西から）
　　3　瓦集積 9（SX02）検出状況（北東から）
　　4　御城米蔵西堀跡（SD02）検出状況（北東から）
　　5　瓦集積 11（SX17）検出状況（西から）
　　6　御城米蔵　遺物出土状況（南西から）
19　1　SD03 検出状況（西から）
　　2　SD05 検出状況（南東から）
　　3　礎石 7・礎石 8 検出状況（南東から）
　　4　瓦集積 12（SX12）検出状況（北東から）
　　5　瓦集積 12（SX12）鬼瓦（274）出土状況（北西から）
　　6　瓦集積 13（SX05）検出状況（南東から）
20　1　瓦集積 15（SX09）検出状況（北東から）
　　2　瓦集積 15（SX09）検出状況（南東から）
　　3　瓦集積 20（SX07）検出状況（北西から）
　　4　瓦集積 19（SX14）検出状況（北西から）
　　5　対象地北東隅（42 トレンチ）遺構検出状況（北西から）
　　6　対象地北東隅（44 トレンチ）遺構検出状況（北から）
21　主要出土遺物
22　本丸北東隅石垣周辺出土遺物
23　1　本丸東堀跡（SD01）出土遺物
　　2　瓦集積 2（SX20）出土遺物
24　1　中世遺構出土遺物
　　2　二の丸御殿跡出土遺物

25　1　二の丸御殿跡庭園遺構出土遺物
　　2　二の丸御殿域出土遺物
26　御城米蔵等出土遺物
27　主要出土鬼瓦
28　1　瓦集積 15 出土繋九目結紋鬼瓦（291）表面
　　2　瓦集積 15 出土繋九目結紋鬼瓦（291）裏面
29　1　瓦集積 15 出土繋九目結紋鬼瓦（292）表面
　　2　鬼瓦（292）裏面の龍頭
　　3　鬼瓦（291）底面
　　4　瓦集積 15 出土軒平瓦
30　1　SD03 出土遺物
　　2　瓦集積出土遺物
31　1　瓦集積 19 出土遺物
　　2　御城米蔵西出土遺物（１）
32　御城米蔵西出土遺物（２）

挿　図　目　次

Fig.1　浜松城跡の位置 …… 1
Fig.2　調査区の配置と基準点 …… 2
Fig.3　26 次・35 次・43 次調査の状況 …… 3
Fig.4　本丸北東隅石垣調査状況 …… 4
Fig.5　二の丸御殿調査状況 …… 4
Fig.6　二の丸御殿庭園遺構調査状況 …… 4
Fig.7　瓦集積調査状況 …… 4
Fig.8　浜松城の立地環境 …… 5
Fig.9　浜松城をめぐるできごとと時期区分 …… 6
Fig.10　浜松城跡の地形 …… 8
Fig.11　近世浜松城の構造 …… 9
Fig.12　浜松城と城下町の構造と変遷 …… 10
Fig.13　浜松城跡の調査位置と履歴 …… 12
Fig.14　７次調査の概要 …… 14
Fig.15　調査区全体図 …… 15
Fig.16　調査対象地区分図 …… 16
Fig.17　土層柱状図（東西方向） …… 18
Fig.18　土層柱状図（南北方向） …… 19
Fig.19　本丸の検出遺構 …… 20
Fig.20　本丸北東隅石垣詳細図（１）…… 21
Fig.21　本丸北東隅石垣詳細図（２）…… 22
Fig.22　瓦集積 1（SX18）詳細図 …… 23
Fig.23　本丸北東隅石垣出土遺物 …… 24
Fig.24　瓦集積 1（SX18）出土遺物 …… 25
Fig.25　谷地形詳細図 …… 27
Fig.26　本丸東堀跡（SD01）詳細図 …… 28
Fig.27　本丸東堀跡（SD01）土層断面図（１）…… 29
Fig.28　本丸東堀跡（SD01）土層断面図（２）…… 30
Fig.29　本丸東石垣崩落痕跡詳細図 …… 31
Fig.30　本丸東堀跡（SD01）出土遺物（１）…… 32
Fig.31　本丸東堀跡（SD01）出土遺物（２）…… 33
Fig.32　瓦集積 2（SX20）出土遺物（１）…… 34
Fig.33　瓦集積 2（SX20）出土遺物（２）…… 35
Fig.34　御誕生場詳細図 …… 36
Fig.35　御誕生場土層断面図 …… 37
Fig.36　二の丸の検出遺構全体図 …… 38
Fig.37　二の丸概略図 …… 39
Fig.38　SP01・SP02 詳細図 …… 40
Fig.39　SX21・SP09 ～ SP13 詳細図 …… 41
Fig.40　SD04 詳細図 …… 42
Fig.41　SX21・SP01・SP02・SD04 出土遺物 …… 42
Fig.42　二の丸御殿跡詳細図（１）…… 44
Fig.43　二の丸御殿跡詳細図（２）…… 45
Fig.44　瓦集積 3（SX19）・瓦集積 4（SX01）
　　出土状態図 …… 46
Fig.45　二の丸御殿跡出土遺物（１）…… 47
Fig.46　二の丸御殿跡出土遺物（２）…… 48
Fig.47　瓦集積 3（SX19）出土遺物（１）…… 49
Fig.48　瓦集積 3（SX19）出土遺物（２）…… 50
Fig.49　庭園遺構全体図 …… 51
Fig.50　下層遺構全体図 …… 52
Fig.51　枯山水庭園遺構全体図 …… 52
Fig.52　瓦集積 5（SX16）全体図 …… 53
Fig.53　庭園遺構土層断面図 …… 54
Fig.54　庭園遺構出土遺物（１）…… 55
Fig.55　庭園遺構出土遺物（２）…… 56
Fig.56　瓦集積 5（SX16）出土遺物 …… 57
Fig.57　瓦集積 6（SX08）詳細図 …… 57
Fig.58　瓦集積 7（SX13）・瓦集積 8（SX03）
　　出土状況図 …… 58

Fig.59 瓦集積 7（SX13）・瓦集積 8（SX03）土層断面図 …… 59
Fig.60 瓦集積 7（SX13）・瓦集積 8（SX03）出土遺物 …… 60
Fig.61 瓦集積 9（SX02）・SX22・SP03 詳細図… 61
Fig.62 瓦集積 9（SX02）・SP03 出土遺物 …… 62
Fig.63 礎石 7・礎石 8 詳細図 …… 63
Fig.64 御殿域内包含層等出土遺物（１） …… 64
Fig.65 御殿域内包含層等出土遺物（２） …… 65
Fig.66 近代石垣 1 詳細図 …… 66
Fig.67 近代石垣 1 検出状況 …… 66
Fig.68 近代石垣 2 検出状況 …… 66
Fig.69 近代石垣 3 検出状況 …… 66
Fig.70 32 トレンチ近代遺構詳細図 …… 67
Fig.71 煉瓦建物跡 …… 67
Fig.72 煉瓦造の構造物 …… 67
Fig.73 近現代出土遺物（１） …… 68
Fig.74 近現代出土遺物（２） …… 68
Fig.75 御城米蔵西堀跡（SD02）詳細図 …… 70
Fig.76 御城米蔵西堀跡（SD02）土層断面図（１） …… 71
Fig.77 御城米蔵西堀跡（SD02）土層断面図（２） …… 72
Fig.78 御城米蔵西堀跡（SD02）出土遺物 …… 73
Fig.79 瓦集積 10（SX06）詳細図 …… 74
Fig.80 瓦集積 11（SX17）詳細図…… 76
Fig.81 瓦集積 11（SX17）出土遺物（１） …… 77
Fig.82 瓦集積 11（SX17）出土遺物（２） …… 78
Fig.83 瓦集積 11（SX17）出土遺物（３） …… 79
Fig.84 SD03 詳細図 …… 80
Fig.85 SD05 詳細図 …… 81
Fig.86 SD03・御城米蔵域内包含層等出土遺物 …… 82
Fig.87 御城米蔵西の遺構全体図 …… 83
Fig.88 瓦集積 12（SX12）詳細図 …… 84
Fig.89 瓦集積 12（SX12）出土遺物（１） …… 85
Fig.90 瓦集積 12（SX12）出土遺物（２） …… 86
Fig.91 瓦集積 13（SX05）詳細図 …… 87
Fig.92 瓦集積 14（SX10）詳細図 …… 88
Fig.93 瓦集積 13（SX05）・瓦集積 14（SX10）出土遺物 …… 89
Fig.94 瓦集積 12（SX12）検出状況（北東から） 89
Fig.95 瓦集積 13（SX05）検出状況（北東から） 89
Fig.96 瓦集積 15（SX09）・瓦集積 16（SX11）詳細図 …… 90
Fig.97 瓦集積 15（SX09）出土遺物（１） …… 91
Fig.98 瓦集積 15（SX09）出土遺物（２） …… 92
Fig.99 瓦集積 15（SX09）出土遺物（３） …… 93
Fig.100 瓦集積 16（SX11）出土遺物…… 94
Fig.101 瓦集積 17（SX15）詳細図 …… 95
Fig.102 瓦集積 17（SX15）出土遺物 …… 95
Fig.103 瓦集積 18（SX04）検出状況（北西から） …… 96
Fig.104 瓦集積 19（SX14）検出状況（南東から） …… 96
Fig.105 瓦集積 18（SX04）詳細図 …… 97
Fig.106 瓦集積 18（SX04）出土遺物 …… 98
Fig.107 瓦集積 19（SX14）詳細図 …… 98
Fig.108 瓦集積 19（SX14）出土遺物（１） …… 99
Fig.109 瓦集積 19（SX14）出土遺物（２） …… 100
Fig.110 瓦集積 20（SX07）詳細図…… 101
Fig.111 瓦集積 20（SX07）出土遺物…… 101
Fig.112 SK01・SK02 詳細図 …… 102
Fig.113 SK03 詳細図 …… 103
Fig.114 SK01・SK02・SK03 出土遺物 …… 103
Fig.115 SA01・SA02 図 …… 104
Fig.116 42・44 トレンチ全体図 …… 104
Fig.117 調査対象地北東隅（42・44 トレンチ）詳細図…… 105
Fig.118 SP04 詳細図 …… 106
Fig.119 SP04・御城米蔵西出土遺物 …… 106
Fig.120 御城米蔵西出土遺物（２） …… 107
Fig.121 御城米蔵西出土遺物（３） …… 108
Fig.122 御城米蔵西出土遺物（４） …… 109
Fig.123 土壌サンプル採取位置 …… 112
Fig.124 暦年較正結果 …… 114
Fig.125 花粉化石分析プレパラート内の状況 …… 115
Fig.126 植物珪酸体 …… 117
Fig.127 植物珪酸体含有量 …… 118
Fig.128 炭化材（１） …… 119
Fig.129 炭化材（２） …… 120
Fig.130 胎土中の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（１） …… 125
Fig.131 胎土中の砕屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成（２） …… 126
Fig.132 ⑦の不定方位法Ｘ線回折チャート … 128
Fig.133 ⑧の不定方位法Ｘ線回折チャート … 128
Fig.134 ⑨の不定方位法Ｘ線回折チャート … 129
Fig.135 ⑩の不定方位法Ｘ線回折チャート … 129
Fig.136 ⑪の不定方位法Ｘ線回折チャート … 130
Fig.137 薄片（１） …… 131
Fig.138 薄片（２） …… 132
Fig.139 試料採取位置 …… 133
Fig.140 試料外観 …… 134
Fig.141 Ｘ線透過写真 …… 135
Fig.142 本丸北東隅石垣に用いられた調査対象石材 22 試料（A1 ～ 22）の位置 …… 136
Fig.143 本丸東石垣に用いられた調査対象石材 30 試料（B1 ～ 30）の位置 …… 137
Fig.144 堀尾領に分布する主な水域及び地質図 …… 138
Fig.145 本丸石垣に用いられた調査対象石材の研磨断面写真 …… 140
Fig.146 本丸石垣に用いられた調査対象石材の偏光顕微鏡写真…… 141
Fig.147 本丸石垣に用いられた調査対象石材の岩石種組成 …… 142
Fig.148 調査対象地域から採取したチャート 325 試料（Ch1 ～ 325）の位置 …… 144

Fig.149　本丸石垣と各地区におけるチャート中の（Al_2O_3 + Fe_2O_3）/（100 - SiO_2）の比較 … 145
Fig.150　調査対象地域から採取した石英片岩 48 試料（QS1 ～ 48）の位置 …… 146
Fig.151　本丸石垣と各地区における石英片岩中の（Al_2O_3 + Fe_2O_3）/（100 - SiO）の比較 … 147
Fig.152　調査対象地域から採取した苦鉄質片岩 174 試料（MS1 ～ 174）の位置…… 148
Fig.153　本丸石垣と各地点における苦鉄質片岩中の規格化された各種指標値の相関 …… 149
Fig.154　規格化された各種指標値に基づく苦鉄質片岩試料の分類（クラスター分析）… 150
Fig.155　調査対象地域から採取した石灰質片岩 22 試料（CS1 ～ 22）の位置 …… 151
Fig.156　本丸石垣と各地点における石灰質片岩中の規格化された各種指標値の相関 …… 152
Fig.157　規格化された各種指標値に基づく石灰質片岩試料の分類（クラスター分析）… 152
Fig.158　本丸石垣石材の採取候補域 …… 153
Fig.159　二の丸の調査成果 …… 156
Fig.160　浜松城中枢部の構造と変遷 …… 157
Fig.161　発掘調査成果と浜松城のできごと … 158

挿　表　目　次

Tab.1　浜松城跡の調査履歴と調査成果 …… 13
Tab.2　池内堆積土分析試料一覧 …… 111
Tab.3　放射性炭素年代測定結果 …… 113
Tab.4　花粉分析結果 …… 116
Tab.5　植物珪酸体分析結果 …… 117
Tab.6　樹種同定結果 …… 118
Tab.7　三和土組成成分分析試料一覧 …… 123
Tab.8　三和土中砕屑物の計数結果 …… 124
Tab.9　Ｘ線回折分析による検出鉱物 …… 126
Tab.10　岩石標準試料中の各元素濃度の回収率及び相対標準偏差（RSD）…… 139
Tab.11　本丸石垣に用いられた調査対象石材の岩石種 …… 142

第１章　序　論

１　調査にいたる経緯

遺跡の概要　浜松城跡は、静岡県浜松市中区に所在する中・近世城郭である。浜松城跡は、天守曲輪と本丸の一部を中心とした一帯が浜松市の史跡にされ、保護されている。昭和 25 年（1950）に浜松城公園として開設され、昭和 33 年（1958）に復興天守閣が建築された。市史跡に指定された浜松城跡の中枢部は現在、歴史ゾーン整備基本計画に基づき浜松城が持つ歴史情報を活かした都市公園を目指し整備が進められている。一方、明治６年（1873）の廃城以降、浜松城の二の丸や三の丸では市街地化が進み、城郭景観は失われているが近年の発掘調査の進展により、開発を免れた浜松城の痕跡は現在も市街地の地下に良好な状態で埋もれていることが明らかになった。

調査地の概要　調査対象地である静岡県浜松市中区元城町 102 番地の 1 は、近世浜松城の時代には本丸東側や御誕生場、二の丸、御城米蔵等が存在したことが江戸時代の絵図の記載から推定される場所である。廃城後、市街地化していたが、アジア太平洋戦争後の昭和 23 年（1948）には、浜松市立元城小学校が移転開設された。平成 23 年（2011）、元城小学校内において確認調査（７次調査）が行われ、戦国時代の井戸をはじめとした遺構や遺物の残存していることが確認された。平成 29 年（2017）、浜松市立中部中学校・元城小学校・北小学校が統合され浜松中部学園が開設された。その後、元城小学校の校舎や体育館等は解体され、公園用地となった。

確認調査の実施　浜松城公園長期整備構想に基づき旧元城小学校跡地の今後の活用方針を検討するため、浜松市都市整備部緑政課の依頼を受けた浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が、敷地内における遺構・遺物の残存状況や内容を把握するための確認調査を実施することになった。

現地調査は、令和元年（2019）６月 20 日から令和２年（2020）３月 19 日までの 26 次調査、令和２年６月１日から令和３年（2021）３月 19 日までの 35 次調査、令和３年６月１日から令和４年（2022）３月 18 日までの 43 次調査の３度に分けて実施した。調査面積は、26 次調査が 2,000 ㎡、35 次調査が 1,500 ㎡、43 次調査が 1,088 ㎡であり、３年間の調査面積は延べ 4,588 ㎡である。

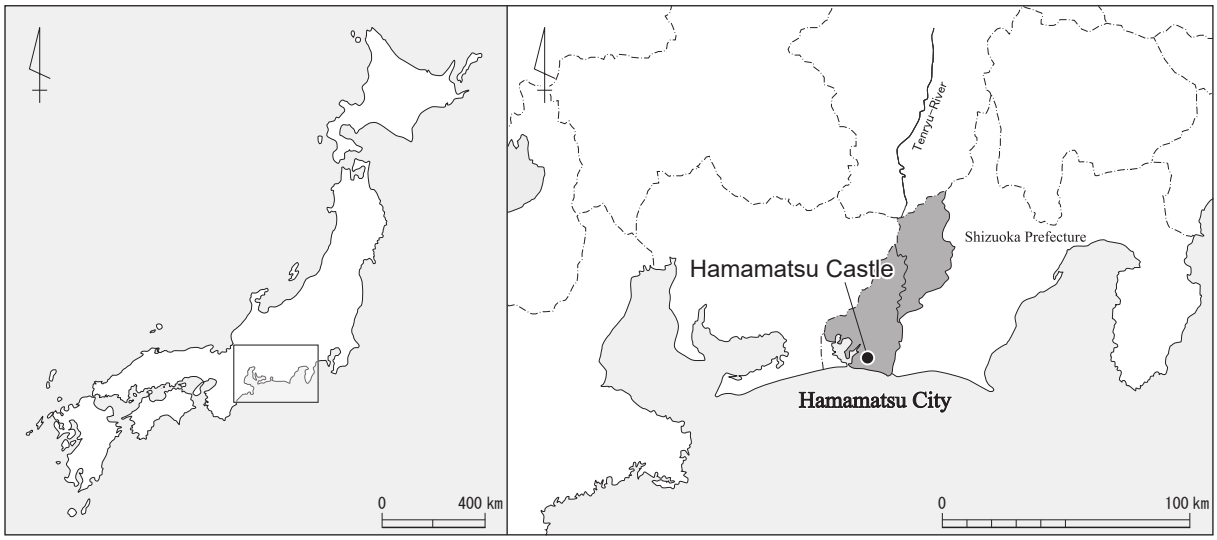


Fig.1　浜松城跡の位置

2　調査の方法と経過

調査区の設定　浜松城跡では、令和５年（2023）１月までに市史跡指定地内と周知の埋蔵文化財包蔵地内を合わせて 45 次にわたる発掘調査が実施されている。調査対象地では、平成 23 年（2011）に７次調査を実施し、浜松城に関わる歴史情報が残存していることが確認されている。

座標の設定　調査対象地周辺に設定されていた既知点を基にして調査対象地内に基準点を設定した。計測に用いた座標系は世界測地系である。

なお、26 次・35 次・43 次調査により調査対象地内に新設した基準点は、令和４年に行われた大河ドラマ館に関わる施設整備により失われている。

図面作成　図面の作成にあたっては、基準点を使用したトータルステーションによる計測と手測りによる実測を基本とし、遺構の特徴に合わせて、写真計測や三次元計測を併用した。

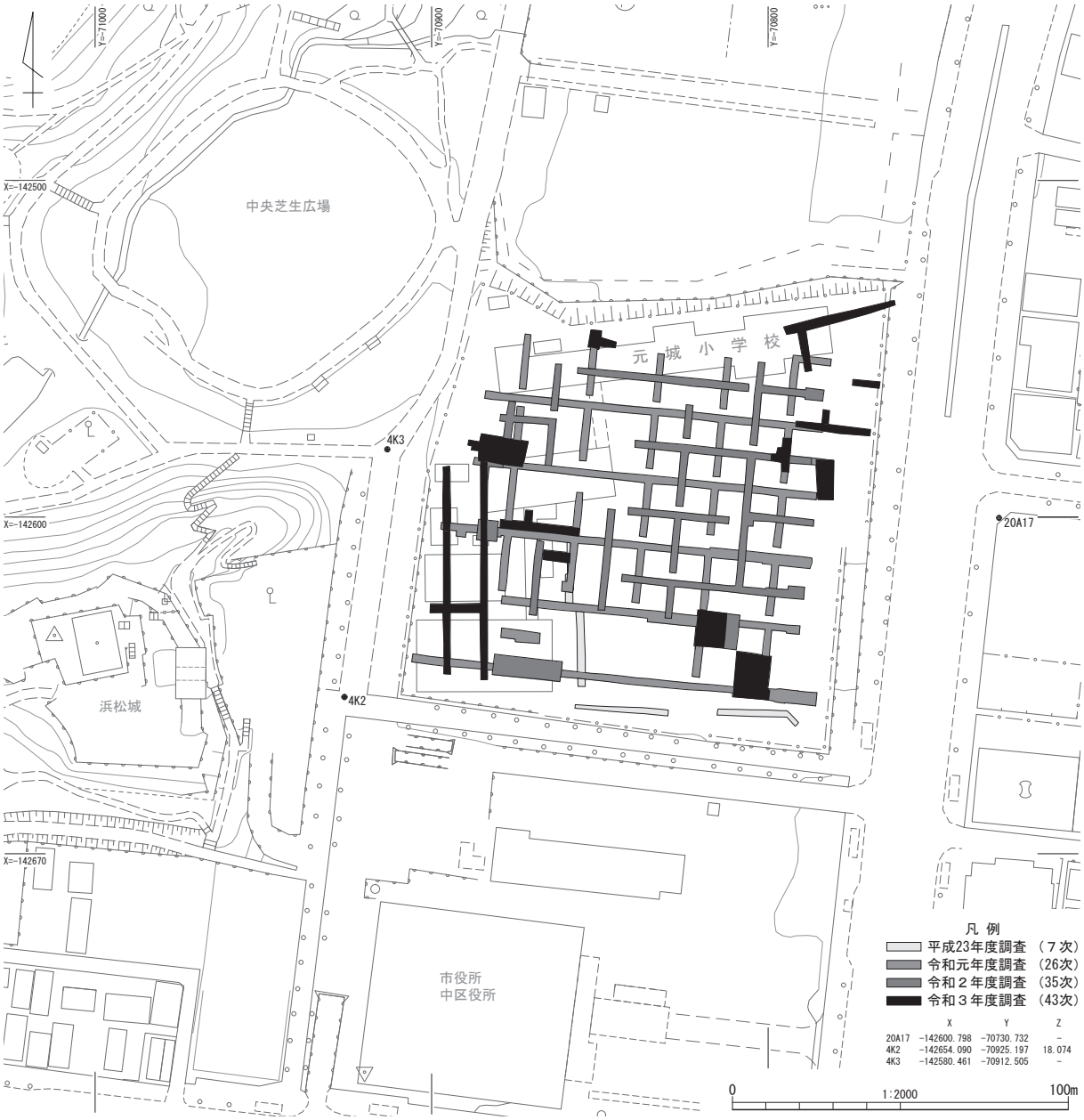


Fig.2　調査区の配置と基準点

現地調査　現地調査は、令和元年度から令和３年度にかけて年度毎に実施し、年度ごとに調査次数を付した。令和元年度調査が 26 次調査、令和２年度調査が 35 次調査、令和３年度調査が 43 次調査である。いずれの調査においても遺構の検出は平面検出を基本とし、必要に応じて最低限の範囲で遺構埋土の掘削や遺物の取り上げを伴う調査を行った。また、瓦集積をはじめとした遺物集積についても遺物の取り上げは特徴の把握に必要な最低限の規模に留め、現地保存した。

埋め戻しについては、遺構を検出した地点においては検出面に灰色砂を平面的に敷き均し、検出遺構の保存と掘削下限の明示を行った。また、現地保存した遺物集積や石垣の埋め戻しには、砂を詰めた土嚢や土木シートで上面を保護した上で埋め戻した。

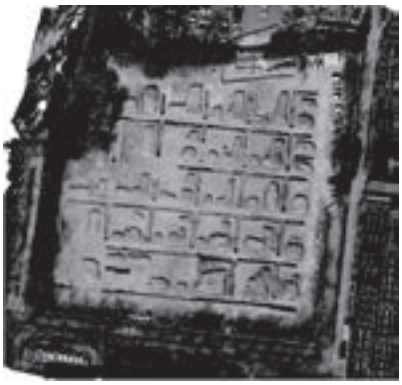
26 次調査は、令和元年６月 20 日に調査を開始した。調査対象地内における浜松城跡にかかわる遺構･遺物の残存状況や内容を把握するため約 20 m間隔の格子状に調査区を設定し､調査を行った。本丸東堀跡の検出や御誕生場と二の丸の段差の検出、二の丸御殿推定地における礎石の可能性を含む大型石材の検出、調査対象地の広範囲に点在する瓦集積等、近世浜松城に関わる重要な遺構を検出した点が特筆できる。浜松城の構造や変遷に関わる歴史情報が対象地の大部分に良好な状態で残存していることが明らかになった調査である。

35 次調査は、令和２年６月１日に調査を開始した。26 次調査の成果を踏まえ、より詳細な状況把握が必要な地点を主な対象として調査を行った。７月には本丸北東隅石垣を検出し、石垣の残存状況と範囲を確認するため平面的な調査を実施した。８月には本丸東堀跡の深さや構造を把握するため、堀跡に直交するようにトレンチを設定し、部分的に堀底まで発掘調査を行い、深さや構造、埋没過程に関わる情報を取得した。また、二の丸御殿部分の詳細な調査は、26 次調査において礎石の可能性があると認識した大型石材を検出した地点を中心に面的な調査区を設定し、実施した。大型石材に礎石据付穴がないこと、対になる礎石や礎石据付穴がみられないこと、周囲に礫が散布することが明らかになり、景石などの可能性を踏まえた調査が必要となった。

43 次調査は、令和３年６月 21 日に開始し、本丸北東隅石垣や二の丸御殿、対象地北東部（御城米蔵跡とその周辺）、対象地北西部の谷地形部分を主な調査対象とした。本丸北東隅石垣の残存状態の把握や石垣崩落痕跡の検出、二の丸御殿の礎石検出、二の丸御殿に付属する枯山水庭園遺構の検出等、浜松城中枢部の重要な遺構が良好な状態で残存していることが明らかとなった。

写真撮影　遺構や遺物等の写真の撮影は、6 × 7 版のカラーリバーサルフィルムと銀塩フィルムを主に用い、必要に応じて 4 × 5 版カラーリバーサルフィルムと銀塩フィルムを用いた撮影を行った。また、35mm カラーリバーサルフィルムおよびフルサイズセンサー搭載のデジタル一眼レフカメラを補助的に用いた。

26 次調査



35 次調査

43 次調査

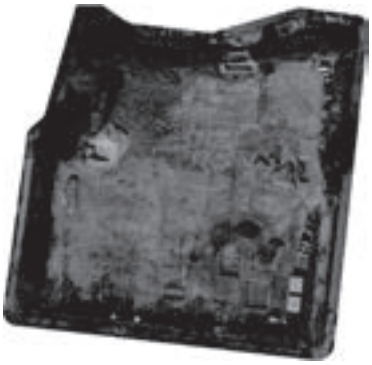


Fig.3　26 次・35 次・43 次調査の状況

整理作業　調査の記録や出土遺物の基礎整理作業は年度毎に実施し、それぞれの調査において発掘調査成果の概要をまとめた概要報告書を発行した。また、令和４年度に 26 次・35 次・43 次調査の成果を総括するため、遺構図面の編集や出土遺物の接合・復元、実測、写真撮影等の整理作業を実施し、報告書刊行を行った。

公開事業　現地調査中には年度毎に実施した現地説明会をはじめ、現場公開や小学生を対象とした発掘体験を実施した。

このほか、『浜松城発掘調査通信』を調査の進展に合わせて計９回発行し、調査成果を速報的に紹介した。

26 次調査では、令和元年９月８日に浜松市文化顧問・磯田道史氏を招き、小学生を対象とした講座と発掘体験を開催した。令和元年 10 月 19 日には、現地説明会を実施し、荒天ではあったものの、410 人が参加した。

35 次調査では、令和２年９月 26 日に現地説明会を実施し、719 人が参加した。また、12 月 19 日には本丸北東隅石垣の公開発掘を実施し、150 人が見学した。

43 次調査では、二の丸御殿礎石検出を契機として現地説明会の開催を検討したが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から開催を見送り、調査成果を紹介する動画を令和３年９月 18 日に公開した。また、二の丸御殿の礎石や二の丸御殿庭園遺構、本丸北東隅石垣の状況が明らかになった。令和３年 12 月 25 日に現地説明会を実施し 470 人が参加した。12 月 11・12 日には産業部観光・シティプロモーション課が主催した、浜松城プレミアム講座＆見学ツアー参加者計 120 人を対象として現場公開を行った。

Fig.4　本丸北東隅石垣調査状況

Fig.5　二の丸御殿調査状況

Fig.6　二の丸御殿庭園遺構調査状況

Fig.7　瓦集積調査状況

３　浜松城跡をめぐる環境

（１）地理的環境

立　地　浜松城跡は、三方原台地の東縁部に立地し、台地の東側を流れる天竜川や天竜川の分流・馬込川によって形成された河岸段丘の高位面から低位面にかけてみられる階段状の地形を活かして築かれた中世から近世にかけて地域の中核を担った城郭である。浜松城の天守曲輪から二の丸にかけての浜松城中枢部にあたる部分からは、天竜川により形成された地域内で最大の平野（遠州平野）を臨むことができる。

地　形　浜松城が築かれた三方原台地は、第四系台地に分類され、三方原礫層や曳馬層の堆積層が隆起して形成された台地であり、上面に著しい平坦面を持つ。台地は北から南西に向けて緩やかに傾斜しており、台地の北端にあたる天竜区二俣付近で海抜標高 130 m、台地の南西端で海抜標高 30 m程度である。三方原台地の南端には太平洋により比高差が 30 m程度ある海蝕崖が形成され、海岸平野を経て太平洋に続く。浜松城が立地する三方原台東縁部には、天竜川により形成された河岸段丘がみられ、一般的に上下２段の低位段丘がみられる。また、台地縁辺部には大小の開析谷が数多く認められる。浜松城は、台地と台地から連なる河岸段丘、台地縁辺部に発達した開析谷により形成された地形を活かして築かれた城郭である。

地　質　浜松城が立地する三方原台地は、下位から亜円礫と砂からなる曳馬砂礫層、円礫・亜円礫や亜角礫からなる三方原礫層、厚さ１～２m程度の赤色ローム層が重なる。なお、浜松城が築城された三方原台地南東部は、浜松城の石垣に用いられているチャートや片岩等の角礫や大型の岩石を含まない地質である。

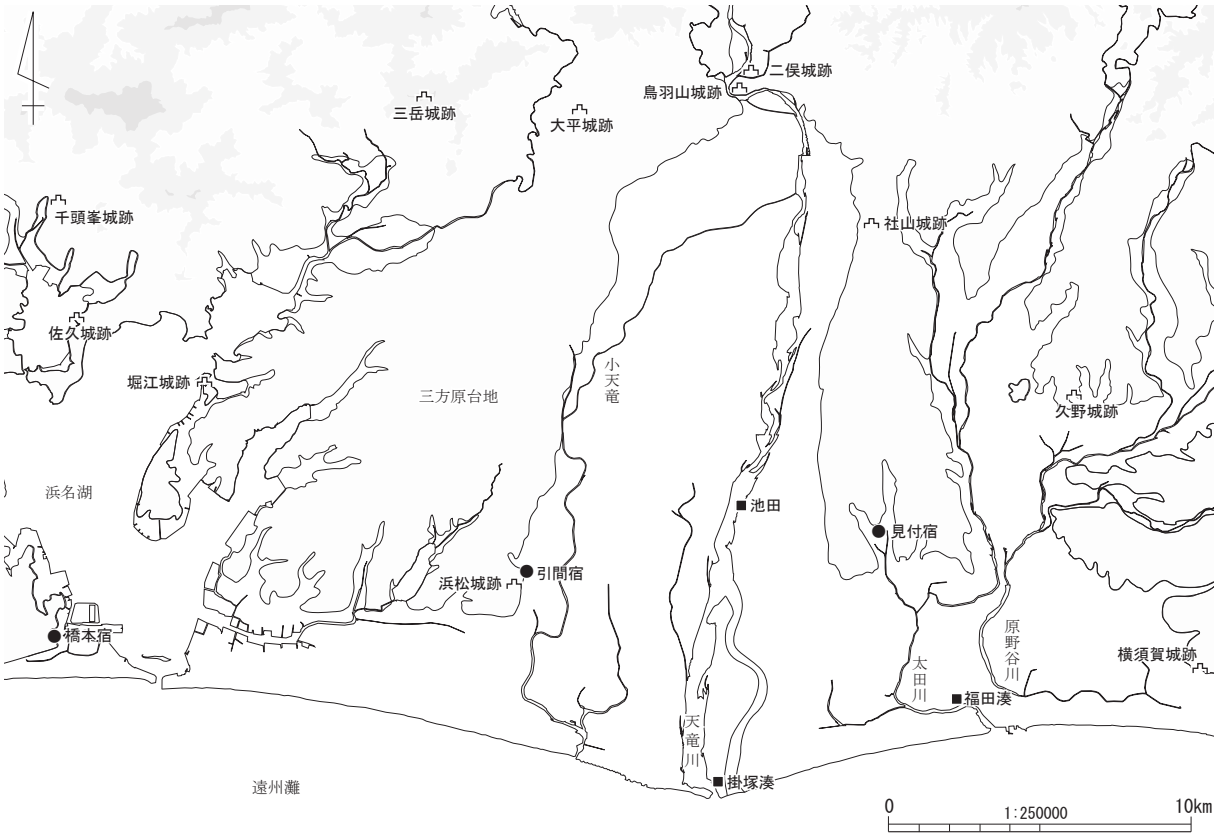


Fig.8　浜松城の立地環境

（2）歴史的環境

概　要　浜松城が所在する静岡県西部地方（遠江）には、戦国時代の城郭が数多く分布している。戦国時代の遠江は、戦国時代前半には斯波氏と今川氏が、戦国時代後半には今川氏、徳川氏、武田氏が領有をめぐり争った地域であり、引間城や浜松城もその舞台である。引間城の時期を含む浜松城と浜松城周辺の動向は、時代や城主の変化等をもとに第１段階：戦国時代前半（今川氏領有期、もしくはそれ以前）、第２段階：戦国時代後半（徳川氏領有期：1570 ～ 1590）、第３段階：安土桃山時代（堀尾氏領有期：1590 ～ 1600）、第４段階：江戸時代（譜代大名領有期：1603 ～ 1868）、第５段階：近代（1868 ～ 1945）、第６段階：現代（1945 ～現在）の６段階に整理されている（鈴木一 2021）。本書では城郭として使用されるよりも前の様相を０段階とする。

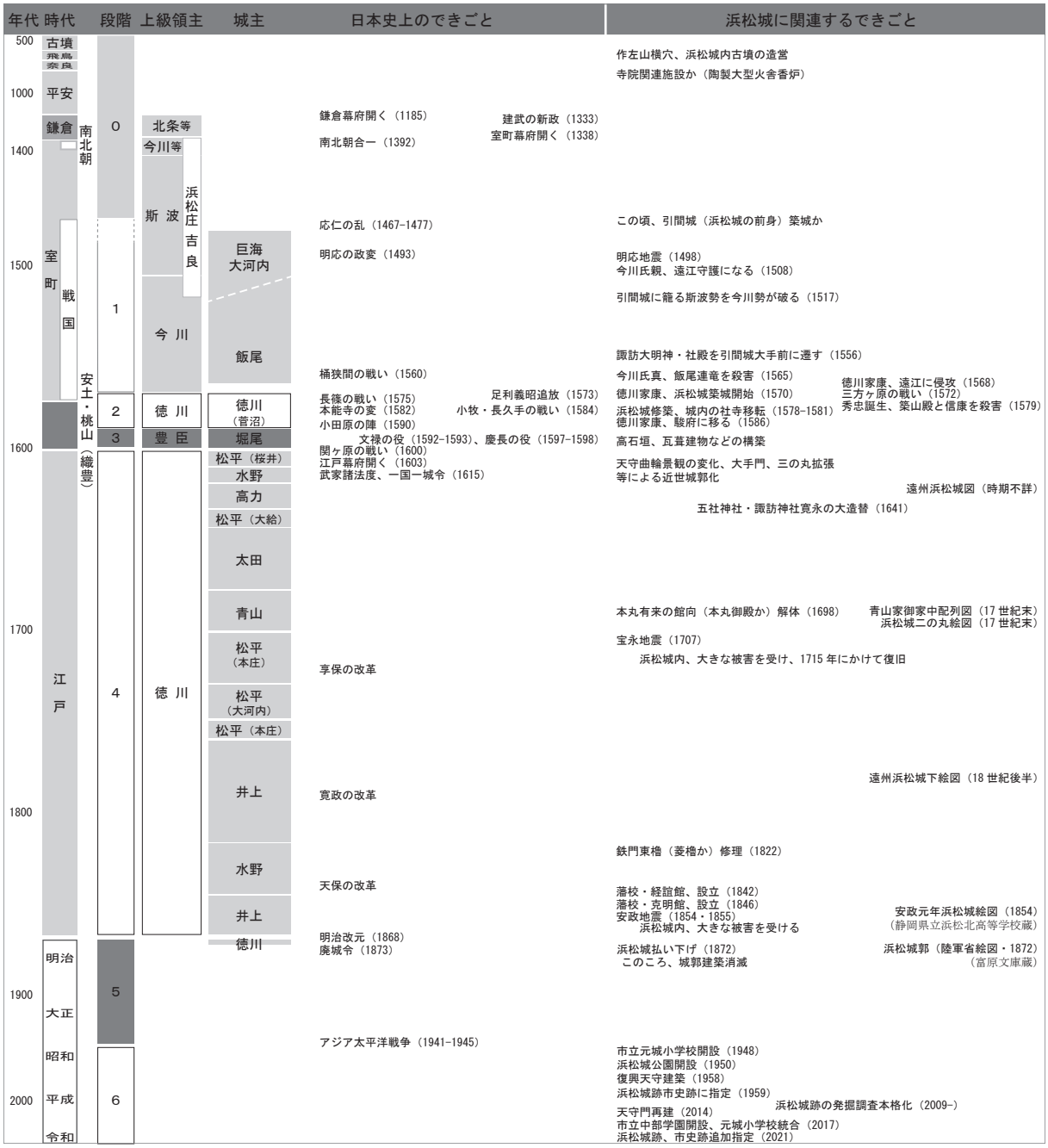


Fig.9　浜松城をめぐるできごとと時期区分

第０段階　第０段階は、引間城の時期を含む浜松城が築城されるよりも前の段階であり、浜松城が築かれた地には古墳や古代の集落が造営されていたことが知られている。浜松城の中枢部と谷を挟んで北側に位置する作左山の南向き斜面には７世紀の横穴墓である作左山横穴が所在し（向坂 1976・浜松市教委 2013）、浜松城内で実施した発掘調査では多くの地点で古墳時代の須恵器や土師器が一定量出土している。また、浜松城跡三の丸を対象とした 27 次調査（浜松市教委 2022a）や浜松城下町遺跡で実施した発掘調査（浜松市教委 2017c 等）では、須恵器や土師器の出土に加え、古代の遺構も認識でき、古代の集落が展開していたことが明らかである。このほか、天守曲輪の天守門付近において陶製の大型香炉の蓋が採集されていることや、石垣背面から宝篋印塔の部材や一石五輪塔が出土していることから天守曲輪とその周辺には古代や中世の寺院が存在した可能性も想定する必要がある。

第１段階　第１段階は、浜松城の前身城郭である引間城を地域拠点とし、斯波氏や吉良氏、今川氏が浜松とその周辺を領有した段階である。引間城は中世都市「ひくま」の西側にある丘陵上に築かれた。築城時期や築城時の城主については多様な記載があり明確ではない。『宗長日記』によると浜松庄の領主であった吉良氏の代官、巨海新左衛門尉が 15 世紀後半頃に築城したとされる。引間城が所在する遠江国は、守護職に応永 23 年（1416）まで今川氏、応永 23 年から永正５年（1508）まで斯波氏、永正５年から今川氏が任じられた。しかし斯波氏の遠江領有以降、斯波氏と今川氏による遠江争奪戦が繰り返されている。また、浜松は吉良氏が治める庄園（浜松庄）であり、地域情勢は複雑なものであった。引間城は遠江国守護が今川氏になった後も斯波・大河内勢力が今川勢力に対抗する拠点とするなど、衝突の舞台となっていた。永正 14 年（1517）、引間城で蜂起した斯波義達と斯波氏に従った大河内氏、巨海氏、高橋氏らを破り、遠江における反今川勢力を退けた。引間城には飯尾氏が配置され３代にわたり城主を務めた。

引間城は江戸時代の浜松城を描いた絵図にみられる「古城」と記載された部分にあたるとされ、土塁と堀に囲まれた４つの正方形状の曲輪によって構成されていたことがうかがえる。現在の元城町東照宮とその周辺の 150 m四方程度の範囲が絵図で古城と表記された部分にあたり、地形から形状をうかがい知ることができる。現在、元城町東照宮が鎮座する北西の曲輪では、発掘調査により 16 世紀代を中心とした時期のかわらけが多数出土し、饗宴などが行われた中心的な空間であったと想定できる。引間城とされる古城地区は、今川氏領有期や徳川氏領有期に城郭の主要な施設の一部として機能していたことが発掘調査成果からも明らかである。

第２段階　第２段階は、徳川家康が元亀元年（1570）に引間城に入城し、浜松城への改称や城域の拡張を伴う改築を行った段階である。永禄３年（1560）の桶狭間の戦いで今川義元が織田信長に敗れると、今川勢力は急激に衰退した。永禄８年（1565）、引間城を拠点とした飯尾連龍が松平家康（後の徳川家康）との内通の疑いにより今川氏真により殺害されるなど大きな混乱が生じた。永禄 11 年（1568）、徳川家康は武田信玄の駿河侵攻に呼応し遠江へと侵攻し、遠江を平定した。その後、天竜川東岸の見附で築城を行ったが、元亀元年（1570）に築城をやめ、天竜川西岸の引間城を南西に拡張して浜松城を築いた。徳川家康の遠江領有以降、武田信玄との領地を廻る争いが激化し、遠江のうち天竜川以東や北遠地域は、武田勢力の影響が及ぶところになった。武田勢力と徳川勢力の衝突は、元亀３年（1572）の三方ヶ原の戦いをはじめ、天正 10 年（1582）に戦国大名としての武田氏が滅亡するまで続いた。この間、徳川家康が浜松城を度々改築したことを「家忠日記」や寺社移転の記録からうかがい知ることができる。徳川家康は天正 14 年（1586）に駿府へと居城を移し、菅沼定政（後の土岐定政）が浜松城代として配置された。

第３段階　第３段階は、堀尾氏領有期（1590 ～ 1600）である。天正 18 年（1590）７月に終結した小田原の陣後、豊臣政権により大規模な転封が行われ、徳川家康は関東８国に移封され、岡崎城には田中吉政、吉田城には池田輝政、浜松城には堀尾吉晴、掛川城には山内一豊、駿府城には中村一氏といった豊臣恩顧の大名が配置された。

堀尾吉晴は、浜松城を高石垣や瓦葺き建物を持つ織豊系城郭へと改築した。堀尾氏在城期の浜松城は東側からの城郭景観を意識した構造であった。最高所には石塁で囲まれた天守曲輪を設け、天守曲輪内には天守台が構築されている。浜松城の天守を描いた絵図などの記録はなく、天守の詳細は不明であるが、天守台とその周辺から鯱瓦をはじめとした瓦が採集されていることや穴蔵に井戸を備えていることから、堀尾氏在城期には天守が存在したとみられる。また、天守曲輪内は遅くとも江戸時代の早い時期に 1.8 mほど埋め立てられており、織豊系城郭から絵図に見られる近世城郭に至る過程で大規模な改変が行われたことが明らかになっている（浜松市教委 2019）。

なお、堀尾氏は浜松城の支城として、山地と平野の境界部分に位置する二俣城と鳥羽山城において石垣を築くなど大規模な改築を行っている。

Fig.10　浜松城跡の地形

第４段階　第４段階は、江戸時代を迎え徳川譜代大名が浜松城主を務めた段階である。江戸時代の浜松城主は譜代大名の十家二十二代を数えた。浜松城は幕政の担い手や担い手候補が一定期間城主を務める役職的な要素を含んでいた。江戸時代の浜松城の規模や構造は、絵図からうかがい知ることができ、最大規模となった江戸時代には南北 600 m、東西 650 mの規模であった。制作年代が明らかな絵図は、元禄５年（1692）に描かれた「遠州浜松」（松江歴史館蔵）、元禄年間を中心とした時期に描かれた「青山家御家中配列図」（浜松市博物館蔵）、享保９年（1724）に写したとされる「遠州浜松城図」（蓬左文庫蔵）、安政元年（1854）に安政地震の被害状況を記録した「安政元年浜松城絵図」（静岡県立浜松北高等学校蔵）、安政地震後の浜松城を描いた「浜松元御城内絵図」（しろはく古地図と城の博物館富永文庫蔵）、明治５年（1872）の浜松城を陸軍省が測量した「浜松城郭」（しろはく古地図と城の博物館富永文庫蔵）があり、近世以降における浜松城の変化をうかがい知ることができる。いずれの絵図も三の丸の拡張や大手門が城域の南端に建築された後の姿を描いたものである。また、江戸時代よりも前の段階における浜松城の様子を示す文献史料等の記録は極めて少なく、江戸時代初頭に想定される改築の全貌は明らかでない。しかし、発掘調査成果からは、天守

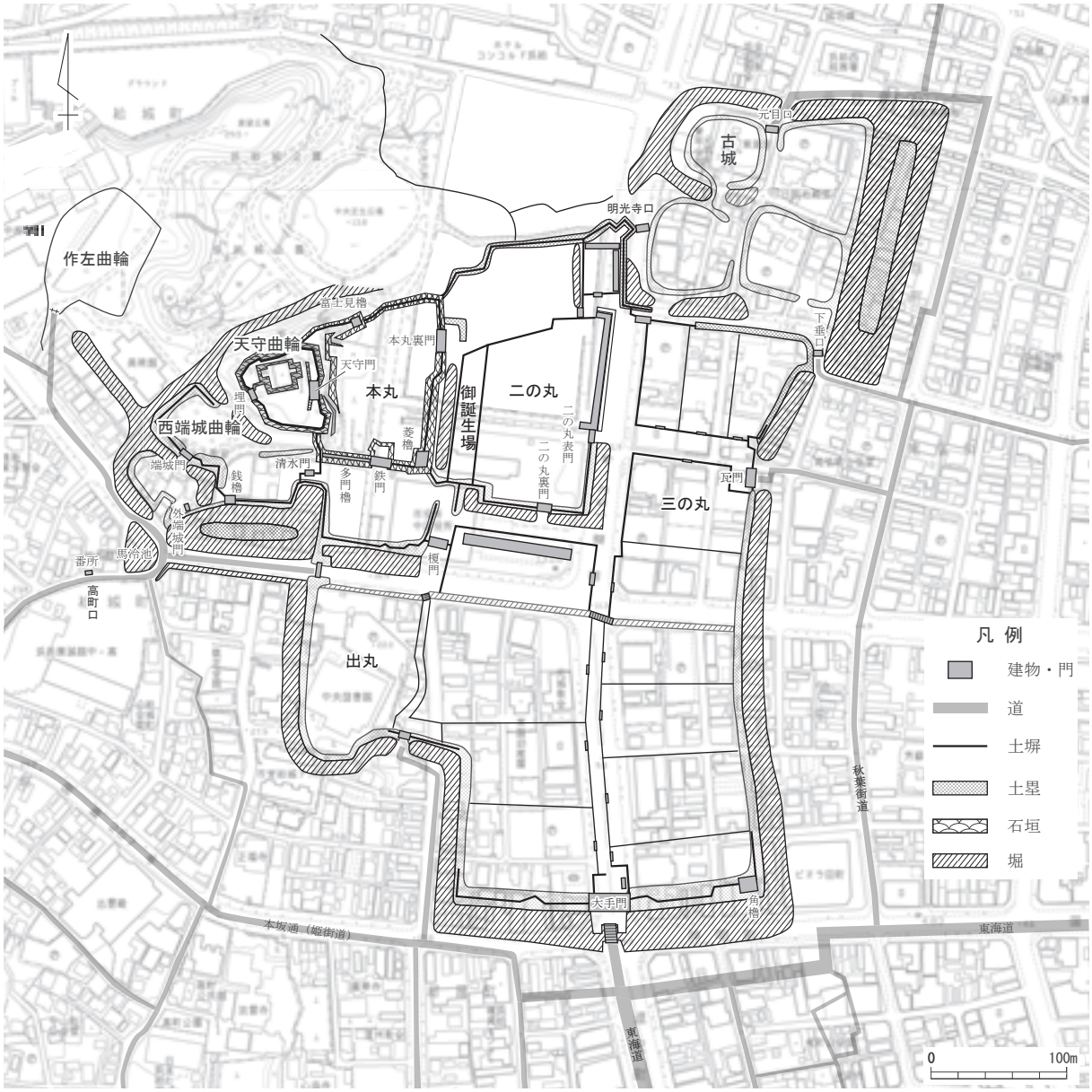
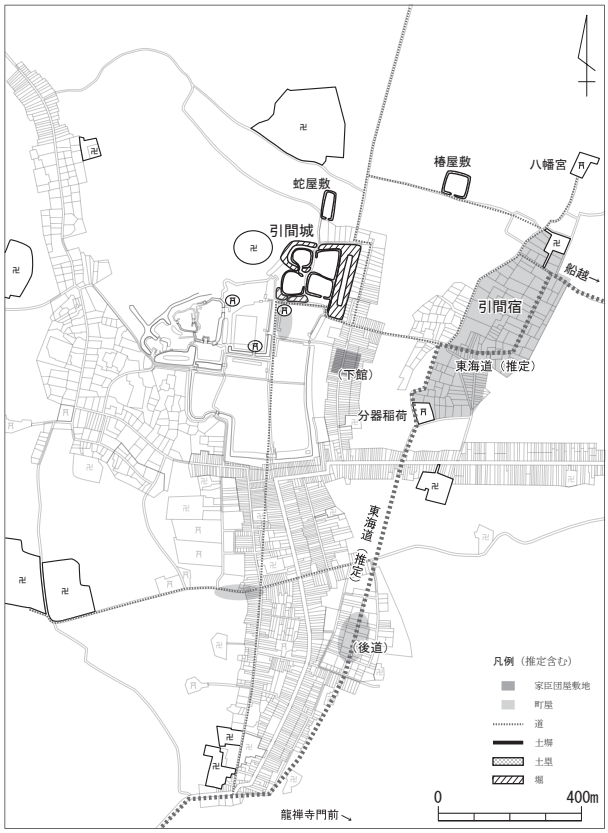
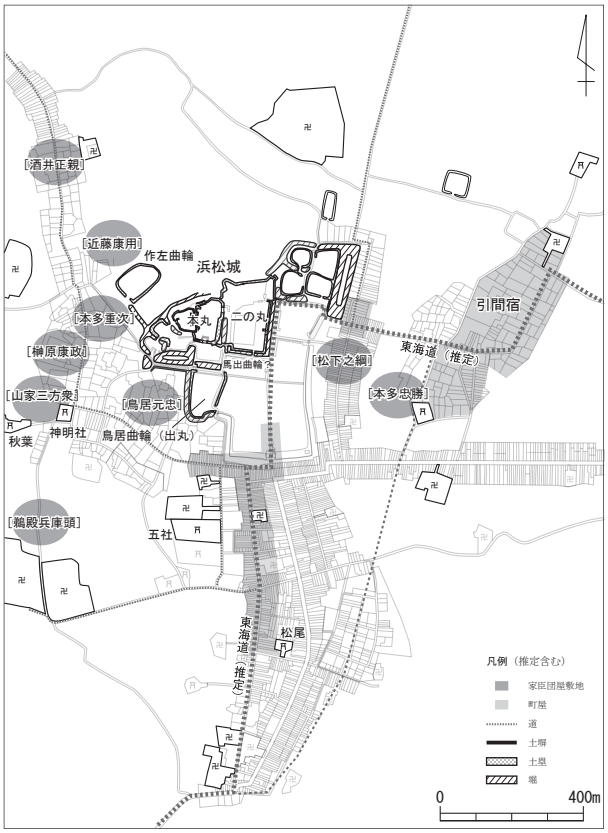


Fig.11　近世浜松城の構造

第１段階　今川支配下による引間城の時代（16 世紀前半）
引間城を引間宿西側の丘陵地に築城



第２段階　徳川家康による浜松城築城と改築（1580 年頃）
城域を南西側に拡張し、浜松城と名づけた



第３段階　堀尾吉晴による豊臣系城郭化の時代（1590 年代）
高い石垣と天守がそびえる東向きの城郭に改築

第４段階　徳川譜代による近世浜松城の時代（17 世紀以降）
天守は既に失われ、南向きの城郭に改築

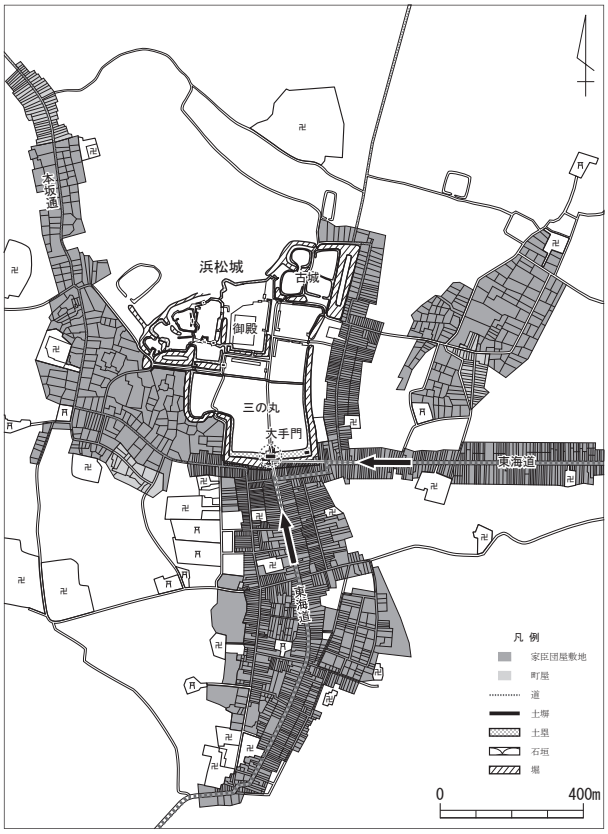


Fig.12　浜松城と城下町の構造と変遷（鈴木一 2014 を改変）

曲輪における２m程度の埋立てと建造物の整理（浜松市教委 2019）、二の丸御殿の建設（浜松市教委 2022c）、三の丸南堀の構築（浜松市教委 2021b）などが江戸時代の早い段階で行われたことが想定できる。

江戸時代に入り、二の丸御殿より上位に位置する天守曲輪や本丸は象徴的な空間へと変化したと捉えられる。天守門が近世浜松城の最高所に位置する天守曲輪の建造物といえ、江戸時代を通して浜松城を代表する建造物であったことがうかがえる。「寛政十三年　藤原姓青山氏系譜（抄）」（静岡県 1992）によると、本丸有来之館向（御殿か）について元禄 11 年（1698）に取壊しの許可を得た記載があり、本丸御殿とみられる建造物が元禄年間まで存在していたとみられる。

宝永４年（1707）の宝永地震では、浜松城に大きな被害が生じ、復旧が行われた。本庄松平氏の家譜「元禄十二～享保八年本庄家譜第二巻　資俊朝臣（抄）」（静岡県 1992）には、被災箇所と復旧に関わる記載があり、正徳５年（1715）にかけて復旧が行われたことが明らかである。このほか、嘉永７年（1854）に発生した安政地震による被災の記録が残る。明治５年（1872）に作成された「浜松城郭」との比較により、修理した建造物や修理していない石垣を推定することが可能である。

なお、第４段階と第５段階の画期を明治改元という歴史上のできごとをもとに設定しているが、考古学的調査による土地利用の画期は、明治５・６年に行われた払い下げに伴う城郭建造物の解体・処分の痕跡によって認識できるものと想定される。

第５段階　第５段階は、明治時代から昭和 20 年（1945）年のアジア太平洋戦争の終戦までの時期である。慶応４年（1868）、徳川宗家 16 代当主・徳川家達が駿河藩に移封され、浜松も所領に含まれた。明治６年（1873）１月 14 日太政官布告により全国の城郭が存城と廃城に分類され、浜松城は廃城となり、城郭建造物の払い下げや解体、土地の払い下げが行われた。なお、浜松城では、明治５年（1872）に先行して一部の城郭建築や土地の民間への払い下げが行われている。この間に浜松城に建てられた建造物は全て失われ、調査対象地では市街地化が進められた。測量を基に作成された陸軍省絵図（1872）に収められた「浜松城郭」には、二の丸御殿をはじめ当時存在した建造物が表現され、浜松城廃城直前の様子を知ることができる。

近代には旧幕臣を中心として旧浜松城内への東照宮の勧進や、旧浜松城内に残る鎧掛けの松など徳川将軍家に関わるものごとへの顕彰が行われた。

第６段階　第６段階はアジア太平洋戦争の終戦から現在に至る期間である。昭和 23 年（1948）年には調査対象地に浜松市立元城小学校が移転開校し、昭和 25 年（1950）には、浜松城跡を会場として開催された「浜松こども博覧会」を契機に会場とその周辺を含めた土地の公有地化が進められ、同年に浜松城公園が開設された。昭和 31 年（1956）には天守曲輪と周辺の土地が公有地となり、天守台の上には昭和 33 年（1958）に復興天守が建設された。復興天守が建築された翌年の昭和 34 年（1959）には、浜松市指定文化財の第１号として、浜松城跡は市史跡に指定された。

昭和 20 年代から昭和 30 年代にかけての戦後復興期を中心に浜松城跡とその周辺には市庁舎や学校、水泳場、体育館、動物園、図書館、美術館等が次々に建設され、公共施設が集中する地区となった。市域の拡大や高度経済成長期の終焉とともに、水泳場の閉鎖や動物園、体育館、小学校などの施設が移転したことを契機として、浜松城の歴史資源を活かした整備が計画・実施されている。

なお、浜松城跡に関わる発掘調査は、平成 21 年（2009）の４次調査（天守門建設に伴う確認調査）から本格化し、令和４年（2022）12 月現在、45 回を数える。三の丸等、近代以降に市街地化した範囲においても地中には浜松城に関わる歴史情報が埋もれていることが明らかになるなど、物理的な歴史情報の蓄積と精度の向上が進んでいる。

4　浜松城跡の調査履歴

概　要　浜松城跡では、令和５年（2023）１月までに 45 次にわたる発掘調査が実施されている。今回の調査対象地は、本丸や二の丸の一部にあたる。平成 23 年（2011）には、7 次調査が実施され、浜松城に関わる歴史情報が埋没していることが明らかになっている。また、市史跡の指定範囲とその周辺にあたる天守曲輪や本丸南広場、西端城曲輪等の整備に先立つ行政目的の発掘調査に加え、近年では、市街地化が進行した三の丸における公共工事や民間開発事業等に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査も実施し、浜松城の規模や構造、変遷が明らかになりつつある。

中枢部の調査　近世浜松城において天守曲輪・本丸・二の丸・西端城曲輪等と呼ばれた範囲を中枢部とする。中枢部における発掘調査は、都市公園浜松城公園の整備に関わる調査や、市役所庁舎建築に関わる調査、浜松城公園歴史ゾーンに含まれる天守曲輪や天守門、富士見櫓を中心とした整備に関わる保存目的の調査、浜松城公園長期整備構想推進事業に関わる旧元城小学校跡地の確認調査が行われ、調査成果が蓄積されている。天守曲輪の発掘調査成果を中心として、浜松城中枢部の構造が江戸時代の早い段階を画期として大きく変貌していることが明らかになった。

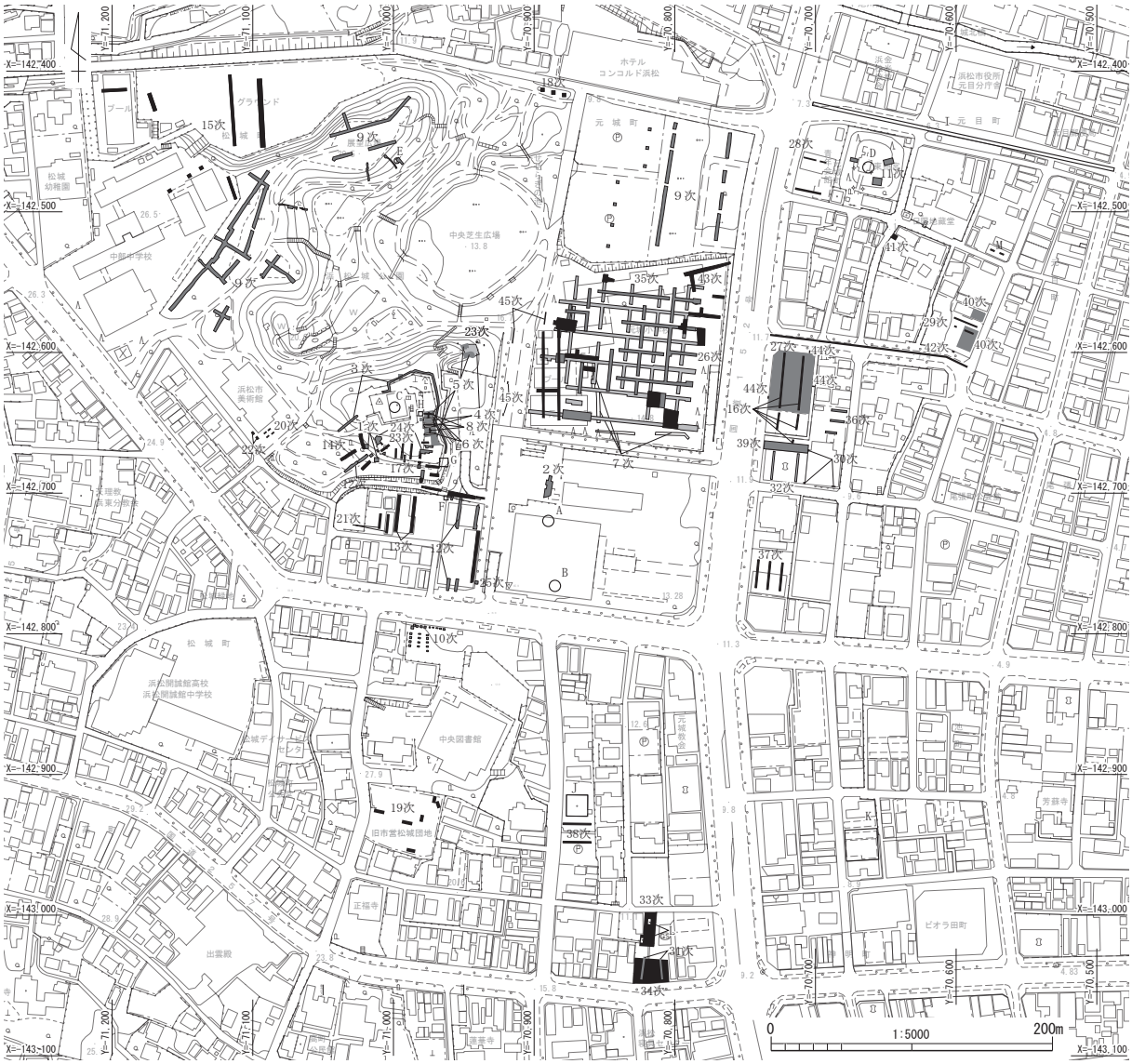


Fig.13　浜松城跡の調査位置と履歴

Tab.1　浜松城跡の調査履歴と調査成果

発掘調査等

次 数	年 次	調査事由	成果等	文 献
１次	1960	浜松農工高による確認調査		浜松市教委1996
２次	1979	市役所地下駐車場整備に伴う工事立会	工事時に石垣が発見され、測量等を実施	浜松市教委1996
３次	1984	電線地中化工事に伴う工事立会	天守曲輪周辺の調査で、未知の石垣等を確認	浜松市教委1996
４次	2009	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓の基礎等を確認	浜文振2010
５次	2010	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓の確認調査。天守門櫓部の根石列等を確認	浜文振2011
６次	2011	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門跡の確認調査で、櫓台石垣の裏込石等を確認	浜文振2012a
７次	2011	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	二の丸・御誕生場の確認調査で井戸等を確認	浜文振2012b
８次	2012	天守門復元工事に伴う確認調査	天守門に付随する瓦積み排水設備の全体像を確認	浜松市教委2013a
９次	2012	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	作左曲輪等の確認調査で柱穴等を確認、作左横穴を再検出	浜松市教委2013b
10次	2014	市役所駐輪場整備に伴う本発掘調査	溝等を確認	浜松市教委2015b
11次	2014	遺構残存状況把握のための確認調査	引間城跡（古城）の確認調査で、土塁を確認。かわらけが多数出土	浜松市教委2016b
12次	2014	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側石垣、本丸南側の空堀跡、西端城曲輪、登り塀を確認	浜松市教委2015b
13次	2015	市役所駐車場整備に伴う確認調査	12次調査で確認したものと同一の可能性がある大型溝を確認	浜松市教委2016a
14次	2015	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側石垣、本丸南側の空堀跡、西端城曲輪、登り塀を確認	浜松市教委2016a
15次	2015	学校建設に伴う確認調査	浜松城跡の範囲内であるが、城郭に係る遺構は確認できず	浜松市教委2016a
16次	2015	社屋建設に伴う確認調査	三の丸跡に係る遺構は未確認だが、戦国期以前の遺構と遺物を確認	浜松市教委2017a
17次	2015	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守曲輪南側土塁の遺存状態、土塁内側石垣基底部、曲輪内整地層を確認	浜松市教委2018a
18次	2015	道路拡幅に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委2017a
19次	2016	用地売買に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委2017a
20次	2015	美術館施設建設に伴う確認調査	堀とみられる落ち込みを確認	浜松市教委2018b
21次	2015	個人住宅建設に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委2018b
22次	2015	美術館施設建設に伴う確認調査	20次調査で確認したものと同一の可能性のある堀跡を確認	浜松市教委2018b
23次	2018	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	富士見櫓跡周辺で石垣、天守曲輪内で高さ2m以上の石塁と瓦集積を確認	浜松市教委2018a
24次	2018	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守曲輪内に、櫓と考えられる基礎と瓦溜まりを確認	浜松市教委2019
25次	2018	水道管敷設に伴う工事立会	近世～近代の遺物を確認	浜松市教委2020a
26次	2019	浜松城公園長期整備構想に関わる確認調査	浜松城の本丸御誕生場、二の丸の構造を確認	本書、浜松市教委2020b
27次	2019	社屋建設に伴う本発掘調査	引間城に関連する堀を確認	浜松市教委2022a
28次	2019	事務所建設に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委2021a
29次	2019	集合住宅建設に伴う確認調査	下垂口北側の堀を確認（40次調査の確認調査）	浜松市教委2022d
30次	2019	社屋建設に伴う確認調査	遺構は確認されなかったが、旧地形の残存を確認	浜松市教委2021a
31次	2019	集合住宅建設に伴う確認調査	大手門西側の堀跡を確認（34次調査の確認調査）	浜松市教委2021b
32次	2019	社屋建設に伴う確認調査	既存建物によって、遺跡の大半は消滅	浜松市教委2021a
33次	2020	集合住宅建設に伴う本発掘調査	近世～近代の土坑・小穴・溝等を確認	浜松市教委2021b
34次	2020	集合住宅建設に伴う本発掘調査	大手門西側で、近世浜松城の南堀を検出。	浜松市教委2021b
35次	2020	浜松城公園長期整備構想に関わる確認調査	浜松城の本丸、御誕生場、二の丸の構造を確認（26次調査から継続）	本書、浜松市教委2021c
36次	2020	社屋建設に伴う確認調査	三の丸において戦国時代～江戸時代の遺物を確認	浜松市教委2022b
37次	2020	宿泊施設建設に伴う確認調査	三の丸において溝や井戸のほか、多数の小穴を検出	浜松市教委2022b
38次	2020	遺構残存状況把握のための確認調査	三の丸西側の堀を確認	浜松市教委2022b
39次	2020	社屋建設に伴う本発掘調査	浜松城三の丸の遺構や引間城に関連する溝を確認	浜松市教委2022a
40次	2020	集合住宅建設に伴う本発掘調査	下垂口北側の堀を確認	浜松市教委2022d
41次	2020	駐車場造成に伴う工事立会い	引間城（古城）に関連する堀を確認	浜松市教委2023
42次	2021	上水道管・ガス管埋設に伴う工事立会い	古城南西堀、古城南堀、浜松城東堀を確認	浜松市教委2023
43次	2021	浜松城公園長期整備構想に関わる確認調査	本丸北東隅石垣・二の丸御殿・庭園を確認（26次・35次から継続）	本書、浜松市教委2022c
44次	2022	下水道管埋設に伴う本発掘調査	27次調査SD02の一部を検出	2023年度報告予定
45次	2022	浜松城公園整備に関わる確認調査	本丸北側斜面を確認	2023年度報告予定

工事立会い等（主要なもの）

記 号	年 次	事 由	成果等	文 献
A	1914	中堀埋立工事	須恵器出土	静岡県1930・浜松市教委1996
B	1957	市役所庁舎建設	須恵器出土	浜松市教委1996
C	1958	復興天守建設	天守台で井戸跡を確認	浜松市教委1996
D	1960	元城町東照宮社殿建設	境内より陶器等が出土	浜松市教委1996
E	1964	動物園内施設整備	作左山横穴を確認	向坂1976・浜松市教委1996
F	1985	駐車場擁壁工事	本丸南側石垣を確認	浜松市教委1996
G	1993	天守曲輪石垣解体修理	天守台付櫓の改修や天守曲輪南東部の石垣の構造を確認	浜松市教委1996
H	2012	天守曲輪ミカン改植	瓦が出土	浜松市教委2013c
I	2012	上水道工事	引間城（古城）北側の堀を確認	浜松市教委2014
J	2013	市役所南別館解体工事	出丸から三の丸にかけての堀を確認	浜松市教委2015a
K	2014	集合住宅建設	三の丸東側の堀を確認	浜松市教委2016c
L	2019	既存建造物解体工事	小穴を確認し、瓦が出土（33次調査対象地）	浜松市教委2021b
M	2021	既存建造物解体工事	基盤層を確認、浜松城東堀の位置を推定する情報を取得	浜松市教委2022b
N	2022	電気・通信設備埋設工事	西端城曲輪西側の堀埋め立て土を確認	2023年度報告予定

※2020 年以降、工事立会い調査であっても、明確な遺構や遺物を確認した調査については、調査次数を付し、発掘調査等に記載した。

三の丸・古城地区の調査　平成 27 年度（2015）以降、三の丸や古城地区のように市街地化が顕著な地点においても引間城の時代を含めた浜松城の痕跡が確認できることが明らかになった。三の丸を対象として実施した 27 次調査や 42 次調査では、堀跡をはじめ多くの遺構や遺物が検出された（浜松市教委 2022a・2023）。また、29 次・40 次調査では東堀を、31 次・34 次調査では南堀を検出し、発掘調査成果によって物理的根拠をもって近世浜松城の範囲を示すことができるようになった。このほか、元城町東照宮が鎮座する地点を中心として引間城に関わる調査成果も蓄積されている。11 次調査では戦国時代に構築された土塁の確認や戦国時代のかわらけが大量に出土したことにより、江戸時代に古城と呼ばれた地点に戦国時代の城郭が存在することが明確になった（浜松市教委 2016b）。41 次調査では戦国時代の堀跡を検出し、埋土中から多量のかわらけが出土した。

旧元城小学校跡地の調査　旧元城小学校跡地は、本書において報告する 26 次・35 次・43 次調査の調査対象地であり、近世浜松城における本丸東側・御誕生場・二の丸の北側部分にあたる。調査対象地が小学校敷地として使用されていた平成 23 年（2011）に実施した 7 次調査は、元城小学校の敷地内に浜松城に関わる遺構や遺物が埋没していることを初めて把握した調査である。御誕生場と二の丸の間には検出面を基準にすると 1 m 以上の段差があることが明らかになり、上段面が御誕生場、下段面が二の丸に該当することが明らかになった。上段面では、素掘りの井戸（7 次調査 SE01）を検出し、出土遺物の特徴から 16 世紀のうちに埋められたものと捉えられる。下段面では近世の包含層や遺構を検出した。本書にて報告する令和元年度から令和 3 年度にかけて実施した 26 次・35 次・43 次調査では、7 次調査における検出遺構に加え、本丸の規模を示す石垣や堀跡の検出、二の丸御殿等をはじめ近世浜松城における重要な遺構や遺物が良好な状態で残存していることが明らかになった。

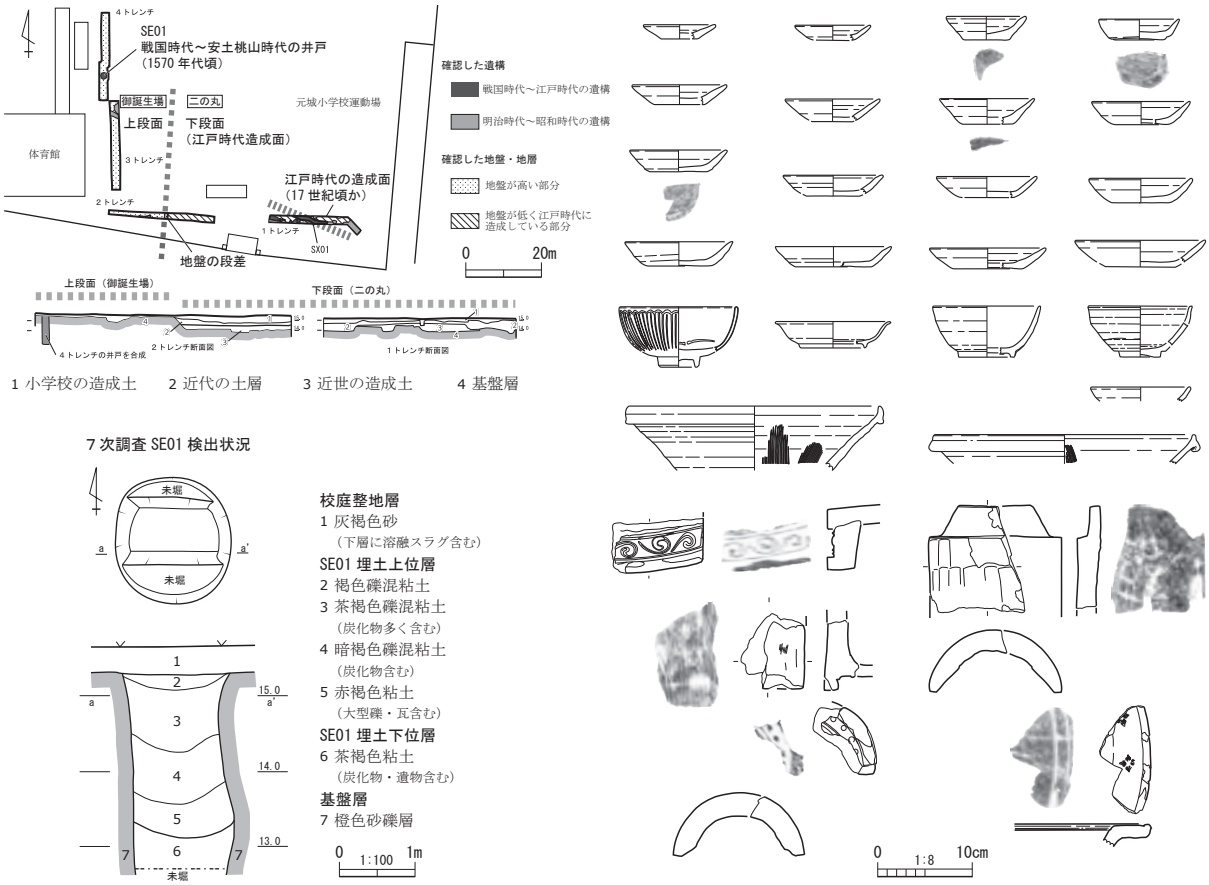


Fig.14　7 次調査の概要

第２章　調査成果

１　調査の概要

調査地の概要　調査対象地である旧元城小学校跡地は、対象地外に残る地形や石垣等の露出遺構と近世の浜松城を描いた絵図の対比から、本丸北東部、御誕生場北半、二の丸北半、御城米蔵の範囲に該当すると想定できる。しかし、近代以降の土地利用により調査段階では平坦な土地となっており、城郭の構造を示す起伏は認識できない状態であった。遺跡の有無に関わる情報は平成 23 年（2011）に実施した 7 次調査の成果に限られていた。対象地内における浜松城跡に関わる遺構や遺物の残存状況や内容について把握するため対象地全域にトレンチを設定し調査を実施した。

Fig.15　調査区全体図

調査成果　令和元年度（2019）から令和３年度（2021）までの３年間にわたり実施した 26 次・35 次・43 次調査により、石垣や堀跡、段差、礎石をはじめとした建物遺構、庭園、瓦集積等を検出した。これらは空間の構造や性格を示す遺構であり、本丸、御誕生場、二の丸、御城米蔵の位置や範囲を発掘調査成果による物理的な根拠をもって示すことができるようになった。また、近世浜松城の城郭遺構の下層を中心に戦国時代に遡る遺構を検出した。中世城郭から近世城郭に至る重層的な歴史情報が良好な状態で残存していることが明らかになった。

地域区分　調査成果は、戦国時代から江戸時代に至るまでの重層的なものであるが、最も名称と発掘調査成果が比定可能な近世の名称を地区名称に用いる。

本丸北東隅石垣と本丸東堀跡に囲まれた対象地南西部を「本丸」とする。本丸と二の丸に挟まれた対象地南側中央部を「御誕生場」とする。対象地南東部の段差に囲まれた空間を「二の丸」とする。二の丸内からは二の丸御殿の建物遺構や庭園遺構を検出した。対象地は奥御殿にあたり、表御殿は対象地外南側である。御城米蔵西堀跡とその東側にあたる調査対象地北東部を「御城米蔵」とする。御城米蔵西堀跡から本丸北東部にかけての範囲は、明治時代以降では「花畑」と記載されるが、近世におけるこの空間の名称は不明なため、「御城米蔵西」とする。

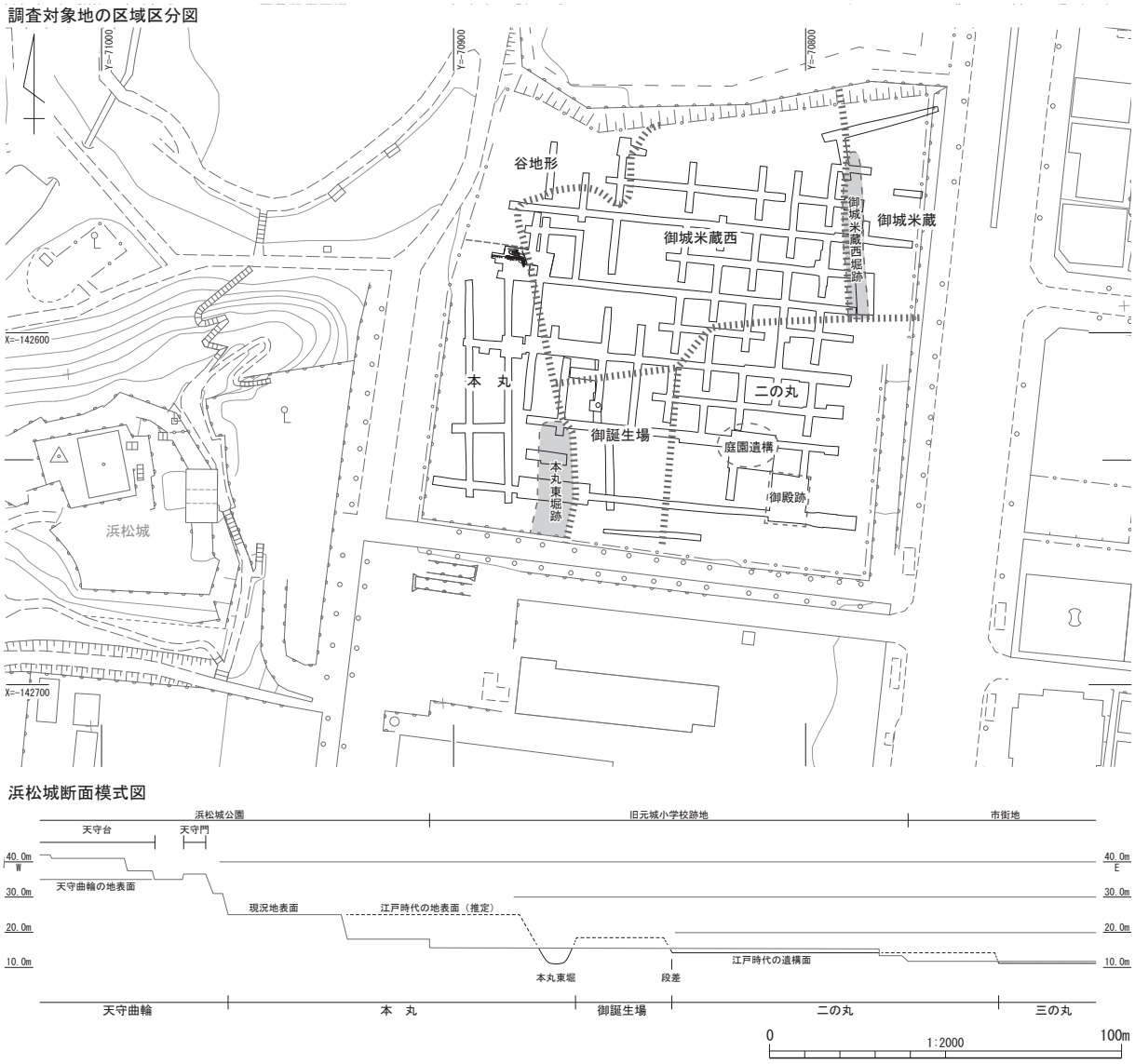


Fig.16　調査対象地区分図

２　基本層位

概　要　調査対象地の土層堆積状況は、土層の特徴から基本層序をⅠ～Ⅶ層に大別して認識することができる。Ⅰ層は旧元城小学校に関わる現代の土層である。Ⅱ層はアジア太平洋戦争時の焼土等による土層である。Ⅲ層は近代初頭から戦前の土層である。Ⅳ層は近世から近代初頭に堆積した土層である。Ⅴ層は近世の土層である。Ⅵ層は中世の堆積層である。Ⅶ層は基盤層である。

以下、調査により明らかになった各層の特徴を整理する。

Ⅰ層（現代）　Ⅰ層は、現地表面から元城小学校建設、解体に関わる現代の土層である。元城小学校建設を契機として２つの層に分けて認識できる。

ひとつは褐色砂礫土や褐色土を用いた元城小学校の造成土である。校庭にあたる部分では、褐色土の下層に 0.1 m程度の厚さで溶融スラグが認められる。

もうひとつは小学校が建設されるまでの間に施工された造成土である。北西方向から南東方向にむかって傾斜して堆積している箇所が多く認められる。

Ⅱ層（太平洋戦争前後）　Ⅱ層は、主に調査対象地の南東部で検出した。アジア太平洋戦争により形成された焼土層および廃棄物層である。焼土や炭化物、２次被熱を受けた煉瓦・近代の瓦・日用品などを多く含む赤褐色の土層である。この層を境に、下層が戦前、上層が戦後と捉えられる。

Ⅲ層（近代）　Ⅲ層は、明治時代（廃城後）から戦前の時期に形成された土層である。煉瓦造りの建物の基礎もⅢ層内に多く残存しており、当該地における近代の土地利用の一端をうかがうことができる。

Ⅳ層（近世・近代）　Ⅳ層は、炭化物を含む黒灰色土を主体とした土層である。近世から廃城時にかけての時期を中心として形成された旧表土および自然堆積層と考えられる。

Ⅴ層（近世）　Ⅴ層は、江戸時代を中心とした近世の土層である。土層の特徴から近世浜松城の造成土と整地土の２つに分けて認識できる。

Ⅴ-1 層　Ⅴ-1 層は、二の丸や御城米蔵において検出した赤褐色砂礫土を主体とした整地層である。二の丸御殿をはじめとした近世の遺構は、Ⅴ-1 層上面を遺構掘削面としている。Ⅴ-1 層上面検出遺構は、礎石や礎石据付穴、根固め石や礎石の抜き取り痕跡とみられるものがあることから、二の丸御殿やその周辺施設に関わる遺構と考えられる。なおⅤ-1 層の上位には、江戸時代の表土層が部分的に認められる。

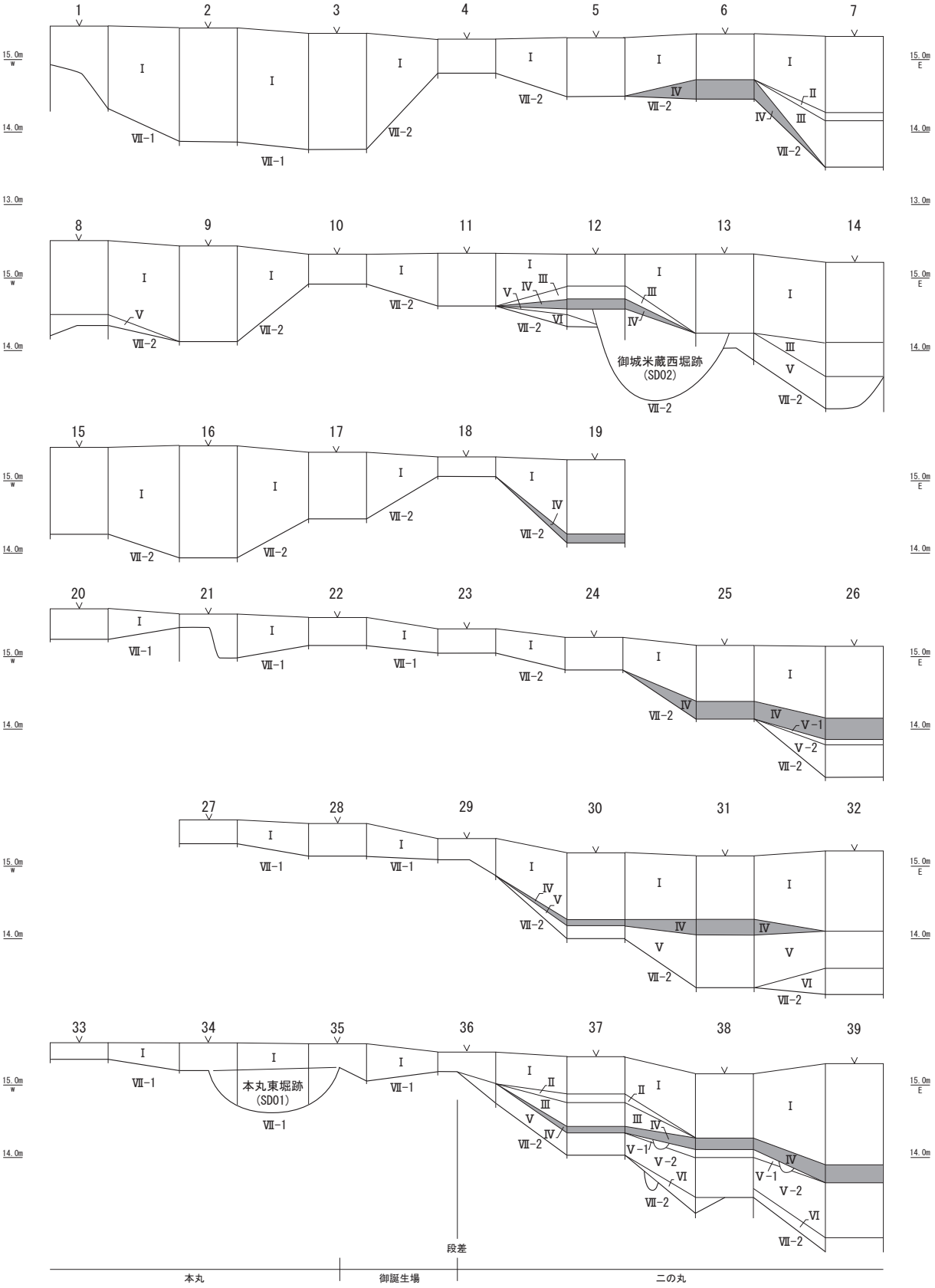
Ⅴ-2 層　Ⅴ-2 層は、赤褐色砂礫土層である。Ⅴ-2 層の厚さは約 0.2 ～ 0.8 mである。二の丸御殿建設に先立つ大規模な造成土層であり、造成の単位で細分が可能である。

Ⅵ層（中世）　Ⅵ層は、基盤層の検出標高が低い調査対象地の南東部を中心に認識した有機質で粘性の強い黒褐色土層である。中世の堆積土（旧表土）と考えられる。二の丸においては、分厚く造成されたⅤ層によって上位層と分離しており、近世の遺構面と明確に異なる遺構面として認識することができる。土層断面の観察ではⅥ層を遺構面とし基盤層（Ⅶ層）を掘削して構築された中世の遺構を確認したが、遺構埋土とⅥ層の特徴が類似しており、Ⅵ層上面での遺構検出は困難であった。そのため、発掘調査時の遺構検出はいずれも基盤層の上面である。

Ⅶ層（基盤層）　Ⅶ層は、基盤層である。その特徴から２つに細分した。

Ⅶ-1 層　Ⅶ-1 層は、明黄褐色の砂礫土で、本丸と御誕生場において確認した。三方原台地の砂礫層である。

Ⅶ-2 層　Ⅶ-2 層は、明褐色の粘質土で、二の丸において確認した。

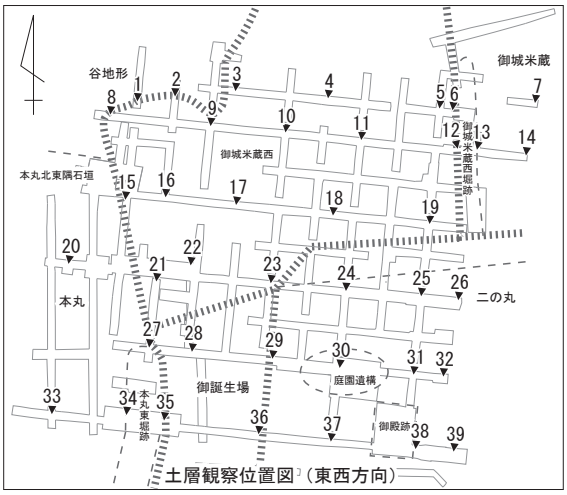


基本層位

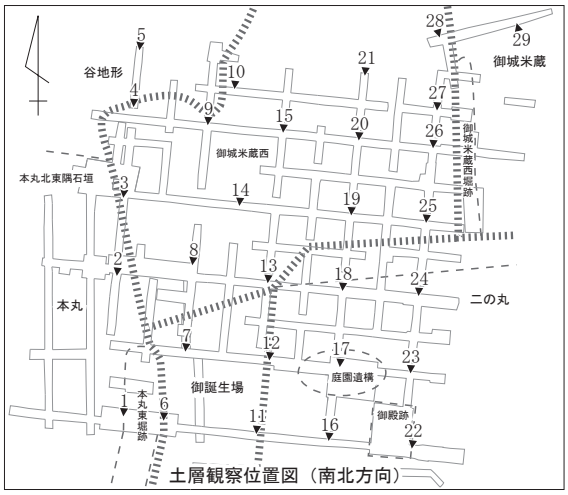
Ⅰ層	現代　褐色土	Ⅳ層	近世・近代　黒灰色土	Ⅵ層	中世　黒褐色土
Ⅱ層	太平洋戦争前後　赤褐色土	Ⅴ層	近世　赤褐色砂礫土	Ⅶ層	基盤層
Ⅲ層	近代　暗褐色土	Ⅴ-1 層	近世整地層	Ⅶ-1 層	基盤層　明黄褐色砂礫土
		Ⅴ-2 層	近世造成層	Ⅶ-2 層	基盤層　明褐色粘質土

0　1:80　2m

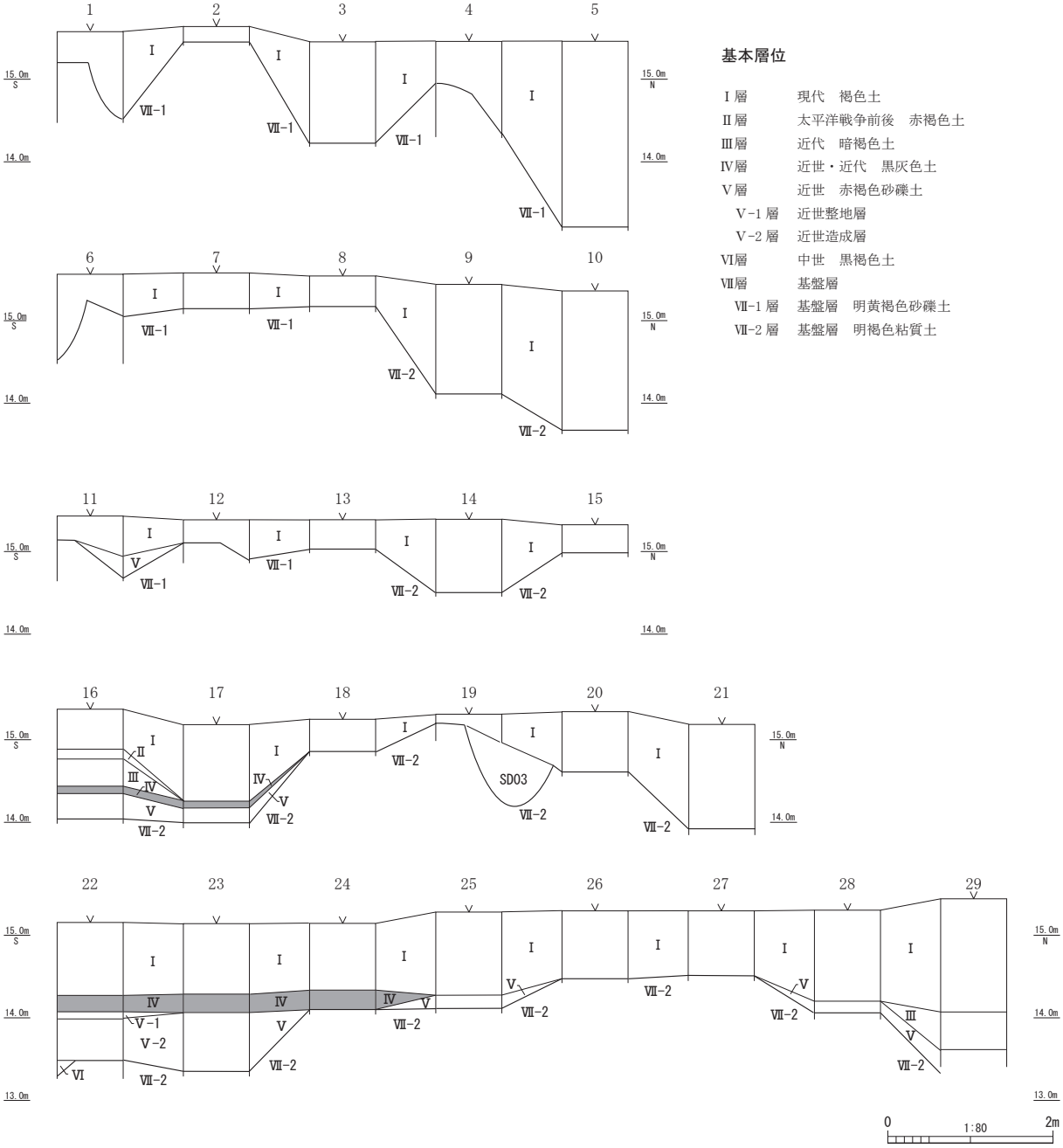
Fig.17　土層柱状図(東西方向)



土層観察位置図[2]（東西方向）



土層観察位置図（南北方向）



基本層位

Ⅰ層	現代　褐色土
Ⅱ層	太平洋戦争前後　赤褐色土
Ⅲ層	近代　暗褐色土
Ⅳ層	近世・近代　黒灰色土
Ⅴ層	近世　赤褐色砂礫土
Ⅴ-1 層	近世整地層
Ⅴ-2 層	近世造成層
Ⅵ層	中世　黒褐色土
Ⅶ層	基盤層
Ⅶ-1 層	基盤層　明黄褐色砂礫土
Ⅶ-2 層	基盤層　明褐色粘質土

Fig.18　土層柱状図（南北方向）

3　本丸の調査

（1）調査の概要

本丸は調査対象地南西部にあたる。近代以降の土地利用により、本丸東側の旧地形が大きく改変され、本丸の規模や形態が不明確な状態であったが、発掘調査により、本丸東堀跡や本丸北東隅石垣を確認し、本丸の規模や構造を定点をもって示すことができるようになった。また、本丸北東隅石垣の北側や本丸東堀跡西側斜面において、石垣の崩落痕跡を検出した。

このほか、現在は造成され谷地形を認識できないが、本丸北東隅石垣の北側では、発掘調査によって谷地形の形状と範囲を復元することができる調査成果を得た。

（2）本丸北東隅石垣

検出状況　調査対象地北西部に設定した、27トレンチで石垣の隅角部を確認し、石垣の残存状況を確認するため平面的な調査を実施した。隅角部は約 120 度と鈍角である。石垣の上部は近代以降の土地利用により失われ、石垣の背面構造が露出している。

石垣の残存高は、隅角部分で 1.7 m程度、北面石垣及び東面石垣では、ともに最大 1.2 mである。

南北方向に築かれた東面石垣は全長約 2 mが遺存している。東面石垣は南へ高くなる自然地形を階段状に加工し、根石の高さが階段状に変化している。本来はさらに南へと石垣が築かれていたと想定できるが、検出部より南側は近代以降の土地利用により失われている。

東西方向に築かれた北面石垣は全長 9 m程度を確認した。北面石垣は、調査対象地の西へと延びていることが明らかである。近世の浜松城絵図に表現されているように、本丸北側に築かれた富士見櫓台石垣や本丸北石塁につながっていたと考えられる。

本丸の北東隅角部の位置が明らかになり、本丸の規模を確定できる重要な成果といえる。

構　造　石垣は南と西へ向かって高くなる自然地形を活かして構築されている。石垣の表面から築石、裏込め、盛土・基盤層の３層構造となっている。築石の大きさは隅角部では長軸 0.9 m×短軸 0.5 m、高さ 0.3 m、石垣面では長軸 0.6 m×短軸 0.4 mほどのものが主体である。

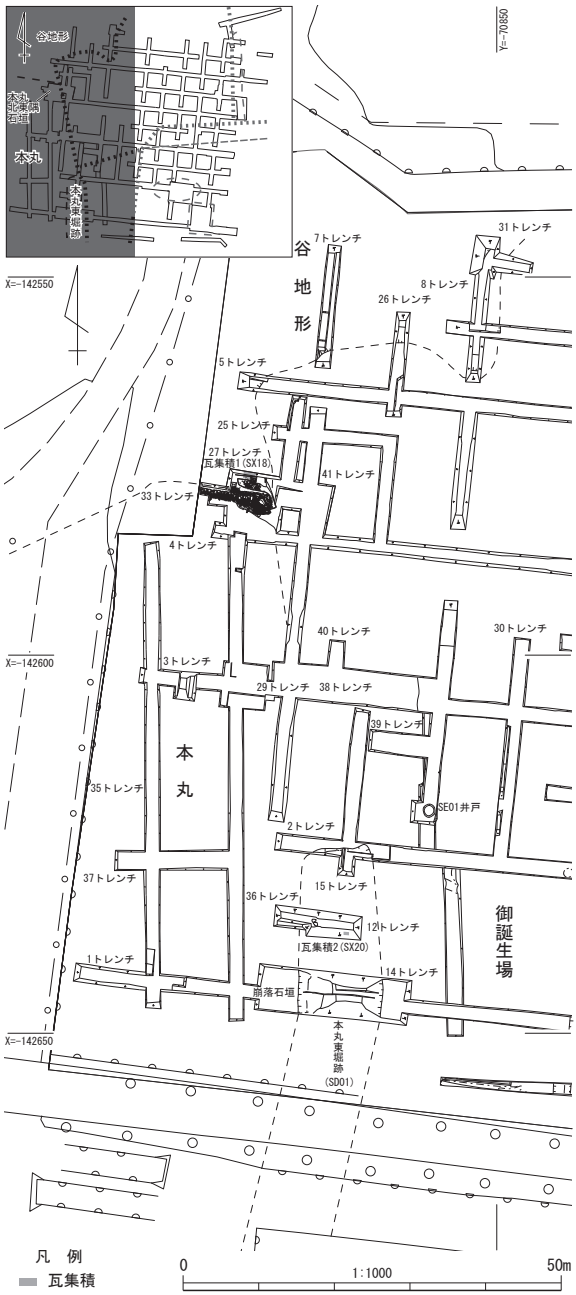
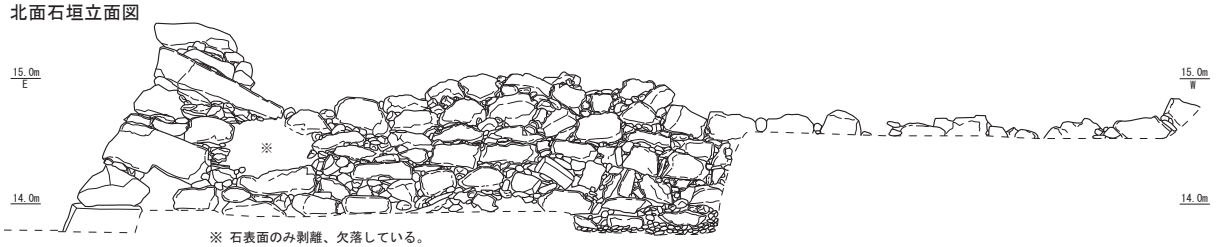


Fig.19　本丸の検出遺構

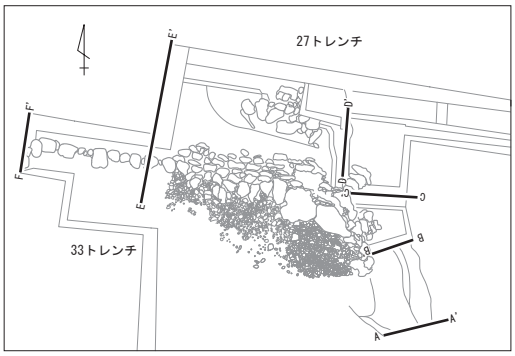
Fig.20　本丸北東隅石垣詳細図（１）

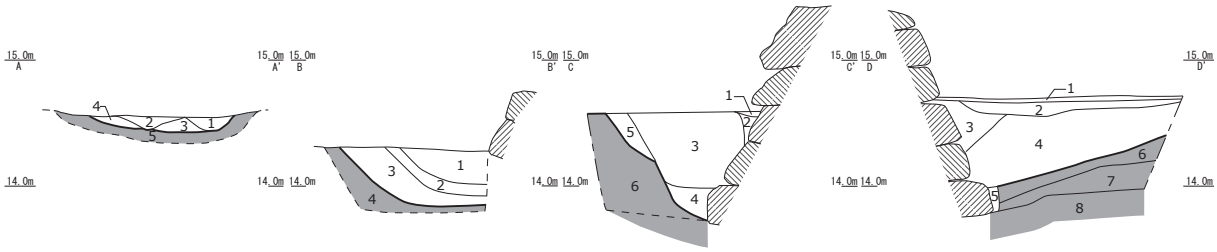
北面石垣立面図



東面石垣立面図

1　明黄褐色粘質土　（しまりあり、橙色粘土塊含む、石垣構築前）
2　黒褐色土　（しまりなし、旧表土）
3　黄褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む）
4　明褐色砂礫土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む、基盤層）





1　褐色土　（しまり中、φ1cmの礫及びφ1cmの炭化物少量含む）
2　黄褐色土　（しまりあり、粒子細かい粘質土）
3　灰褐色土　（しまり中、φ1～5cmの炭化物多量に含む）
4　灰褐色土　（しまりあり、φ5cmの礫含む、粘質土）
5　明褐色砂礫　（基盤層）

石垣構築前盛土

1　明黄褐色粘質土　（しまりあり、橙色粘土塊含む、石垣構築前）
2　黒褐色土　（しまりなし）
3　黄褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む）

基盤層

4　明褐色砂礫土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む）

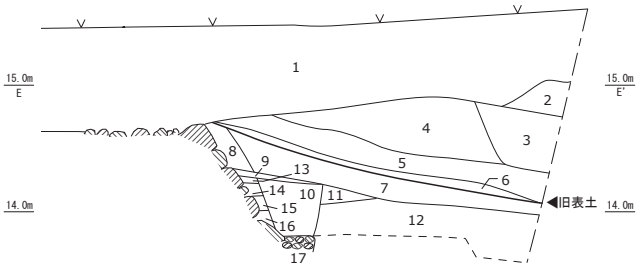
根切り溝埋土

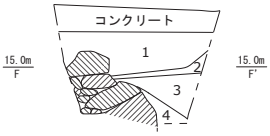
1　黄褐色土（しまり中、φ1～3cmの砂礫多量に含む）
2　暗褐色土（しまり中、φ0.5cm炭化物多量に含む）
3　暗褐色土（しまり中、角礫少量含む）
4　にぶい黄褐色土（しまりあり、φ2cmの砂礫多量に含む）
5　暗褐色土（しまりなし）

基盤層

6　暗褐色砂礫

1　暗褐色土（しまりなし、小礫含む）
2　暗褐色土（しまり中、φ1cmの黄褐色土塊少量含む）
3　暗褐色土（しまり中、φ10cmの礫多量に含む）
4　黄褐色土（しまり中、黄褐色土・灰褐色土塊含む）
5　暗褐色土（しまり中、礫少量含む、根切り溝埋土）
6　暗灰褐色土（しまり中、黄褐色土塊含む、基盤層）
7　暗褐色砂質土（炭化物少量含む、基盤層）
8　暗褐色砂礫（基盤層）





1　にぶい黄橙色土　（しまりなし、粒子粗い、表土）
2　灰色土　（しまりなし、粒子粗い、砕石もしくは小礫多量に含む）
3　黄橙色土　（しまり中、φ5cmの礫少量含む）
4　褐色土　（しまり中、粒子細かい）

Ⅰ層　現代

1　にぶい黄橙色土　（しまりなし、粒子粗い、表土）

近世以降の堆積土

2　黄橙色土　（しまりなし、黄褐色粘土塊入る、建築部材（壁土等）の一部か）
3　黒褐色土　（しまりあり、φ5cmの黄褐色土塊少量含む）
4　浅黄橙色土　（しまり中、φ3cmの礫含む）
5　黄橙色土　（しまり中、φ5cmの礫少量含む）
6　浅黄橙色土　（しまりなし、φ1cm以下の砂礫多量に含む、φ5cmの礫少量含む、粒子粗い、下部に旧表土と捉えられる黒褐色土あり）

石垣前面の盛土等

7　灰白色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む、φ5cmの礫含む、粒子粗い）
8　褐色土　（しまりあり、φ2cm以下の礫含む）
9　褐色土　（しまりあり、φ1cm以下の砂礫多量に含む）
10　にぶい黄橙色土　（しまり中、円礫多量に含む）
11　暗褐色土　（φ2cm以下の砂礫多量に含む）
12　橙色土　（しまり中、φ5cmの黄褐色土塊含む）
13　明褐色土　（しまりあり、φ1cm以下の砂礫多量に含む）
14　褐色土　（しまりあり、砂礫微量に含む）
15　暗褐色土　（しまりあり、砂礫微量に含む）
16　褐色土　（しまりあり、砂礫微量に含む）
17　栗石層

0　1:60　2m

Fig.21　本丸北東隅石垣詳細図（２）

築石は、ほとんど加工が認められない自然石を使用し、布崩し積みの技法を用いて築かれ、間詰石には円礫を多用している。隅角は、石材の長短を交互に積み上げる算木積みが用いられているが、下２石は長・短辺揃えた、重ね積みである。下２石までは、石垣面が凸凹であり傾斜は約80度である。３石目以上は約75度であり、傾斜が異なる。築石石材は、分析の結果、浜名湖北岸・東岸地域を中心とした地点で産出したチャートや天竜川中、上流域で産出する石英片岩が用いられていることが明らかになった。

東面石垣の根石は、南に向かい階段状に根石の高さが高くなる。南側２石の根石は、谷地形を埋めた盛土の上に据えられているが、隅角部付近では盛土を段状に掘削し、基盤層上に根石を据えている。一方、北面石垣の根石は、隅角部からほぼ水平に据えられている。北面石垣に限って根石の前方や下部には10～15cm大の円礫が敷き詰められている。

築石の背後には、0.5mから1.5mの幅で円礫を主体とした裏込めが認められる。また、東面石垣と北面石垣東半の裏込めの背後には、基盤層と同質の土砂を用いた盛土が認められ、旧地形を反映したものとみられる。

石垣崩落痕跡　北面石垣の北側から築石とみられる石材や裏込め石とみられる円礫が乱雑に積み重なった状態で出土した。検出状況から石垣崩落痕跡と捉えられる。

石垣崩落痕跡の直上からは、完形のかわらけ（Fig.23-2）が出土した。かわらけの特徴から19世紀頃のものとみられる。この崩落痕跡は、安政地震もしくは廃城との関連がうかがえる。

北面石垣のFig.21の※で示した部分は、築石表面が剥落しており、奥には築石が残存している。このことから、崩落時には表面が剥落した築石の高さまで露出していたと考えられる。

瓦集積１（SX18）　崩落痕跡の上層では、南北１m、東西２m程度の範囲で瓦集積１（SX18）を検出した。この瓦も地震による崩落や廃城により屋根材や壁材が堆積した可能性がある。瓦集積は、瓦の密度や埋土の特徴から上下２つのまとまりとして捉えることができる。下層はしまりの強い黄

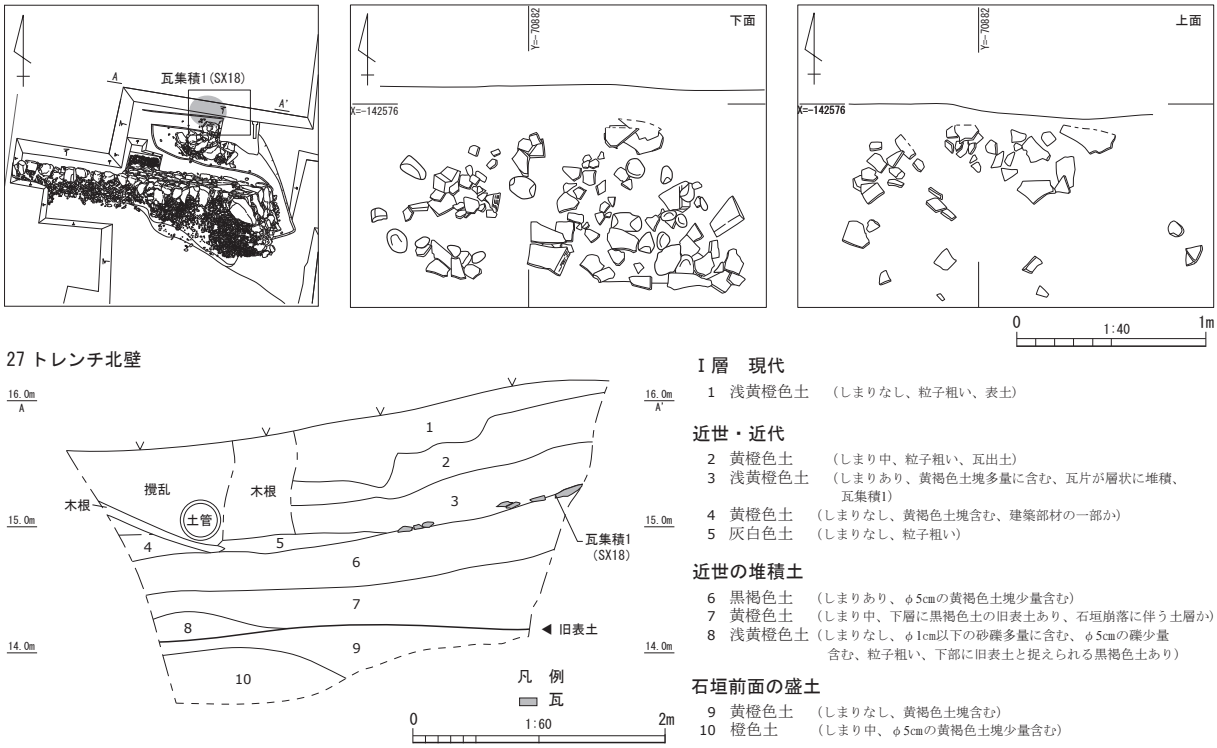


Fig.22　瓦集積1（SX18）詳細図

褐色土塊が混ざる。壁や塀などの構築部材の一部が崩落・堆積した可能性がうかがえる。一方、上層は、瓦の密集度は低く、しまりが弱い。

上層からは近代の御神酒徳利（12）が出土している。近代のものは1点に限られ、廃城後、露出していた廃棄瓦に混入した可能性が考えられる。

本丸北東隅石垣周辺出土遺物　本丸北東隅石垣の周辺から出土した遺物について、時期的な特徴を示すものを中心に抽出し、図化した。

1は石垣隅角部から出土した、須恵器の短頸壺である。今回の調査対象地からは、少ないながらも須恵器が出土している。2は石垣北側崩落石直上から出土したロクロ成形のかわらけである。完形品であり、口径9.2cm、底径6.2cm、器高1.8cmである。3は灯明具で、口径は外側6.7cm、内側3.6cmを測り、内口縁に芯受けとみられるえぐりが認められる。京焼（信楽）産で19世紀代の所産と考えられる。4は青花碗で、高台内に「大明年造」の銘がみられ、16世紀を中心とした時期に位置づけられる。

5は三ツ巴紋軒丸瓦の破片である。珠文は3個残るが、全体では12個と考えられる。6・7は丸瓦である。6はコビキA技法が認められ、端部面取りを2回行っている。凹面には細かい布目、吊紐痕、横目縫取痕、棒状刺突痕がみられる。断面形はやや扁平である。7はコビキB技法が認められ、端部面取りを2回行っている。凹面には棒状刺突痕がみられる。8は道具瓦の一部と考えられる。9は鬼瓦で、並型の破片と考えられる。10は目板瓦である。

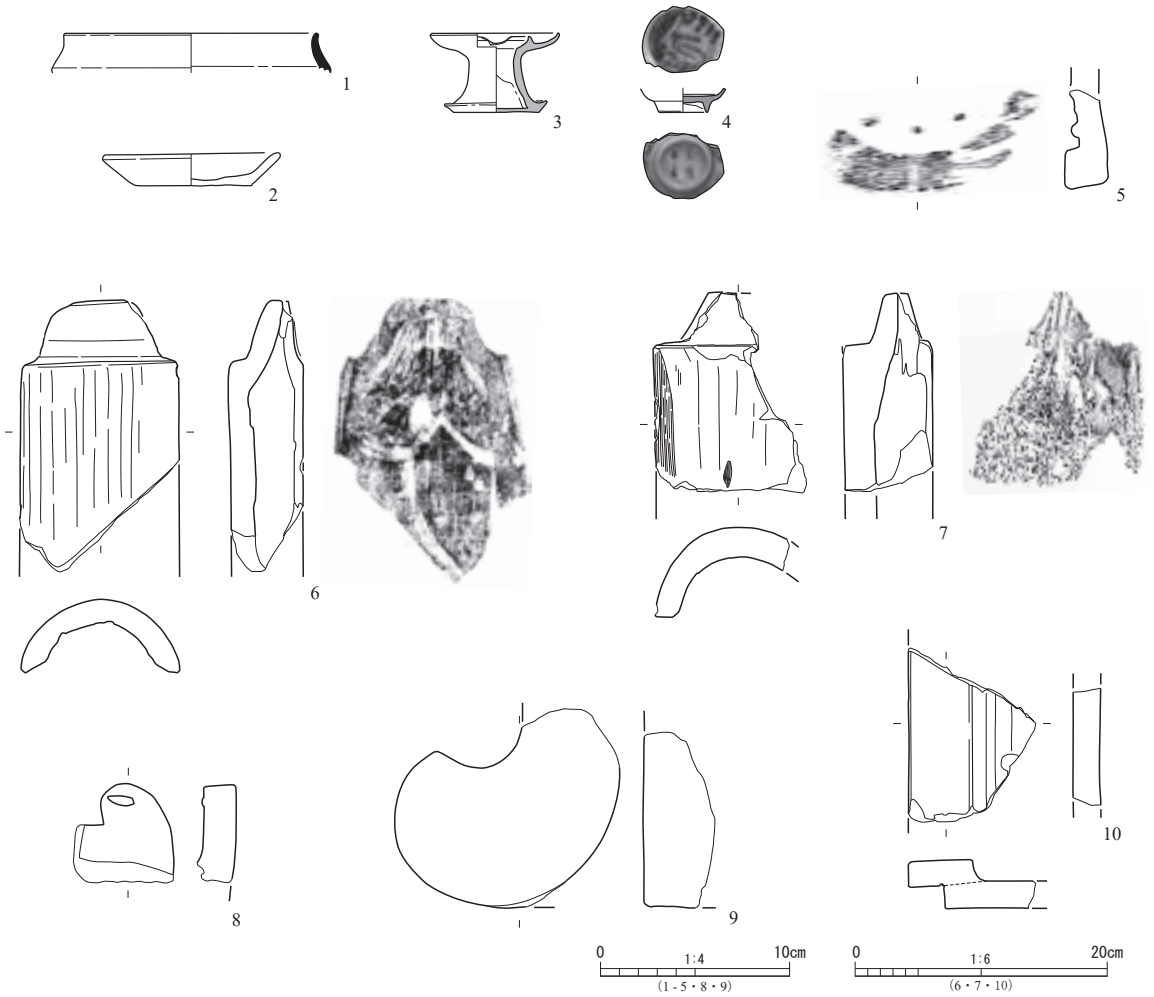


Fig.23　本丸北東隅石垣出土遺物

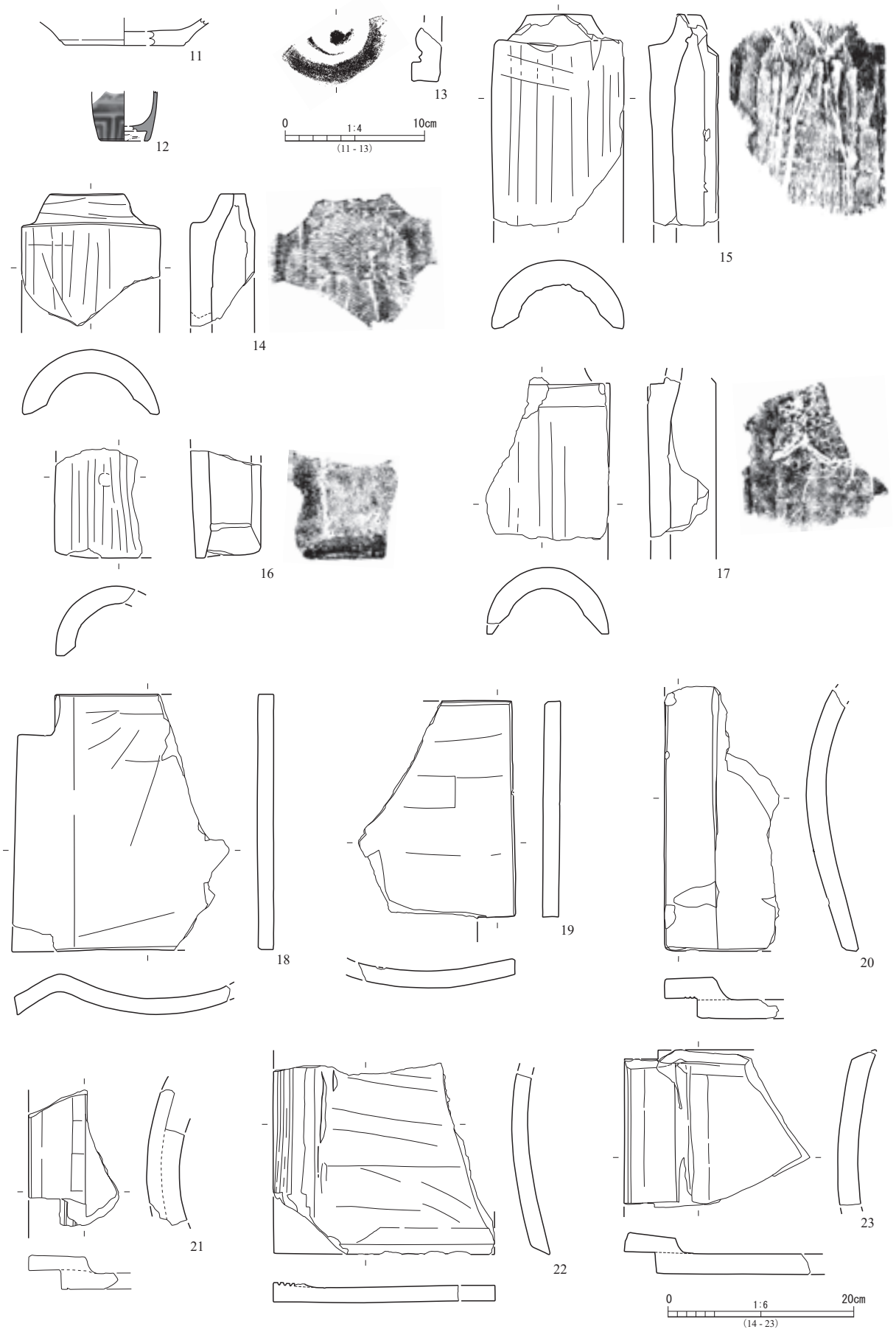


Fig.24　瓦集積1（SX18）出土遺物

瓦集積１(SX18) 出土遺物　瓦集積１からは、軒桟瓦や雁振瓦を中心とした瓦に加え、かわらけや徳利など近世から近代にかけての遺物が出土した。

11 はロクロ成形のかわらけである。底部のみ残存しているため、口径は不明であるが、底径 8.5cm である。胎土は砂質であり、にぶい橙色に焼成されている。底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。12 は瓦集積１の上層から出土した、近代の徳利（御神酒徳利）である。

13 は右巻きの三ツ巴紋軒桟瓦の瓦当面である。陶質に焼成され、色調は灰色である。14 ～ 17 は丸瓦である。14 は胴部から玉縁部にかけての破片である。凹面には粗い布目圧痕のほか、棒状刺突痕が認められる。側面端部には１回の面取りの痕跡が認められる。15 も胴部から玉縁部にかけての破片である。凹面にはコビキＢ技法、吊紐痕、棒状刺突痕が認められる。側面端部には面取りが２回施される。16 は胴部端部破片である。側面端部には２回の面取りが施される。凹面にはコビキＢ技法、粗い布目のほか、左側に袋とじ痕とみられる痕跡が認められる。17 は胴部破片である。凹部には細かい布目、吊紐痕、横目縫取痕が認められる。側面端部には２回の面取りの痕跡が認められる。表面は銀化が顕著である。18・19 は桟瓦である。18 は 4.0 × 4.0cm の切込みが残存する。20 ～ 23 は雁振瓦である。

本丸北東隅石垣の時期と特徴　調査対象地北西部で検出した本丸北東隅石垣は、隅角部を確認することができ、本丸の規模と構造を復元する情報を得ることができた。築石は布崩し技法が用いられ間詰石には円礫が多用されるなど二俣城や鳥羽山城の石垣と共通しており、同時期に構築された石垣と捉えられる。また、石垣の構築技法や石垣の崩落痕跡など、石垣の構築から消失に至る過程が明らかになった点も重要な成果である。

（３）谷地形

谷地形　調査対象地北西部で谷地形を確認した。総延長は約 45 ｍで、本丸北東隅石垣の隅角部付近からはじまり、北東方向に蛇行し、調査対象地外へとつづくとみられる。谷の傾斜角は約 30 度である。谷地形の深さは、7 トレンチ北側で現地表から 4 ｍ以上掘削したが基盤層は確認できなかった。この谷地形は、天守曲輪や本丸の北側から続く谷地形であり、自然地形を堀などの防御施設として城郭に取り込んでいたことがうかがえる。

谷地形の埋土は、上層が元城小学校の北校舎建設・解体による攪乱がおよぶ現代の土層である。20 トレンチや 7 トレンチでは、この層の下位に、谷上部からの埋立て土が 2 ｍ以上にわたり確認でき、出土遺物から廃城後に造成されたと捉えられる。

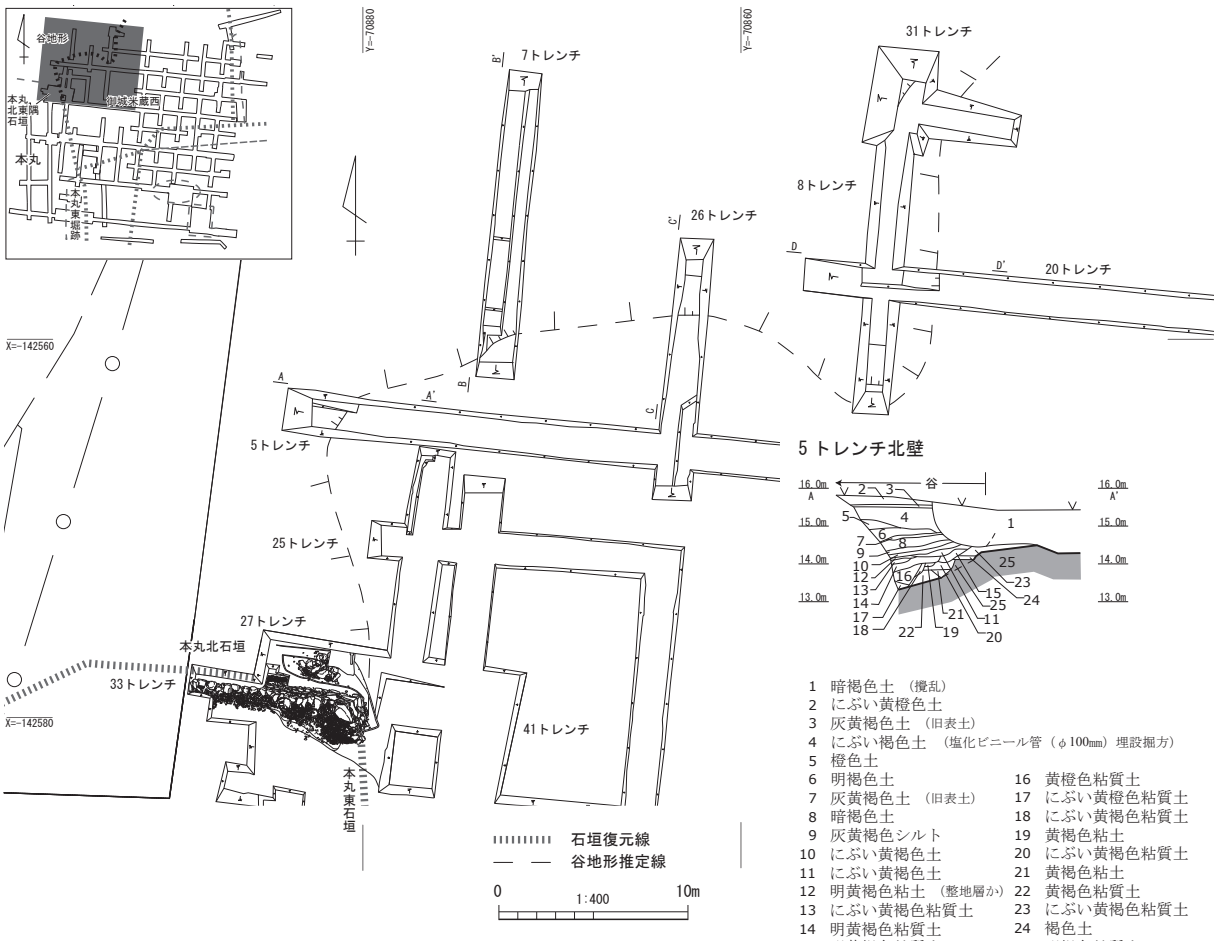
谷地形出土遺物　24 は、8 トレンチ 8 層から出土した雁振瓦で中央部に方形の釘穴が確認できる。

（４）本丸東堀跡(SD01)

検出状況　2、12、14、15 トレンチで検出した本丸と御誕生場の間に築かれた南北方向へ続く堀跡である。本丸北東隅石垣東面石垣の延長方向に位置する堀跡を 22.5 ｍにわたり検出した。調査対象地以南も堀跡が続いていると考えられる。検出位置や規模などから、本丸東堀跡と捉えられる。

本丸東堀跡（SD01）の検出面は基盤層上面である。2・15 トレンチでは、SD01 北端を検出した。検出面から発掘調査の掘削下限までの深さは 1.2 ｍであり、2・15 トレンチでは堀底を検出していない。北端部の平面形はやや不定形であるが、堀が機能していた時期もしくは埋没時に一部崩落したものと考えられる。

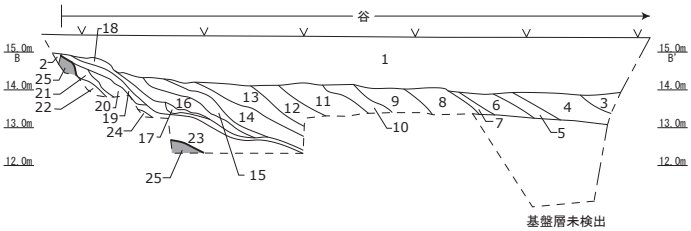
12 トレンチでは、西肩から幅約 7.2 ｍにわたり SD01 を検出した。12 トレンチの東側肩部は、調



5 トレンチ北壁

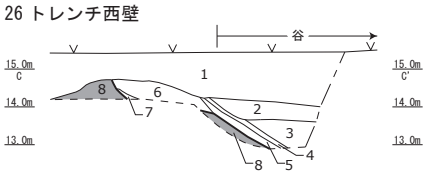
1　暗褐色土　（攪乱）
2　にぶい黄橙色土
3　灰黄褐色土　（旧表土）
4　にぶい褐色土　（塩化ビニール管（φ100mm）埋設掘方）
5　橙色土
6　明褐色土
7　灰黄褐色土　（旧表土）
8　暗褐色土
9　灰黄褐色シルト
10　にぶい黄褐色土
11　にぶい黄褐色土
12　明黄褐色粘土　（整地層か）
13　にぶい黄褐色粘質土
14　明黄褐色粘質土
15　明黄褐色粘質土
16　黄橙色粘質土
17　にぶい黄橙色粘質土
18　にぶい黄褐色粘質土
19　黄褐色粘土
20　にぶい黄褐色粘質土
21　黄褐色粘土
22　黄褐色粘質土
23　にぶい黄褐色粘質土
24　褐色土
25　明褐色粘質土　（基盤層）

7 トレンチ西壁



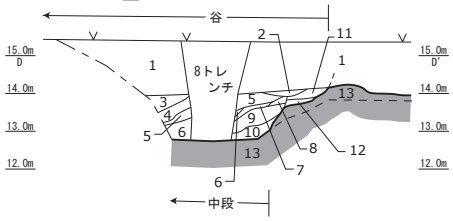
1　褐色土　（攪乱）
2　にぶい黄褐色土　（攪乱）
3　明黄褐色砂礫
4　明褐色土
5　黄橙色粘質土
6　明褐色土
7　明黄褐色粘質土
8　明褐色土
9　明黄褐色粘質土
10　明褐色土
11　明黄褐色土
12　黄褐色土
13　明黄褐色土
14　黄褐色土
15　明黄褐色礫
16　明黄褐色礫
17　灰黄褐色土
18　灰黄褐色シルト
19　黄褐色土
20　明黄褐色粘質土
21　黄褐色土
22　にぶい黄褐色砂礫
23　黄褐色土　（基盤層崩落土か）
24　にぶい黄褐色土
25　明黄褐色土　（基盤層）

26 トレンチ西壁



1　暗褐色土　（攪乱）
2　黄褐色変質土
3　褐色土
4　黒褐色土（旧表土）
5　にぶい黄褐色土
6　黄褐色土
7　黄褐色砂礫土
8　にぶい黄褐色砂礫土（基盤層）

20 トレンチ北壁



1　暗褐色土　（攪乱）
2　にぶい黄褐色土
3　橙色土
4　明褐色土
5　明褐色土
6　黄褐色粘質土
7　褐色土
8　明赤褐色粘質土
9　褐色粘質土
10　にぶい黄褐色土
11　にぶい黄橙色砂礫土
12　にぶい黄橙色砂
13　にぶい黄褐色砂礫土　（基盤層）

0　1:200　5m

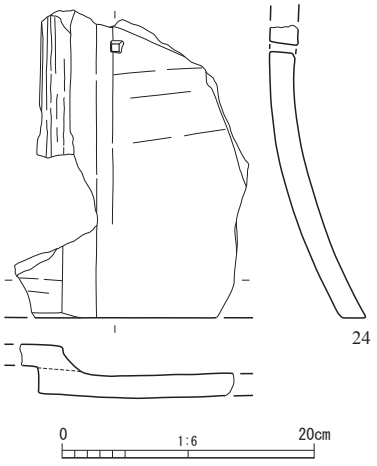


Fig.25　谷地形詳細図

査区外にあり未検出である。12 トレンチでは現地表面より約 4 m、（標高 12.0 m）まで掘削したが堀底は確認できなかった。12 トレンチ南壁では SD01 の 17 層から鬼瓦や鯱瓦を多く含む瓦集積 2（SX20）を確認した。南側壁面での検出に限られ、平面的な広がりは不明である。

14 トレンチでは、堀の両肩および堀底を検出した。SD01 の規模は、検出面を基準にすると幅 11.0 m、現地表面からの深さは 3.5 mである。なお、堀底は 14 トレンチ内北側壁面沿いにサブトレンチを設定し確認した。堀底の断面形状は逆台形を呈する部分と半円形を呈する部分がある。堀跡の東側斜面は、堀底から 60 度の角度で直線的に立ち上がる。一方、西斜面は途中まで東斜面同様、60 度の角度で直線的に立ち上がるが、底部から 1 m程度上がった地点から傾斜が 30 度と緩やかになり、かつ湾曲した形状に変化している。

2 トレンチで堀跡の北端を検出し、14 トレンチで検出した堀跡まで、22.5 mにわたり堀跡を確認し、14 トレンチの南へと続いていることが明らかである。江戸時代には、堀の北側に本丸裏門があったと想定される。堀跡の主軸方向は N-2°-W で、ほぼ真北に延びているが、検出状況から 14 トレンチ中央付近で堀が曲がると考えられる。

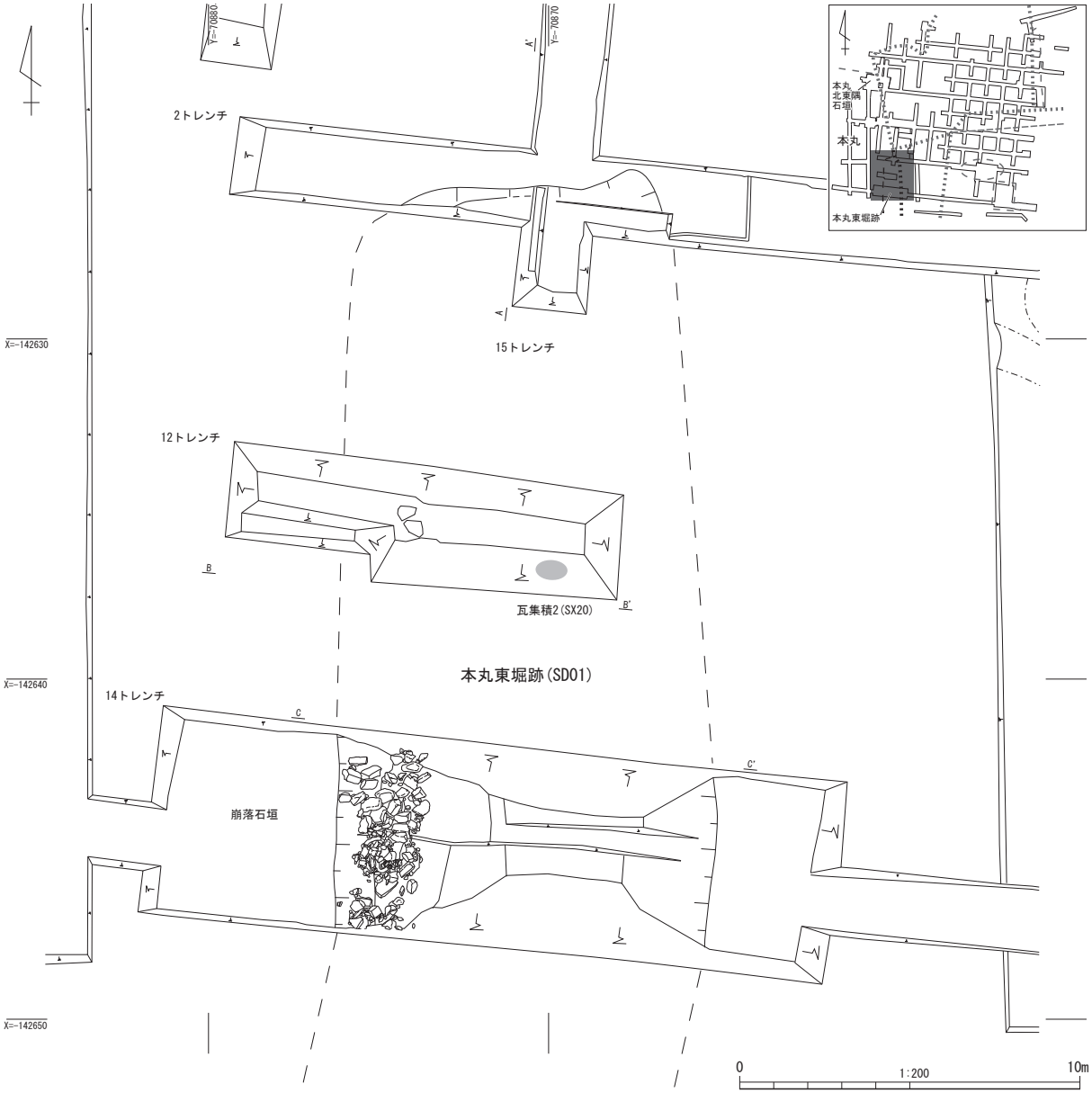


Fig.26　本丸東堀跡（SD01）詳細図

埋土の特徴　本丸東堀跡の埋土は、近代における埋立て土（A 層）、本丸東石垣崩落と浚渫後に堆積した近世末期の層（B 層）、本丸東石垣崩落に伴う土層（C 層）、中世・近世の堆積土（D 層）の４層に分けて捉えることができる。12 トレンチでは A 層と B 層の境界付近において、鯱瓦や鬼瓦を多く含む瓦集積 2（SX20）を検出した。

以下、各層の特徴を整理する。

SD01-A 層（近代の埋立て土）　褐色系の砂礫土や灰白色系のシルトなどの基盤層に由来する土砂を主体とした近代の埋立て土である。14 トレンチ 15 層では拳大の礫が大量に含まれ、18 層では灰白色シルト層が認められる。SD01-A 層は本丸側から堀跡内にもたらされたものが主体である。

A 層の下位からも近代の遺物が出土していることから、本丸東堀跡の埋立ては、廃城後一定期間を経て、本丸東側の削平と合わせて実施されたものと考えられる。

SD01-B 層（近世末期の土層）　黄褐色系の砂礫土やシルトなどの埋土を主体とする土層である。C 層との間には明確な切り合いが認められ、近世末期において、C 層堆積後に浚渫や改築が行われた可能性がある。

SD01-C 層（本丸東石垣崩落痕跡）　14 トレンチにおいて検出した本丸東石垣崩落痕跡に関わる土層である。SD01 西斜面から築石とみられるチャートなどの大型石垣や裏込めとみられる円礫が混

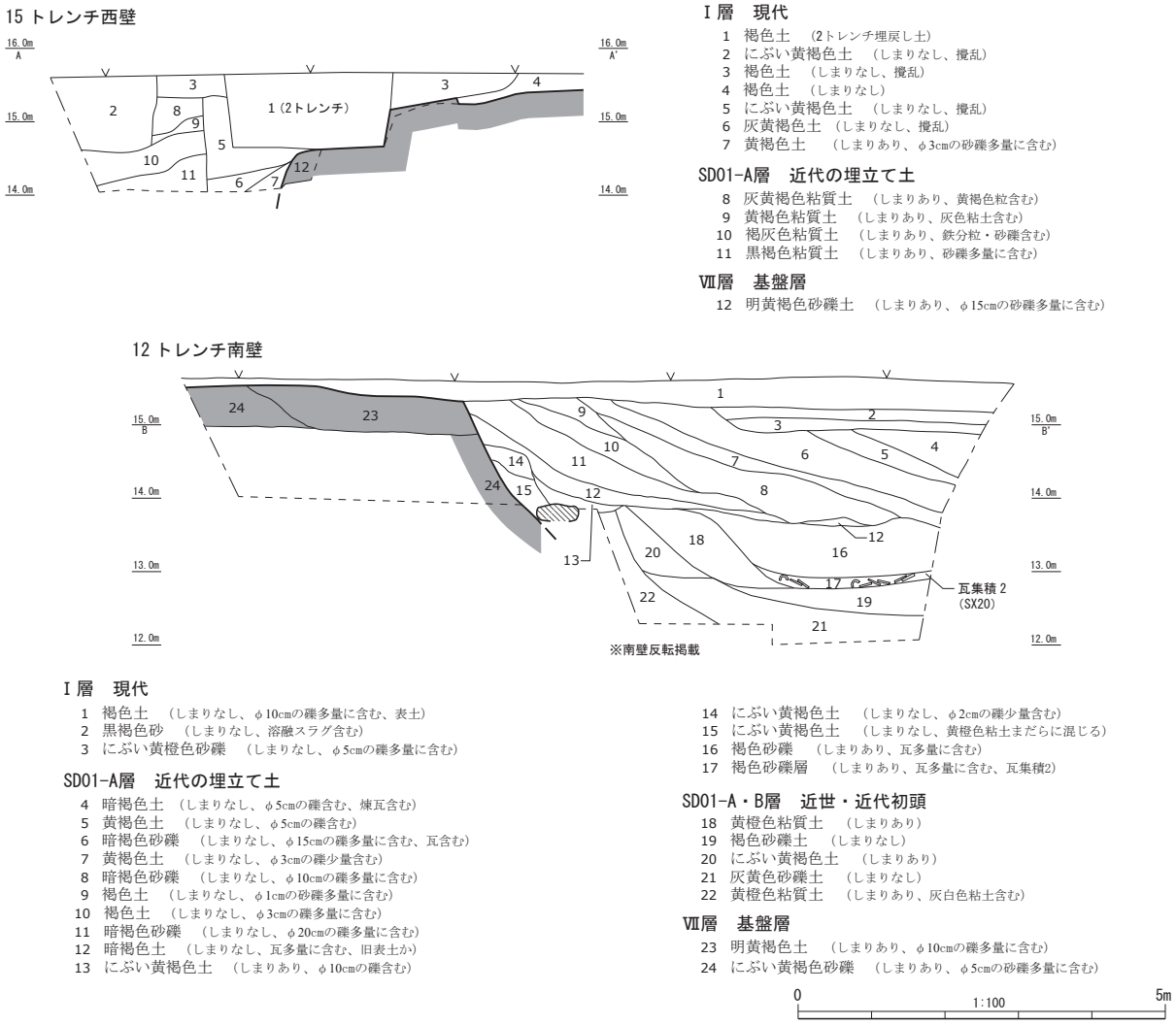
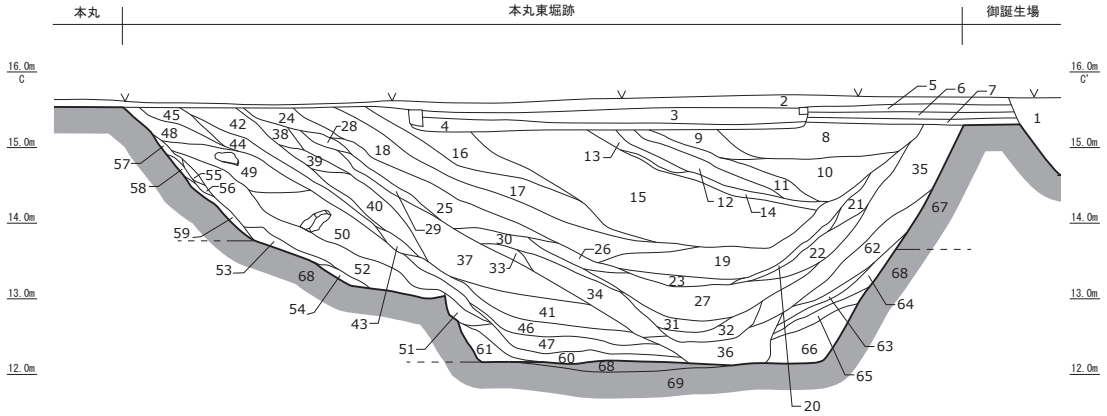
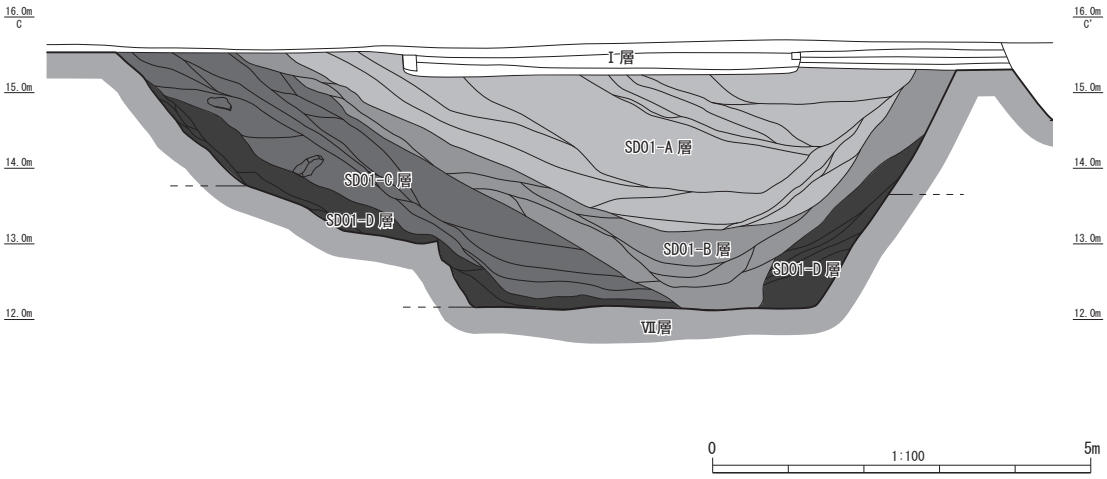


Fig.27　本丸東堀跡（SD01）土層断面図（１）

土層断面図



土層断面模式図



I 層　現代

1 暗褐色土　（しまりなし、コンクリート片含む、攪乱）
2 褐色土　（しまりなし、φ5cmの礫少量含む、表土）
3 明褐色砂礫土　（しまりなし、φ10cmの砂礫多量に含む、両端にコンクリート基礎有）
4 褐灰色砂　（しまりなし）
5 明橙色砂　（しまりなし）
6 黒褐色砂　（しまりなし、溶融スラグ含む）
7 にぶい黄褐色砂礫　（しまりなし、φ5cmの礫多量に含む）

SD01-A層　近代の埋立て土

8 褐色土　（しまりなし、φ3cmの砂礫多量に含む）
9 褐色土　（しまりなし、φ3cmの砂礫多量に含む）
10 黄褐色土　（しまりなし、φ15cmの礫多量に含む）
11 明黄褐色土　（しまりなし、φ3cmの砂礫含む）
12 明黄褐色土　（しまりなし、φ3cmの砂礫多量に含む）
13 黄褐色土　（しまりなし、φ2cmの砂礫多量に含む）
14 黄褐色土　（しまりなし、φ2cmの砂礫多量に含む）
15 黄褐色土　（しまりなし、φ15cmの砂礫多量に含む）
16 明黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
17 明黄褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む）
18 灰白色シルト　（しまりあり、φ2cmの砂礫・鉄分粒含む）
19 褐灰色粘質土　（しまりあり、φ1cmの砂礫・鉄分粒含む）
20 にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
21 灰黄褐色土　（しまりあり、φ2cmの砂礫含む）
22 灰黄褐色土　（しまりあり、φ2cmの砂礫含む）
23 にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）

SD01-B層　近世末期

24 にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
25 灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
26 灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
27 褐灰色土　（しまりあり、φ5cmの砂礫多量に含む）
28 明黄褐色土　（しまりあり、φ2cmの砂礫含む）
29 明黄褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む）
30 明黄褐色シルト　（しまりあり、鉄分粒含む）
31 褐灰色土　（しまりあり、灰色シルト少量含む、φ2cmの砂礫含む）
32 褐灰色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫含む、鉄分粒含む）
33 灰白色シルト　（しまりあり）
34 黄褐色シルト　（しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む）
35 褐灰色土　（しまりあり、φ5cmの砂礫含む）
36 灰黄褐色土　（しまりあり、φ15cmの砂礫含む、軒瓦出土）

SD01-C層　本丸東石垣崩落痕跡

37 にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ5cmの砂礫多量に含む）
38 明黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
39 にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
40 にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫含む）
41 灰黄褐色土　（しまりあり、φ5cmの砂礫多量に含む）
42 にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ5cmの砂礫多量に含む）
43 褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む）
44 褐色土　（しまりあり、φ2cmの砂礫含む）
45 にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫含む）
46 灰黄褐色シルト　（しまりあり、φ3cmの砂礫・鉄分粒含む）
47 褐灰色シルト　（しまりあり、φ3cmの砂礫・鉄分粒含む）
48 にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む）
49 灰黄褐色土　（しまりあり、φ15cmの礫多量に含む、崩落石材含む）
50 灰黄褐色土　（しまりあり、φ15cmの礫多量に含む、崩落石材含む）

SD01-D層　中世・近世

51 黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
52 褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む）
53 明褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む、黄色粘土塊含む）
54 褐色土　（しまりあり、φ2cmの砂礫含む）
55 褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
56 褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
57 褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
58 暗褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
59 にぶい褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
60 灰黄褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫含む）
61 にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ2cmの砂礫含む）
62 にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ5cmの砂礫含む）
63 にぶい黄褐色シルト　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
64 褐灰色シルト　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
65 明黄褐色シルト　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
66 にぶい黄褐色砂礫土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む）

VII層　基盤層

67 明褐色砂礫土　（しまりあり、φ5cmの砂礫多量に含む）
68 黄褐色粘質土　（しまりあり、白色粘土塊含む）
69 明黄褐色粘質土　（しまりあり、φ3cmの砂礫含む）

Fig.28　本丸東堀跡（SD01）土層断面図（２）

在して出土し、本丸東斜面に築かれた石垣の崩落により形成された土層と考えられる。堀跡西斜面の傾斜が緩やかな部分の上位に限って認識できた。崩落痕跡の検出範囲は、南北 5.5 m、東西 3.0 mであり、南北方向ともに調査区外へとつづいている。検出した石垣崩落痕跡は、長辺 30 ～ 50cm の長方形の石材と拳大の円礫が混在した状態である。石材は石垣に用いられているものと同等の大きさのチャートが主体といえる。本丸東堀跡の形状を把握するため、検出した崩落痕跡の北側半分に番号を付与し、取り上げた。崩落痕跡の下部には石垣の根石など、石垣としての原位置を保つ石材は確認できなかった。このことから、検出した石材はすべて西斜面からの崩落石と判断し、本丸東石垣は今回の検出面より上位に構築されていたと考えられる。崩落石の検出位置や出土状況から、江戸時代の絵図に表現されている本丸東石垣の崩落痕跡と考えられる。

Fig.29　本丸東石垣崩落痕跡詳細図

SD01-D 層（中世・近世の土層）　D 層は、褐色土や黄褐色砂礫土を主体とした土層である。堀底付近に堆積する黄褐色系の土砂は堀開削後の初期流入土と捉えられる。

SD01 遺物出土状況　本丸東堀跡からは、近世瓦を中心に数多くの遺物が出土した。これらの遺物は、近代の埋立て土（A 層）を中心に出土したものであり、廃城等に伴い本丸内に廃棄されていた近世瓦が本丸の土砂と共に本丸東堀跡内にもたらされたと捉えられる。本丸由来の遺物群の可能性が高く、本丸の一端をうかがい知ることができる資料である。

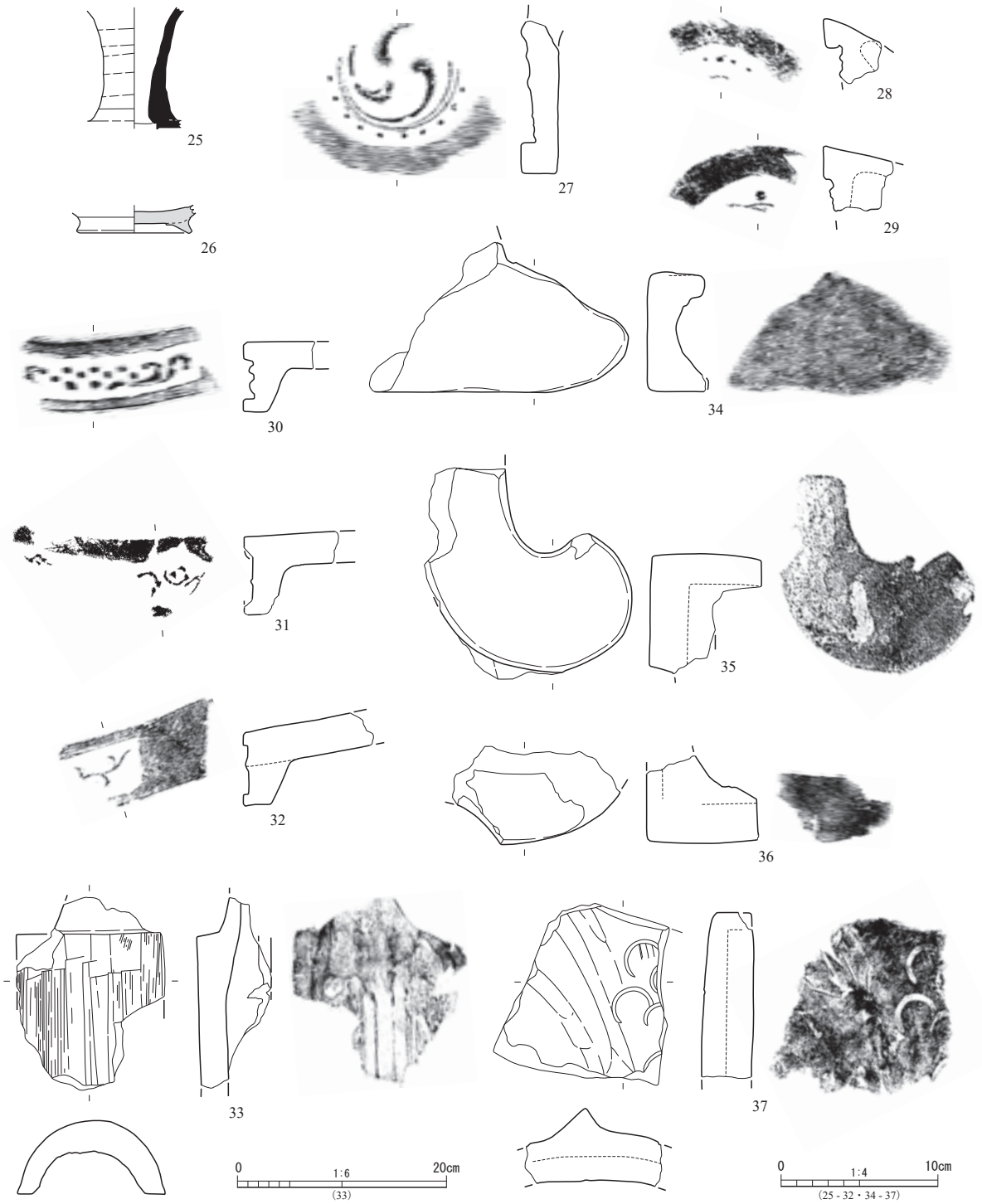


Fig.30　本丸東堀跡（SD01）出土遺物（１）

SD01 出土遺物　本丸東堀跡（SD01）からは、軒瓦や鳥伏間瓦、目板瓦に加え、鯱瓦や鬼瓦などの道具瓦が多く出土している点が特徴といえる。近傍に設けられた本丸裏門に葺かれた瓦が廃棄されたもしくは流入したと考えられる。

25・37 は排土、30 ～ 32・36 は I 層、26 ～ 29・33・35 は A 層、34 は C 層から出土した。

25 は須恵器の長頸瓶である。26 は山茶碗の碗で、底部裏に回転糸切り痕が認められる。

27 ～ 29 は三ツ巴紋の軒丸瓦（27・29）と鳥伏間瓦（28）である。27 は左巻きの三ツ巴紋が施され、連珠紋と巴紋の間に圏線がめぐる。珠文は小振りで 10 個残る。全体では 20 個以上に復元できる。28 の珠文は小振りで 4 個残る。29 の珠文は 1 個のみ残る。

30 ～ 32 は軒桟瓦である。30 は三葉紋唐草紋である。中心飾りは三葉の両脇が２つに分離し、子葉が簡略化され、点珠で表現された東海式軒桟瓦と考えられる。31・32 はともに中心飾りは確認できない。31 は連続する唐草紋や点珠がついた唐草紋の形状から、中心飾りは菊紋と想定できる。32 は垂れの右側上角を面取りしている。33 は丸瓦である。凸面は縦方向の板ナデが認められる。側面端部は面取りが２回行われ、凹面には棒状刺突痕が確認できる。

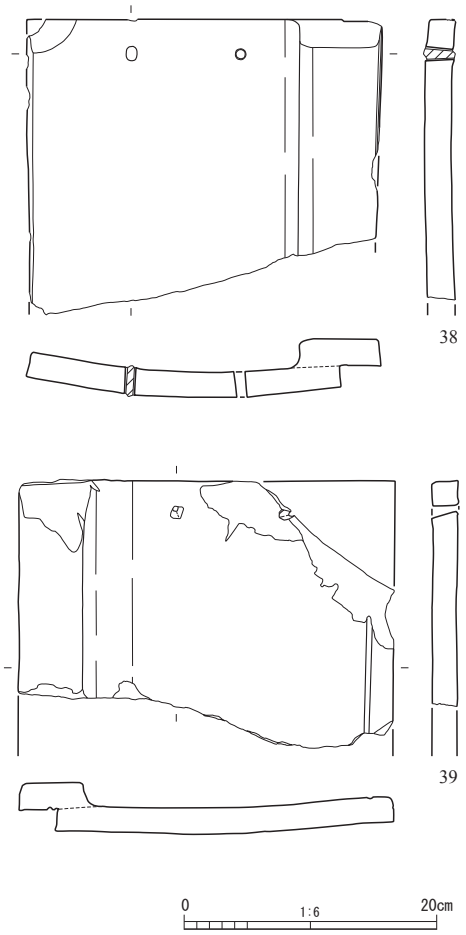


Fig.31　本丸東堀跡（SD01）出土遺物（２）

34 ～ 36 は鬼瓦である。いずれも破片資料であるが、瓦当面縁に紋様がない並型の一部と考えられる。右胴部の破片と推察される。34・35 は鬼瓦下端が直線状になる切据鬼と考えられる。36 は下端が直線状ではなく、途中で上方に折れているため、棟巴瓦の上に跨がせて据える跨鬼と考えられる。裏面が窪んだ裏なし型である。

37 は鯱瓦である。鱗がＣ字形のスタンプで表現され、Ｃ字形の中に線刻のあるものとないものとが混在する。中央部には蛇腹と考えられる隆帯が認められる。

38・39 は目板瓦である。両者とも３辺残存し、幅 28.1cm（38）、幅 29.8cm（39）を測る。どちらも上端２箇所に釘穴が認められる。角桟が付けられた位置は右側と左側でそれぞれ異なっている。38 は桟上端を面取りしている。39 は平瓦部凹面の右端に縦方向の水切りが認められる。

瓦集積 2（SX20）　12 トレンチの南壁中で検出した瓦集積である。16・17 層中（Fig.27）に多く瓦が含まれ、特に 17 層から集中して出土した。南壁面において瓦の出土を確認したため、平面形は確認できなかったが、北壁面に明確な広がりは認識できなかったため、南へとつづいている可能性が高い。瓦集積を確認した層は、標高約 13.1 m である。12 トレンチでは、標高 12 m付近まで掘削したが堀底は確認できなかった。南に隣接する 14 トレンチでは、標高 12 m付近で堀底を検出しており、12 トレンチ下位の堆積が水平堆積に近くなっていることを加味すると、堀底に近いと考えられる。瓦集積 2 から出土した遺物は、ほとんどが瓦であった。繋九目結紋の家紋瓦をはじめとした軒丸・軒平瓦や軒桟瓦、そして鬼瓦や鯱瓦といった道具瓦が多く出土した。

瓦集積２（SX20）出土遺物　本丸東堀跡埋土中に形成された瓦集積２からは、鯱瓦や鬼瓦、軒瓦等、大量の近世瓦が出土した。

40・41 は軒丸瓦である。40 は右巻きの三ツ巴紋軒丸瓦の瓦当部である。珠文は６個残っており、全体で 12 個以上に復元できる。41 は本庄松平氏の家紋である繋九目結紋軒丸瓦の瓦当面である。紋様が厚く、丸みを帯びた形状である。

42・43 は軒平瓦である。42 の瓦当面には三葉紋２反転均整唐草紋が施される。43 は中心飾りが不明であるが、２反転均整唐草紋と考えられる。いずれも重線で唐草紋が描かれており、唐草の巻きが弱いものである。

44 ～ 50 は軒桟瓦である。44 ～ 46 は小巴であり、瓦当面には右巻きの三ツ巴紋と連珠文が施される。47・48 は右巻きの三ツ巴紋が施された軒桟瓦の小巴である。48 の瓦当面には離型剤のキラ

Fig.32　瓦集積2（SX20）出土遺物（１）

コが認められる。瓦の色調は橙色である。49 は軒桟瓦の垂れである。中心飾りは欠損のため不明な部分が多いが、飛び唐草紋をもつ軒桟瓦である。唐草の先端は点珠となっている。50 は軒桟瓦の垂れであり、連弧文が施されている。

51 は丸瓦で、凹面にはコビキＢ技法、粗い布目、吊紐痕が認められる。また側面端部には２回の面取りが施され、凸面は縦方向のミガキ調整が認められる。

52 は鬼瓦である。頭の頂部片で、頂部左側の形から丸張型と考えられる。裏面に窪みを持つ裏なし型である。53 ～ 56 は鯱瓦である。53 は背鰭を突起で立体的に表現したものとみられる。突起は２個残存し、突起の脇には円形の低い突起が確認できる。54 には正面右下に円形の孔が開けられている。円形の孔は半分のみ残存し、復元径は約 8mm である。55・56 は鰭部である。55 は鰭の立体表現が両面に認められ、尾鰭とみられる。56 は片面が立体表現され、胸鰭とみられる。

本丸東堀跡の時期と特徴　本丸東堀跡（SD01）は検出面を基準にすると幅 11 m以上、深さ 3 m以上の規模を持つ断面逆台形の堀として構築され、後に西側斜面のみが緩やかな斜面に変化したとみられる。本丸東堀跡の北端を検出し、本丸裏門の位置を推定することが可能となった点も大きな成果である。本丸東堀跡の構築時期は、出土瓦の特徴から 16 世紀末以前と捉えられる。江戸時代には本丸東石垣の崩落もあったが、浚渫を行い、廃城時まで維持されたことが明らかになった。堀の埋立ては、廃城から一定期間が経過したのちに本丸東半の削平と合わせて行われたとみられる。なお、本丸東堀跡北端付近で検出した瓦集積 2 には、鯱瓦や鬼瓦が認められ、北側に近接した本丸裏門の瓦が含まれている可能性が高い。

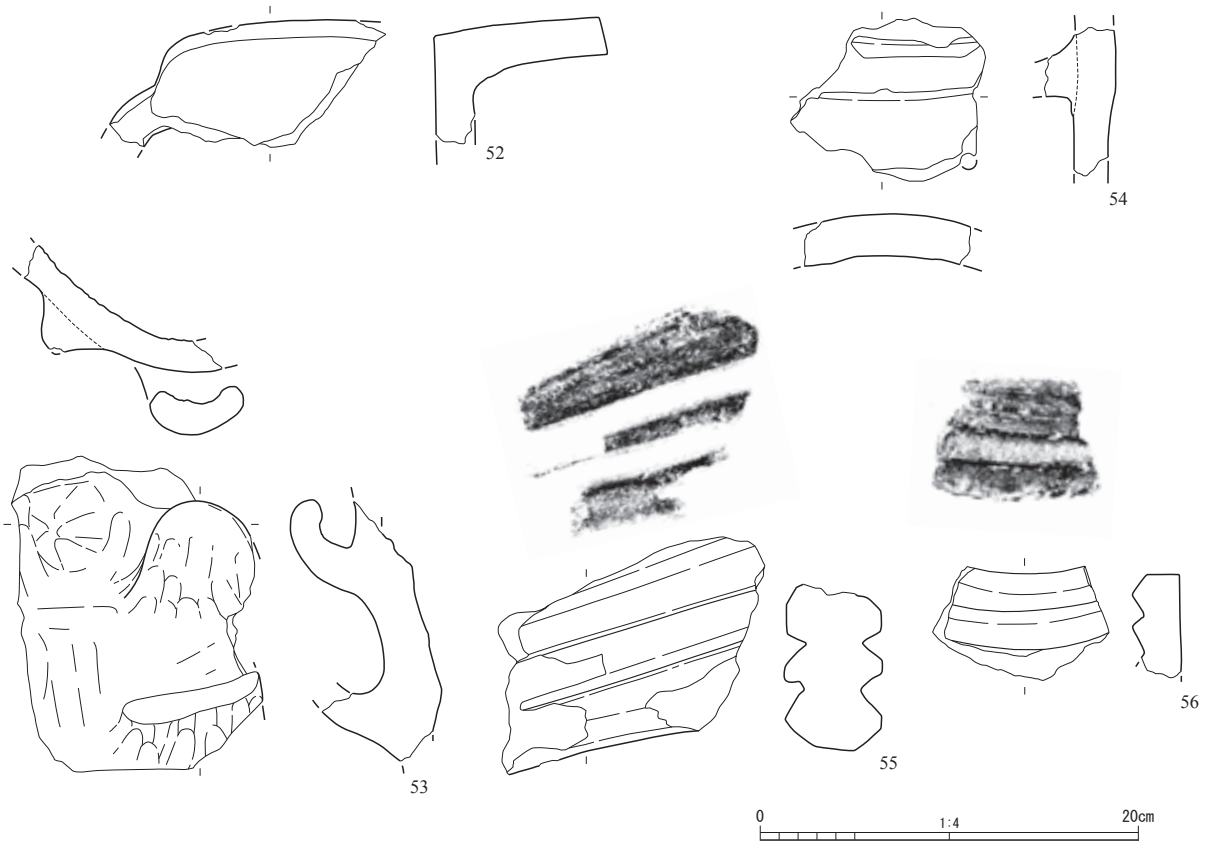


Fig.33　瓦集積2（SX20）出土遺物（２）

4　御誕生場の調査

（1）調査の概要

江戸時代に描かれた絵図には、本丸と二の丸の間に御誕生場が描かれている。御誕生場は二代将軍徳川秀忠が誕生したと言い伝えられた場所のひとつである。7次調査により、御誕生場と二の丸の段差を検出し、大まかな位置が特定されたが、詳細は不明であった。26次・35次調査において、調査対象地の南中央部で本丸東堀跡の北端や御誕生場と二の丸の間の段差を検出したことにより、御誕生場の範囲が明らかになった。

（2）検出遺構と出土遺物

御誕生場の規模と構造　1・2トレンチの中央付近で検出したこの段差は、南北方向の段差は西に対して東が低い。段差は基盤層を掘り込み形成されている。堆積状況から近代以降に改変されていることが明らかである。廃城後、調査対象地が住宅地として利用されていた近代には、西と東の高低差が3ｍ以上あったとされる。このことから、江戸時代には御誕生場と二の丸の間には3～4ｍ以上の段差があったと考えられる。検出した御誕生場の規模は、東西約25ｍ、北端はSE01付近と捉えられ、対象地外の南へと続いている。

御誕生場で検出した遺構は、7次調査で検出した井戸（SE01）のみであり、26次・35次調査では平面形の確認にとどめたため遺物は出土していない。江戸時代以前の御誕生場の遺構面は、近代以降に大幅な改変を受けているため、井戸などの掘削深度が深い遺構のみが残存していると考えられる。

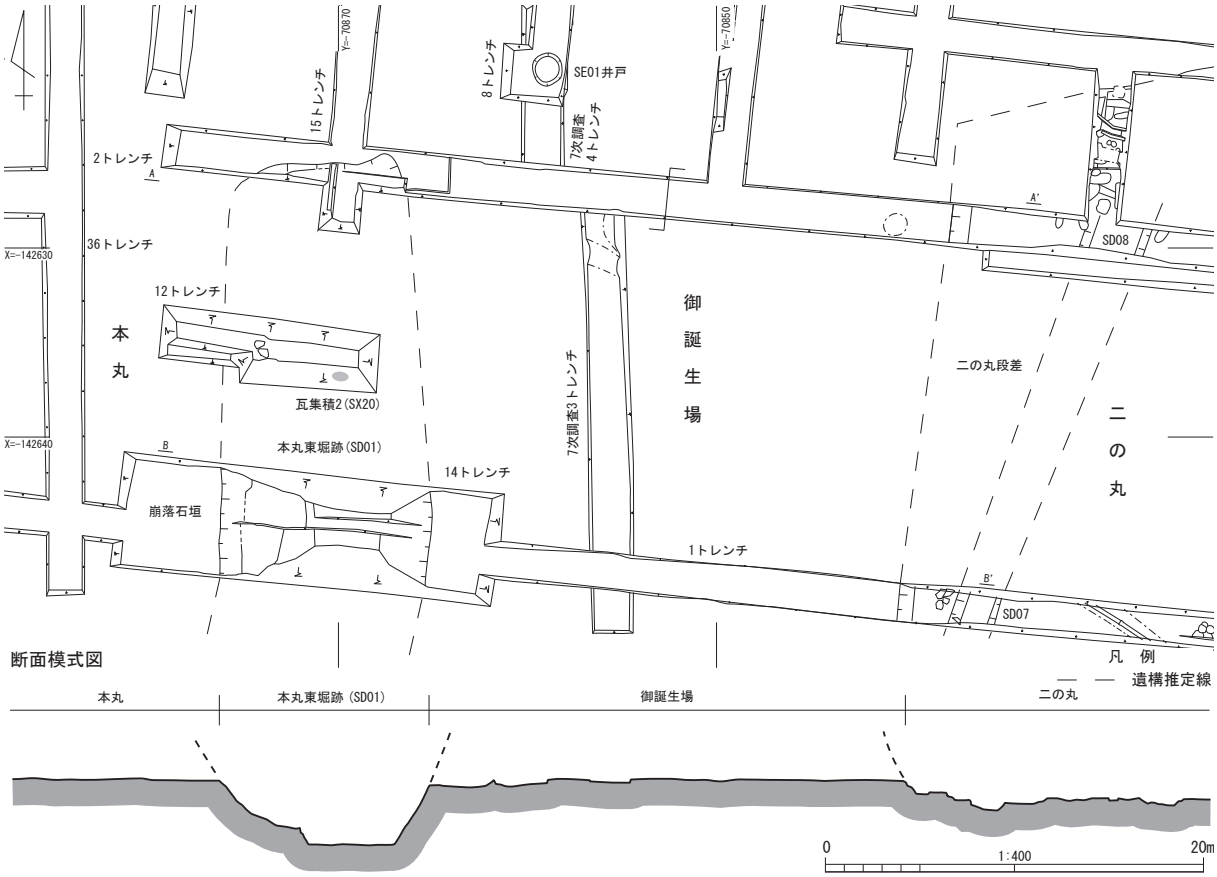
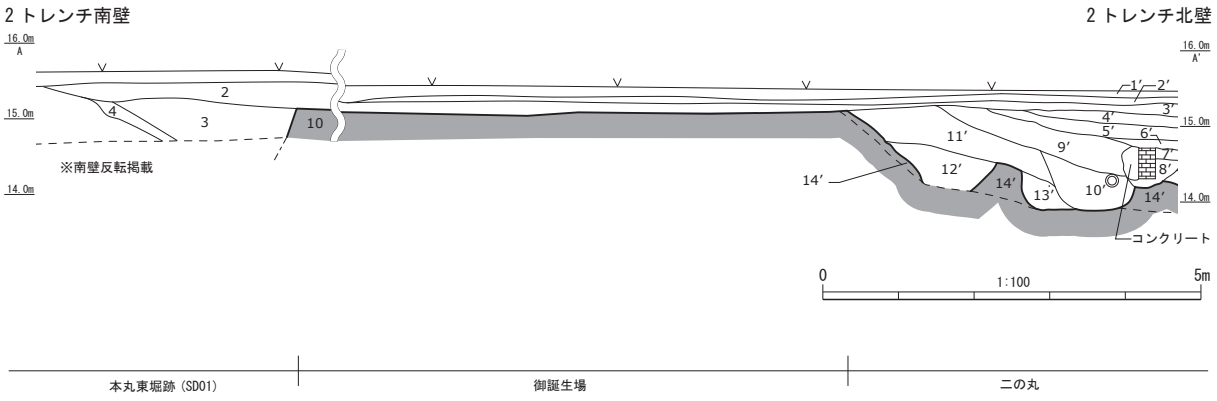


Fig.34　御誕生場詳細図



2 トレンチ南壁

Ⅰ層　現代
1　にぶい黄褐色土　（表土）
2　暗褐色土

Ⅱ層～Ⅲ層　近代・太平洋戦争前後
3　暗褐色土
4　褐色土
5　暗褐色土
6　褐色土
7　暗褐色土　（攪乱）

Ⅴ層　近世
8　灰黄褐色粘質土
9　にぶい黄褐色粘質土

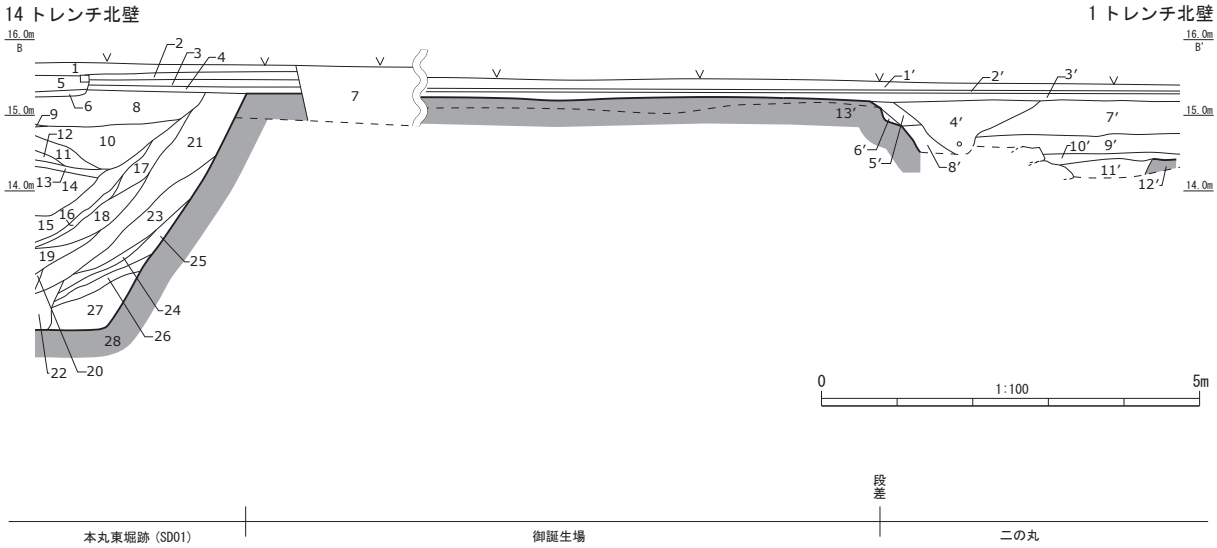
Ⅶ層　基盤層
10　黄褐色砂礫

2 トレンチ北壁

Ⅰ層　現代
1′　明褐色砂
2′　黒褐色砂
3′　にぶい黄橙色砂礫

Ⅱ層～Ⅲ層　近代・太平洋戦争前後
4′　黄褐色土
5′　黒褐色土
6′　黒褐色土
7′　褐色土
8′　褐色土
9′　黒褐色土
10′　灰黄褐色土
11′　にぶい黄褐色土
12′　灰黄褐色土
13′　にぶい黄褐色土

Ⅶ層　基盤層
14′　黄橙色砂礫土



14 トレンチ北壁

Ⅰ層　現代
1　褐色土　（表土）
2　明橙色砂
3　黒褐色砂
4　砂礫
5　明褐色砂礫土
6　褐灰色砂
7　暗褐色土（しまりなし、コンクリート含む、攪乱）

SD01-A層　近代の埋立て土
8　褐色土
9　褐色土
10　黄褐色土
11　明黄褐色土
12　明黄褐色土
13　黄褐色土
14　黄褐色土
15　褐灰色粘質土
16　にぶい黄褐色土
17　灰黄褐色土
18　灰黄褐色土

SD01-B層　近世
19　褐灰色土
20　褐灰色土
21　褐灰色土
22　灰黄褐色土

SD01-D層　中世
23　にぶい黄褐色土
24　にぶい黄褐色シルト
25　褐灰色シルト
26　明黄褐土色シルト
27　にぶい黄褐色砂礫土

Ⅶ層　基盤層
28　明黄褐色粘質土

1 トレンチ北壁

Ⅰ層　現代
1′　明褐色砂
2′　黒褐色砂（砂礫含む）
3′　にぶい黄橙色土
4′　暗褐色土

Ⅱ層～Ⅲ層　近代・太平洋戦争前後
5′　褐色土
6′　にぶい黄褐色土
7′　明黄褐色土
8′　にぶい黄褐色土
9′　黒褐色砂
10′　黒褐色土

Ⅴ層　近世
11′　黄褐色土

Ⅶ層　基盤層
12′　黄橙色砂礫土
13′　にぶい黄褐色砂礫

Fig.35　御誕生場土層断面図

5　二の丸の調査

（1）調査の概要

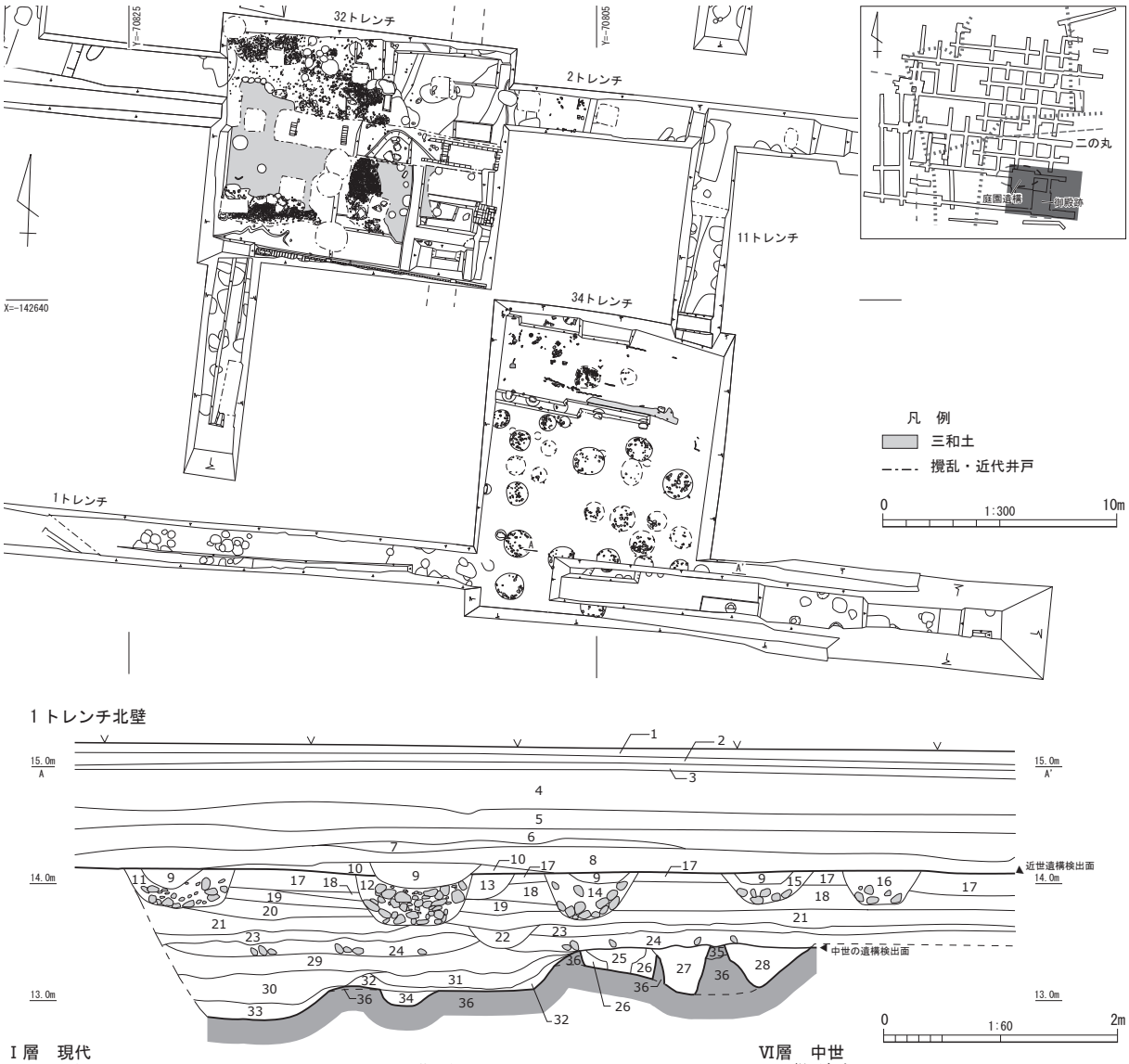
調査地南東部は、江戸時代の絵図との対比から浜松城の二の丸北半にあたる地点であり、二の丸御殿のうち奥御殿が存在していた可能性が高いと想定される地点である。二の丸に関わる遺構や遺物の残存状況とその内容を把握するための調査を行った。

26 次調査では二の丸を網羅するように約 20 m間隔の格子状にトレンチを設定し、調査を実施した結果、浜松城に関わる遺構が、数多く残存していることを確認した。

Fig.36　二の丸の検出遺構全体図

また、大規模な攪乱などを利用し、近世遺構面よりも下層へ掘削を伴う調査を実施した１トレンチ東側では、盛土などにより明確に識別可能な複数の遺構面を確認した。遺構面は大きく、中世面と近世面２つの遺構面に分けて捉えることができる。26 次調査の成果を受け 35 次・43 次調査では、二の丸御殿に関わる遺構が多く遺存している可能性が高い部分に平面的な調査区を設定し、近世の二の丸御殿に関わる遺構を検出した。

二の丸御殿に関わる遺構には、列を成した状態で検出した礎石や礎石据付穴、雨落ち溝、庭園遺構など、御殿の構造を示す重要な遺構が含まれている。



Ⅰ層　現代

1　明褐色砂　（しまりなし）
2　黒褐色砂　（しまりなし、溶融スラグ含む）
3　にぶい黄橙砂礫　（しまりなし、φ5cmの礫多量に含む）
4　褐色土　（しまりなし、コンクリート・近代瓦多量に含む）
5　暗褐色土　（しまりなし、炭化物含む、コンクリート含む）

Ⅱ層～Ⅲ層　近代・太平洋戦争前後

6　褐色土　（しまりあり、炭化物含む）
7　黒褐色土　（しまりなし、炭化物多量に含む）

Ⅳ層　近世・近代

8　黒灰色土　（しまりあり、炭化物多量に含む）
9　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの礫多量に含む、礎石抜取穴）
10　褐色土　（しまりあり、φ1cmの礫少量含む、堆積層・江戸時代表土）

礎石据付穴

11　黄褐色土　（しまりあり、φ10～15cmの礫多量に含む、礎石据付穴）
12　黄褐色土　（しまりあり、φ10～15cmの礫多量に含む、礎石据付穴）
13　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
14　褐色土　（しまりあり、φ10～15cmの礫含む、礎石据付穴）
15　褐色土　（しまりあり、φ10～15cmの礫含む、礎石据付穴）
16　黄橙色土　（しまりあり、φ10～15cmの礫含む、礎石据付穴）

Ⅴ-1層　近世整地層

17　明黄褐色砂礫土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む、御殿構築面）

Ⅴ-2層　近世造成層

18　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ5cmの礫含む、江戸時代）
19　黄褐色土　（しまりあり、φ3cmの礫含む）
20　褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多く含む）
21　にぶい黄褐色土　（しまりあり、炭化物・砂礫少量含む）
22　にぶい黄褐色土　（しまり中、φ1～5cmの砂礫少量含む）
23　明褐色土　（しまり中）

Ⅵ層　中世

24　褐灰色土　（しまりなし、φ15cmの礫含む、SX21）
25　暗褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
26　褐灰色土　（しまり中、φ1～5cmの砂礫少量含む）
27　暗褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
28　褐灰色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
29　褐灰色土　（しまり中、φ１cmの礫含む）
30　褐灰色土　（しまり中、φ0.5～1cmの黄褐色粒子含む）
31　にぶい黄橙色土　（しまり中、φ1cmの砂礫極少量含む）
32　褐灰色土　（しまりあり）
33　褐灰色土　（しまり中、φ1cmの砂礫極少量含む）
34　にぶい黄橙色土　（しまり中、φ1cmの砂礫極少量含む）

Ⅶ層　基盤層

35　明褐灰色土　（しまり中、φ1cm砂礫少量含む）
36　明黄褐色土　（しまり中、黄褐色土少量含む）

Fig.37　二の丸概略図

（2）中世の検出遺構と出土遺物

中世の遺構は近世遺構の下層にあり、上面遺構保護のため調査が及ばない部分が多いが、二の丸御殿や庭園遺構の下部から中世の遺構や遺物を検出した。

SP01　1トレンチの東側で検出した小穴である。24層の盛土を掘り込んでいる。長径0.6 m、深さ0.4 mを測る。中央に直径0.2 mの柱痕が認められる。埋土から天目茶碗が1点出土した。

SP01 出土遺物　59は天目茶碗である。内外面に錆釉が施され、大窯第1段階に位置づけられる。

SP02　1トレンチの東側、SP01の西側で検出した。24層の盛土を掘り込んでいる。直径0.45 m、深さ0.4 mを測る。柱痕は認められなかった。白磁が1点出土した。

SP02 出土遺物　60は白磁の碗と考えられ、16世紀後半から17世紀前半に位置づけられる。

SX21　小穴検出面において径15cm程度の円礫が南北方向に並べられた礫群を検出し、SX21とした。部分的な検出であり、その詳細は不明であるが、礫の密度が高く遺物が一定量包まれることから遺構とした。中世の旧地表面や近世面造成の単位の可能性も含まれる。

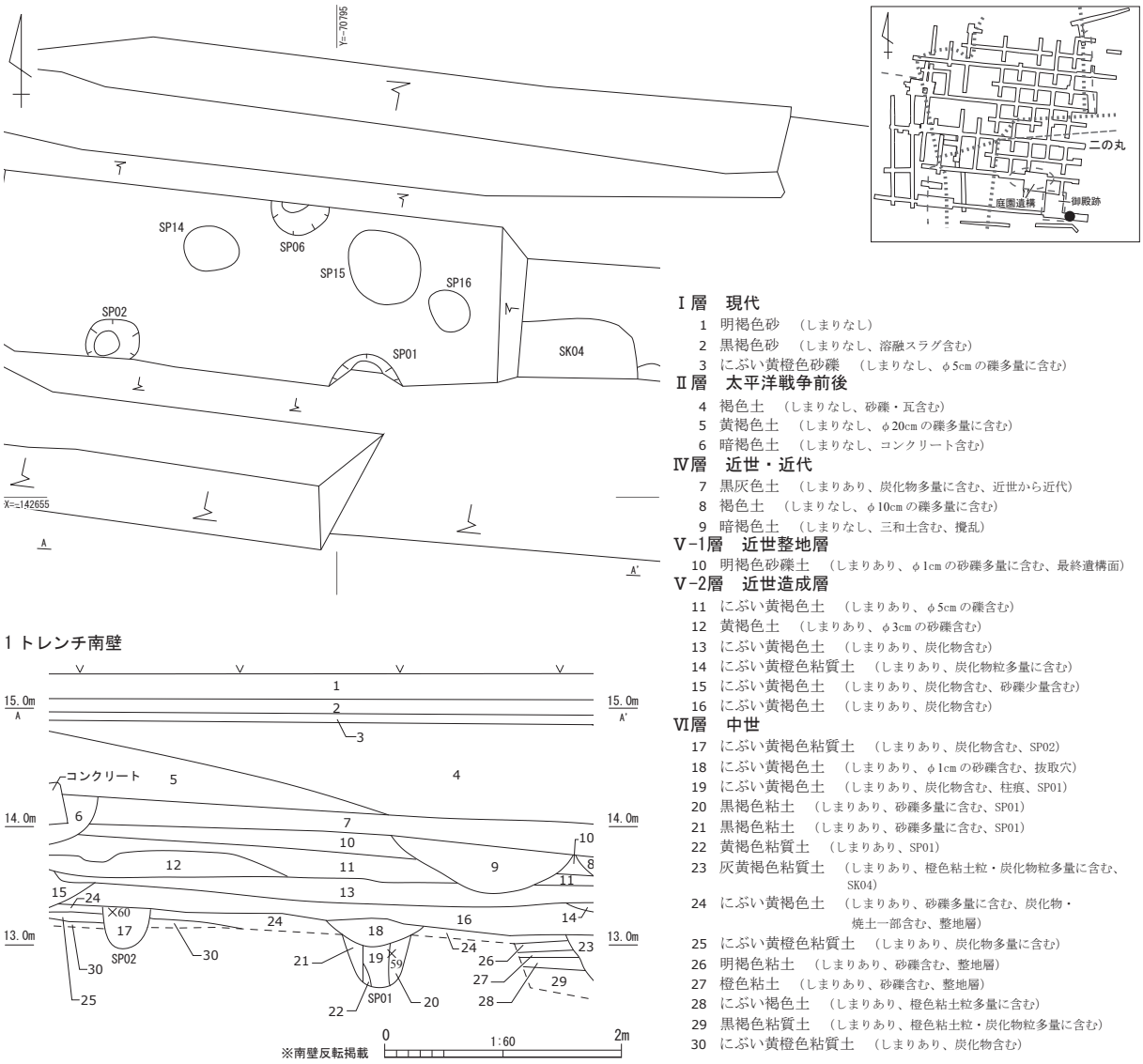
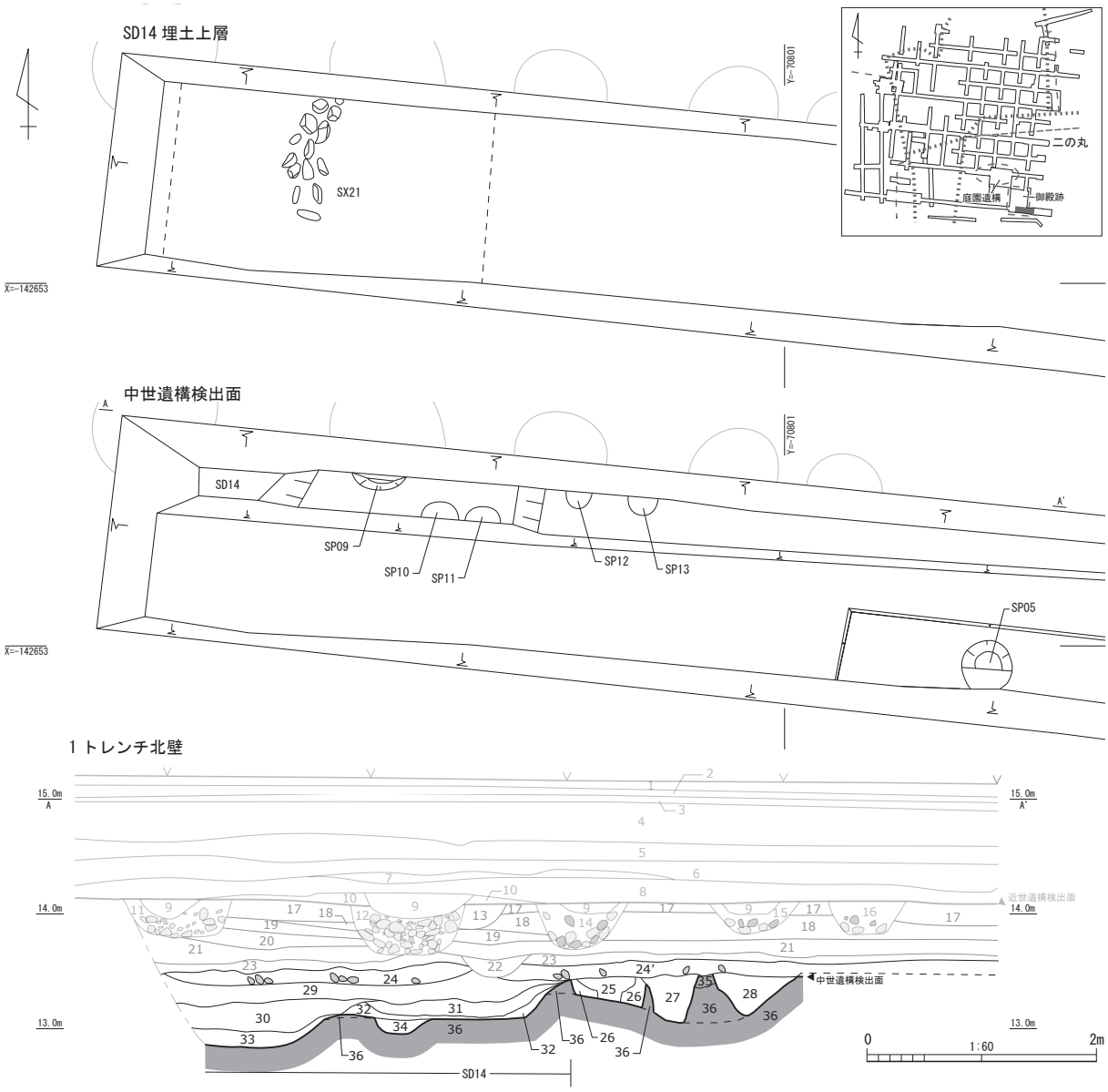


Fig.38　SP01・SP02詳細図

SX21 出土遺物　57・58 はかわらけである。いずれもロクロ成形で、16 世紀後葉を中心とした時期のものと捉えられる。

SP09 ～ SP13　1 トレンチで基盤層を掘り込み形成されている小穴群を確認した（SP09 ～ SP13）。直径 0.3 ～ 0.6 m程度の小穴が主体を占める。

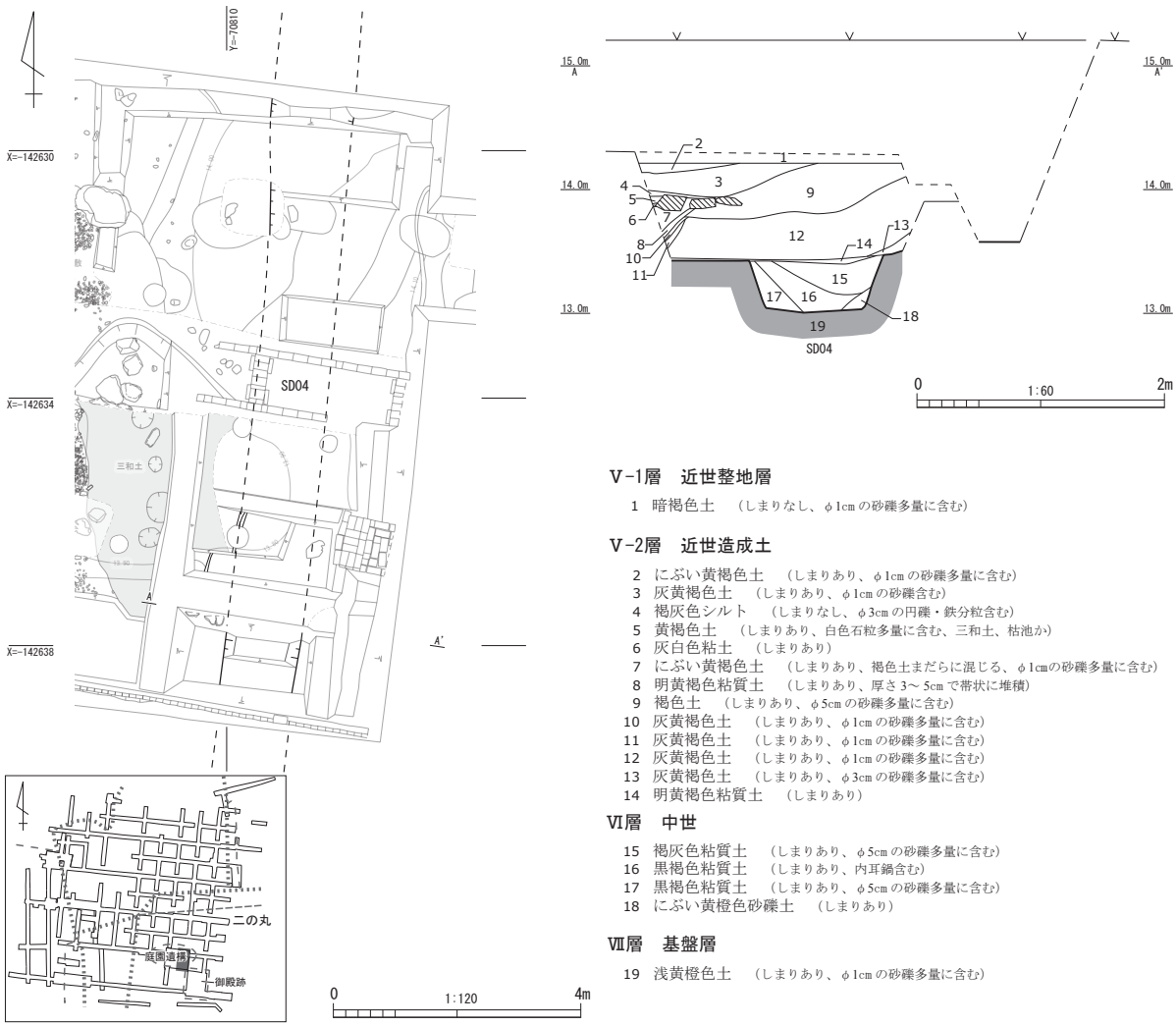
SD04　32 トレンチの庭園遺構の下層で検出した南北方向に延びるとみられる溝跡である。基盤層上面で検出した。32 トレンチ北側と 32 トレンチ南側のサブトレンチでの検出にとどまるが、一連の溝跡と捉えられる。幅は北側サブトレンチで 1.3 m、南側サブトレンチで 1.2 mを測る。検出面からの深さは 0.8 m、底面の標高は北側サブトレンチで 13.2 m、南側サブトレンチで 13.0 mであり、北から南に向かって緩やかに傾斜する。断面形状は逆台形である。埋土は粘性が強い黒褐色土で、検



Ⅵ層　中世
24　褐灰色土　（しまりなし、φ15cmの礫多量に含む、SX21）
24′ 褐灰色土　（しまりなし、φ15cmの礫含む）
25　暗褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む、SP12）
26　褐灰色土　（しまり中、φ1～5cmの砂礫少量含む）
27　暗褐色土　（しまり中、φ1cmの砂礫多量に含む、SP13）
28　褐灰色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
29　褐灰色土　（しまり中、φ1cmの礫含む、SD14埋土）
30　褐灰色土　（しまり中、φ0.5～1cmの黄褐色粒子含む、SD14埋土）
31　にぶい黄橙色土　（しまり中、φ1cmの砂礫極少量含む、SD14埋土）
32　褐灰色土　（しまりあり、SD14埋土）
33　褐灰色土　（しまり中、φ1cm砂礫極少量含む、SD14埋土）
34　にぶい黄橙色土　（しまり中、φ1cmの砂礫極少量含む、SP09埋土）

Ⅶ層　基盤層
35　明褐灰色土　（しまり中、φ1cmの砂礫少量含む）
36　明黄褐色土　（しまり中、黄褐色土少量含む）

Fig.39　SX21・SP09 ～ SP13詳細図



Ⅴ-1層　近世整地層

1　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む）

Ⅴ-2層　近世造成土

2　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
3　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
4　褐灰色シルト　（しまりなし、φ3cmの円礫・鉄分粒含む）
5　黄褐色土　（しまりあり、白色石粒多量に含む、三和土、枯池か）
6　灰白色粘土　（しまりあり）
7　にぶい黄褐色土　（しまりあり、褐色土まだらに混じる、φ1cmの砂礫多量に含む）
8　明黄褐色粘質土　（しまりあり、厚さ3～5cmで帯状に堆積）
9　褐色土　（しまりあり、φ5cmの砂礫多量に含む）
10　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
11　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
12　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
13　灰黄褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む）
14　明黄褐色粘質土　（しまりあり）

Ⅵ層　中世

15　褐灰色粘質土　（しまりあり、φ5cmの砂礫多量に含む）
16　黒褐色粘質土　（しまりあり、内耳鍋含む）
17　黒褐色粘質土　（しまりあり、φ5cmの砂礫多量に含む）
18　にぶい黄橙色砂礫土　（しまりあり）

Ⅶ層　基盤層

19　浅黄橙色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）

Fig.40　SD04詳細図

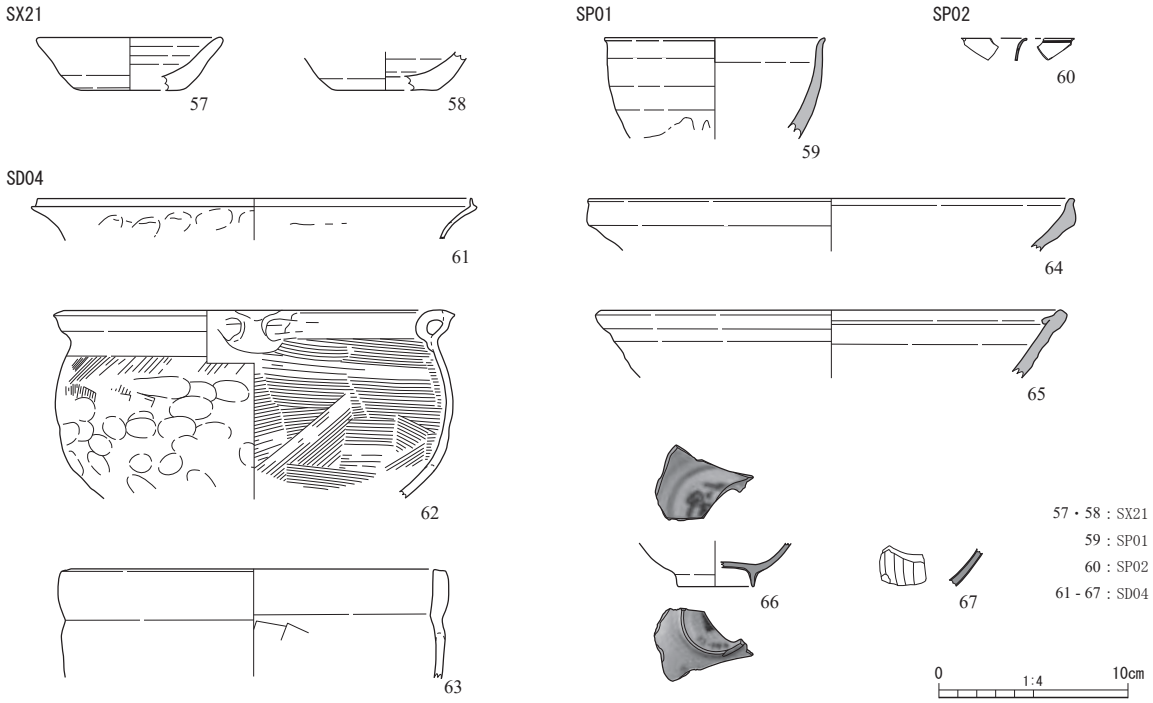


Fig.41　SX21・SP01・SP02・SD04出土遺物

出面より上部は中世から近世にかけてのものと捉えられる造成土で覆われている。出土した内耳鍋や陶磁器の特徴から、遺構の年代は 15 世紀中葉から 16 世紀後葉までの間を中心としていると考えられる。

SD04 出土遺物　61 は土師質土器甕である。外面はススが付着している。62・63 は内耳鍋である。62 はくの字形内耳鍋で、15 世紀中葉から 15 世紀後葉、63 は内彎形内耳鍋で、16 世紀後葉から 17 世紀前葉に位置づけられる。64･65 は擂鉢である。大窯第１段階後半（64）と大窯第２段階後半（65）に位置づけられる。

66・67 は貿易陶磁器である。66 は青花碗である。16 世紀中葉に位置づけられる。67 は青磁の碗で連弁文が認められる。15 世紀末から 16 世紀中葉に位置づけられる。

SD14　1 トレンチにおいて、基盤層を掘り込む溝状遺構（SD14）の東端を検出した。西側へ深く掘り込まれ、中段を有している。基盤層を 30cm 程度掘り込み、約 1.8 ｍの中段平坦面を設けた西側でさらに 30cm ほど掘削している。なお、SD14 の中段平坦面では、直径 40cm 程度の小穴を３基（SP09 ～ SP11）検出した。

SD14 は、近世遺構が残存する部分に続いており遺構の規模は不明である。

二の丸下層遺構の特徴　御殿下層では、２つの遺構面を確認した。上面の SX21 からは、16 世紀後葉のかわらけが２点出土している。下面からは、SD14 や多数の小穴等を確認した。また、庭園遺構下層からは、SD04 を確認した。いずれの遺構も 15 世紀中葉から 16 世紀後葉の間を中心とした時期に形成・埋没した遺構と捉えられる。

（３）近世の検出遺構と出土遺物

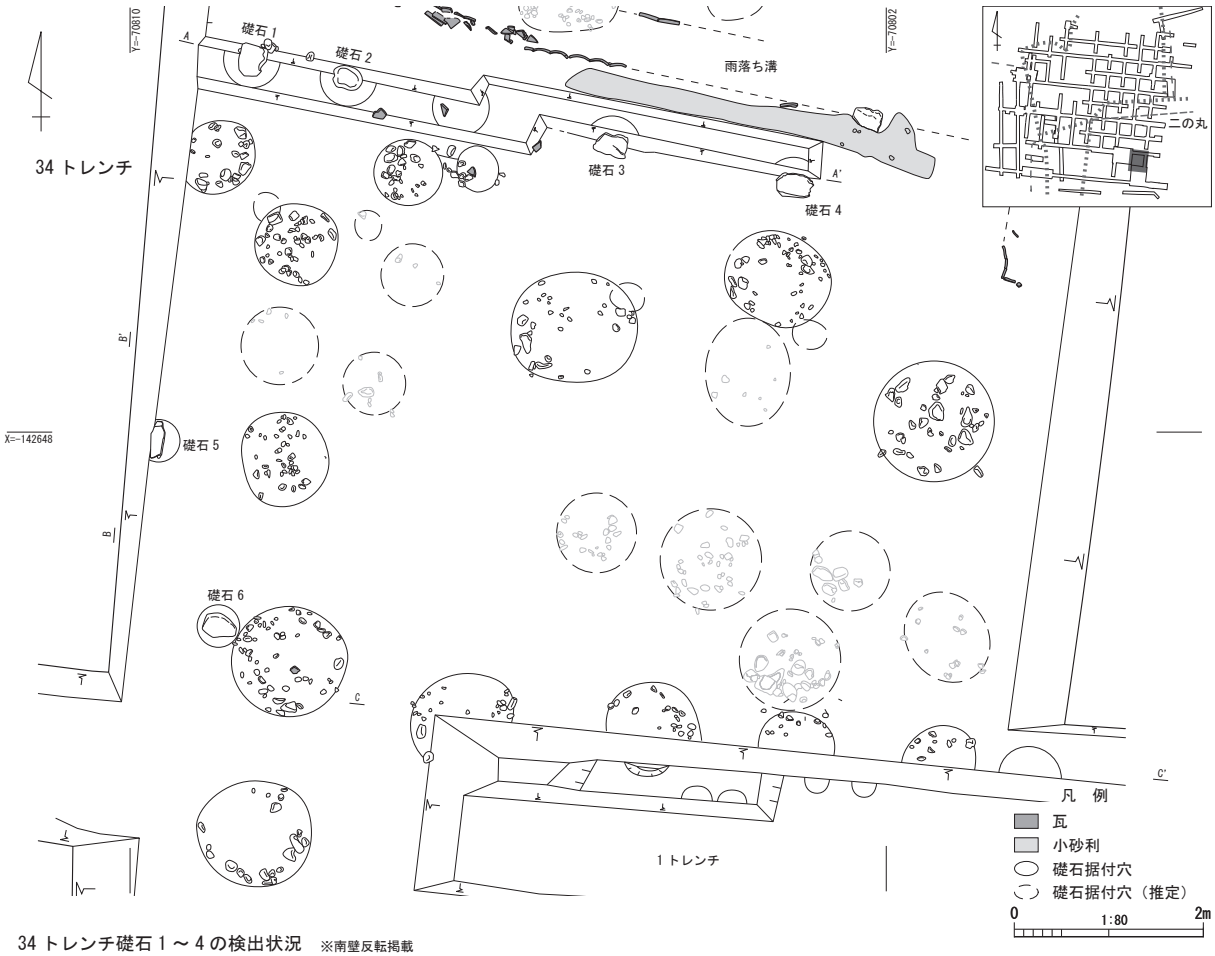
1. 二の丸御殿

二の丸御殿の概要　26 次調査では礎石据付穴を５基検出し、35 次・43 次調査では平面的な調査により規則的に配置された礎石・礎石据付穴、雨落ち溝の一部と考えられる瓦列、瓦集積を検出した。出土した瓦には家紋瓦をはじめとした軒瓦が含まれ、検出した瓦集積 3 は 18 世紀から 19 世紀に帰属すると考えられる。また、32 トレンチでは、調査区の大部分を占める三和土による枯池や円礫敷の洲浜を検出した。これらは御殿内に作られた枯山水庭園の可能性が高い。

二の丸御殿建物遺構　34 トレンチでは、礎石を６石確認した（礎石 1 ～ 6）。このうち礎石 1 ～ 4 の４つの礎石は、東西方向に並んだ状態で検出した。礎石 2 と礎石 3 の間には、礎石が現存しておらず、抜きとられた痕跡が平面や土層断面から確認できる。礎石 3 と礎石 4 の中心間の距離は約 2 ｍ、礎石 1 と礎石 2 の中心間の距離は約 1m である。このことから、６尺５寸（約 1.97 ｍ）の京間を基準とした建造物の基礎と推定できる。

東西方向の礎石列西端の礎石 1 に直交する位置において礎石 5 を確認した。また礎石 2 と直交する礎石 6 を検出した。礎石として利用されている石材は、縦 20cm、横 40cm、厚さ 15cm 程度である。土層堆積状況から、礎石を据える位置に礎石よりも一回りほど大きい直径 50cm 程度の穴を掘削し、拳大の礫を敷き詰め、その隙間に土を充填した後に礎石を設置している。また、堆積状況から、礎石は最低でも 5cm 以上は、当時の地表面より高く露出していたと捉えられる。礎石上面の標高値はいずれも 14.2 ｍ程度で揃っている。

34 トレンチの礎石列より南方では、径 10cm ～ 20cm 大の円礫が集中した地点を 14 箇所以上確認した。このうち、半裁され断面の観察が可能なものは、いずれも深さ 0.6 ｍ程度の掘込みに拳大の円礫を高密度で詰め、その間に土が充填されたことが確認できる。円礫が充填された穴の掘込み面



34 トレンチ礎石 1 ～ 4 の検出状況　※南壁反転掲載

Ⅳ層　近世・近代

1　暗褐色土　（しまり中、φ0.5 cmの礫少量含む、旧表土）

礎石据付穴

2　暗褐色土　（しまりあり、均質性が高い）
3　暗褐色土　（しまり中）
4　暗褐色土　（しまりあり、φ0.5cmの礫少量含む）
5　褐色土　（しまり中、φ5 cmの礫含む）
6　褐色土　（しまりあり、φ5 cmの礫・黄褐色土少量含む）

Ⅴ-1層　近世整地層

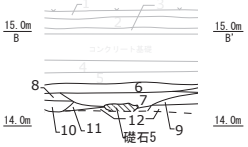
7　黄褐色土　（しまりあり、節状に入る整地土）
8　赤褐色土　（しまり中、φ5 cmの礫少量含む、φ1 cmの礫含む）

Ⅴ-2層　近世造成層

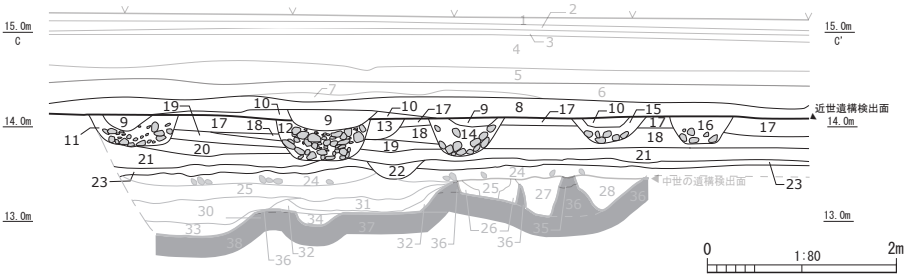
9　暗褐色土　（しまりなし、φ1 cmの礫少量含む）

0　1:40　1m

34 トレンチ西壁



1 トレンチ北壁



Ⅳ層　近世・近代

6　オリーブ褐色土
（しまりなし、粒子細かい、炭化物含む、有機物多量に含む、江戸時代後期から明治時代の土層か）
7　褐色土
（しまりあり、黄褐色土塊含む）
8　にぶい黄褐色土
（しまりあり、黄褐色土塊含む）
9　褐色土
（しまり中、φ0.3cmの砂礫極少含む、御殿の旧表土）
10　にぶい黄褐色土
（しまりあり、φ1～5cmの礫多量に含む橙色土塊含む、φ5～20cmの礫あり）
11　にぶい黄褐色土
（しまりあり、黄褐色土塊含む、砂質土、まじりはほとんどない、φ8cmの礫少量含む）
12　褐色土
（しまり中、φ1cmの礫少ない、橙色土塊含む）

Ⅳ層　近世・近代

8　黒灰色土　（しまりあり、炭化物多量に含む）
9　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの礫多量に含む、礎石抜取穴）
10　褐色土　（しまりあり、φ1cmの礫少量含む、堆積層・江戸時代表土か）

礎石据付穴

11　黄褐色土　（しまりあり、φ10～15cmの礫多量に含む）
12　黄褐色土　（しまりあり、φ10～15cmの礫多量に含む）
13　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
14　褐色土　（しまりあり、φ10～15cmの礫含む）
15　褐色土　（しまりあり、φ10～15cmの礫含む）
16　黄橙色土　（しまりあり、φ10～15cmの礫含む）

Ⅴ-1層　近世整地層

17　明黄褐色砂礫土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む、御殿構築面）

Ⅴ-2層　近世造成層

18　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ5cmの礫含む）
19　黄褐色土　（しまりあり、φ3cmの礫含む）
20　褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多く含む）
21　にぶい黄褐色土　（しまりあり、炭化物・砂礫少量含む）
22　にぶい黄褐色土　（しまり中、φ1～5cmの砂礫少量含む）
23　明褐色土　（しまり中）

Fig.42　二の丸御殿跡詳細図（1）

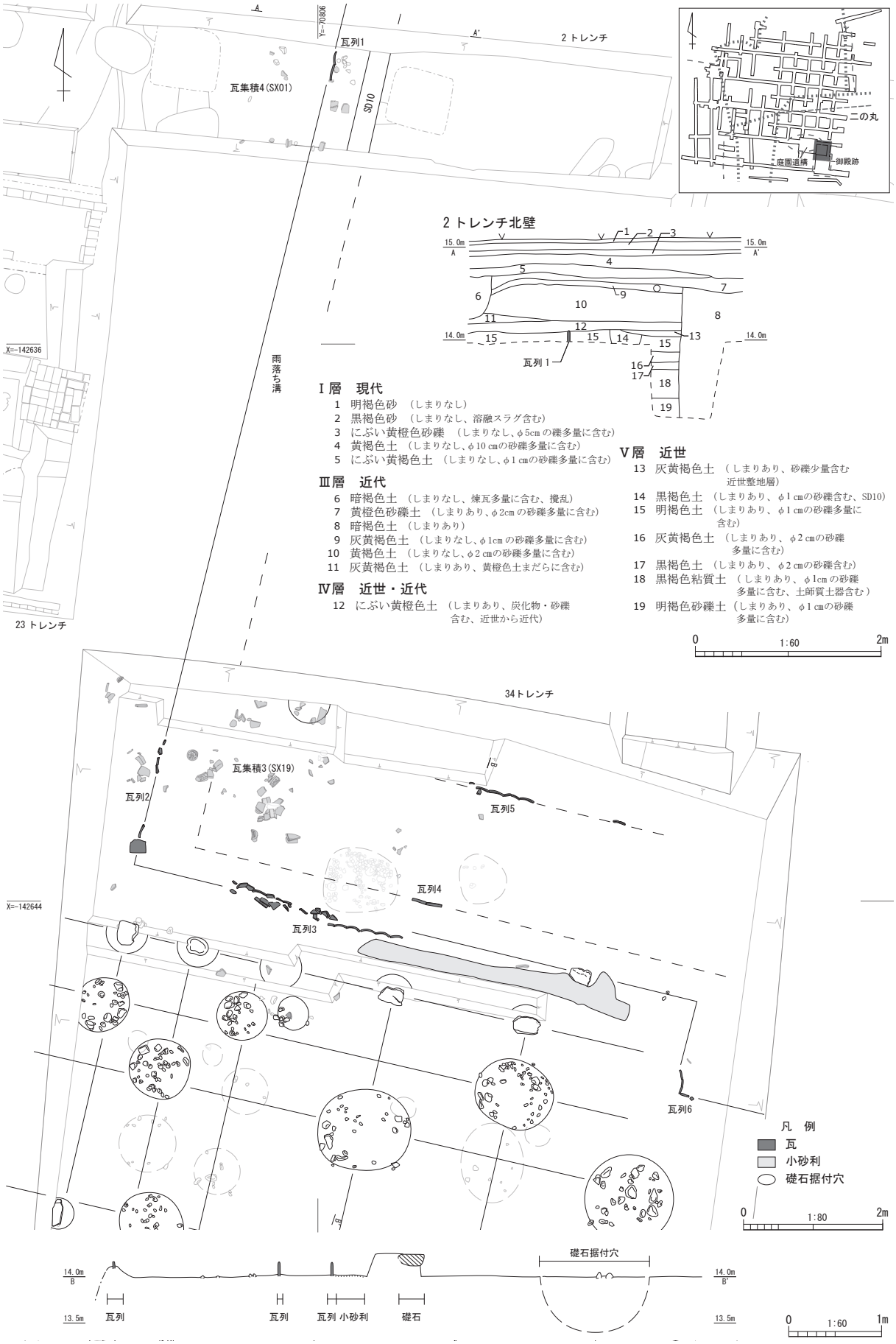


Fig.43　二の丸御殿跡詳細図（２）

から上部に硬く締まった土層（17 層）が 10cm 程度認識でき、二の丸御殿建設時の地表面であったと考えられる。

検出した礎石据付穴は、検出した礎石と規則性をもって配置されている。礎石列の配列上に位置する礎石据付穴を複数確認でき、これらは、二の丸御殿の構造物を支える柱の基礎の一部であったと捉えられる。

雨落ち溝　地面に垂直に立てられた瓦が複数枚連続し、列を成した遺構を断続的に検出した。2 トレンチと 34 トレンチでは、６つの瓦列を確認し、南北方向に２列（瓦列 1、瓦列 2）、東西方向に３列（瓦列 3、4、5）、L 字型をした１列（瓦列 6）である。いずれも礎石の軸線と同じ軸線をもつものであり、雨落ち溝と判断した。

最も遺存状態が良い瓦列は、瓦列 3 であり、2.5 m程度の列を形成し、礎石 1 ～ 4 と並行である。この瓦列と礎石列の間には、小砂利が平面的に分布している部分が確認できた。雨落ち溝と礎石の間にまかれたものと捉えられる。

21 トレンチで検出した瓦列 1 と 34 トレンチで検出した瓦列 2 は、軸線が同じであり、一連の遺構と捉えられる。瓦列 1、瓦列 2、瓦列 3 は、平面形に連続性が認められ、連続した遺構と考えられる。また瓦列 3 の北には平行する瓦列 4 がある。瓦列 3、瓦列 4 の間は 0.4m であり、両側が瓦を立ててつくられた雨落ち溝であったとみられる。このほか、L 字形をした瓦列 6 は、他の瓦列との明確な連続性は確認できないが、主軸方向は南北であり、瓦列 3 の延長線と直交する点から、瓦列 3 と連続する遺構の可能性がある。瓦列 5 は、瓦列 3 や瓦列 4 と同じ主軸でつくられており、関連する遺構と捉えられる。瓦列 4 と瓦列 5 の間は、約 1.4m 離れている。中庭などが存在した可能性が想定できる。

瓦集積 3(SX19)　334 トレンチ御殿跡北西部において検出した瓦集積である。南北 2.0 m、東西 5.1 m程度の範囲から検出した。瓦集積 3 は、瓦がほぼ水平な場所に集積されている。他の瓦集積と比

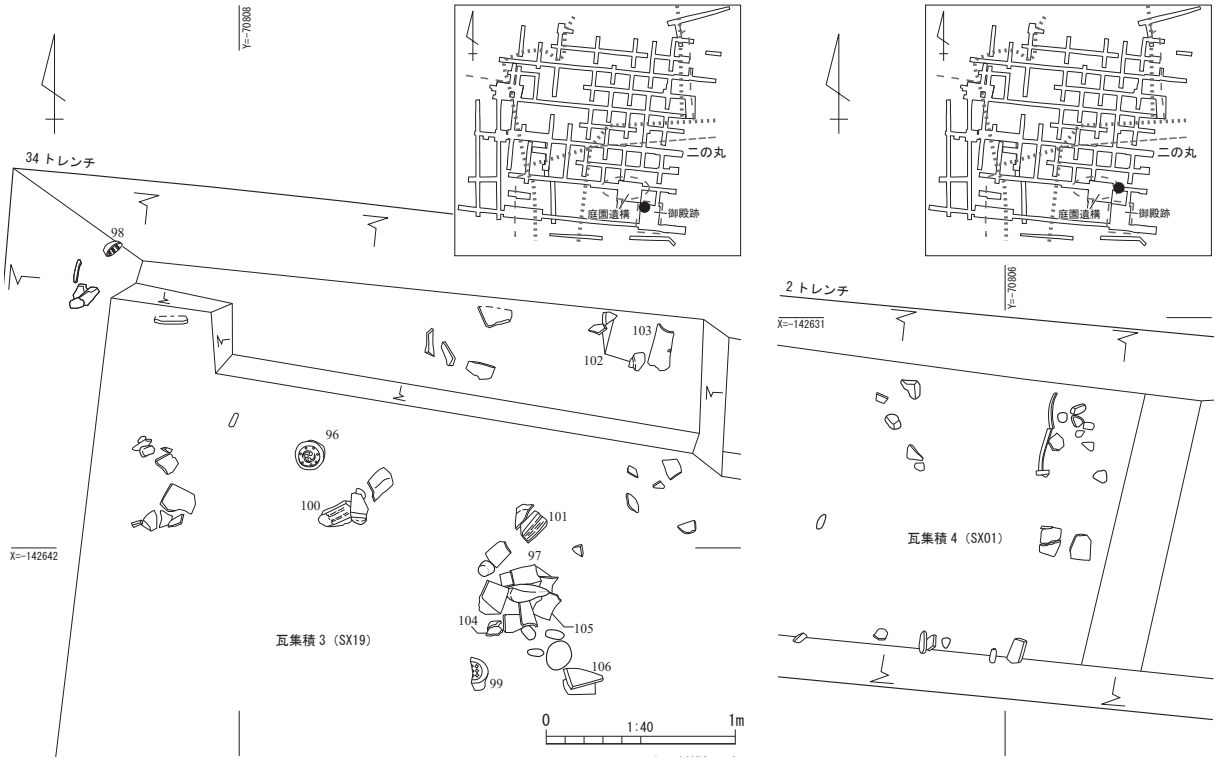


Fig.44　瓦集積3(SX19)・瓦集積4(SX01)出土状態図

べ密度は高くないが、散在して検出した瓦は、比較的遺存状態が良好な繋九目結紋軒丸瓦や三ツ巴紋軒丸瓦が含まれた。軒瓦の特徴から、瓦集積 3 は 18 世紀代の瓦が主体である。

瓦集積 4（SX01）　2 トレンチ庭園遺構東側で検出した瓦集積である。南北 1.4 m、東西 1.6 mの範囲で検出した。瓦集積 4 は、瓦列 1 の周辺で検出した瓦集積であり、瓦列を構成していたと考えられる瓦片も確認できる（Fig.44）。

御殿跡出土遺物　御殿跡からは土師質土器や陶器のほか、軒平瓦や軒桟瓦などの瓦が出土した。ここでは特徴的な遺物を抽出し、図示する。

68 は土師質土器の蓋と考えられる。口径 25.4cm で、残存する器高は 3.6cm である。69 は土師質土器の甕である。口径は 24.0cm に復元できる。16 世紀頃に位置づけられる南伊勢系鍋である。70 はくの字形内耳鍋の口縁部内耳破片である。口径は 19.0cm に復元でき、15 世紀中葉から 16 世紀後葉に位置づけられる。71 は土師質土器の茶釜である。頸径は 21.9cm に復元でき、下部にススが厚く付着している。16 世紀に位置づけられる南伊勢系鍋である。72 は土師質土器の小型壺と考えられる底部破片で、底径は 3.6cm である。73 は土師質焼成の製品であるが、器種不明の破片である。

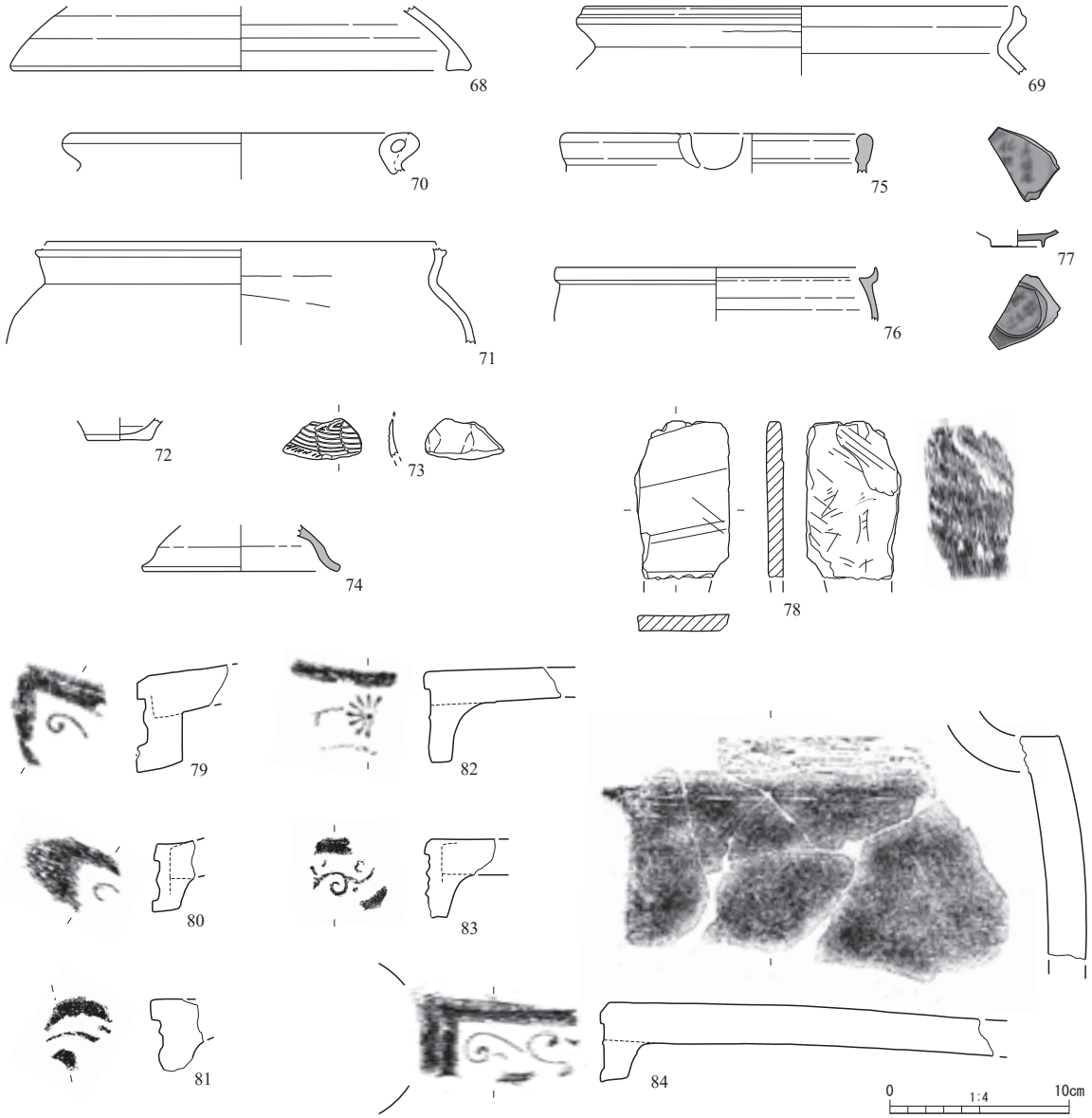


Fig.45　二の丸御殿跡出土遺物（１）

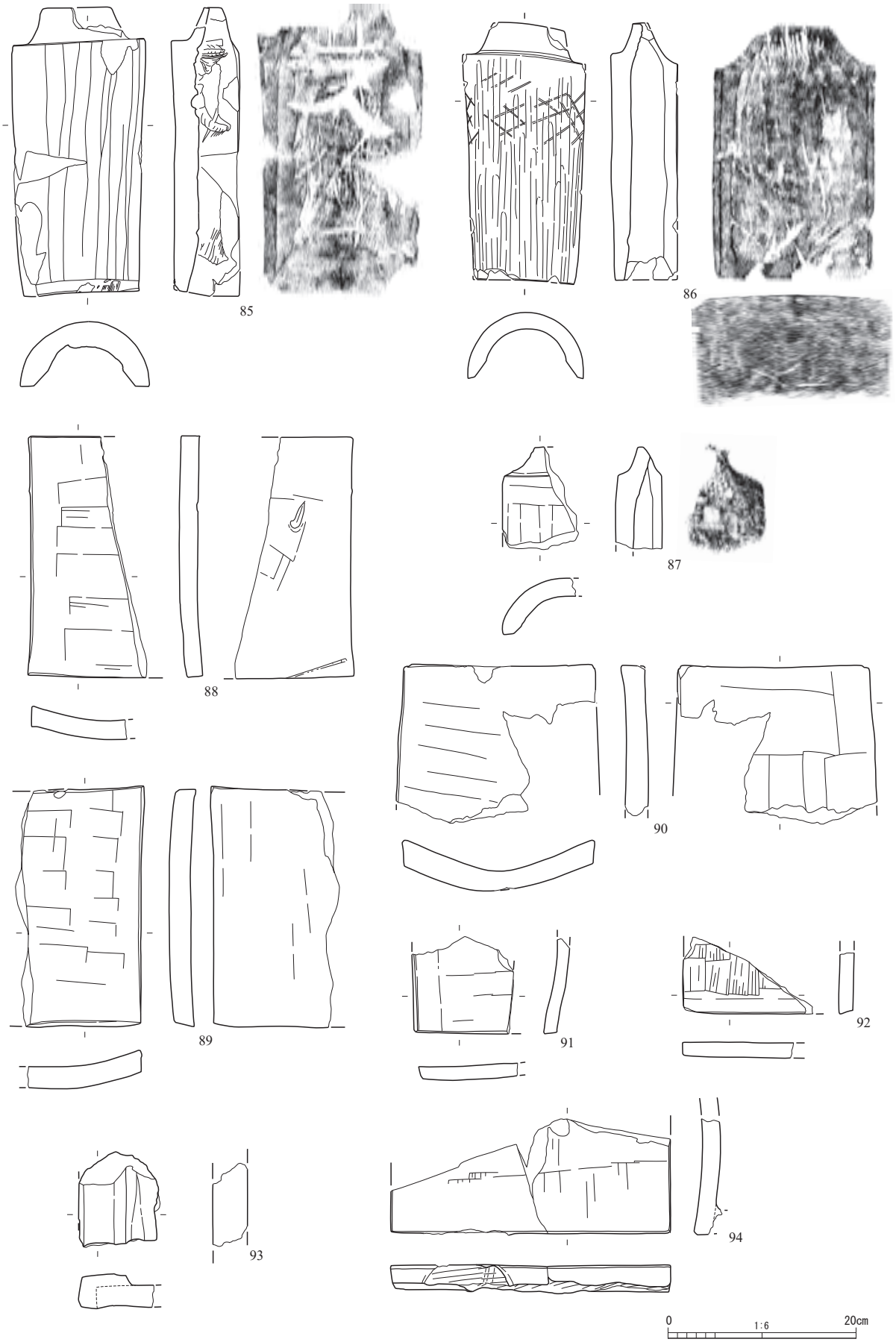


Fig.46　二の丸御殿跡出土遺物（２）

裏面のナデ部分に指紋が認められる。75 は瀬戸産陶器の片口である。登窯第３段階第９小期に位置づけられる。76 は益子産の行平鍋で、近代に位置づけられる。77 は肥前産の碗で、17 世紀第３四半期と考えられる。78 は板状の砥石と考えられる。表面に「三月十」等の線刻がみられる。

79・80 は軒平瓦である。唐草紋の一部と考えられる文様が認められる。81 ～ 84 は軒桟瓦である。81 は小巴で、右巻きの三ツ巴紋と考えられる。82 は垂れで、中央飾りの菊紋が認められる。また顎貼付技法の痕跡が認められる。83・84 は唐草紋が認められるが、中央飾りが不明である。83 の瓦当面には離型剤のキラコが認められる。85 ～ 87 は丸瓦である。85 の凹面にはコビキＡ技法、吊紐痕、横目縫取痕が認められる。また側面端部には２回面取りが施される。86 の凸面には斜格子タタキが認められる。凹面にはコビキＢ技法、細かい布目、棒状刺突痕が認められる。側面端部には２回面取りが施されている。87 は玉縁から胴部にかけての破片である。凹面には棒状刺突痕と縄目痕と考えられる痕跡が認められる。88 ～ 90 は平瓦である。いずれも３辺残存しており、88・89 は縦 25.7cm と同じ大きさである。91・92 は熨斗瓦である。平瓦と比べ薄く作られている。93 は隅瓦と考えられる。94 は道具瓦である。側面に円形の剥離痕が確認できる。

瓦集積３(SX19)出土遺物　瓦集積３からは繋九目結紋軒丸瓦などの軒瓦や丸瓦、目板瓦などの瓦が主に出土した。特徴的な遺物を抽出し、図示した。

95 は土師質土器の五徳である。表面は被熱による影響で剥離している箇所が多く認められる。96 ～ 99 は軒丸瓦である。96 は瓦当面に右巻きの三ツ巴紋が施される。珠文は１箇所が欠損しているが、珠文の総数は７個である。瓦当の直径は 15.5cm を測り、側面端部は面取りが２回施される。焼成は不良で、瓦当面の紋様は低く扁平化している。97 も右巻きの三ツ巴紋軒丸瓦である。残存している珠文は２個だが、全部で７個と推定される。范傷が認められる。98 は繋九目結紋軒丸瓦である。家紋文様が厚手で丸みを帯びる。丸瓦部凹面にはコビキＢ技法が認められる。側面端部には面取りが２回施される。焼成は不良で、扁平化している。瓦当面に離型剤の砂が顕著に認められ

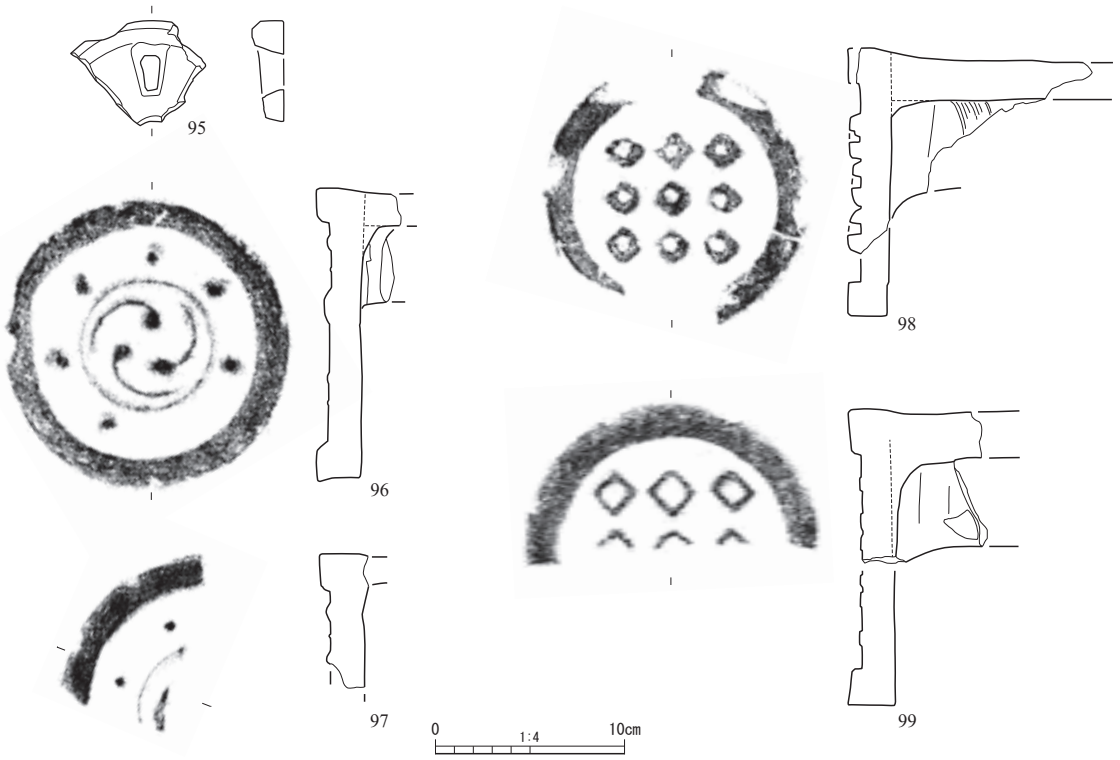


Fig.47　瓦集積3(SX19)出土遺物（１）

る。99 は繋九目結紋軒丸瓦で、家紋は薄く角張る。凹面にはコビキＢ技法と粗い布目が認められる。側面端部には面取りが２回施される。焼成は不良で、側面端部を中心にハナレ砂が顕著に認められる。100 ～ 103 は丸瓦である。100 の凹面にはコビキＢ技法、細かい布目、棒状刺突痕が認められる。側面端部には面取りが２回施される。101 の凹面にはコビキＢ技法、粗い布目、棒状刺突痕、ユビナデが認められる。側面端部の面取りは２回行われる。102 の凹面にはコビキＢ技法、粗い布目、吊紐痕、棒状刺突痕が認められる。胴部中央玉縁寄りに釘穴が開けられている。玉縁端部の欠損は焼成前の欠損である。103 の凹面にはコビキＢ技法、棒状刺突痕が認められる。胴部中央に釘穴が開けられている。104 は平瓦である。105 は桟瓦である。106・107 は目板瓦で、106 には水切りの溝が施されている。

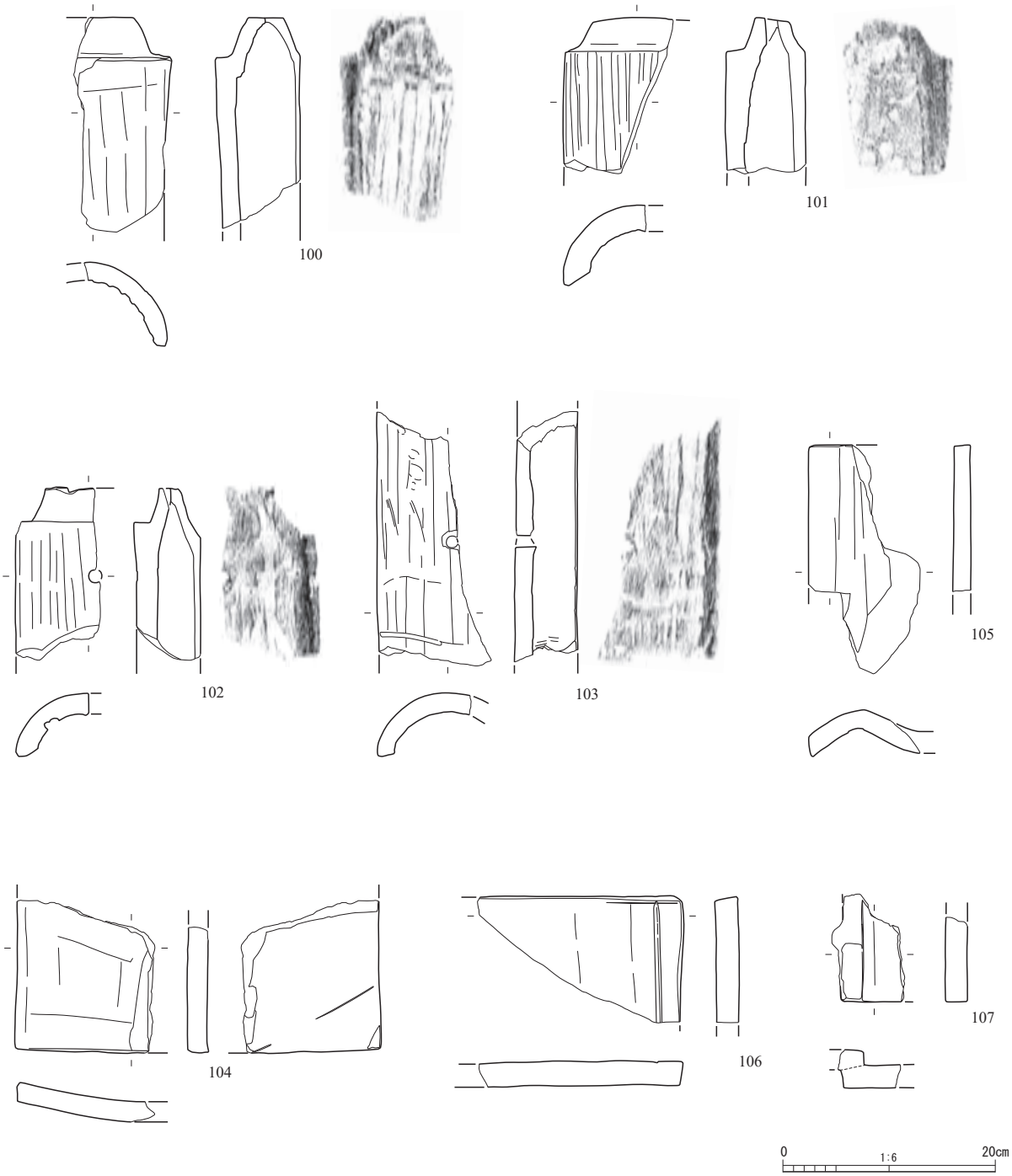


Fig.48　瓦集積3（SX19）出土遺物（２）

2. 二の丸御殿庭園遺構

庭園遺構の概要　御殿建物遺構を検出し 34 トレンチの北西に設定した 32 トレンチでは、二の丸御殿に伴うとみられる。洲浜、築山、景石、枯池により構成される枯山水庭園遺構を検出した。また庭園下層では、苑池の可能性がある遺構を検出した。

Fig.49　庭園遺構全体図

Fig.50　下層遺構全体図

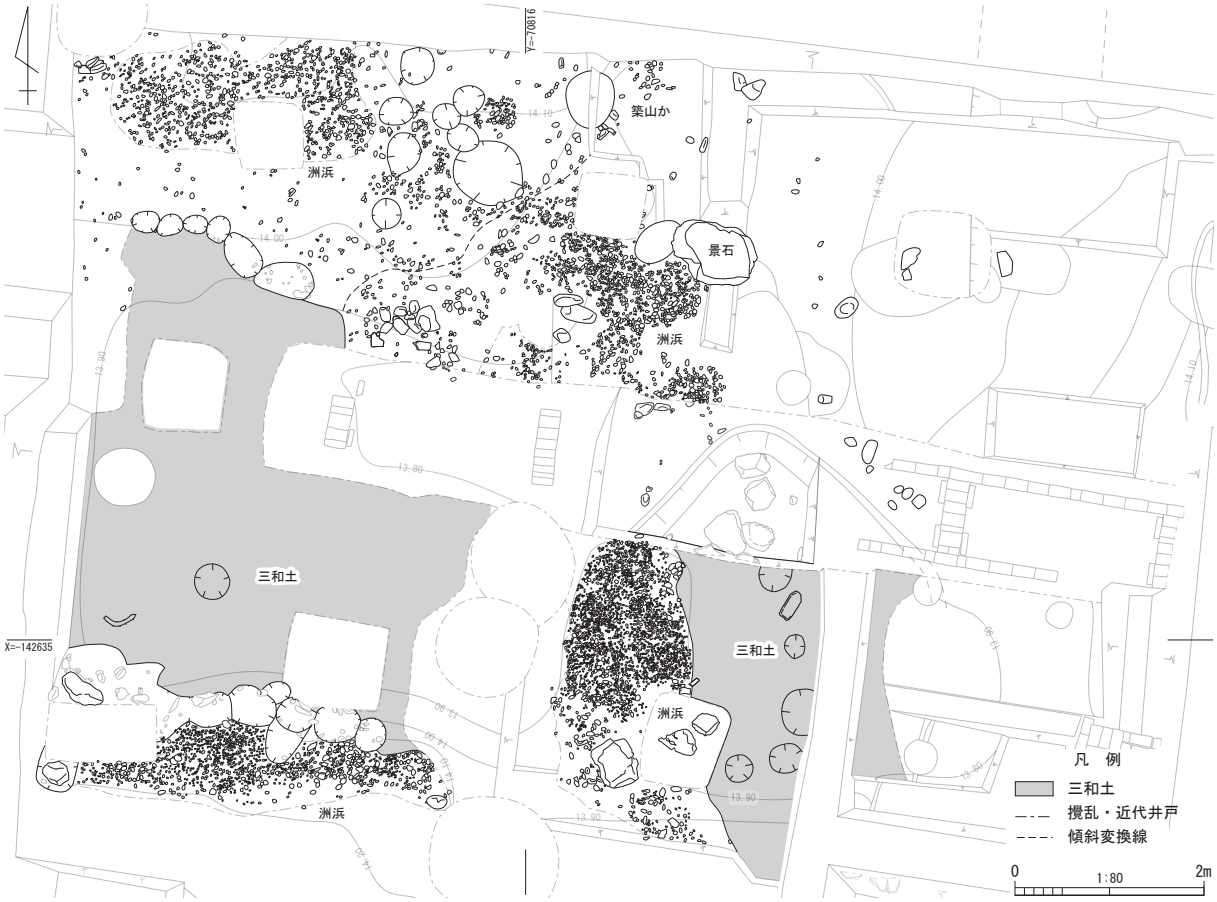


Fig.51　枯山水庭園遺構全体図

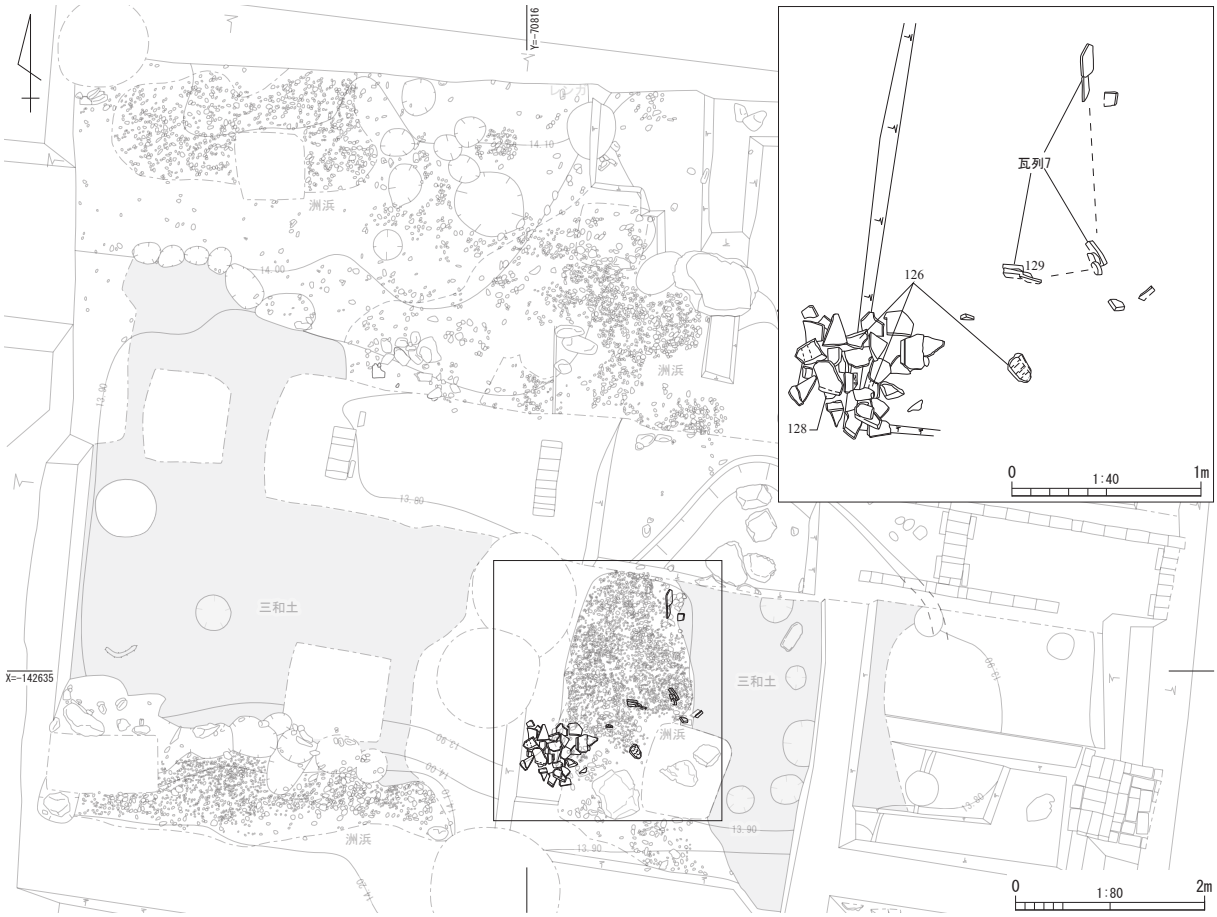


Fig.52　瓦集積5（SX16）全体図

枯山水庭園遺構の上面では、瓦集積５（SX16）を検出した。庭園遺構は、二の丸御殿の生活空間である「奥御殿」に付属したものと捉えられる。近世浜松城の絵図に描かれていない二の丸御殿の様子をうかがい知ることができる重要な成果といえる。

庭園下層遺構　枯山水庭園遺構の枯池下層を 0.5 mほど掘り込んだ遺構である。シルト質の黄褐色土により厚さ 10cm 程度の壁面を有し、40 ～ 60cm 大のチャートが多く出土した。

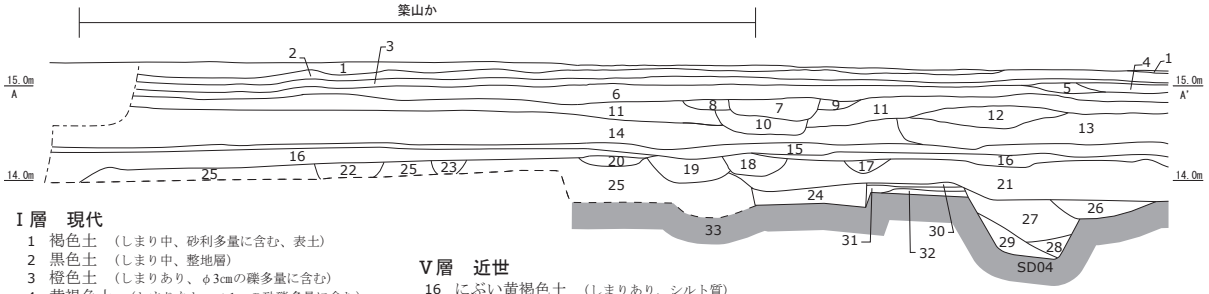
検出が一部に留まっているため平面形は不詳であるが、検出状況から、枯山水庭園遺構に先行する、不整形の池（苑池）である可能性が想定できる。

枯山水庭園遺構　32 トレンチで面的に検出した遺構である。円礫を敷き詰めた岸辺空間である洲浜、大型のチャートを用いた景石、三和土を用いた枯池、人工の山である築山の可能性がある痕跡を検出した。確認できた枯山水庭園遺構の範囲は南北約 10 m、東西約 9 mである。

枯　池　庭園下層遺構が埋没し 10cm 程度の土砂が堆積した上において、広範囲にわたって三和土を検出した。三和土は枯池を表現しているとみられる。枯池の平面形は不整形で、南北約 5 m、東西は調査区外に続くため 10 m以上の規模と捉えられる。三和土面は西側中央部が最も低い。

三和土面に、30 ～ 60cm 大の窪みを 7 つ確認した。窪みの底面にも三和土面が遺存しているため、後世からの掘り込みではない。34 トレンチ南西部に、平面形が径 30cm 程度の三日月状をした、高さ 5cm 程度の凸面を確認した。

洲　浜　三和土による枯池からなだらかに立ち上がる斜面と斜面上部の平坦面に、5 ～ 15cm 大の円礫が敷きつめられ、洲浜が表現されている。三和土面の南側と北側に広がる洲浜は、三和土面より緩やかな斜面であり、平坦面は三和土面より 30cm 程度高い。三和土面と円礫面の境界部分では、



Ⅰ層　現代

1　褐色土　（しまり中、砂利多量に含む、表土）
2　黒色土　（しまり中、整地層）
3　橙色土　（しまりあり、φ3cmの礫多量に含む）
4　黄褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む）
5　にぶい黄褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む）
6　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む）
7　暗褐色土　（しまりなし、φ2cmの砂礫多量に含む、攪乱）
8　褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む、攪乱）
9　黄褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む、攪乱）
10　褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む、攪乱）
11　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む）
12　明褐色土　（しまりなし、φ5cmの砂礫多量に含む）
13　黄褐色土　（しまりなし、φ10cmの砂礫含む）

Ⅲ層　近代

14　褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む）

Ⅳ層　近世・近代

15　灰黄褐色土　（しまりあり、炭化物・ガラス片含む）

Ⅴ層　近世

16　にぶい黄褐色土　（しまりあり、シルト質）
17　にぶい黄褐色砂質土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
18　にぶい黄褐色砂質土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
19　にぶい黄褐色砂質土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
20　にぶい黄褐色砂質土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
21　明褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む）
22　褐色土　（しまり中、黄褐色土が塊含む）
23　褐色土　（しまり中、黄褐色土が塊含む）
24　灰黄褐色土　（しまりあり、φ20cmの砂礫多量に含む）
25　明褐色土　（しまり中、φ1cm大の礫少量含む、粒子が細かい、築山か）
26　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む、明黄褐色土塊含む）

SD04埋土

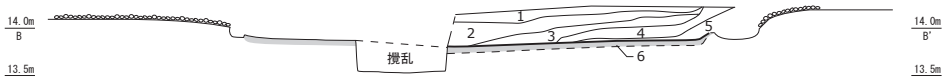
27　黒褐色土　（しまりあり、φ2cmの砂礫多量に含む）
28　褐灰色粘質土　（しまりあり、φ2cmの砂礫多量に含む）
29　褐灰色粘質土　（しまりあり、φ2cmの砂礫多量に含む）

Ⅵ層　中世

30　褐灰色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
31　黄色土　（しまりあり、叩きしめている、整地層）
32　黒褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）

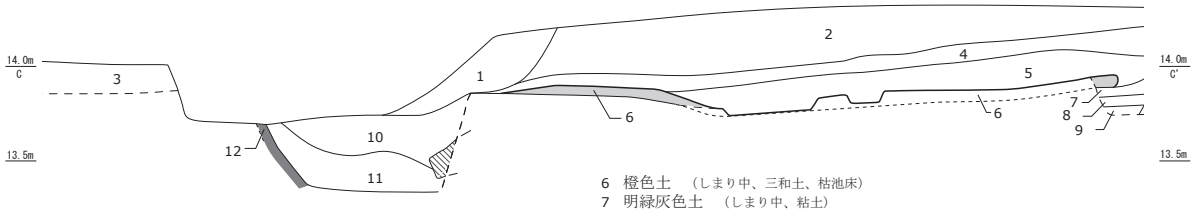
Ⅶ層　基盤層

33　浅黄橙色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）

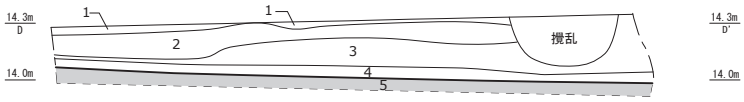


1　褐色土　（しまり中）
2　褐色土　（しまりあり）
3　灰褐色砂層　（しまり中、粒子粗い、赤褐色土が少量入る）
4　灰褐色砂層　（しまりなし、粒子細かい、遺物多量に含む）
5　暗褐色土　（しまりあり）
6　三和土　（枯池床）

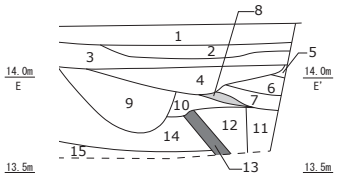
0　1:80　4m



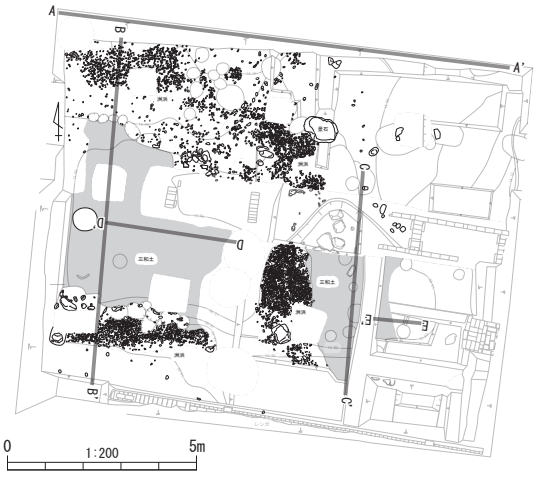
1　橙色土　（しまり中、近代煉瓦建物掘方）
2　明黄褐色土　（しまりあり、黄褐色土少量含む）
3　にぶい褐色土　（しまりあり、φ1～3cmの砂礫含む）
4　暗褐色土　（しまりあり、φ0.5cmの炭化物少量含む、φ5cmの礫少量含む）
5　灰黄褐色土　（しまり中、φ5cmの礫少量含む、瓦片含む）
6　橙色土　（しまり中、三和土、枯池床）
7　明緑灰色土　（しまり中、粘土）
8　黒褐色土　（しまり中、粘土の粒子細かい）
9　黄橙色土　（しまり中、暗褐色土少量含む）
10　暗褐色土　（しまりあり、φ0.5cmの砂礫含む）
11　黒色土　（しまり中、粘性強の土層（暗褐色）が縞状に２本入る、間に赤褐色土層）
12　橙色土　（しまりあり、石灰少量含む、粘質土）



1　暗褐色土　（しまりあり、粒子細かい）
2　褐色土　（しまりあり、黄褐色土含む）
3　灰褐色砂礫土　（しまりなし）
4　暗褐色土　（しまり中、炭化物少量含む）
5　三和土　（枯池床）



1　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む）
2　褐色土　（しまりあり、φ2cmの砂礫多量に含む）
3　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
4　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む、φ0.5cmの玉砂利含む）
5　にぶい赤褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
6　灰黄褐色シルト　（しまりあり、φ1cmの砂礫、炭化物多量に含む、瓦含む、近世堆積層）
7　褐灰色シルト　（しまりあり）
8　三和土　（しまりあり、白色石粒多量に含む）
9　褐灰色土　（しまりなし、φ10cmの砂礫・片岩含む、三和土片含む）
10　灰白色粘土　（しまりあり、近世整地層）
11　にぶい黄褐色粘質土　（しまりあり、瓦片含む、φ1cmの円礫多量に含む）
12　にぶい黄褐色土　（しまりあり、褐色土少量含む、φ1cmの砂礫多量に含む）
13　明黄褐色粘質土　（しまりあり、厚さ3～5cmで帯状に堆積）
14　褐色土　（しまりあり、φ5cmの砂礫多量に含む）
15　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）



凡　例
三和土
粘質土

0　1:40　2m

Fig.53　庭園遺構土層断面図

礫を抜き取った痕跡とみられる 40 ～ 60cm 大の浅い窪みを確認した。枯池と洲浜の境界部分には、護岸石組みがあったことが想定できる。

築山・景石　34 トレンチ北西部は三和土面より、30cm ほど高く、円礫のない一帯は築山の痕跡と考えられる。築山には長辺 80cm、短辺 60cm、高さ 50cm ほどあるチャートが景石として配置されている。その周辺では、礫が抜き取られた痕跡とみられる長軸 20 cm 程度の不整形な窪みを多数検出した。

瓦集積 5（SX16）　32 トレンチ中央南付近で検出した瓦集積である。明らかに三和土の枯池や洲浜の上に形成されていることから、枯山水庭園が廃絶した後に形成された遺構であると考えられる。

瓦集積 5 の範囲は、0.7 m四方である。出土した瓦は、目板瓦を中心に丸瓦や平瓦が含まれる。礫敷と瓦集積との間には間層が認められることから、庭園が廃絶した後に瓦が集積したと考えられる。遺構の年代は江戸時代後期と考えられるが詳細な時期は不明である。

また、瓦集積の北東側で立位の瓦を検出し、瓦列 7 とした。瓦列 7 は、平瓦もしくは目板瓦と考えられる瓦を立てており、枯山水庭園埋没後に形成された雨落ち溝の可能性がうかがえる。

庭園遺構出土遺物　108 はかわらけである。非ロクロ成形で在地のかわらけと考えられる。109・110 は火鉢と考えられる（小林 2019）。両者は酷似している。脚部は３脚であったと考えられ、脚部底に穴が開けられ脚部内部は空洞である。17 世紀中葉から後葉に位置づけられる。111 は天目茶碗である。瀬戸産で登窯第１段階第３・４小期に位置づけられる。112 は丸皿である。底部まで灰釉が施釉されている。大窯第３段階後半から第４段階前半に位置づけられる。113 は折縁盤である。内外面に呂宋釉が施され、欠損しているが脚部が付くと考えられる。外面には雲龍文が施されている。勇右衛門窯の製品と考えられ、登窯第３段階第８・９小期に位置づけられる。114 は蓋である。瀬戸美濃産と考えられ、近代に位置づけられる。115 は羽口である。ガラス質の溶融物が認められる。116 は砥石である。表面の一部に被熱痕がみられる。

117 は桔梗紋軒丸瓦である。桔梗の花弁が立体的に表現されている。118・119 は三葉紋２反転

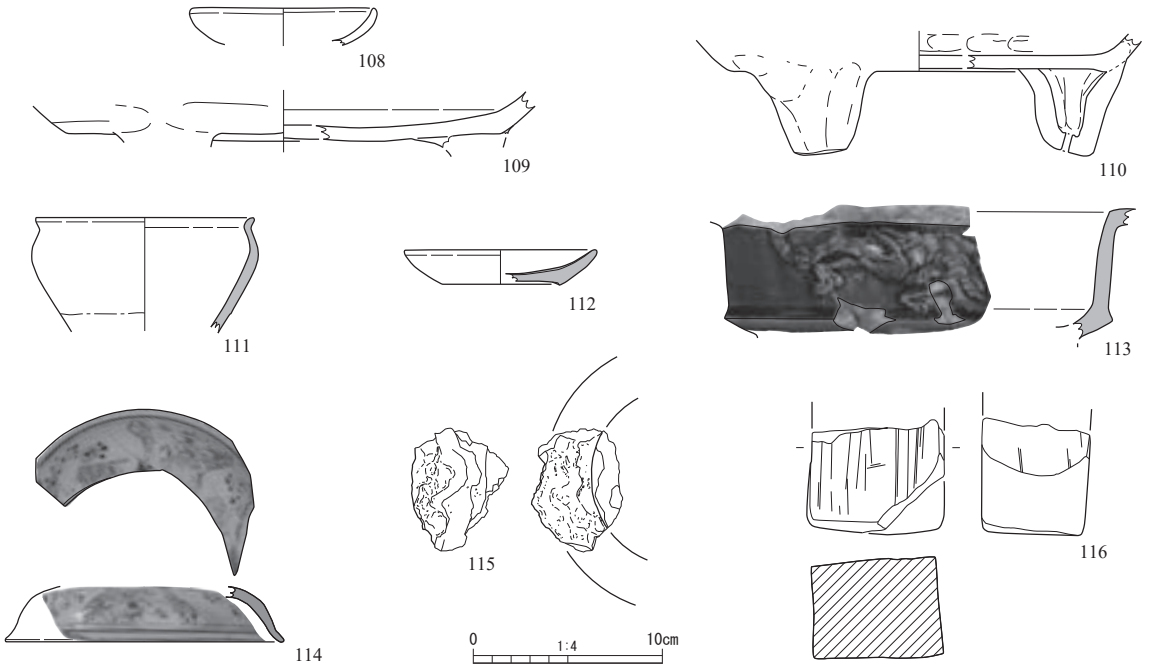


Fig.54　庭園遺構出土遺物（１）

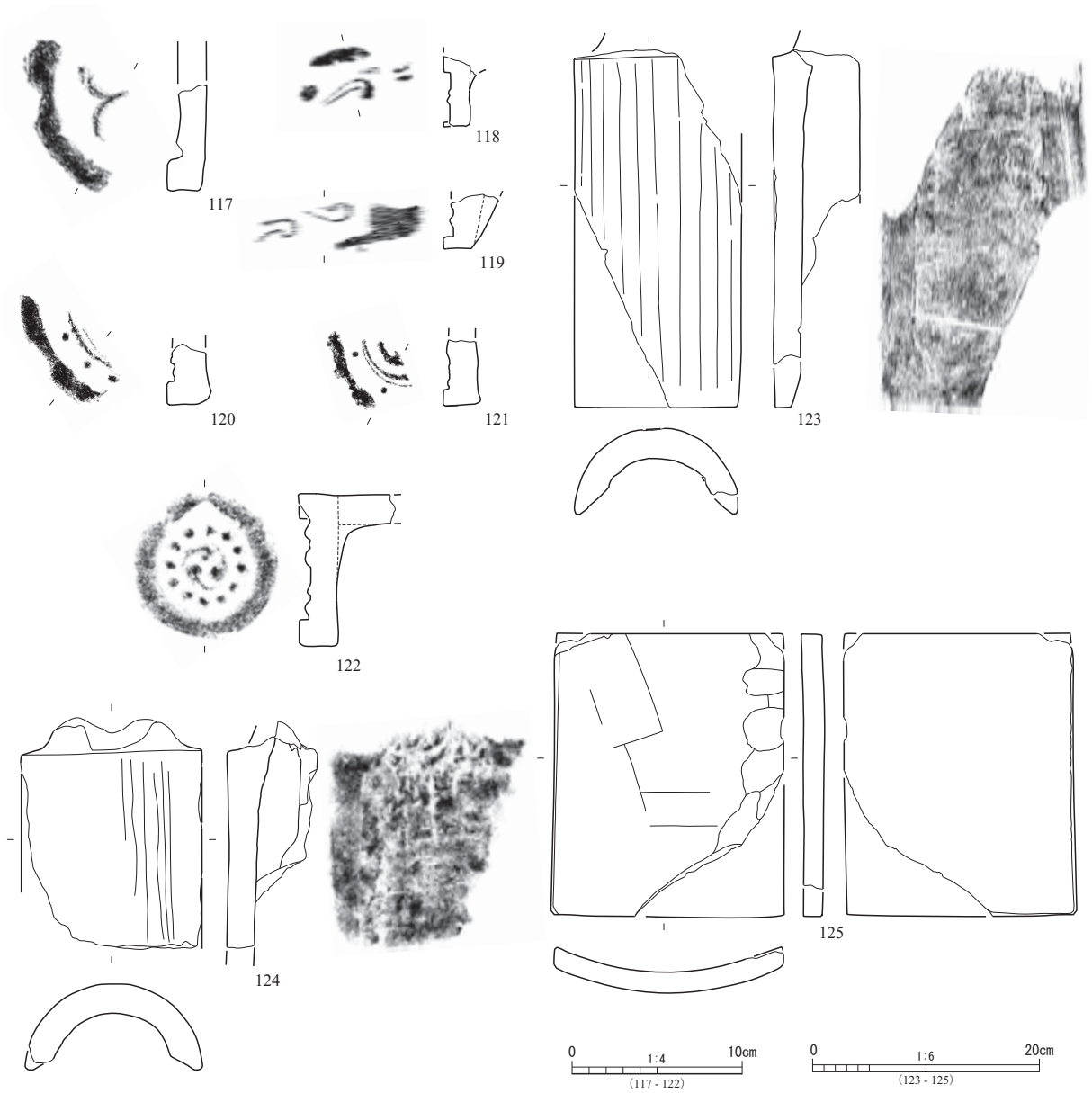


Fig.55　庭園遺構出土遺物（２）

均整唐草紋軒丸瓦である。いずれも唐草紋の巻きが弱い。120 は三ツ巴紋軒桟瓦である。欠損が多く、巻きの方向は不明である。珠文は３個残っている。121 は左巻きの三ツ巴紋軒桟瓦である。珠文は２個残っている。122 は右巻きの三ツ巴紋軒桟瓦である。小巴に欠損は認められない。120 ～ 122 はいずれも垂れが欠損している。123・124 は丸瓦である。いずれも凹面にはコビキＢ技法と粗い布目が認められる。側面端部の面取りは、123 が２回、124 が１回施される。125 は平瓦である。欠損が少ないことから全体形状が復元でき、縦横比は 0.83 以下である。凸面には打欠き痕が認められ、凹面にはハナレ砂が認められる。

瓦集積5（SX16）出土遺物　瓦集積5からは丸瓦や平瓦、目板瓦等の瓦が出土した。特徴的な遺物を抽出し、図示した。126は丸瓦である。凹面にはコビキＢ技法、粗い布目、吊紐痕、袋とじ痕と考えられる痕跡が認められる。側面端部の面取りは２回行われている。127は平瓦である。128 ～ 130は目板瓦である。128は釘穴が開けられており、桟部は長く面取りが施される。また桟が右に付けられている。130は表面右側に水切りの溝が施される。

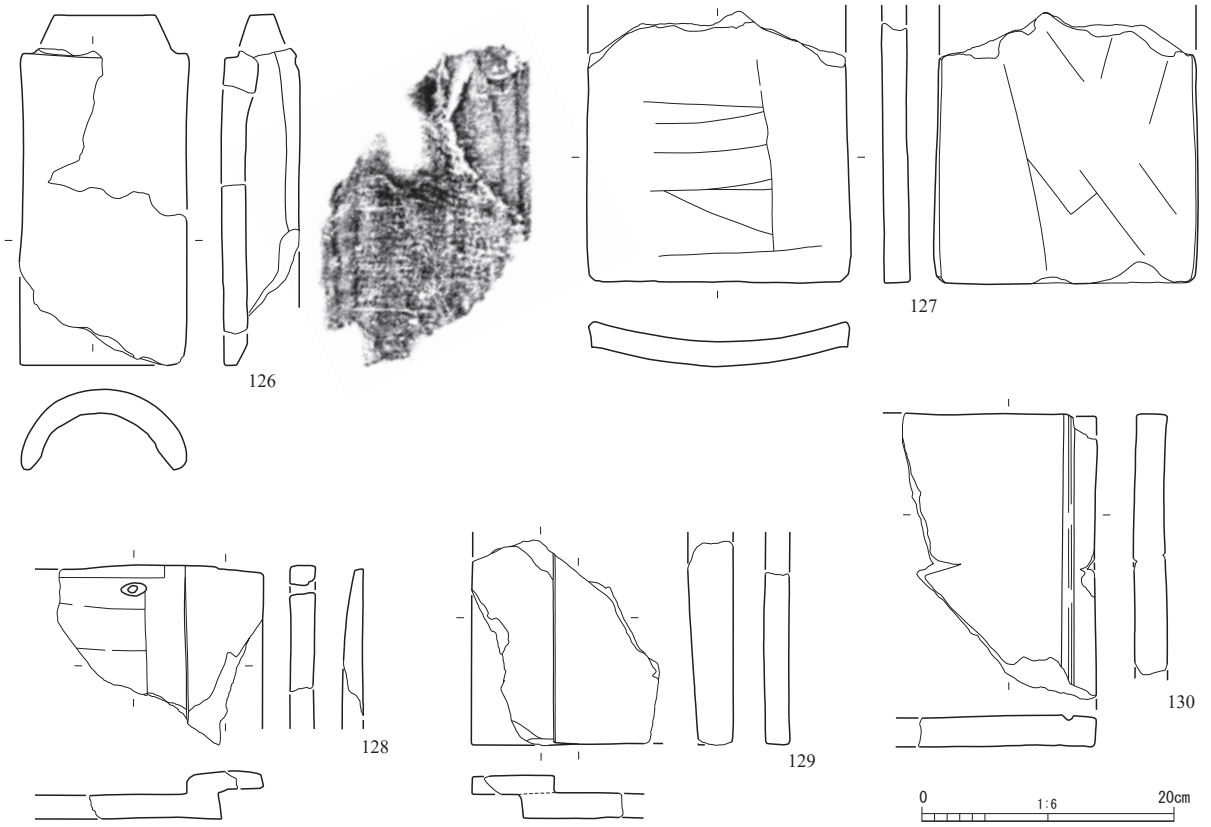


Fig.56　瓦集積5（SX16）出土遺物

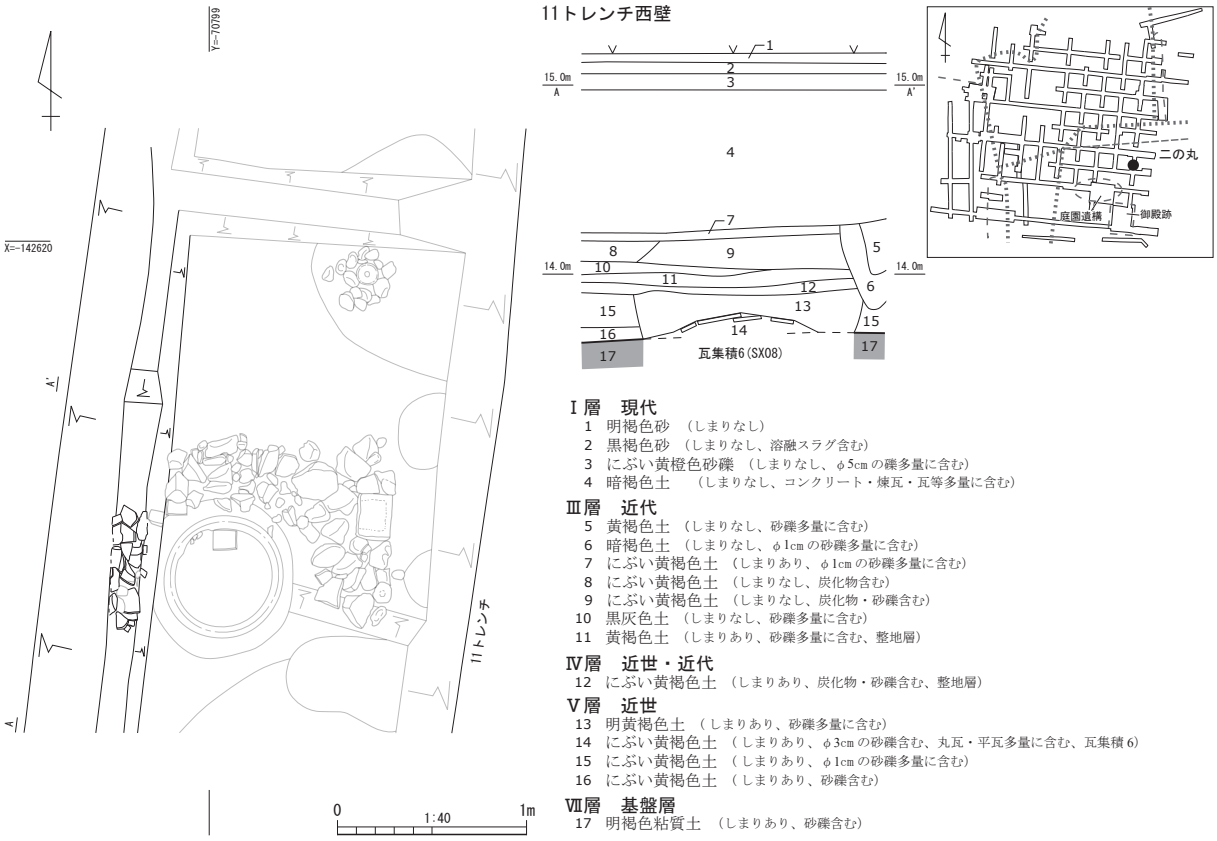


Fig.57　瓦集積6（SX08）詳細図

3. 二の丸におけるその他の遺構

瓦集積6（SX08）　瓦集積6は、17トレンチと交差する11トレンチ西壁サブトレンチで検出した。近世土層中で確認した土坑状の掘り込みの下部から多量の瓦が出土した。南北方向の長さは0.7mを測り、東西方向は調査範囲外に延びる。平瓦の上に、丸瓦が南北方向に列をなすように配置されている。遺構の性格は不明である。検出した瓦は現地保存し取り上げていないため、詳細な時期は不明である。

瓦集積7（SX13）　瓦集積7は、3トレンチと23トレンチの交点付近で検出した。近世土層中で確認した掘り込みの中に瓦が集積する。瓦が集積する範囲は南北方向3.2m、東西4.3mを測る。瓦の集中部は大きく東西に分けられ、西側の集中部には三ツ巴紋軒丸瓦、軒桟瓦、目板瓦、甕などが含まれている。東側集中部は西側に比べ、礫が多く含まれており、瓦は少ない。遺構の年代は江戸時代と考えられる。

瓦集積7（SX13）出土遺物　131は甕である。志戸呂窯もしくは初山窯の製品と考えられる。大窯段階に位置づけられる。

132・133は右巻きの三ツ巴紋軒丸瓦である。珠文は132が５個、133が11個残っており、どちらも全体で12個あったと推定される。瓦当面の直径はいずれも16.0cmを測る。134は軒桟瓦である。小巴には右巻きの三ツ巴紋が施されている。垂れは欠損部分が多く、唐草紋は認められるが中央飾りは不明である。135・136は丸瓦である。135の凹面にはコビキＢ技法、粗い布目、吊紐痕が認められる。側面端部には面取りが１回施される。136の凹面にはコビキＢ技法、粗い布目、吊紐痕に加え、袋とじ痕が認められる。側面端部の面取りは２回施される。137は平瓦である。138は目板瓦である。中央部に円形の釘穴が１箇所開けられている。139は雁振瓦で、凸面にハナレ砂が認められる。140は砂岩製の砥石である。長軸方向および斜め方向に使用に伴う擦痕が認められる。

Fig.58　瓦集積7（SX13）・瓦集積8（SX03）出土状況図

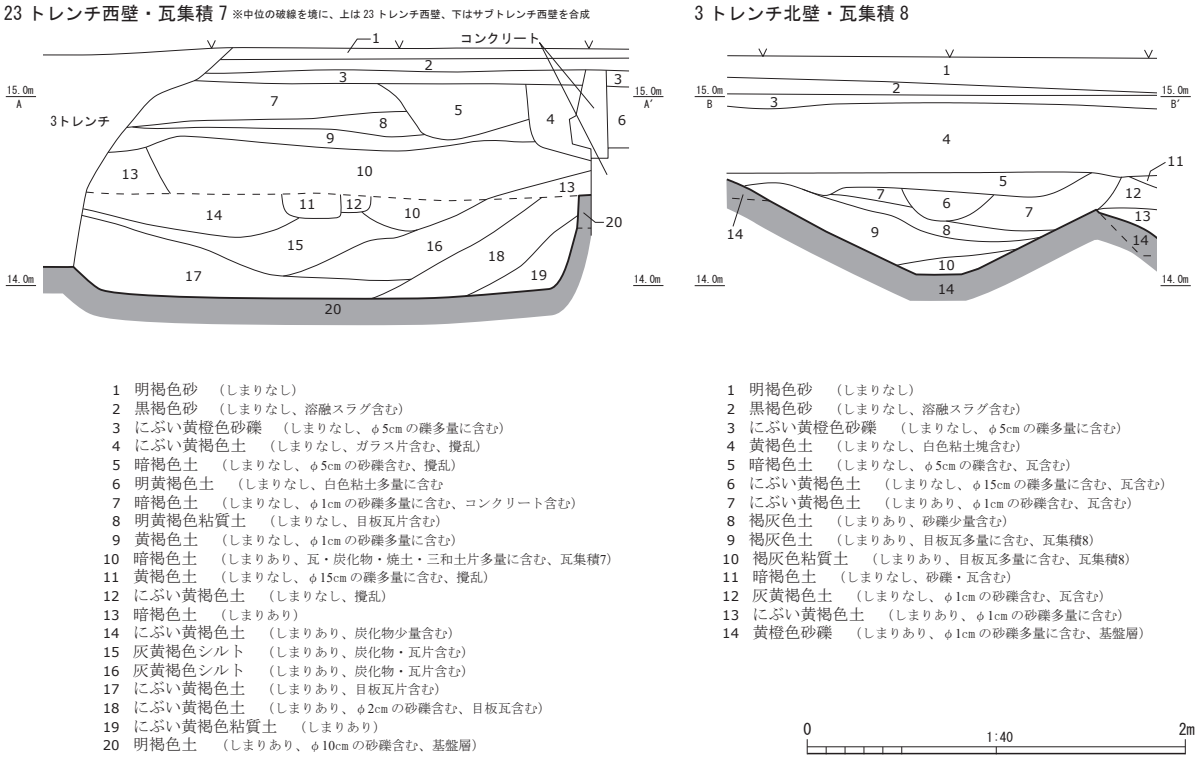


Fig.59　瓦集積7(SX13)・瓦集積8(SX03)土層断面図

瓦集積8(SX03)　瓦集積7の西側で検出した。近世土層中で確認した断面形状が擂鉢状を呈する掘り込みから瓦が多く出土した。瓦は掘り込み面に沿うように並ぶ。三ツ巴紋軒丸瓦のほか、目板瓦を中心とした瓦で構成される。遺構の年代は江戸時代と考えられる。

瓦集積8(SX03)出土遺物　141は皿と考えられる。釉調から志野・織部と考えられる。142は目板瓦である。桟部が欠落している。

瓦集積9(SX02)　3トレンチの二の丸北西で検出した。瓦集積の規模は東西方向が1.2mである。サブトレンチを用いて状態を確認したところ、0.5mの高低差を持つ斜面に、目板瓦や丸瓦が折り重なるように堆積した状態で出土した。

瓦集積範囲は未掘削部分にさらに広がっていると考えられる。1m程度西側には後述する礫集積(SX22)が位置するが関連は不明である。遺構の年代は18世紀前半以降と考えられる。

瓦集積9(SX02)出土遺物　143はかわらけである。ロクロ成形で口径11.4cmを測る。口縁の一部にススが付着していることから、灯明皿として使用されていたと考えられる。144は碗である。外面に絵付けがある肥前産の磁器で、18世紀前半に位置づけられる。

礫集積(SX22)　瓦集積9（SX02)の西側で検出した礫集積である。径15cm以下の角礫が並ぶように検出した。礫の中には方形に加工が施されたものも認められる。上面は削平されているため堀込面は不明だが、礫集積の幅0.3mで垂直に掘り込まれている。遺物の出土がないため、遺構の性格および年代は不明である。

SP03　17 トレンチと 23 トレンチの交点付近で検出した。検出面は近世土層である。長径 0.36 m、短径 0.3 mの楕円形を呈する。底部は検出していない。遺物は焜炉と考えられる土師質土器等が多く出土した。遺構の年代は江戸時代と考えられるが、詳細な時期は不明である。

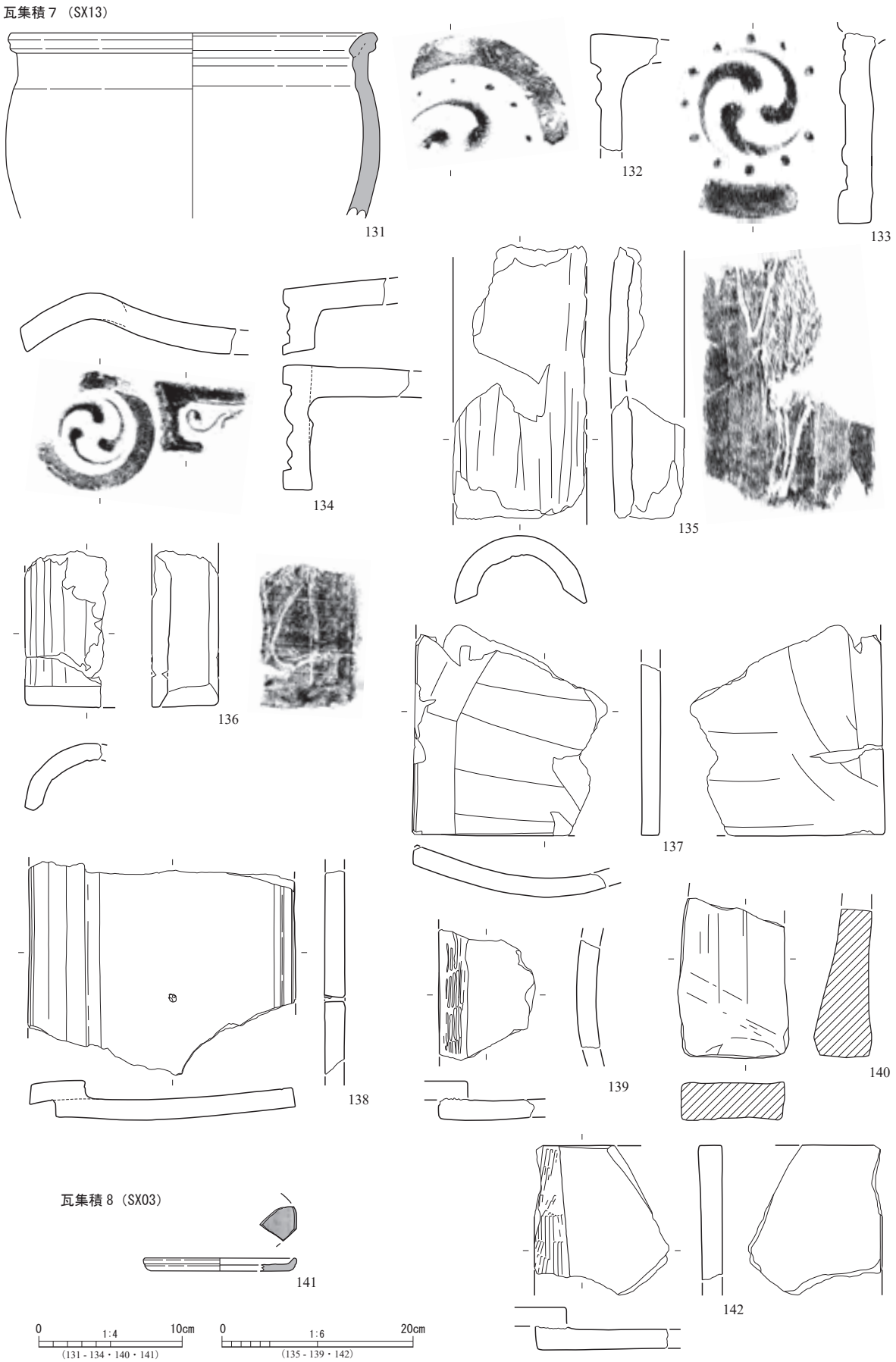
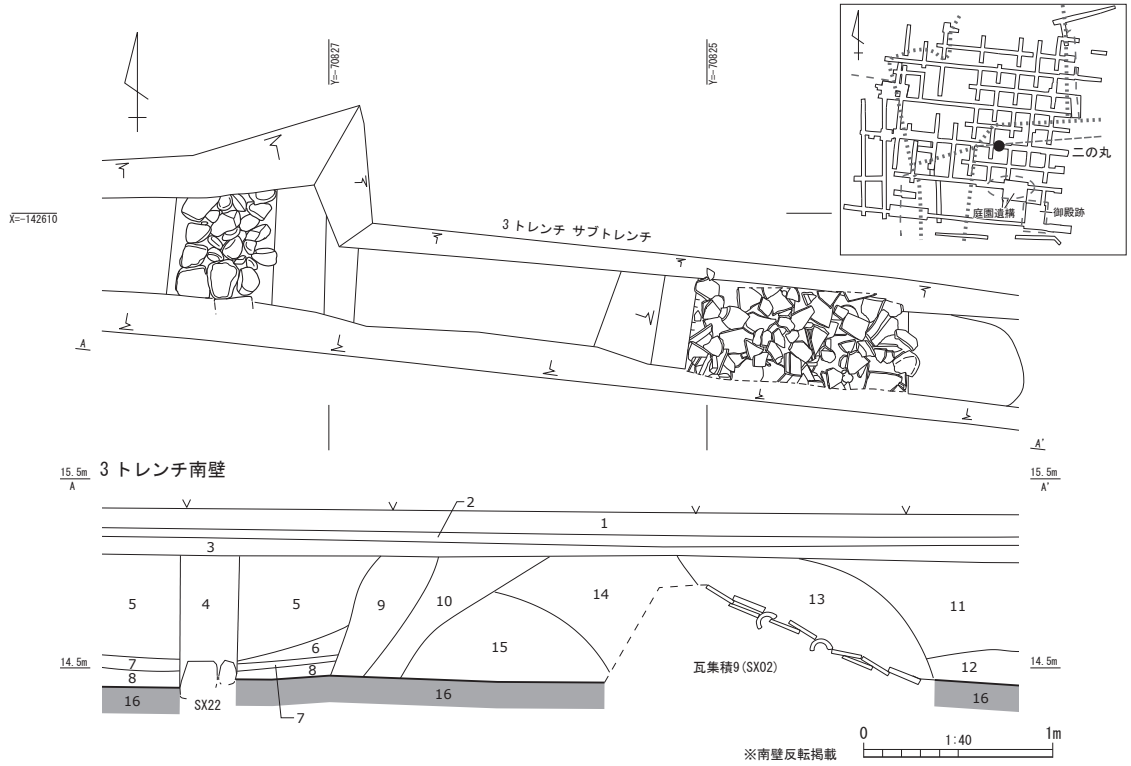


Fig.60　瓦集積7(SX13)・瓦集積8(SX03)出土遺物

SP03 出土遺物　146 ～ 164 は土師質土器で器種は焜炉と考えられる。146 ～ 150 は口縁破片、151 ～ 157 は体部から底部にかけての破片である。比較的残りが良好な 154 の復元値は、口径 17.0cm、底径 16.0cm、高さ 6.0cm である。口縁端部は平坦に仕上げており、一部被熱したものも確認できる。他の口縁部片も 154 のような器形になると想定される。152 は体部に直径 6mm 程度の穴が多く開けられている。焼成は須恵質である。158 ～ 161 は底部に直線状の沈線と直径 4mm 程度の穴が複数開けられている。平面形は一部に出っ張りが認められ、穴が開けられている。162・163 は蓋状



1　明褐色砂　（しまりなし）
2　黒褐色砂　（しまりなし、溶融スラグ含む）
3　にぶい黄橙色砂礫　（しまりなし、φ5cm の礫多量に含む）
4　黄橙色砂礫土　（しまりあり、φ5cm の礫多量に含む、塀か、最下層にφ15cm の角礫並ぶ）
5　にぶい黄橙色砂礫　（しまりあり、φ1cm の砂礫多量に含む）
6　褐色粘質土　（しまりあり、炭化物少量含む、塀基礎か）
7　黄褐色土　（しまりあり、炭化物・砂礫少量含む、塀基礎か）
8　にぶい黄褐色土　（しまりあり、砂礫少量含む、塀基礎か）
9　明黄褐色土　（しまりあり、φ2cm の砂礫多量に含む）
10　黄褐色砂礫　（しまりあり、φ1cm の砂礫多量に含む）
11　明黄褐色土　（しまりあり、φ5cm の礫多量に含む）
12　明黄褐色砂　（しまりあり、φ1cm の礫少量含む）
13　にぶい黄褐色土　（しまりあり、炭化物含む、瓦片含む、瓦集積9）
14　黄褐色砂礫　（しまりなし、φ2cm の砂礫多量に含む）
15　暗褐色砂礫　（しまりなし、φ2cm の砂礫多量に含む）
16　黄褐色砂礫土　（しまりあり、φ1cm の砂礫多量に含む、基盤層）

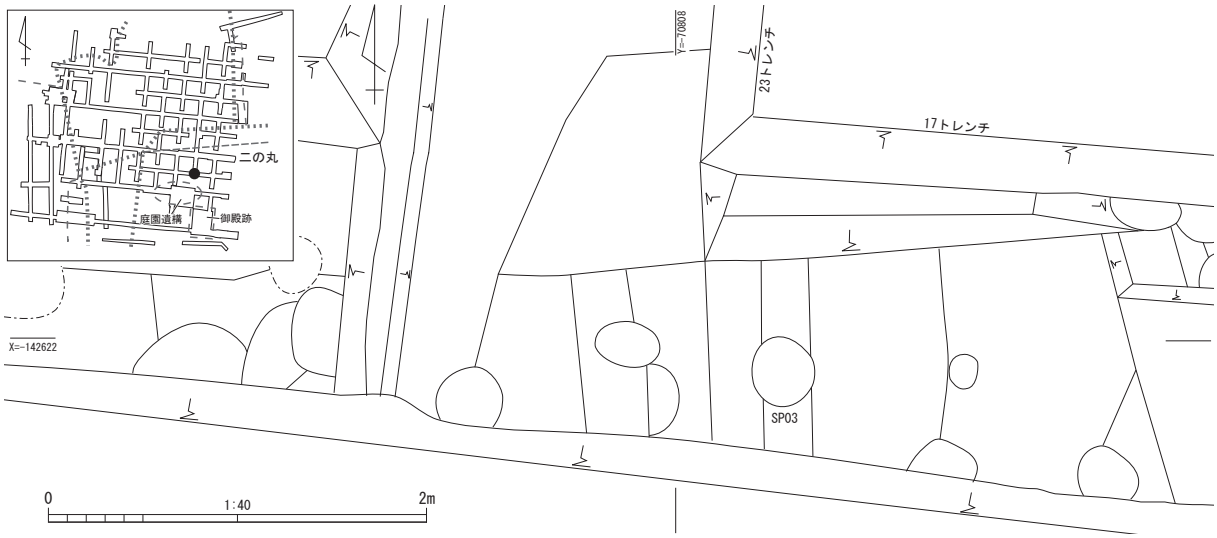


Fig.61　瓦集積9（SX02）・SX22・SP03詳細図

のものと考えられる。162 の上部は平坦になっており、直径 1.4cm の穴が確認できる。焜炉の部材の可能性が考えられるが、詳細は不明である。164 は把手である。

焜炉はいくつかの部材で構成されているため、これらの出土品を組み合わせると焜炉となる可能性があるが、今回の中では全体を復元するには至らなかった。

礎石 7・8　11 トレンチ御殿跡北端で検出した。平面では明確な掘り込みが確認できなかったが、断面では近世土層中の掘り込みを確認した。礎石 7 は最大長 0.85 m、最大幅 0.6 mの不整四角形を呈する。礎石 8 は最大長 0.45 m、最大幅 0.35 mを測る。いずれも石材はチャートを用いている。礎石 8 の東端が中心と考えた場合の礎石の中心間の寸法は 1.3 mである。礎石上面の標高は、礎石 7 が 13.95 m、礎石 8 が 13.9 mである。

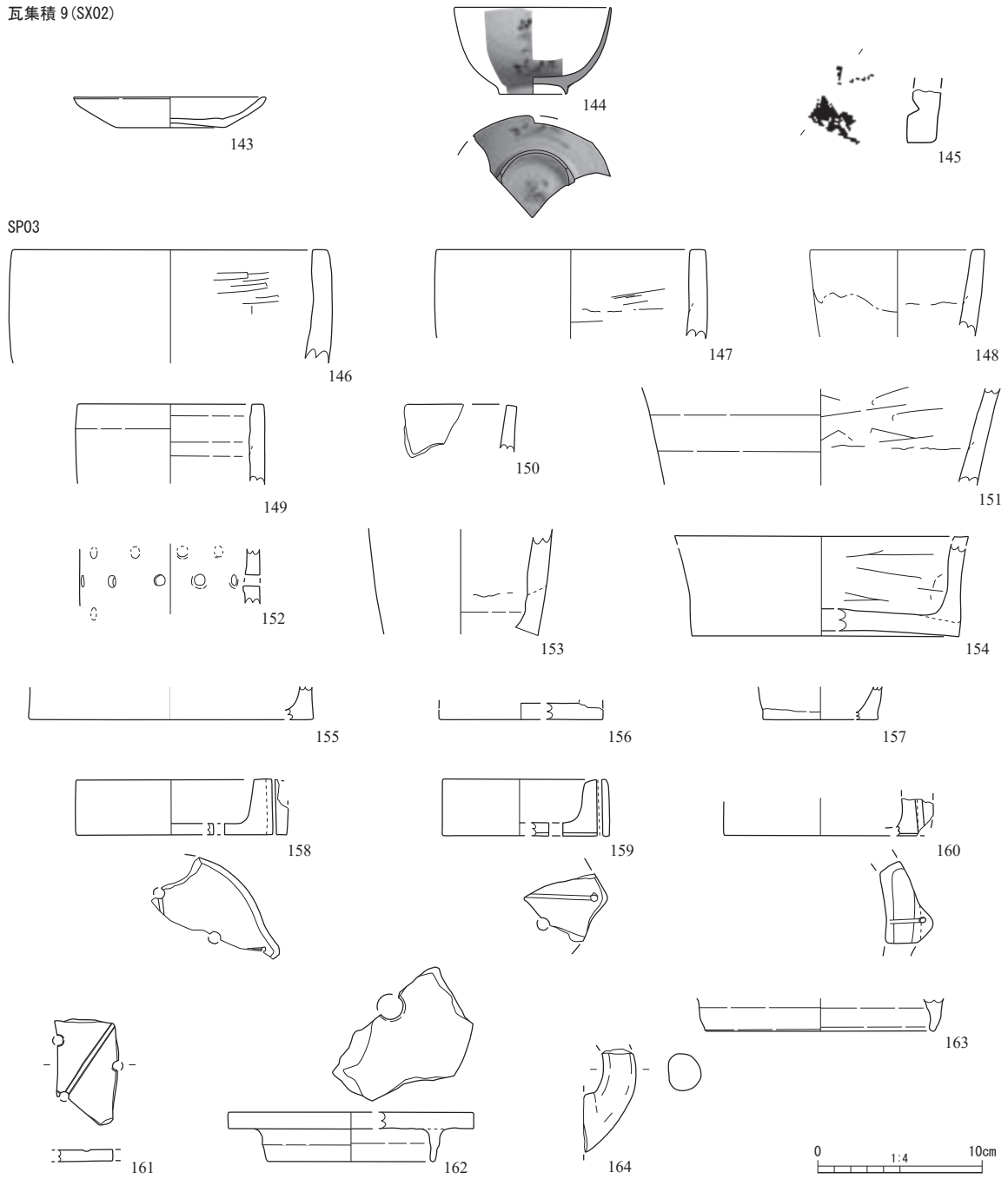


Fig.62　瓦集積9(SX02)・SP03出土遺物

御殿域内包含層等出土遺物　御殿域内包含層等からは、桔梗紋軒丸瓦や軒平瓦に加え、青磁などの貿易陶磁や擂鉢、大皿などの日用雑器まで多くの種類の遺物が出土している。出土した中から特徴的な遺物を抽出し、図示した。

165 は須恵器壺である。底部のみ残存している。166・167 はかわらけである。166 はロクロ成形、167 は非ロクロ成形で巻き上げ痕が確認できる。168 は羽釜である。口縁部のみ残存する。169・170 は内耳鍋である。両者とも内彎形内耳鍋に分類できる（鈴木 1996）。171 ～ 175 は土師質土器である。SP03 で出土した土師質土器と酷似しているため、同じく焜炉と考えられる。176 は蓋と考えられる。つまみ部分に穴が開いている。177・178 は天目茶碗である。177 は口縁部の内反りが緩やか、178 は内反りが顕著である。177 は大窯第１段階、178 は大窯第４段階後半に位置づけられる。179 は皿である。端反皿か丸皿と考えられ、底部まで全面に施釉されている。大窯第３・４段階に位置づけられる。180 は大皿と考えられる。錆釉で志戸呂産と考えられる。181 は馬目皿である。江戸後期に位置づけられる。182・183 は甕である。182 は口縁内面にススが付着している。183 は大窯段階に位置づけられる。184 は擂鉢である。瀬戸産で、登窯２段階第６小期に位置づけられる。185 は美濃産の水注の底部である。大窯第３・４段階の特徴を示している。186 は碗である。肥前産で 19 世紀前半に位置づけられる。187 は稜花皿である。龍泉窯産で 15 世紀後半から 16 世紀前半の特徴をもつ。188 は端反皿である。16 世紀代の貿易陶磁と考えられる。189 は青磁の盤である。破片資料のため大きさ等詳細は不明であるが、龍泉窯産の貿易陶磁で 14･15 世紀に位置づけられる。190 は合子と考えられる。外面と内面の一部に施釉されており、口縁部から内側半分までは露胎である。小片のため大きさは不明で、香炉の可能性も考えられる。

191 は桔梗紋軒丸瓦である。桔梗の花弁が立体的に表現されている。192・193 は軒平瓦である。いずれも小破片であるが、重線の唐草紋が認められる。192 は唐草紋の巻きが弱く、193 は巻きが強い。194・195 は軒桟瓦である。小巴に施される文様は、いずれも右巻きの三ツ巴紋である。垂れは残存していない。196 は鬼瓦の破片である。並型の鬼瓦の一部と考えられる。197・198 は目板

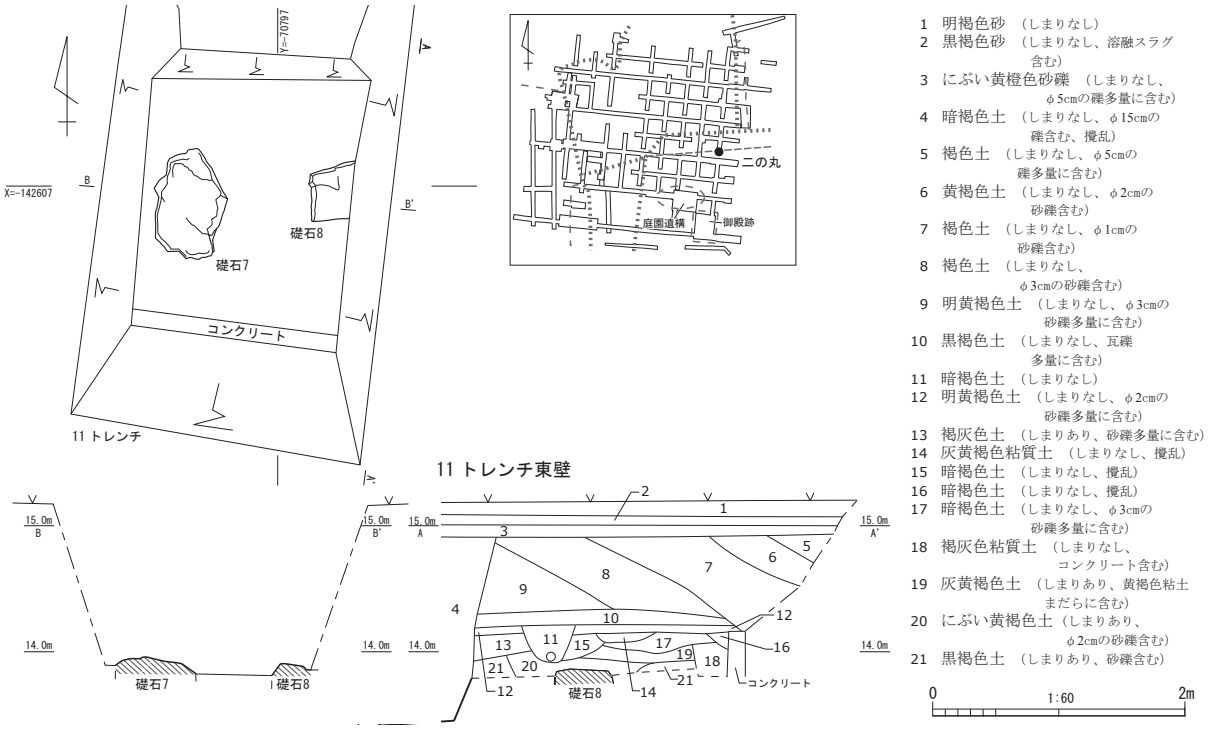


Fig.63　礎石7・礎石8詳細図

瓦である。197 は桟がごくわずかに残存している。４面が残存しており、幅 27.9cm、長さ 42.3cm を測る。釘穴が尻部に２箇所､頭部に１箇所開けられている。頭部右側には打欠き痕が認められる。198 は釘穴が尻部に１箇所開けられている。桟上面は斜めに切り欠きをしている。

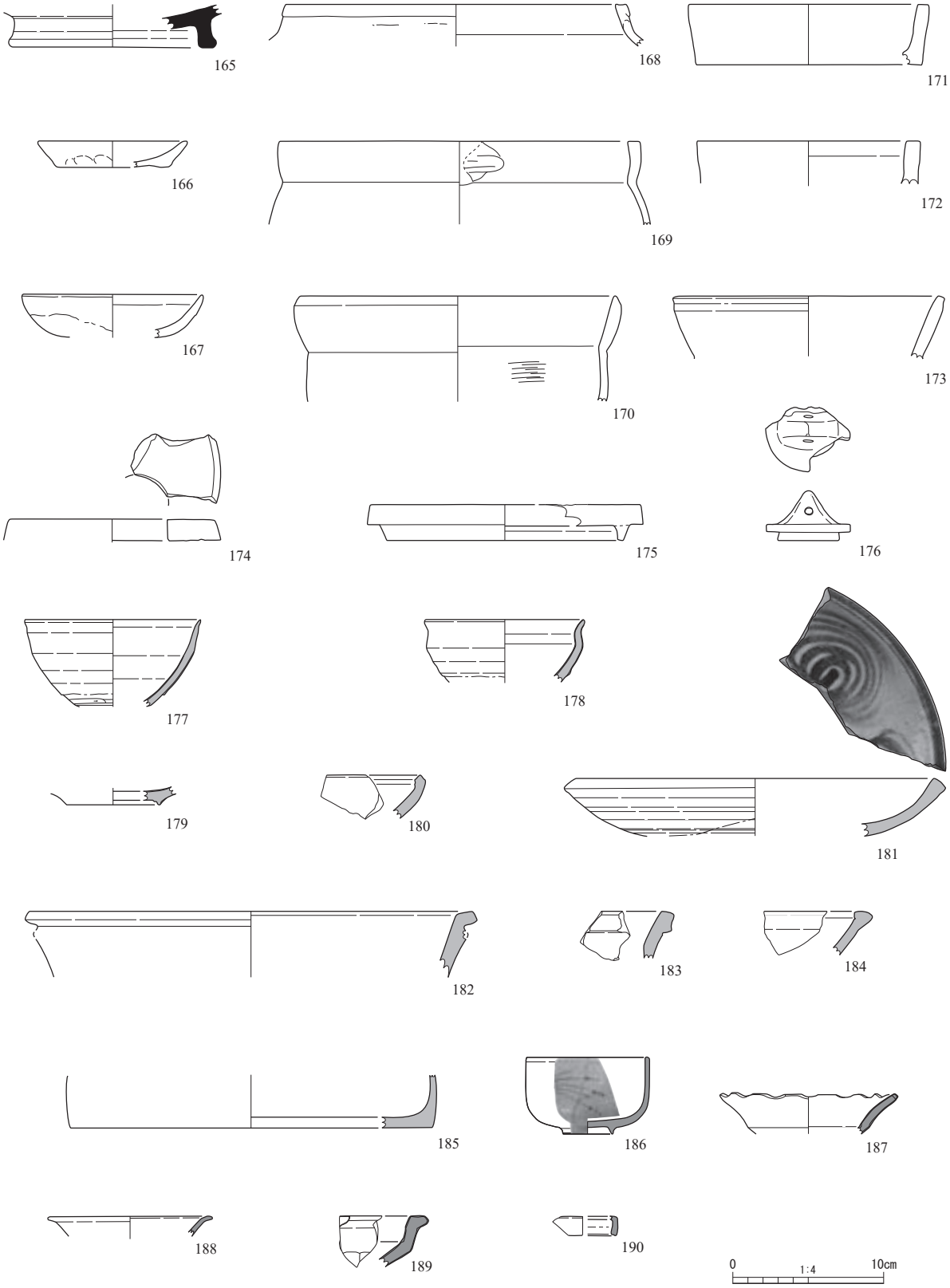


Fig.64　御殿域内包含層等出土遺物（１）

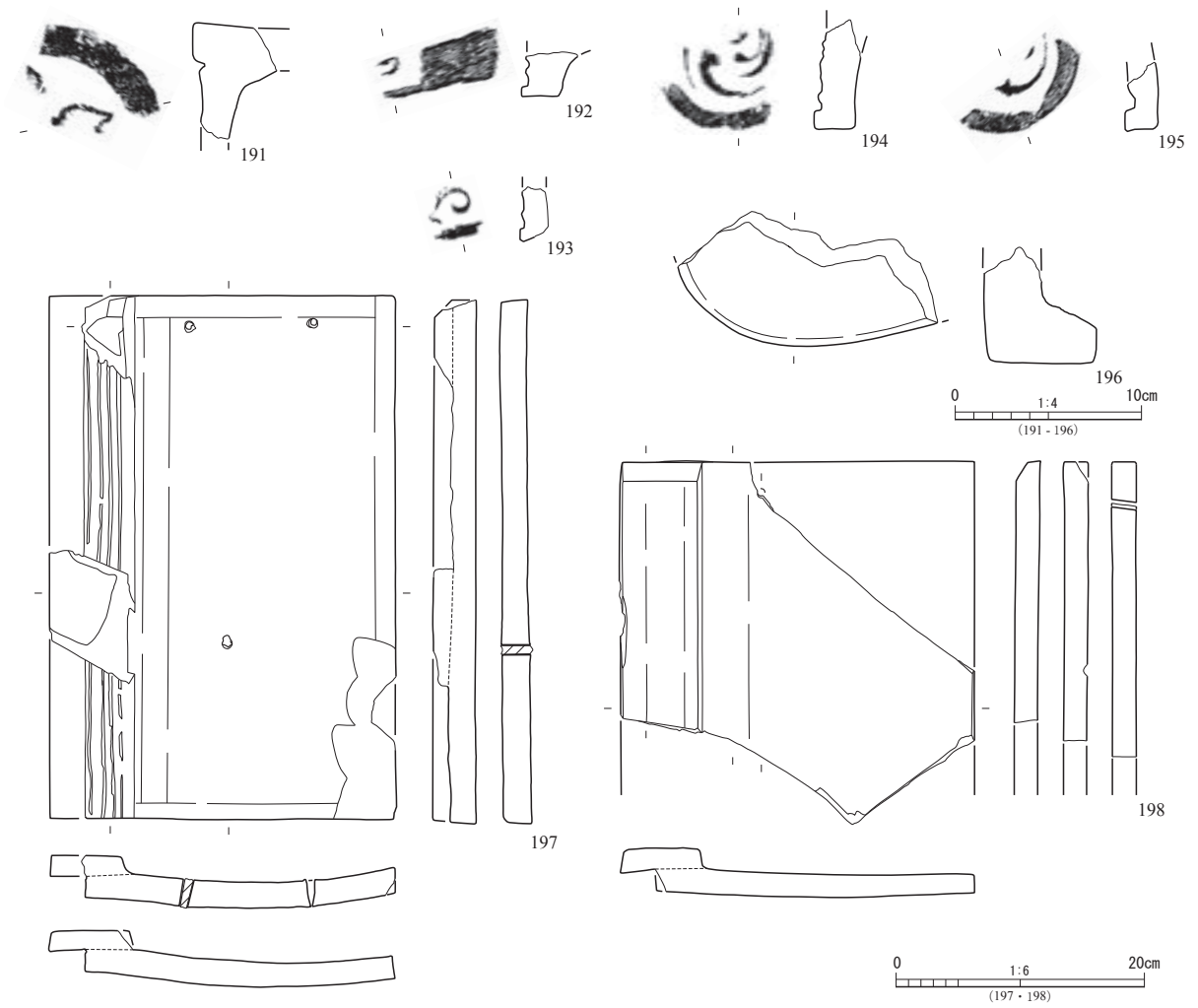


Fig.65　御殿域内包含層等出土遺物（２）

4. 小　結

二の丸の主要な調査成果は、近世の二の丸御殿建物遺構および枯山水庭園遺構を良好な状態で確認できたことである。 34 トレンチでは、６尺５寸の京間を基準として配置された近世浜松城の御殿建物の礎石および礎石据付穴を複数検出した。また、雨落ち溝の壁面と考えられる、礎石列と並行する瓦列を検出した。御殿遺構の形成時期は、17 世紀初頭まで遡る可能性がある。二の丸御殿は、絵図の変化から廃城時まで何度か改築されたとみられるが、ほぼ同一面を使用していたことが明らかになった。

32 トレンチでは、枯山水庭園跡を検出した。三和土面と礫敷で表現された枯池と洲浜、さらに築山や景石と推察される痕跡を確認できた。三和土直上の堆積土の分析は、枯池の可能性を示すものであった（第３章参照）。

枯山水庭園上層では瓦集積 5 と瓦列 7 を確認した。堆積状況から当該遺構は枯山水庭園廃絶後に形成されたことは明らかであり、江戸時代のうちに枯山水庭園は廃絶していた可能性がある。枯山水庭園遺構の形成時期は不明確だが、廃絶時期は三和土直上堆積物の放射性炭素年代測定の年代から 18 世紀代～廃城前と捉えられる（第３章参照）。

枯山水庭園下層では、シルト質土壌の壁面を有する苑池を確認した。部分的な検出であったため、全体像は不明であるが、検出部の形状や遺構中から多くのチャートが出土したことから枯山水庭園に先行する庭園遺構が存在した可能性がある。

（4）近代以降の遺構

調査対象地は浜松城の廃城後、払い下げが行われ、市街地化したことが知られる。発掘調査により、近代の石垣や煉瓦造の建物など廃城後の土地利用の一端をうかがい知ることができる調査成果を得た。

近代石垣　調査対象地中央東端の旧元城小学校正門に近いところで、３つの近代石垣を検出した。11 トレンチでは、SD05 の真上に作られた石垣を検出した。石垣は３段程度が残存し、上部は後世の造成により失われている。築石は円礫を主体にし、根石の前面は三和土で固められている。

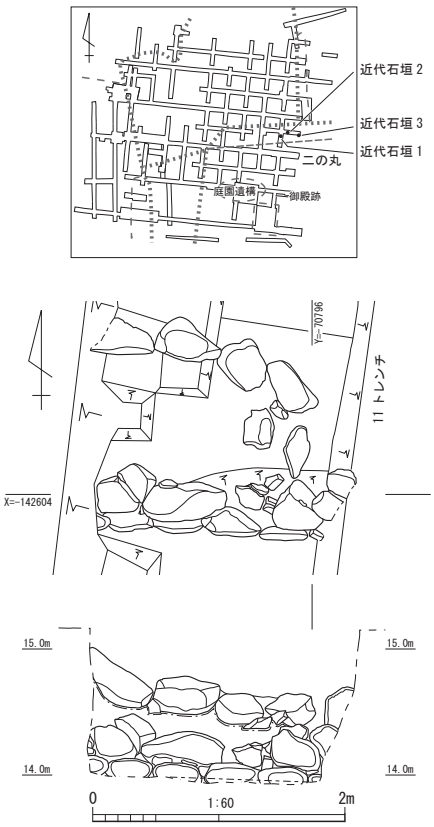


Fig.66　近代石垣 1 詳細図

Fig.67　近代石垣 1 検出状況

Fig.68　近代石垣 2 検出状況

Fig.69　近代石垣 3 検出状況

石垣の西側延長方向にあたる 10・22・23 トレンチでも同様の石垣が確認できる（Fig.36）。また、18 トレンチの東端では、近代石垣 2・3 を検出した。いずれも南北方向に延びる石垣であり、近代石垣と直交する。石垣は亀甲積みで造られているが、西側の石垣は石灰岩の角礫、東側の石垣は円

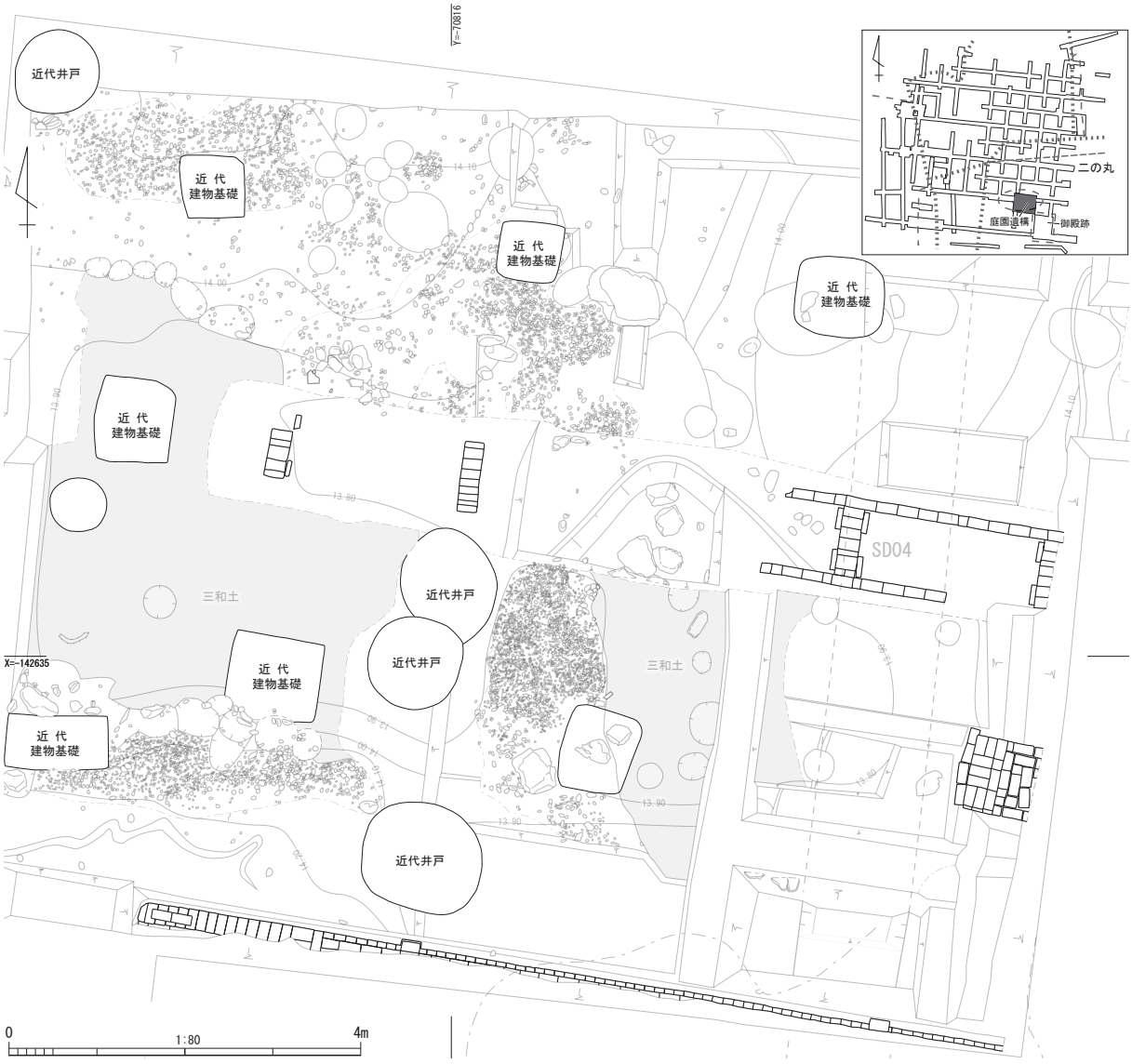


Fig.70　32トレンチ近代遺構詳細図

Fig.71　煉瓦建物跡

Fig.72　煉瓦造の構造物

礫と、石材が異なる。石材間の隙間はモルタルで目地を埋めている。また、近代石垣 3 は、石垣前面にコンクリートと玉石による舗装面が認められ、南側は煉瓦積みの構造物と接している。これらの石垣の詳細な築造年代は不明であるが、いずれも廃城後から小学校開設までの間に築造されたものと捉えられる。なお、近代に築かれた石垣は、SD02 や SD05 と関連する位置に築かれたものが多く、近世の地形を反映しているとみられる。

煉瓦建物跡　庭園遺構を検出した 32 トレンチでは、庭園遺構に重複する煉瓦積みの構造物を多く検出した。また、32 トレンチ中央部において、2m 間隔で東西方向にならぶ 4 つの煉瓦造の構造物を検出した。構造物は一連のものとみられ、同様の特徴をもつ、幅 0.35m、長さ 0.8m、残存高 0.5m の構造物の下部両端には空洞が設けられ、煉瓦で蓋をする構造になっている。空洞の中には炭化した木材片が入っているものみられた。煉瓦の積み方は長辺だけを並べる長手積みである。32 トレンチ南壁際において、東西方向に延びる煉瓦積みの構造物を確認した。長辺だけを並べる段と短辺だけを並べる段を交互に繰り返すイギリス積みで造られている。

約 4 m間隔で 1 m四方の穴が等間隔に並んでおり、煉瓦積みの構造物に関連する遺構と考えられる。この地には専売公社があったことが知られ、関連する遺構であると考えられる。

近現代の遺物　近現代の遺物としては、高田徳利、飲料や薬の瓶類、茶碗や皿の日用雑器など様々な遺物が出土した。高田徳利は、「□渕屋」の文字がみられる。天守曲輪の調査で出土した、間渕屋の高田徳利とみられる。製造年代は、明治時代後期から大正時代頃に推定できる。また、下部に「NIPPON BEER KOSEN CO LTD」と書かれた日本麦酒鉱泉株式会社のビール瓶や、「鎮漱液」、「美顔水」と書かれた小瓶、「ブラザーミシン」と印字がある灰皿、硯など、廃城後に市街地化していた歴史を示す遺物が多く出土した。

Fig.73　近現代出土遺物（1）

Fig.74　近現代出土遺物（2）

６　御城米蔵の調査

（１）調査の概要

調査対象地北東部にあたる箇所は、江戸時代に描かれた『遠州浜松城絵図』（17 世紀）や『青山家御家中配列図』（17 世紀末）など複数の絵図に「御城米蔵」と表記されている。御城米蔵は、絵図によると、入口が南にあり、西は南北方向に延びる堀（御城米蔵西堀）や柵・土塀、東と北は土塀で囲まれた様子が描かれ、堀と塀に囲まれた独立した空間である。御城米蔵には、北側と東側に蔵が１棟づつ描かれている。

今回の調査により、当該地区において、絵図に描かれた堀と同一と考えられる堀跡（SD02）を確認し、御城米蔵のおおよその位置が判明した。また、御城米蔵の建物遺構は検出できていないが、近世の遺構を検出したことから、御城米蔵に関わる遺構が残存している可能性が高い。このほか、SD03 や SD05 のように近世の浜松城を描いた絵図には表現されていない大型かつ相対的に古い時期の遺構を検出し、近世浜松城よりも前の浜松城の構造と変遷に関する調査成果が得られた。

（２）御城米蔵西堀跡（SD02）

検出状況　5・44、6、13、20、46トレンチで検出した南北方向へ延びる堀跡をSD02とした。検出位置や規模、時期から御城米蔵と御城米蔵西の間に築かれた御城米蔵西堀にあたると捉えられる。

SD02 の検出面は基盤層上面である。堀底はいずれのトレンチでも確認していないが、5・44、6、13 トレンチでは東西両方の肩部を検出した。5・44 トレンチで検出した堀跡の幅は検出面を基準に計測すると 4.4 m、6 トレンチでは幅 3.9 m、13 トレンチは 6.2 mであった。20 トレンチは東側の肩部が、46 トレンチは西側の肩部がそれぞれトレンチ外にあたる。南北方向の堀端部については、確認できなかったが、42 トレンチで堀跡が検出されなかったことから、6 トレンチと 42 トレンチの間で収束すると考えられる。

検出した堀跡の延長は 37.0 mである。堀跡斜面は、45 ～ 60 度で傾斜している。検出面から 1 m 程度の深さまでしか掘削していないため堀底面や堀下層の状況は不明である。

埋土の概要　SD02 の埋土は、近代における埋立て土、近世を中心とした堆積土、初期流入土の３層に分けて捉えることができる。

近代における埋立て土は、褐色・黄褐色系の砂礫土が主体であり、土層にアジア太平洋戦争時の焼土層が各トレンチで確認できる。Ⅱ・Ⅲ層堆積状況から、廃城後、少なくとも戦前までは段差や窪みが存在していたことがうかがえる。

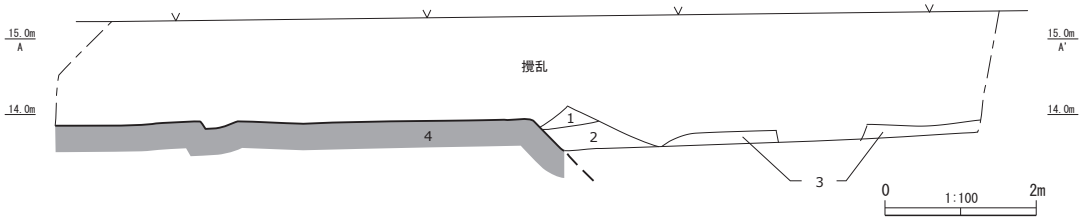
近世を中心とした堆積土としては、黄褐色系の砂礫土や灰褐色の粘質土が主体である。このうち、SD02 の埋土を明確に切っている土層（6 トレンチ 8 層、5・44 トレンチ 11 ～ 12 層、26 層）が確認できる。近世から戦前までにかけての時期に、浚渫や改築して使用されていたと考えられる。

初期流入土は、黄褐色系のシルトや粘質土が主体である。主に東側斜面の基盤層に沿って堆積が確認できる。

遺物の出土状況　5・44 トレンチでは 13 層から桔梗紋軒丸瓦や目板瓦を含む瓦集積 10（SX06）を検出した。また、46 トレンチでは、SD02 脇の土坑状遺構（11 層）から、軒丸瓦を含む大量の瓦や陶磁器が含まれる瓦集積 11 を検出した。その他、近世の層を中心に、鉄絵鉢や擂鉢、桔梗紋軒丸瓦、軒平瓦が出土している。

Fig.75　御城米蔵西堀跡(SD02)詳細図

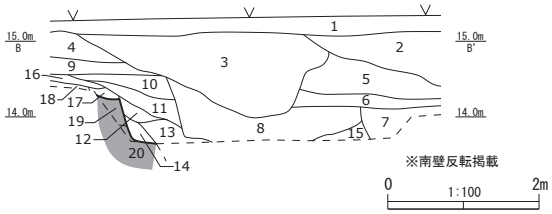
43 トレンチ東壁



SD02埋土
1　暗褐色土　（しまりなし、瓦礫少量含む）
2　黄褐色土　（しまり中）
3　暗褐色土　（しまり中）

Ⅶ層　基盤層
4　黄褐色土

6 トレンチ南壁



Ⅰ層　現代
1　暗褐色土　（しまりあり、砕石・コンクリート片含む、表土）
2　明黄褐色土　（しまりなし、φ15cmの礫・煉瓦片・焼土含む、撹乱）
3　暗褐色土　（しまりなし、人頭大の礫・コンクリート片・煉瓦・三和土多量に含む、撹乱）
4　褐色土　（しまりなし、φ2cmの礫多く含む、瓦含む、近代）
5　灰黄褐色土　（しまりなし、煉瓦・瓦・コンクリート片含む ）

Ⅱ層　太平洋戦争前後
6　赤褐色土　（しまりなし、炭化物含む、焼土層）

Ⅲ層　近代
7　暗褐色土　（しまりなし、桟瓦含む、瓦・土管含む、撹乱）
8　灰黄褐色土　（しまりなし）

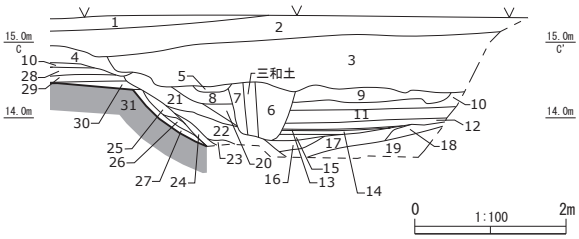
Ⅳ層　近世・近代
9　暗褐色土　（しまりあり、砂礫・炭化物多量に含む、近世から近代）

SD02埋土
10　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
11　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ5cmの礫少量含む）
12　にぶい黄橙色粘質土　（しまりあり、砂礫少量含む）
13　にぶい黄褐色土　（しまりなし、φ10cmの礫多量含む）
14　にぶい黄褐色粘質土　（しまりあり、砂礫少量含む）
15　灰黄褐色粘質土　（しまりあり、基盤層由来の土砂含む）

Ⅴ層　近世
16　黄橙粘土　（しまりあり、一部に砂礫含む、整地層）
17　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの礫含む）
18　灰黄褐色粘質土　（しまりあり、炭化物少量含む、旧表土）

Ⅶ層　基盤層
19　明褐色粘質土　（しまりあり、砂礫少量含む）
20　灰白色粘土　（しまりあり、明褐色粘土の基盤層がまだらに含む）

20 トレンチ北壁



Ⅰ層　現代
1　青灰色砕石　（しまりあり、下層に厚さ10cm程度の黄橙色土あり、表土）
2　暗褐色土　（しまりなし、煉瓦・コンクリート多く含む）
3　暗褐色土　（しまりなし、コンクリート・土管含む）
4　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む）
5　青灰色砕石　（しまりなし）
6　暗褐色土　（しまりなし、三和土・コンクリート基礎含む、建物基礎）
7　褐灰色粘質土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む、撹乱）
8　暗褐色土　（しまりなし、煉瓦含む）
9　暗褐色土　（しまりなし、瓦・三和土・円礫含む）

Ⅱ層　太平洋戦争前後
10　赤褐色土　（しまりなし、炭化物・焼土・瓦礫多量に含む）
11　明赤褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む）

Ⅲ層　近代
12　褐灰色土　（しまりなし、上下に厚さ1cm程度の黒色土層あり）

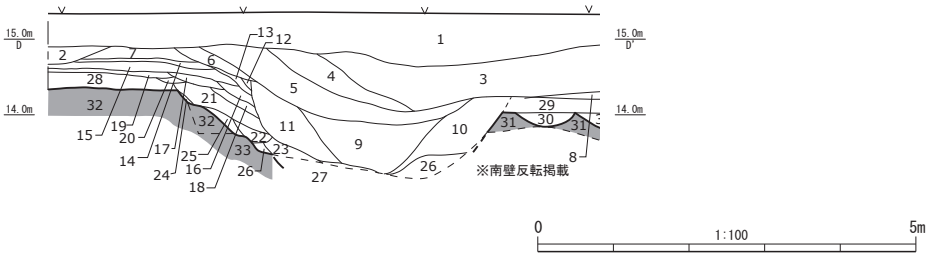
SD02埋土
13　黄橙色砂礫土　（しまりなし、φ1cmの砂礫含む）
14　黒褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
15　灰黄褐色シルト　（しまりなし、φ1cmの砂礫含む）
16　灰黄褐色粘質土　（しまりあり、炭化物・鉄分粒含む）
17　褐灰色粘質土　（しまりあり、炭化物含む）
18　にぶい黄褐色シルト　（しまりあり、φ1cmの砂礫・鉄分粒含む）
19　黒褐色粘質土　（しまりあり、炭化物・鉄分粒・磁器含む）
20　褐灰色粘質土　（しまりなし、φ2cmの砂礫含む、撹乱）
21　にぶい黄褐色土（しまりあり、φ1cmの砂礫・炭化物・瓦片含む）
22　灰黄褐色シルト　（しまりあり、φ1cmの砂礫・鉄分粒多量に含む）
23　にぶい黄褐色粘質土（しまりあり、φ15cmの礫・瓦多量に含む）
24　褐灰色シルト　（しまりあり、鉄分粒含む）
25　にぶい黄橙色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
26　灰黄褐色シルト　（しまりあり、φ1cmの砂礫・鉄分粒含む）
27　にぶい黄褐色シルト　（しまりあり、φ1cmの砂礫・鉄分粒含む）

Ⅴ層　近世
28　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
29　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫・炭化物多量に含む）
30　にぶい黄褐色土　（しまりあり、明黄褐色土粒多量に含む）

Ⅶ層　基盤層
31　明黄褐色粘質土（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）

Fig.76　御城米蔵西堀跡（SD02）土層断面図（１）

5 トレンチ・44 トレンチ南壁



Ⅰ層　現代
1　にぶい黄褐色土　（しまりなし、φ5cmの礫多量に含む、表土）
2　暗褐色土　（しまりなし、瓦・煉瓦含む、攪乱）
3　黄褐色土　（しまりなし、コンクリート・三和土多量に含む）
4　赤褐色土　（しまりなし、焼土多量に含む、近代瓦・陶磁器含む、焼土層多量に含む）
5　暗褐色土　（しまりなし、桟瓦・陶磁器多量に含む、瓦礫多量に含む）
6　暗褐色土　（しまりなし、φ1cm の礫多量に含む）
7　黒褐色土　（しまりなし、φ2cm の礫多量に含む、瓦含む、近代から現代）

Ⅱ層　太平洋戦争前後
8　暗赤色土　（しまり中、 焼土、昭和20年頃か）

Ⅲ層　近代
9　灰黄褐色土　（しまりなし、φ10cmの礫・瓦多量に含む）
10　にぶい黄褐色土　（しまりあり、瓦・陶磁器含む）
11　褐色土　（しまりなし、瓦・陶磁器含む）
12　暗褐色土　（しまりなし、φ1cm の礫多量に含む）
13　暗褐色土　（しまりなし、粒状の黄橙色土まだらに含む）
14　黄褐色砂礫土　（しまりあり、φ1cm の礫多量に含む、整地層）
15　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cm の 礫多量に含む、炭化物含む、堆積層）
16　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの礫含む）
17　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの礫含む）
18　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの礫含む）

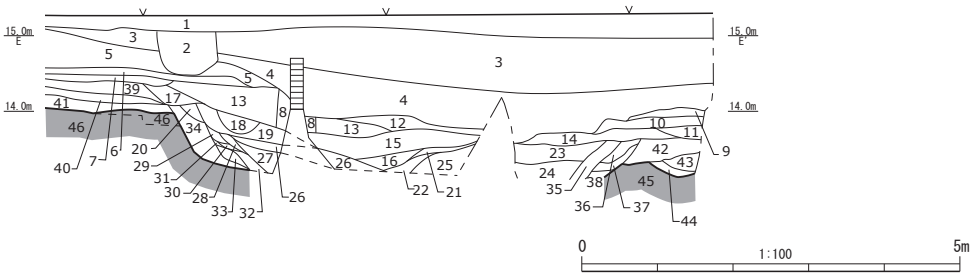
Ⅴ層　近世
19　明黄褐色砂礫土　（しまりあり、φ1cmの礫多量に含む、江戸時代か）

SD02埋土
20　にぶい黄褐色土　（しまりなし、φ1cmの礫含む）
21　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの礫含む）
22　灰黄褐色土　（しまりあり、φ10cmの礫含む）
23　褐灰色粘質土　（しまりあり、φ1cmの礫含む）
24　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの礫含む）
25　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの礫多量に含む）
26　褐灰色粘質土　（しまりあり、φ1cmの礫少量含む）
27　褐灰色粘質土　（しまりあり、φ1cm の礫含む、桔梗紋軒丸瓦含む）

Ⅴ層　近世
28　黒褐色粘質土　（しまりあり、φ1cmの礫含む、炭化物含む）
29　黄褐色土　（しまりあり、φ5cmの礫多量に含む）
30　黄褐色土　（しまりあり、φ5～10cmの礫含む）

Ⅶ層　基盤層
31　にぶい褐色土　（しまりなし）
32　明黄褐色粘質土　（しまりあり、φ1cmの礫少量含む）
33　灰白色粘土　（しまりあり、明褐色粘土まだらに含む）

13 トレンチ・46 トレンチ北壁



Ⅰ層　現代
1　褐色土　（しまりあり、φ10cm の礫多量に含む、表土）
2　暗褐色土　（しまりなし、φ10cm の円礫多量に含む、暗渠）
3　褐色土　（しまりなし、φ10cm の砂礫多量に含む）
4　褐色土　（しまりなし、φ10cm の礫・20 cmの角礫
チャート・瓦・煉瓦多量に含む）
5　暗褐色土　（しまりなし、コンクリート・煉瓦含む）
6　にぶい黄褐色土　（しまりあり、砂礫・炭化物含む）
7　黄褐色土　（しまりあり、φ1cm の砂礫多量に含む）
8　暗褐色土　（しまりなし、φ3cm の砂礫含む、煉瓦壁）

Ⅴ層　近世
9　黒褐色土　（しまり中、φ1cmの炭化物少量含む、
φ1～5cmの赤褐色粒子少量含む）
10　黒褐色土　（しまりあり、φ1cmの黄褐色土塊含む）
11　暗褐色土　（しまりなし）
12　暗褐色土　（しまりなし、砂礫含む）
13　にぶい黄褐色土　（しまりなし、φ5cm の砂礫多量に含む）
14　明黄褐色土　（しまり中、φ1～2cmの砂礫含む）
15　黄褐色土　（しまりあり、φ10cm の礫・炭化物含む）
16　にぶい黄褐色土　（しまりあり、砂礫多量に含む）
17　黄褐色土　（しまりなし、φ2cm の砂礫多量に含む）

SD02埋土
18　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ2cm の砂礫含む）
19　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ2cm の砂礫・炭化物含む）
20　黄褐色土　（しまりあり、砂礫含む）
21　にぶい黄褐色粘質土　（しまりあり、鉄分粒含む）
22　褐灰色粘質土　（しまりあり、鉄分粒含む）
23　暗褐色土　（しまり中、赤褐色のすじ多く含む、鉄分の析出か）
24　暗褐色土　（しまり中、φ5cmの炭化物少量含む）
25　褐灰色粘質土　（しまりあり、鉄分粒含む）
26　灰黄褐色粘質土　（しまりあり、砂礫少量含む、鉄分粒含む）
27　灰黄褐色粘質土　（しまりあり、φ3cm の砂礫含む）
28　灰黄褐色粘質土　（しまりあり、鉄分粒含む）
29　にぶい黄褐色土　（しまりあり、砂礫含む）
30　灰黄褐色粘質土　（しまりあり）
31　灰黄褐色粘質土　（しまりあり）
32　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cm の砂礫多量に含む）
33　灰黄褐色土　（しまりあり、砂礫含む）
34　にぶい黄褐色土　（しまりあり、明褐色粘土塊含む）
35　暗褐色土　（しまり中、φ1～3cmの砂礫多量に含む）
36　赤褐色土　（しまり中、鉄滓あり）
37　赤褐色土　（しまりなし、炭化物少量含む）
38　赤褐色土　（しまりなし）

Ⅴ層　近世
39　明褐色土　（しまりあり、砂礫・炭化物含む、江戸時代、最終遺構面か）
40　にぶい黄褐色土　（しまりあり、砂礫・炭化物多量に含む、かわらけ含む）
41　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cm の砂礫含む、炭化物含む）
42　黄褐色土　（しまり中、φ1cmの砂礫少量含む）
43　暗黄褐色土　（しまりあり）
44　暗黄褐色土　（しまりあり）

Ⅶ層　基盤層
45　暗黄褐色土　（しまりあり）
46　明褐色粘質土　（しまりあり、砂礫少量含む）

Fig.77　御城米蔵西堀跡（SD02）土層断面図（２）

御城米蔵西堀跡（SD02）出土遺物　199・200はかわらけである。199は非ロクロ、200はロクロ成形で、いずれも口径は10cm程度である。201は土師器の盤もしくは皿である。高台径が13.2cmで、上面に赤彩が付着している。202は天目茶碗である。高台脇を幅広く削り取っている。大窯第３段階後半から大窯第４段階前半に位置づけられる。203は尾呂茶碗であり、美濃Ⅲa・b期に位置づけられる。

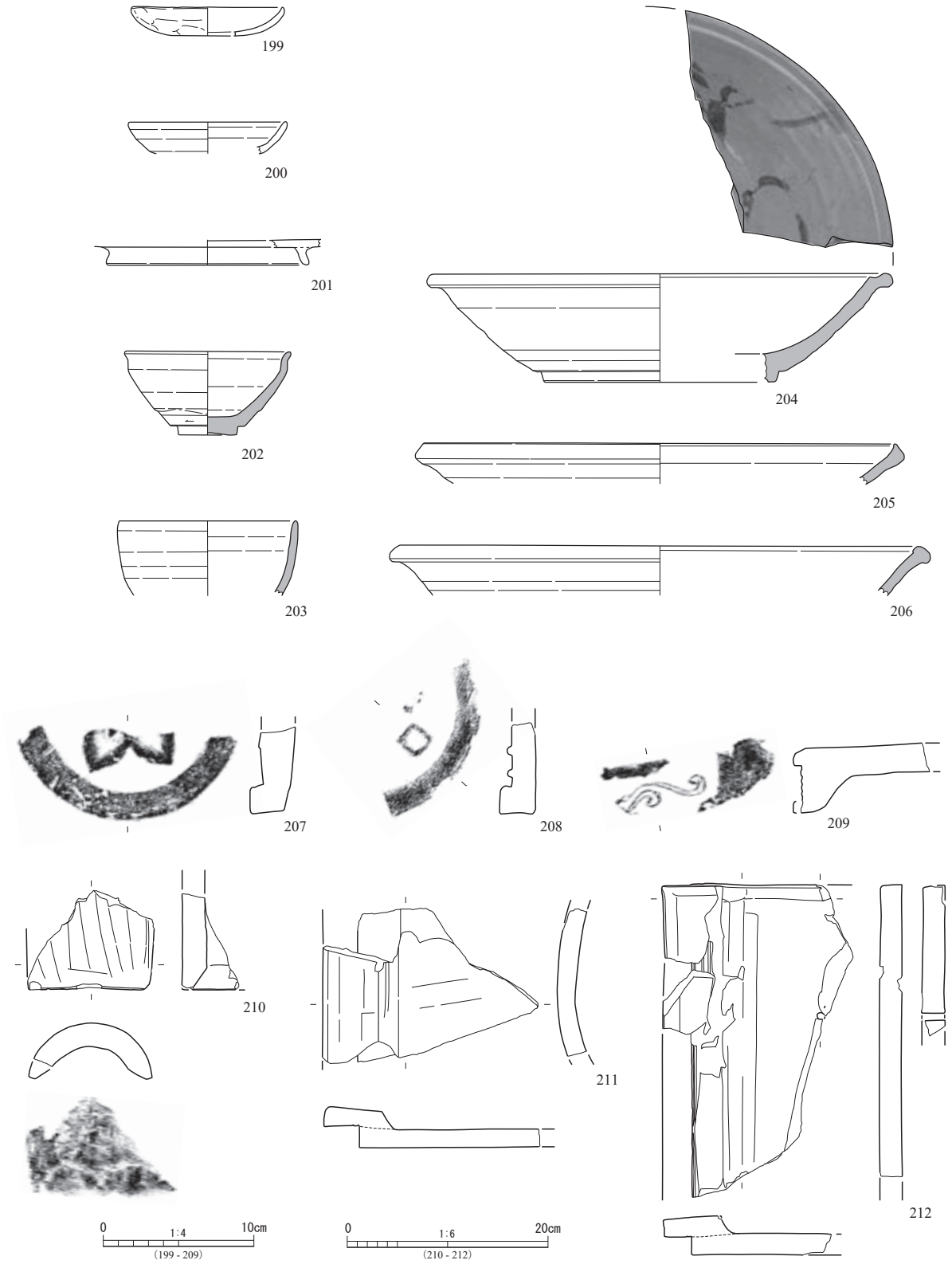
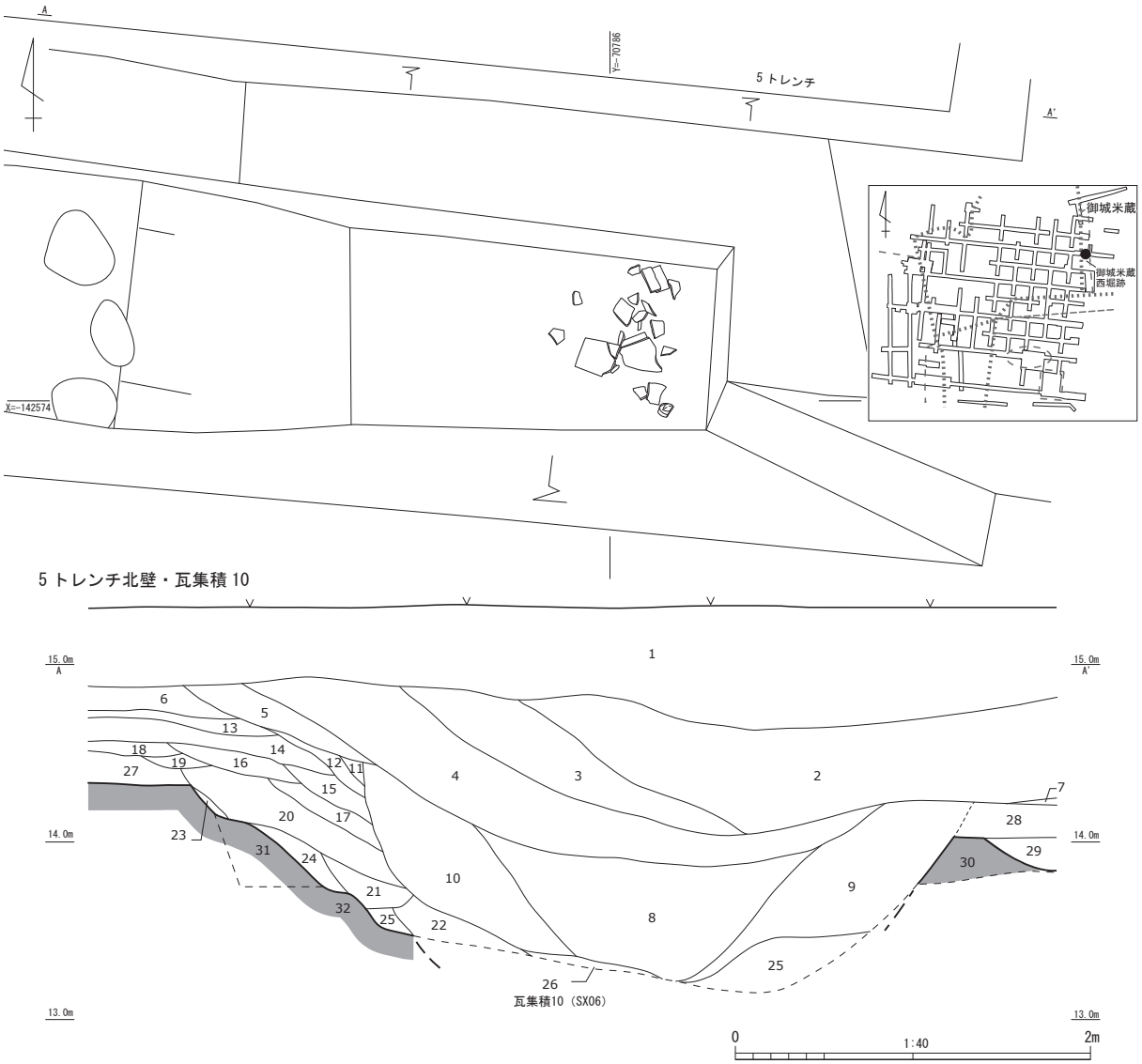


Fig.78　御城米蔵西堀跡（SD02）出土遺物

204は鉄絵鉢である。口縁の折れが弱く古い要素を示している。登窯第１段階第２・３小期に位置づけられる。205・206は擂鉢である。205は古瀬戸後期様式Ⅳ期新に、206は登窯第３段階第11小期にそれぞれ位置づけられる。

207は桔梗紋軒丸瓦で、桔梗の花弁が立体的に表現されている。208は繋九目結紋軒丸瓦で、家紋文様が薄く、角張っている。本庄松平氏の家紋瓦で、18世紀前半から中頃に位置づけられる。209は唐草紋軒平瓦で、複線の巻きの強い唐草紋が認められる。210は小型の丸瓦で、凹面にはコビキ



1　にぶい黄褐色土　（しまりなし、φ5cmの礫多量に含む、表土）
2　黄褐色土　（しまりなし、コンクリート・三和土多量に含む）
3　暗褐色土　（しまりなし、桟瓦・陶磁器多量に含む）
4　赤褐色土　（しまりなし、焼土多量に含む、近代瓦・陶磁器含む、焼土層多量に含む）
5　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの礫多量に含む）
6　黒褐色土　（しまりなし、φ2cmの礫多量に含む、瓦含む、近代から現代）
7　暗赤色土　（しまりあり、焼土）
8　灰黄褐色土　（しまりなし、φ10cmの礫・瓦多量に含む）
9　にぶい黄褐色土　（しまりあり、瓦・陶磁器含む）
10　褐色土　（しまりなし、瓦・陶磁器含む）
11　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの礫多量に含む）
12　暗褐色土　（しまりなし、粒状の黄橙色土まだらに含む）
13　黄褐色砂礫土　（しまりあり、φ1cmの礫多量に含む、整地層、近代）
14　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの礫多量に含む、炭化物含む）
15　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの礫多量に含む）
16　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの礫含む）
17　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの礫含む）
18　明黄褐色砂礫土　（しまりあり、φ1cmの礫多量に含む、江戸時代か）
19　にぶい黄褐色土　（しまりなし、φ1cmの礫含む）
20　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの礫含む）
21　灰黄褐色土　（しまりあり、φ10cmの礫含む）
22　褐灰色粘質土　（しまりあり、φ1cmの礫含む）
23　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの礫多量に含む）
24　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの礫含む）
25　褐灰色粘質土　（しまりあり、φ1cmの礫少量含む）
26　褐灰色粘質土　（しまりあり、φ1cmの礫含む、桔梗紋軒丸瓦含む、瓦集積10）
27　黒褐色粘質土　（しまりあり、φ1cmの礫多量に含む、炭化物含む）
28　黄褐色土　（しまりあり、φ5cmの礫多量に含む）
29　黄褐色土　（しまりあり、φ10cmの礫含む）
30　にぶい褐色土　（しまりなし、基盤層）
31　明黄褐色粘質土　（しまりあり、φ1cmの礫少量含む、基盤層）
32　灰白色粘土　（しまりあり、明褐色粘土まだらに含む、基盤層）

Fig.79　瓦集積10（SX06）詳細図

Ｂ技法、ハケメが認められる。側面端部には２回面取りが施されている。211は雁振瓦である。212は目板瓦で、釘穴が１箇所認められる。釘穴の位置から右重ねの目板瓦である可能性も考えられる。

瓦集積10（SX06）　5・44トレンチにおいて、SD02がある程度埋没し浚渫した後の堀底付近（10層）にて瓦集積10を確認した。瓦集積10は小規模な瓦集積で、南北方向に0.5ｍ、東西方向に0.7ｍの範囲に分布する。土層の切り合いから、浚渫は江戸時代末期から近代にかけて形成したと考えられる。

（３）御城米蔵におけるその他の検出遺構と出土遺物

瓦集積11（SX17）　瓦集積11は、46トレンチSD03堀跡の東側で検出した。南北方向に2.0ｍを測り、東方向は調査範囲外に延びる。瓦は基盤層まで掘り込んだ土坑状の遺構から出土している。瓦は幾重にも重なり、堆積が厚い部分では20cmを越える堆積が確認できた。出土遺物は、丸瓦や平瓦が主体を占めるが、三ツ巴紋をもつ軒丸瓦、唐草紋をもつ軒平瓦を含み、「山」の刻印がみられる丸瓦も出土している。さらに加えて、三彩土瓶を始め磁器や陶器の碗や擂鉢など道具類も出土している。

瓦集積11（SX17）出土遺物　213・214はロクロ成形のかわらけである。215は平碗である。箔入で、古瀬戸後期様式前半に位置づけられる。216は大皿である。錆釉が施釉された瀬戸美濃産の焼締大皿である。大窯第３・４段階に位置づけられる。217は擂鉢である。瀬戸美濃産で大窯第４段階前半に位置づけられる。218は蓋と考えられる。最大径が10.3cmである。219は三彩土瓶である。京焼（信楽）で近世に位置づけられる。220は碗である。高台径が4.5cmで高台端部のみ露胎である。肥前産で18 ～ 19世紀に位置づけられる。

221は右巻きの三ツ巴紋軒丸瓦である。珠文は全部で９個で、瓦当の直径は16.0cmを測る。凹面にはコビキＢ技法と吊紐痕が認められる。222は三ツ巴紋軒丸瓦である。珠文は２個残っており、全部で10個と想定される。223は軒平瓦であるが、詳細は不明である。224は唐草紋が施される軒平瓦である。中央部に広く面取りが施される。225 ～ 230は丸瓦である。225は凹面にコビキＡ技法、吊紐痕が認められる。226は凹面にコビキＢ技法、細かい布目、縄目痕が認められる。227は凹面にコビキＢ技法、細かい布目、吊紐痕が認められる。228は胴部凸面玉縁寄りと凸面狭端縁連結面に「山」のスタンプが施される。凹面には粗い布目、吊紐痕が認められる。229は凹面にコビキＢ技法、粗い布目、棒状刺突痕が認められ、側面端部には面取りが２回施される。230は凹面にコビキＢ技法、吊紐痕、袋とじ痕が認められる。側面端部には面取りが２回施される。231 ～ 241は平瓦である。231・232は両面にハナレ砂が認められる。233は凸面にハナレ砂が認められる。234は両面にハナレ砂が認められる。また凸面にはユビナデ、頭端部には布目が認められる。236は凸面にハケが、凹面にナデが認められる。238は調整が施されず、凸面にハナレ砂が認められる。239は凸面が未調整で、銀化が認められる。241は頭端部にスタンプが施される。また両面にハナレ砂が認められる。

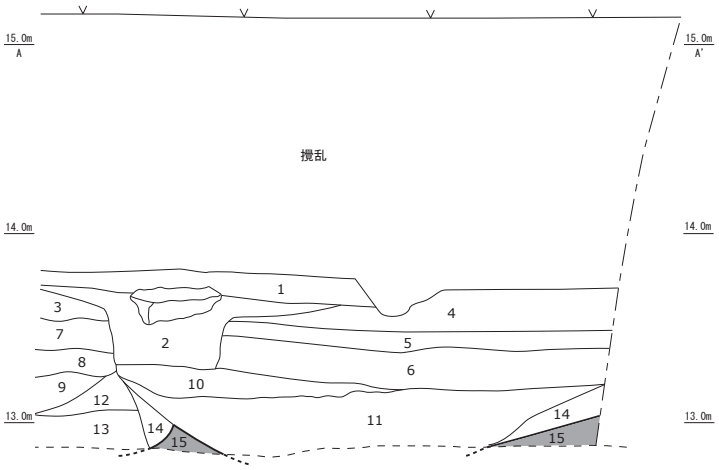
SD03　4、23、11、46トレンチで検出した東西方向に延びる堀跡である。土層や出土遺物の特徴や、絵図には描かれていないことから、江戸時代の早い段階には埋没していたと考えられる。

SD03検出状況　SD03の検出面は基盤層上面である。4トレンチで検出した堀跡の幅は検出面を基準として0.4ｍ、23トレンチは2.6ｍ、11トレンチでは2.9ｍ、46トレンチは1.0ｍであった。なお4トレンチでは南側の肩部、23、11、46トレンチでは北側の肩部を検出した。4トレンチでは西側の堀端部を検出した。検出した堀跡の延長は37.0ｍである。いずれのトレンチでも堀底を検出し、検出面からの深さは4トレンチで0.8ｍ、11トレンチで0.9ｍ、23トレンチで1.1ｍである。SD03の断面形状は逆台形を呈する。堀跡斜面は、いずれのトレンチでも45 ～ 60度の傾斜である。46トレンチでSD02に切られることを確認し、SD02構築時にはSD03が廃絶していたことが明らかである。なお、

46トレンチでは平面検出にとどめた。

SD03埋土と遺物の概要　SD03の埋土は、礫や炭化物を含む暗褐色土を主体とする土層である。遺物は主に11トレンチと23トレンチから出土しており、内耳鍋や天目茶碗等が認められる。

46 トレンチ東壁・瓦集積 11



1　暗褐色土　（しまり中、φ1cmの炭化物少量含む、φ1～5cmの赤褐色粒子少量含む、戦災由来）
2　灰褐色土　（しまり中、根固め、φ1cmの砂礫含む、φ1～3cmの砂礫多量に含む、近代遺構）
3　黒褐色土　（しまりあり、φ1cmの黄褐色土塊少量含む）
4　黒褐色土　（しまりなし、φ1～5cmの礫多量に含む）
5　暗褐色土　（しまり中、赤褐色土の鉄分の析出か、粒子細かい）
6　暗褐色土　（しまり中、粒子細かい）
7　暗褐色土　（しまりなし、φ10～20cmの礫多量に含む）
8　灰褐色土　（しまり中、赤褐色土が棒状に入る、鉄分の析出か）
9　褐色土　（しまり中、黄褐色土少量含む）
10　暗褐色土　（しまり中、φ5～10cmの礫含む）
11　暗赤褐色土　（しまり中、瓦集積 11）
12　暗褐色土　（しまりなし）
13　暗褐色土　（しまりなし）
14　黒褐色土　（しまりなし、φ1～5cmの礫多量に含む）
15　暗黄褐色土　（しまりあり、基盤層）

0　1:40　2m

Fig.80　瓦集積11（SX17）詳細図

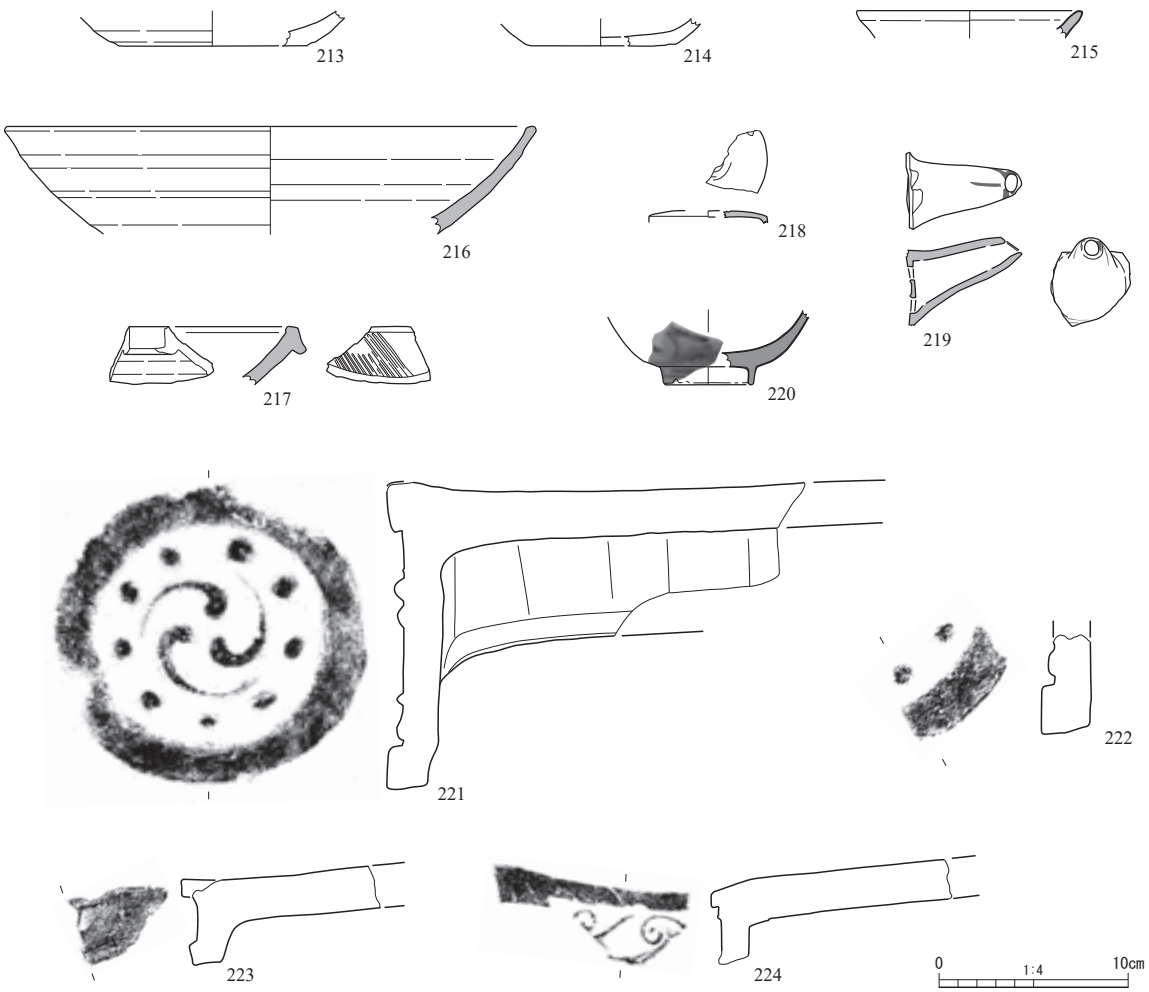


Fig.81　瓦集積11（SX17）出土遺物（１）

SD03出土遺物　SD03からは、かわらけ、釜、内耳鍋といった土師質土器や天目茶碗、甕などの陶器を中心に出土し、瓦は出土していない。242 ～ 261はすべてSD03埋土中から出土した。

242 ～ 244はかわらけである。242・243は非ロクロ成形、244はロクロ成形である。口径は、8.7cm（242）と10.0cm（243）を測る。245 ～ 248は羽釜で、羽径はそれぞれ21.0cm（245）、22.4cm（246）、26.0cm（247）、25.0cm（248）を測る。いずれも15世紀前半に位置づけられる（北村1996b）。249 ～ 252は内耳鍋である。249・250はくの字形内耳鍋（15世紀中葉から16世紀後葉）、251・252は内彎形内耳鍋（16世紀後葉から17世紀前葉）。253は半球形内耳鍋（16世紀中葉から17世紀前葉）に位置づけられる（鈴木正1996）。254は天目茶碗である。釉薬は鉄釉が縦に縞状に掛かっている。大窯３段階前半に位置づけられる。255は小皿である。口縁端部のみ施釉されており、外面体部は一部赤化している。古瀬戸後期様式Ⅳ期新に位置づけられる。256は反り皿である。大窯第２段階後半に位置づけられる。257・258は常滑産の甕で、14世紀後半（257）と15世紀後半（258）に位置づけられる。259・260は擂鉢である。259は古瀬戸後期様式Ⅳ期新に、260は大窯期に位置づけられる。261は羽口で、推定内径は6cmである。

SD05　11トレンチで検出した東西方向に延びる堀跡である。絵図には描かれていないため、江戸時代前半には埋められていたと考えられる。

SD05検出状況　SD05の検出面は基盤層上面である。堀跡の幅は検出面を基準として2.8m、掘り方下部に近代の石積を検出したため、堀底は検出できなかった。また南側肩部も近代石垣1に伴う

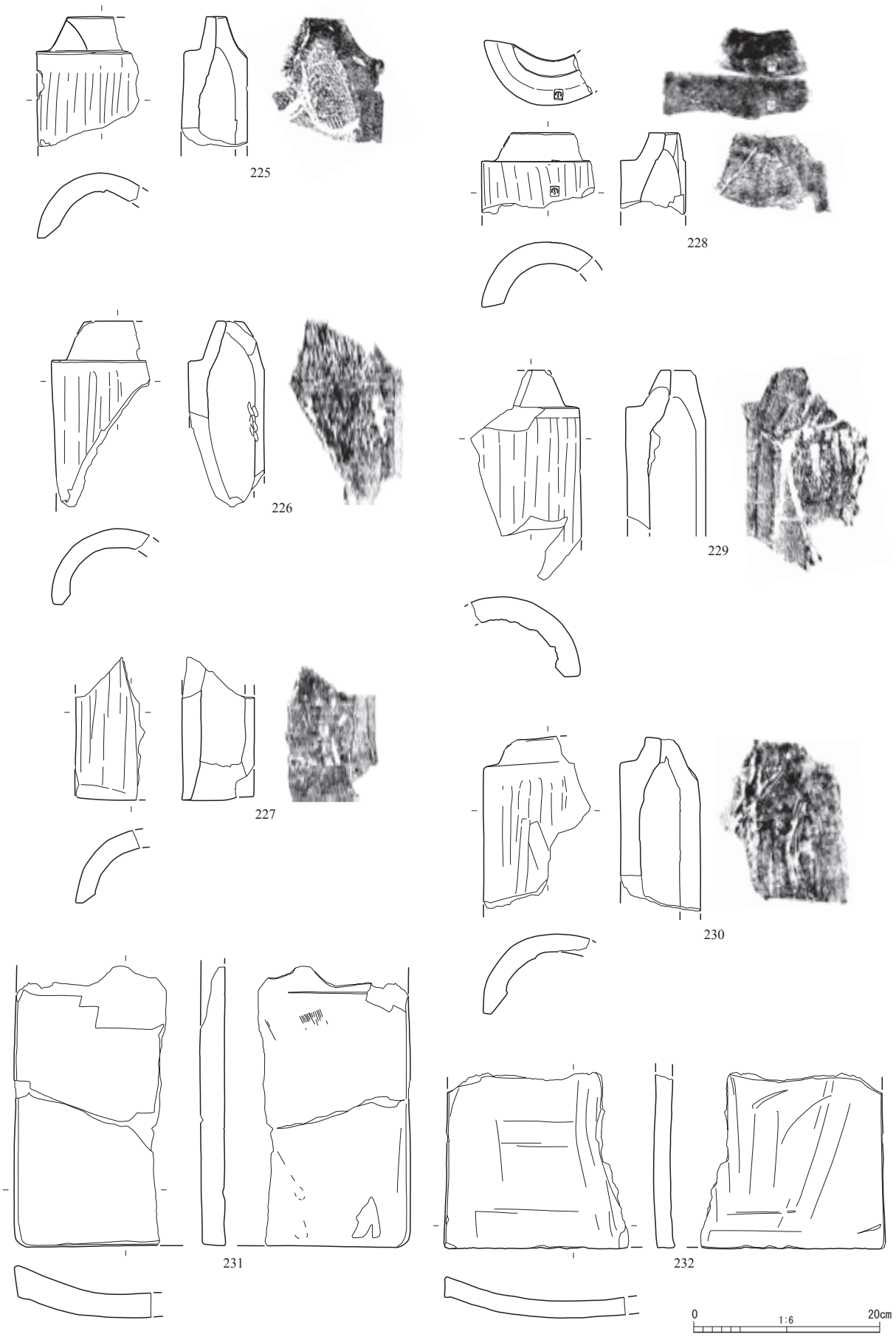


Fig.82　瓦集積11（SX17）出土遺物（２）

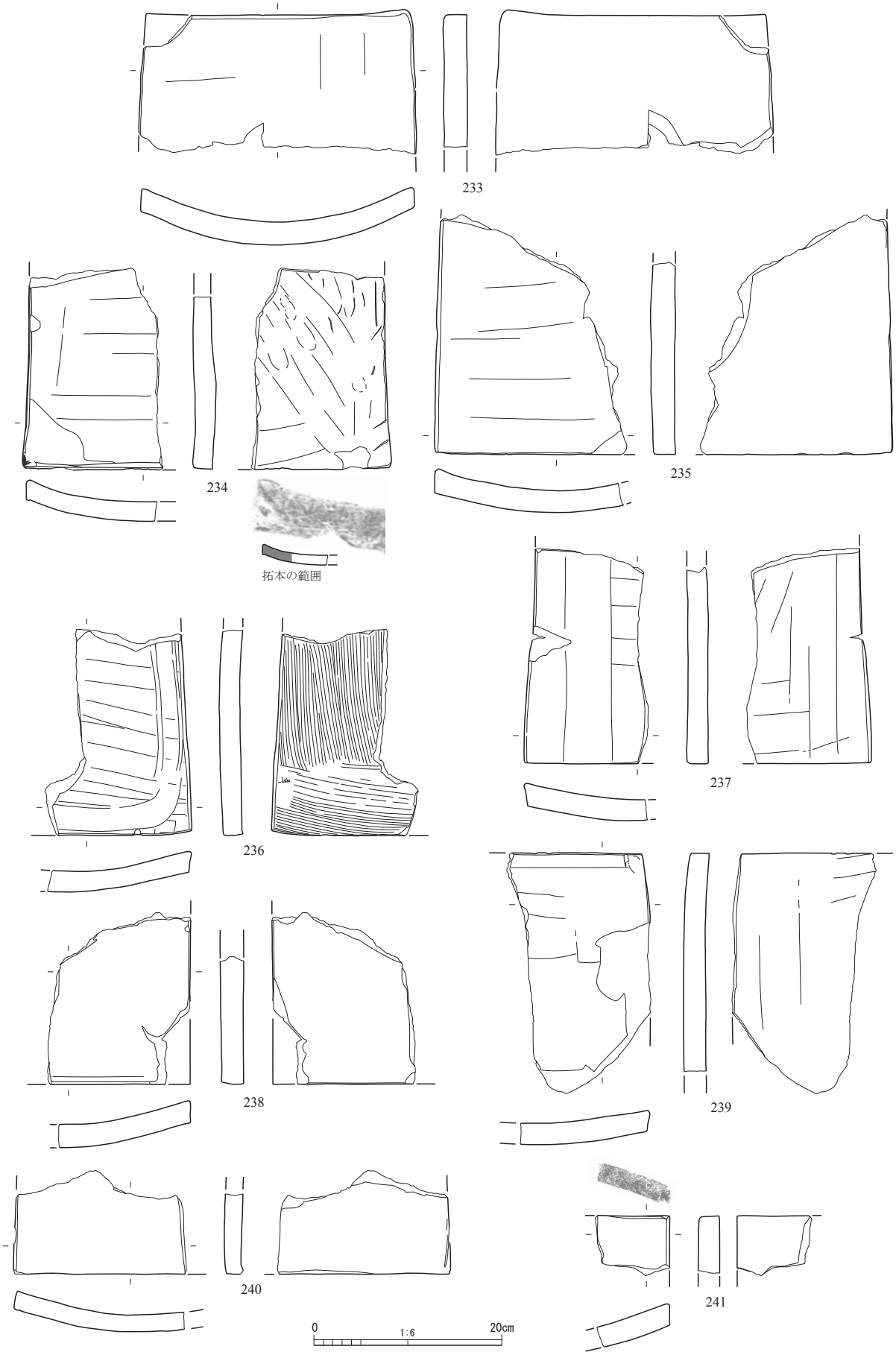
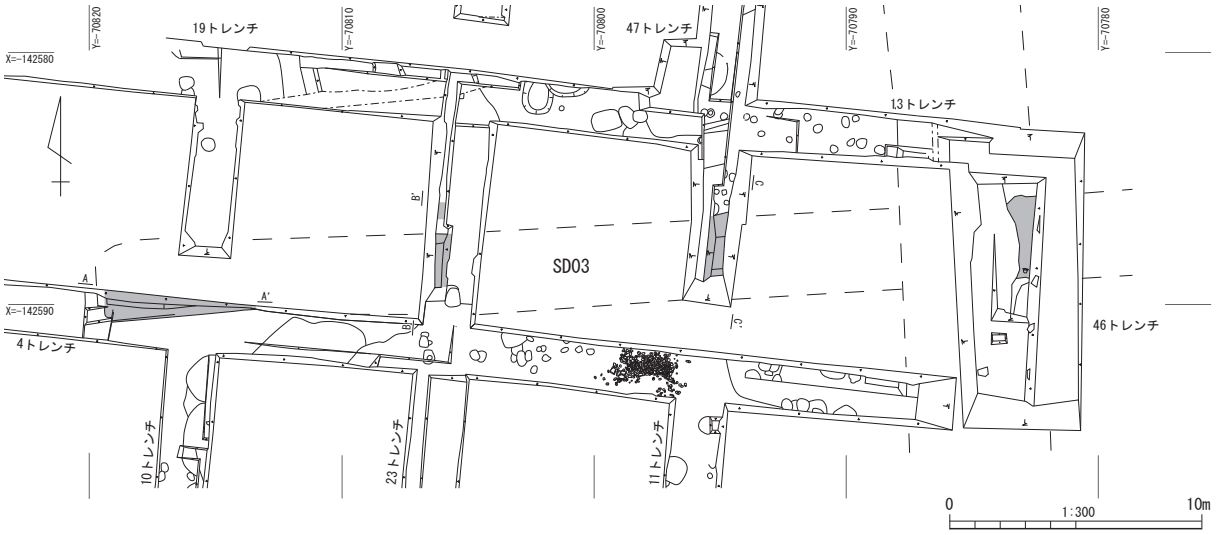
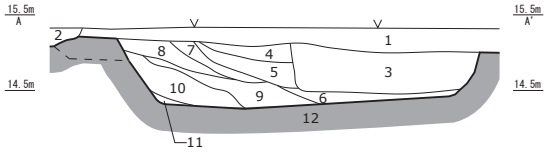


Fig.83　瓦集積11（SX17）出土遺物（３）



4 トレンチ北壁



Ⅰ層　現代

1　暗褐色土　（しまりなし、タイル・コンクリート等含む、表土）
2　暗褐色土　（しまりなし、瓶・コンクリート・煉瓦・瓦等多量に含む、攪乱）
3　黒褐色土　（しまりなし、φ15cm 以下の円礫多量に含む、暗渠）

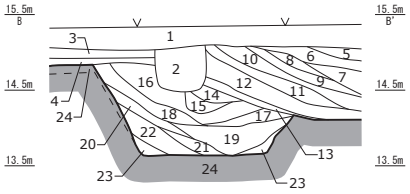
SD03 埋土

4　褐色土　（しまりあり、砂礫多量に含む）
5　黒褐色土　（しまりあり、有機物多量に含む、土師質土器含む）
6　灰黄褐色粘質土　（しまりあり）
7　暗褐色土　（しまりあり、φ15cm 以下の砂礫含む、土師質土器多量に含む）
8　にぶい黄褐色土　（しまりあり、砂礫多量に含む）
9　暗褐色砂礫　（しまりなし、土師質土器少量含む）
10　黄褐色砂礫　（しまりあり、φ15cm 以下の砂礫多量に含む）
11　暗褐色粘質土　（しまりあり）

Ⅶ層　基盤層

12　明褐色粘質土（しまりなし、砂礫微量含む）

23 トレンチ西壁



Ⅰ層　現代

1　明黄褐色土　（しまりあり、φ1cm の砂礫多量に含む、表土）
2　暗褐色土　（しまりなし、φ5cm の円礫多量に含む、攪乱）
3　にぶい黄橙色砂礫　（しまりなし、φ5cm の礫多量に含む）
4　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ2cm の砂礫多量に含む）
5　明褐色土　（しまりあり、φ3cm の砂礫多量に含む）
6　暗褐色土　（しまりあり、φ3cm の砂礫・炭化物多量に含む、コンクリート片含む）
7　褐灰色土　（しまりあり、φ3cm の砂礫含む）

Ⅴ層　近世

8　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ5cm の砂礫含む）
9　暗褐色土　（しまりあり、φ10cm の砂礫多量に含む）
10　褐色土　（しまりあり、φ5cm の砂礫、瓦多量に含む）
11　褐色土　（しまりあり、φ10cm の砂礫、瓦多量に含む）
12　暗褐色土　（しまりあり、φ15cm の礫、瓦多量に含む）
13　褐灰色シルト　（しまりあり、φ1cm の砂礫多量に含む）

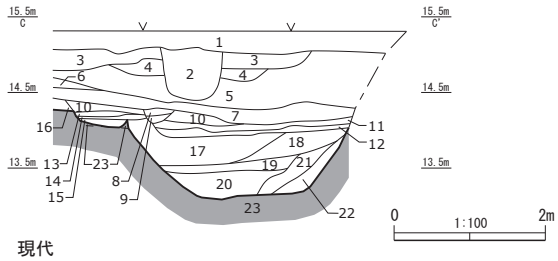
SD03 埋土

14　暗褐色土　（しまりあり、φ1cm の砂礫多量に含む）
15　褐灰色シルト　（しまりあり、φ15cm の礫多量に含む）
16　赤褐色土　（しまりあり、φ1cm の砂礫多量に含む）
17　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cm の砂礫多量に含む）
18　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ3cm の砂礫多量に含む）
19　黒褐色土　（しまりあり、φ10cm の砂礫多量に含む）
20　明黄褐色粘質土　（しまりあり、φ3cm の砂礫・炭化物含む）
21　黒褐色粘質土　（しまりあり、φ1cm の砂礫・炭化物含む）
22　黒褐色粘質土　（しまりあり、φ3cm の砂礫・炭化物含む）
23　灰黄褐色粘質土　（しまりあり、砂礫微量に含む）

Ⅶ層　基盤層

24　明褐色土　（しまりあり、φ5cm の砂礫多量に含む）

11 トレンチ東壁



Ⅰ層　現代

1　褐色土　（しまりあり、φ15cm の礫多量に含む、表土）
2　暗褐色土　（しまりなし、φ10cm の円礫多量に含む、暗渠）
3　黄褐色土　（しまりなし、砂礫多量に含む）
4　黄褐色土　（しまりなし、φ5cm の礫含む）

Ⅴ層　近世

5　明褐色土　（しまりあり、砂礫・炭化物含む、最終遺構面か）
6　明褐色土　（しまりあり、φ1cm の砂礫多量に含む）
7　褐色土　（しまりあり、炭化物・砂礫多量に含む）
8　にぶい黄褐色土　（しまりなし、炭化物多量に含む）
9　にぶい黄褐色土　（しまりなし、炭化物・焼土粒含む）
10　にぶい黄褐色土　（しまりあり、炭化物・砂礫多量に含む）
11　黒褐色土　（しまりなし、炭化物多量に含む、旧表土）
12　明褐色砂礫土　（しまりあり、φ1cm の砂礫多量に含む、整地層、近世）
13　明黄褐色土　（しまりあり、砂礫含む、白色粘土粒がまだらに入る、整地層）
14　明黄褐色土　（しまりあり、砂礫微量に含む）
15　明褐色土　（しまりあり、炭化物含む）
16　暗褐色土　（しまりなし、砂礫・炭化物多量に含む）

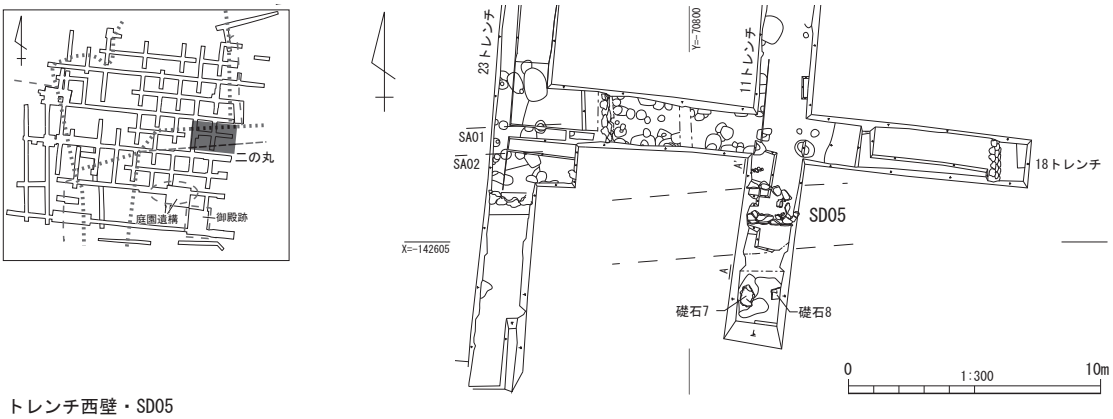
SD03 埋土

17　にぶい黄褐色土　（しまりあり、砂礫・炭化物含む）
18　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ15cm の礫含む）
19　暗褐色土　（しまりあり、φ3cm の礫多量に含む）
20　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ15cm の礫多量に含む）
21　灰黄褐色粘質土　（しまりあり、炭化物含む、φ5cm の礫多量に含む）
22　黒褐色粘質土　（しまりあり、炭化物・砂礫少量含む）

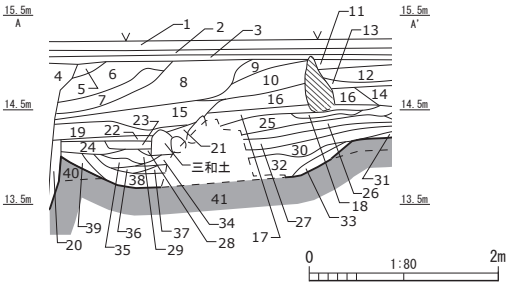
Ⅶ層　基盤層

23　明褐色粘質土　（しまりあり、砂礫微量に含む）

Fig.84　SD03詳細図



11 トレンチ西壁・SD05



Ⅰ層　現代

1　明褐色砂　（しまりなし）
2　黒褐色砂　（しまりなし、溶融スラグ含む）
3　にぶい黄橙色砂礫　（しまりなし、φ5cmの礫多量に含む）
4　暗褐色土　（しまりなし、φ15cmの礫含む、攪乱）
5　黄褐色土　（しまりなし、φ2cmの砂礫含む）
6　明黄褐色土　（しまりなし、φ3cmの砂礫多量に含む）
7　にぶい黄褐色土　（しまりなし、φ3cmの砂礫多量に含む、瓦含む）
8　黄褐色土　（しまりなし、φ3cmの砂礫多量に含む、瓦含む）
9　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む）
10　黄褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む）
11　褐灰色土　（しまりなし、φ2cmの砂礫多量に含む）
12　明赤褐色土　（しまりなし、φ3cmの砂礫多量に含む）
13　暗褐色土　（しまりなし、砂礫多量に含む）
14　暗褐色土　（しまりなし、φ3cmの砂礫含む）
15　黒褐色土　（しまりなし、瓦礫多量に含む）
16　暗褐色土　（しまりなし、φ15cmの礫含む）
17　暗褐色土　（しまりなし、砂礫含む）
18　明黄褐色砂礫土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む、整地層）

Ⅱ層　太平洋戦争前後

19　赤褐色土　（しまりなし、瓦礫多量に含む）

Ⅲ層　近代

20　黒褐色土　（しまりなし、砂礫含む、攪乱）
21　暗褐色土　（しまりなし、砂礫含む）
22　褐灰色土　しまりあり、砂礫多量に含む）
23　灰黄褐色土　（しまりあり、φ2cmの砂礫多量に含む）
24　褐灰色粘性土　（しまりあり、砂礫少量含む、戦前整地層）
25　黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
26　暗褐色土　（しまりなし、φ5cmの砂礫含む）
27　明褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む、整地層）
28　明黄褐色土　（しまりあり、砂礫多量に含む）
29　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む、黄褐色粘土塊含む）

中世・近世

30　黒褐色土　（しまりあり、砂礫・炭化物含む、中世堆積層）
31　にぶい黄褐色土（しまりあり、φ2cmの砂礫含む、中世堆積層）

SD05 埋土

32　黒褐色粘質土（しまりあり、砂礫含む）
33　黒褐色粘質土　（しまりあり、砂礫含む）
34　黒褐色粘質土　（しまりあり）
35　褐灰色粘質土　（しまりあり、砂礫少量含む）
36　褐灰色粘質土　（しまりあり、砂礫少量含む）
37　褐灰色粘質土　（しまりあり、φ15cmの礫含む）
38　褐灰色粘質土　（しまりあり、砂礫少量含む）

Ⅵ層　中世

39　褐色土　（しまりあり、砂礫含む）

Ⅶ層　基盤層

40　黄橙色粘質土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
41　明褐色粘質土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）

Fig.85　SD05詳細図

と考えられる地形改変を受けて削平されている。SD05の埋土は、礫を含む黒褐色および褐灰色粘質土層である。遺物の出土は認められなかった。

御城米蔵域内包含層等出土遺物　262は内耳鍋である。外面にススが付着し、内彎形内耳鍋に分類される（鈴木1996）。底部が一部欠損しているが、それ以外は残存している。263は段皿である。264は右巻きの三ツ巴紋軒丸瓦である。珠文は２個残っており、全体で11個と考えられる。265は軒平瓦である。圏線を持つことから、五葉紋３反転均整唐草紋軒平瓦と考えられる。

御城米蔵の特徴　今回の調査により、調査対象地北東部において、絵図に描かれているものと考えられる御城米蔵西堀跡（SD02）を確認し、御城米蔵のおおよその位置が判明した。SD02は、埋土や出土遺物から、江戸時代を通して堀が機能していたと推定できる。また、SD02とSD03の前後関係からSD02の構築は、SD03埋没後の16世紀後葉以降のことと捉えられる。また、御城米蔵の建物の検出はできなかったが、当該期の遺構を検出したことから、後世の地形改変を受けず、現在まで近世の遺構が遺存している状況が確認できた。

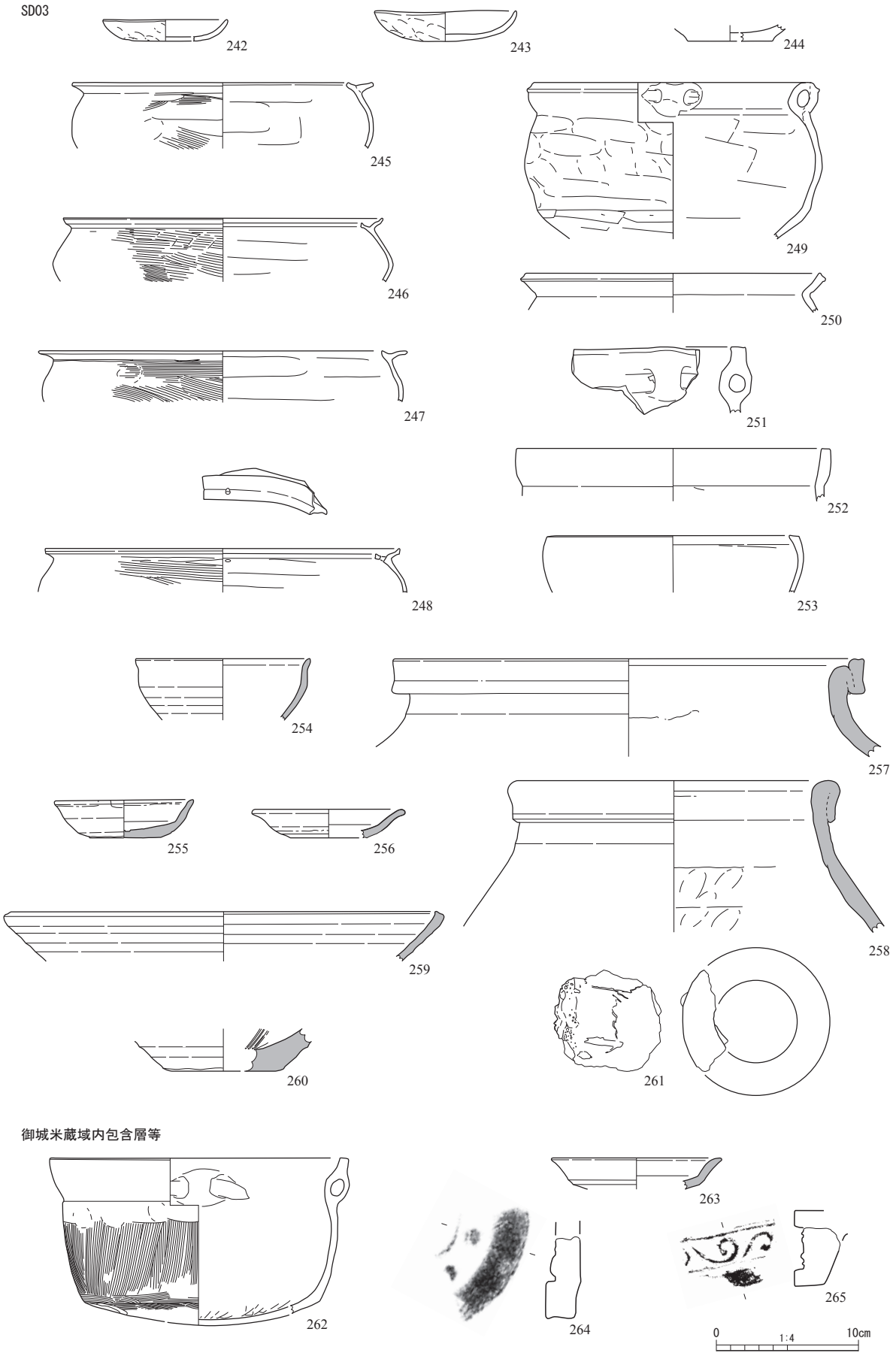


Fig.86　SD03・御城米蔵域内包含層等出土遺物

７　御城米蔵西の調査

（１）　調査の概要

御城米蔵西は調査対象地北東部から中央部北側を指す。南側に二の丸、東側に御城米蔵が所在する。江戸時代の絵図では何も描かれてないことが多い空間であるが、今回の調査において、瓦集積や土坑、小穴列等を検出し、御城米蔵西の特徴の一端が明らかになった。

（２）　検出遺構と出土遺物

瓦集積12(SX12)　瓦集積12は、20トレンチ中央で検出した。検出面は基盤層上面である。南半は

Fig.87　御城米蔵西の遺構全体図

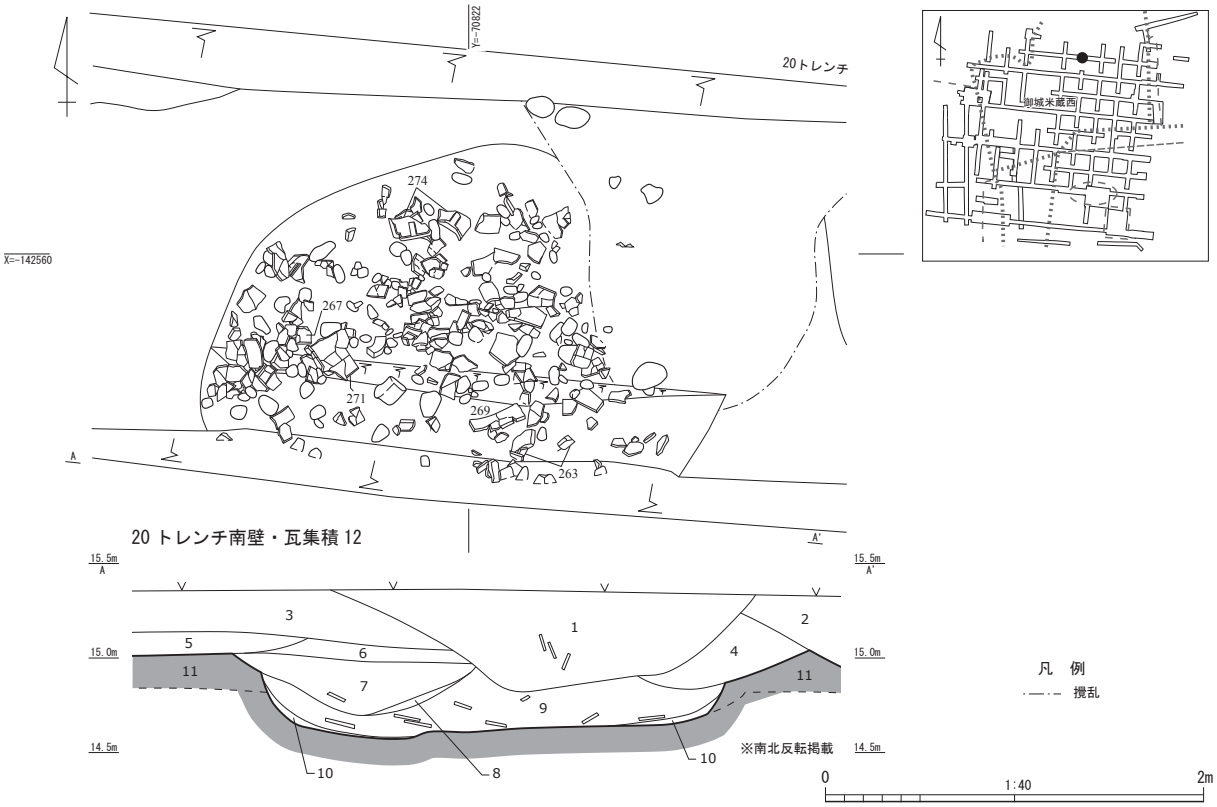
トレンチ外に延びる。検出した平面形状は南北方向1.9m、東西方向2.7mの円形を呈する。瓦集積東側は近代以降の攪乱により切られている。検出面からの深さは0.4mを測り、断面形状は皿形を呈する。埋土は拳大の礫を多く含む灰黄褐色土が主体となるが、掘り方の縁辺部には若干の自然堆積層が認められることから、掘り込みの形成時期と、瓦が廃棄される時期との間にわずかに時間差があったと考えられる。繋九目結紋鬼瓦等の主要な遺物に加え、遺構の南側にサブトレンチを設定し、サブトレンチから出土した遺物の取り上げも行った。繋九目結紋鬼瓦は瓦当面が下に向いた状態で出土した。瓦集積12の形成時期は、遺物の特徴から18世紀以降と考えられる。

瓦集積12(SX12)出土遺物　瓦集積12からは丸瓦や平瓦に加え、繋九目結紋鬼瓦やなまこ瓦などの道具瓦も出土した。ここでは特徴的な遺物を抽出し、図示した。

266は美濃産の筒形碗である。口径は8.9cmに復元でき、内外面に錆釉が施されている。美濃Ⅱ期(17世紀中葉)に位置づけられる。

267は丸瓦である。凹面にはコビキB技法、粗い布目、吊紐痕、棒状刺突痕が認められる。側面端部は２回面取りが行われる。268 ～ 273は平瓦である。268・270は凸面にハナレ砂が認められる。269・271は凸面にハケ調整が認められる。272は調整が施されず、凸面にハナレ砂が認められる。273は凹面には板ナデ後ミガキが施され、凸面に板ナデが施されている。

274は繋九目結紋が施された鬼瓦である。残存幅21.1cm、高さ23.7cm、厚さ7.0cmを測る。焼成は良好で、硬質である。頭右側と胴が欠損している。瓦当面は、頭の縁が平面的に造られている。瓦



1　黒褐色土　(しまりなし、コンクリート・瓦多量に含む、攪乱)
2　暗褐色土　(しまりなし、砕石・ビニール含む、攪乱)
3　黒褐色土　(しまりなし、煉瓦・コンクリート含む、攪乱)
4　灰黄褐色土　(しまりなし、φ3cmの砂礫多量に含む、瓦含む)
5　黒褐色土　(しまりなし、煉瓦・コンクリート含む、攪乱)
6　灰黄褐色土　(しまりなし、φ5cmの砂多量に含む、瓦含む)
7　にぶい黄褐色土　(しまりなし、φ10cmの砂礫多量に含む、角礫含む)
8　灰黄褐色シルト　(しまりあり、φ5cmの砂礫含む)
9　灰黄褐色土　(しまりあり、φ15cmの礫多量に含む、瓦(繋九目結紋鬼瓦・平瓦等) 多量に含む、瓦集積12)
10　褐灰色土　(しまりあり、φ1cmの砂礫含む)
11　明黄褐色砂礫　(しまりあり、φ5cmの砂礫多量に含む、基盤層)

Fig.88　瓦集積12(SX12)詳細図

Fig.89　瓦集積12（SX12）出土遺物（１）

当面の繋九目結紋は、９つの菱形紋のうち、一部欠損しているがほぼすべて残存している。瓦当面の地紋は、円形の浮文で周囲に四角形の刺突紋であり、原体は１辺0.5cmの角材の中央に直径0.4cmの円を彫ったものである。繋九目結紋の間を埋めるように地紋が施されている。規則性はない。裏面は、窪みを持つ裏なし型で造られており、ハケ調整が認識できる。裏面中央に縦に入った仕切りの側面中央付近に穴が開けられている。一部欠損しているが、幅5.6cm、推定高2cmの不定楕円形である。鬼瓦を固定する際に銅線を結ぶための龍頭と考えられる。鬼瓦下端は胴が欠損しているため形状が不明である。275は鬼瓦の破片である。276 ～ 278はなまこ瓦である。277と278の小口には釘穴が開けられている。

瓦集積13（SX05）　瓦集積13は、5トレンチ御城米蔵西の東側で検出した。検出した規模は南北1.8m、東西3.4mを測る。調査区の南壁沿いにサブトレンチを設定し、基盤層が北西から南東にかけて緩やかに傾斜するところに瓦が堆積している状況を確認した。地形が高い北西から折り重なるように軒瓦や平瓦、丸瓦が堆積している。出土状況などから、人為的もしくは地震や自然災害等での建造物の倒壊による瓦集積形成の可能性も考えられる。

瓦集積13の出土遺物は、桔梗紋軒丸瓦や重線唐草紋軒平瓦、出土陶器など、いずれも17世紀後半を中心としたものである。

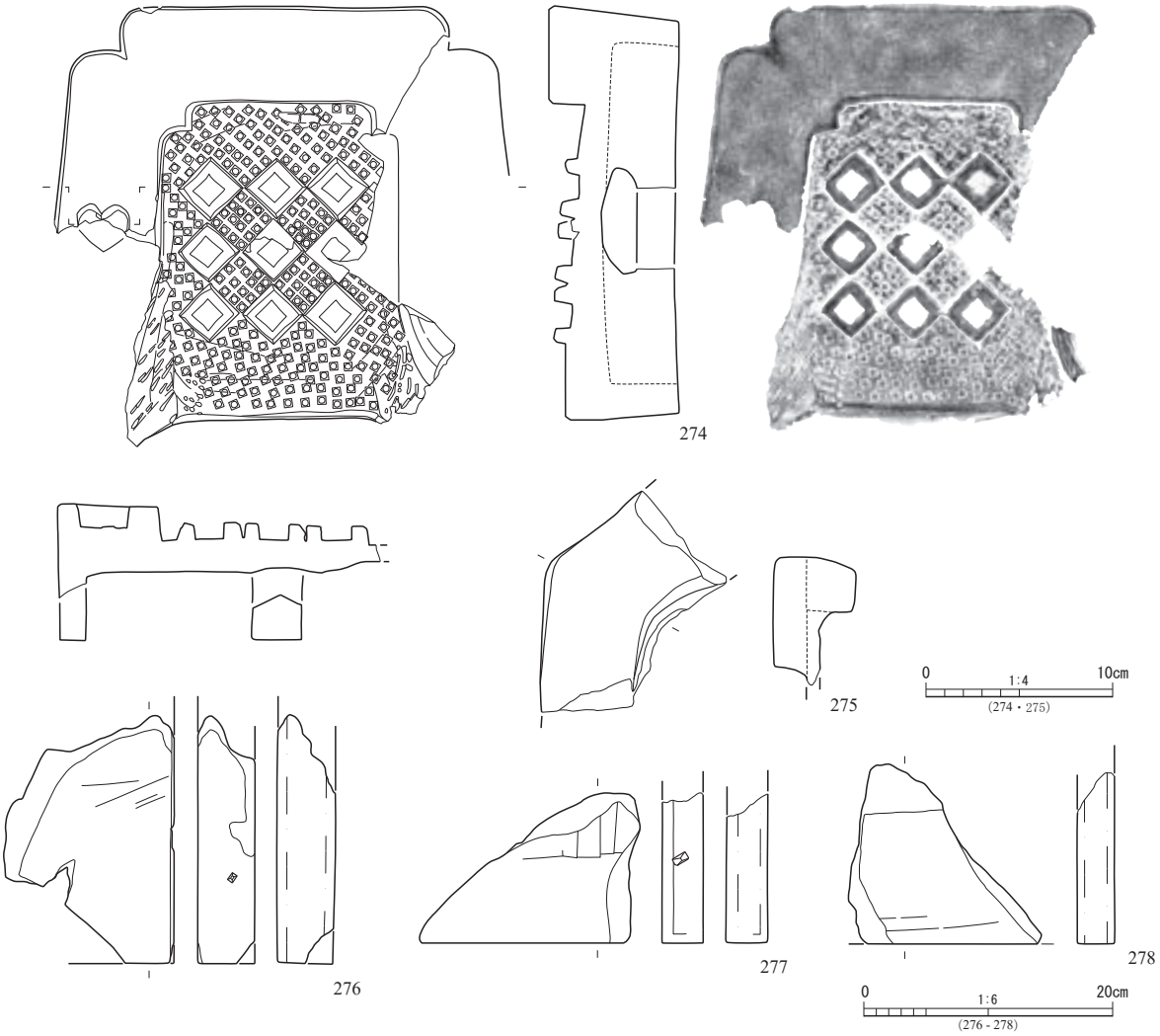
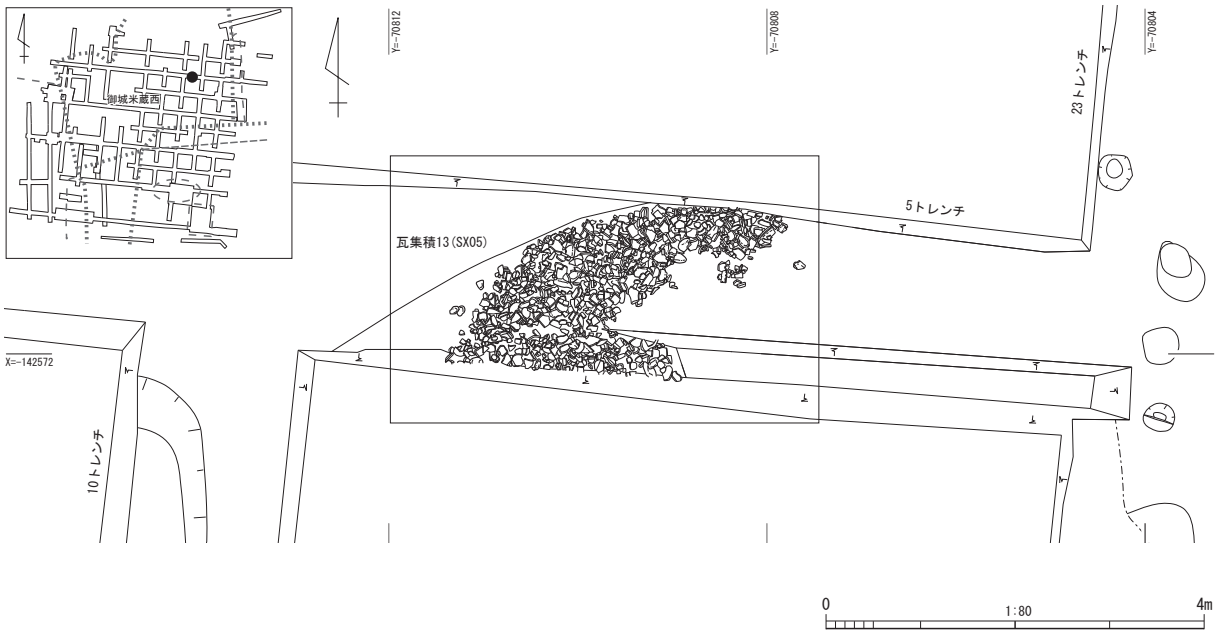
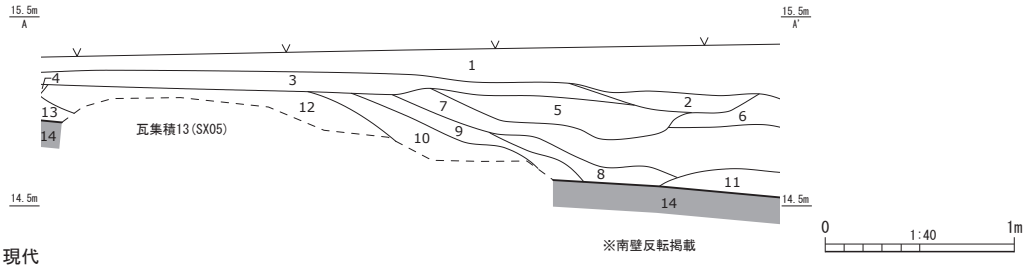


Fig.90　瓦集積12（SX12）出土遺物（２）



5 トレンチ南壁



※南壁反転掲載

Ⅰ層　現代

1 にぶい黄褐色土　（しまりなし、φ10cm の礫多量に含む、表土）
2 暗褐色土　（しまりなし、コンクリート片・瓦片含む、攪乱）
3 黒褐色土　（しまりなし、砂礫多量に含む、瓦（赤やけ）片含む）
4 褐色土　（しまりなし、砂礫多量に含む、瓦片含む、攪乱）
5 黄褐色土　（しまりあり、砂礫多量に含む）
6 にぶい黄橙色土　（しまりあり、砂礫多量に含む）

Ⅴ層　近世

7 にぶい黄橙色土　（しまりあり、砂礫多量に含む）
8 灰黄褐色シルト　（しまりあり、鉄分粒含む）
9 明黄褐色粘質土　（しまりあり、瓦細片多量に含む）
10 明黄褐色粘質土　（しまりあり、瓦片少量含む）
11 にぶい黄褐色粘質土　（しまりあり、瓦片多量に含む）
12 明黄褐色粘質土　（しまりあり、瓦・φ15cm の礫多量に含む、瓦集積13）
13 にぶい黄褐色土　（しまりあり、砂礫多量に含む）

Ⅶ層　基盤層

14 黄褐色粘質土　（しまりあり、砂礫含む）

Fig.91　瓦集積13（SX05）詳細図

瓦集積14(SX10)　瓦集積14は、19トレンチ中央付近で検出した。検出した規模は東西1.2mで南北はトレンチ外に延びる。瓦は西に向かって緩やかに傾斜する地形に堆積している。出土した遺物は平瓦が主体を成し、常滑産の甕も認められる。遺構の詳細な年代は不明である。

瓦集積13(SX05)・瓦集積14(SX10)出土遺物　279 ～ 283は瓦集積13から、284は瓦集積14から出土した遺物である。瓦集積13からは軒丸瓦や軒平瓦といった瓦のほかに、陶器の鉄絵鉢等が出土した。また、瓦集積14からは瓦に加え陶器が出土した。特徴的な遺物を抽出し図示した。

279は瀬戸産もしくは美濃産の鉄絵鉢である。年代は登窯第１段階第３・４小期に位置づけられることから、17世紀後葉以降と考えられる。

280は桔梗紋軒丸瓦である。太田氏の家紋瓦で、桔梗の花弁が立体的に表現されている。281は軒平瓦である。大半が欠損しているため詳細は不明であるが、重線の唐草紋と考えられる。282は丸瓦である。凹面には布目痕が認められる。側面端部には面取りが２回行われる。283は平瓦である。下部側面に別の粘土片が付着している。284は常滑産の鉢と考えられる破片である。口径は39.6cmに復元できる。

瓦集積15(SX09)　瓦集積15は、11トレンチと19トレンチの交点付近で検出した。形成時期は南北で２時期に分けられる。南側の瓦集積の規模は南北1.4m、東西は1.2mを測る。近世土層を掘り込んで形成されている。北側の瓦集積に切られる。北側の瓦集積の規模は南北2.2m、東西1.4mを測る。南側と同じく近世土層を掘り込んでいるが、南側を覆う土層を掘り込んで形成していることから、南北で時期差があると考えられる。遺構の年代は、繋九目結紋鬼瓦が出土していることから、18世紀以降と考えられる。

瓦集積16(SX11)　瓦集積16は、瓦集積15の南西に隣接して検出した。検出した規模は南北1.6m、東西2.5mを測る。近世土層を掘り込んで形成されているが、東側の立ち上がりは確認できなかった。検出した深さは0.4mである。平坦な底部を持ち、西側では直線的に立ち上がる。瓦に混じり拳大の円礫も多く検出した。また、径20cm程度の円形の鉄塊が瓦に混じって出土している。軒平瓦や目板瓦が出土したが、遺構の年代が分かる遺物は認められなかった。

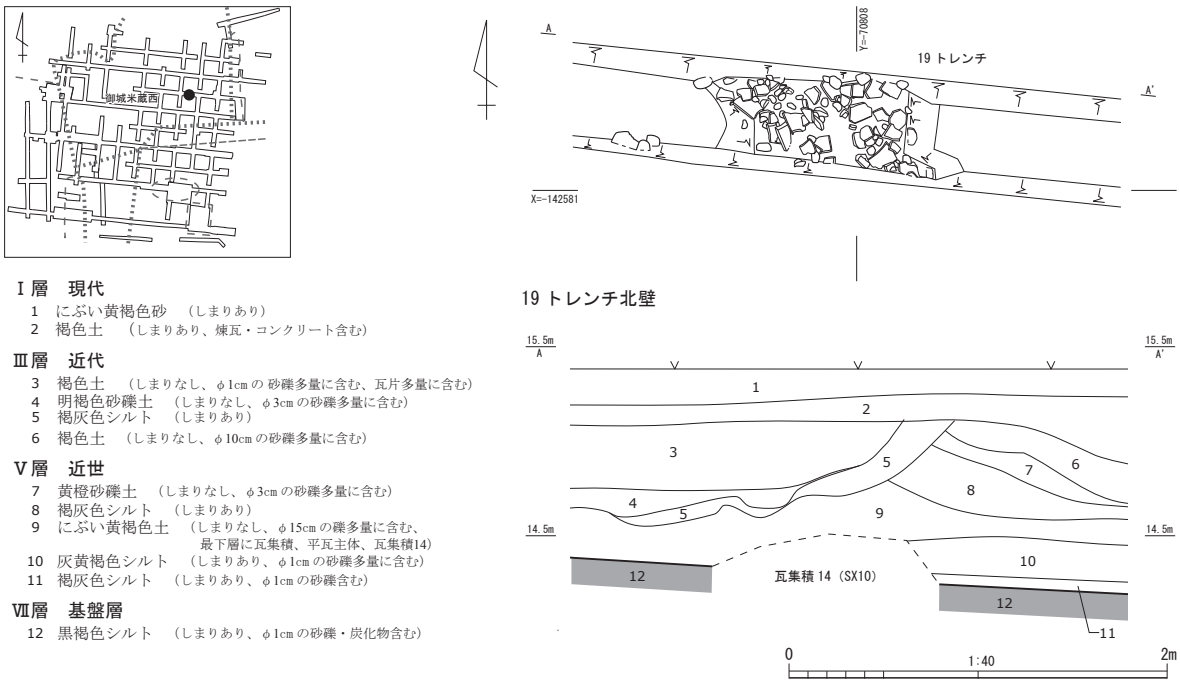


Fig.92　瓦集積14(SX10)詳細図

瓦集積15（SX09）出土遺物　瓦集積15からは軒平瓦や鬼瓦といった瓦のほかに、火鉢等も出土した。特徴的な遺物を抽出し、図化した。

285は火鉢である。江戸時代の所産ではないと考えられる。286は軒平瓦である。瓦当面には五葉紋２反転均整唐草紋が施されている。瓦の右端が切縮められている。287・288は平瓦である。287は凸面にハナレ砂が認められる。289は目板瓦で円形の釘穴が１箇所開けられている。290は隅瓦である。桟部に円形の釘穴が斜めに１箇所開けられている。裏面にはハナレ砂が認められる。

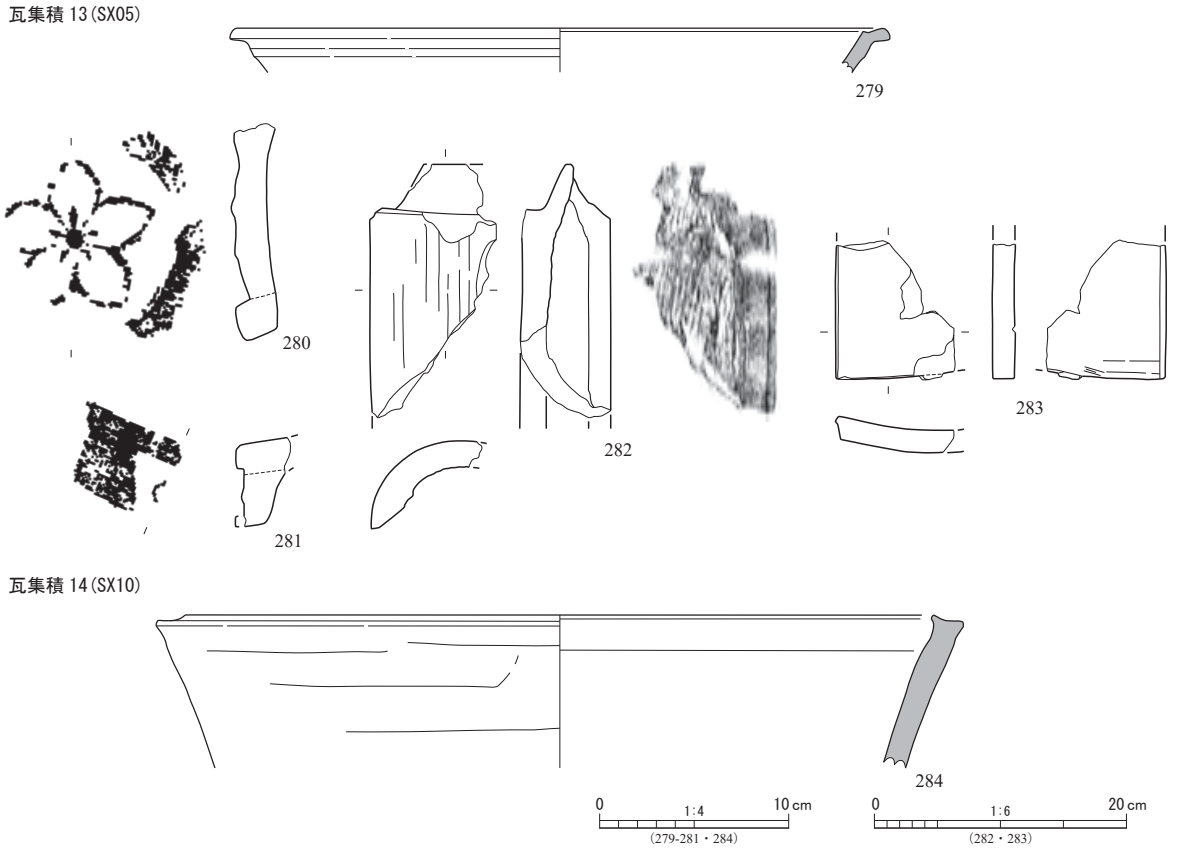
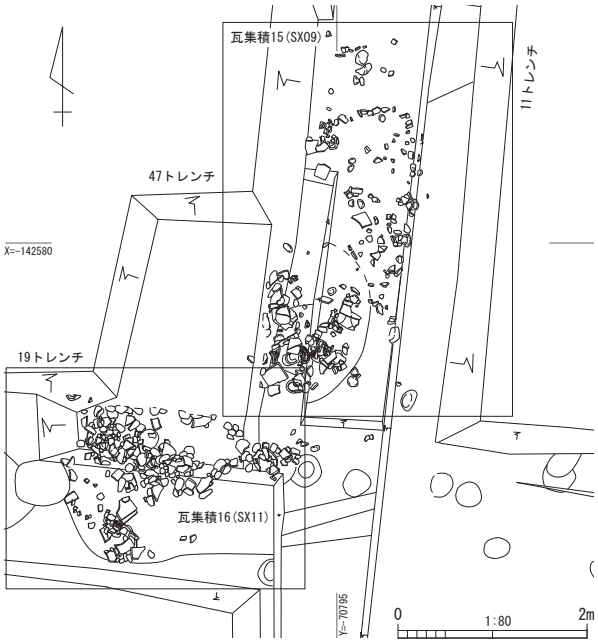
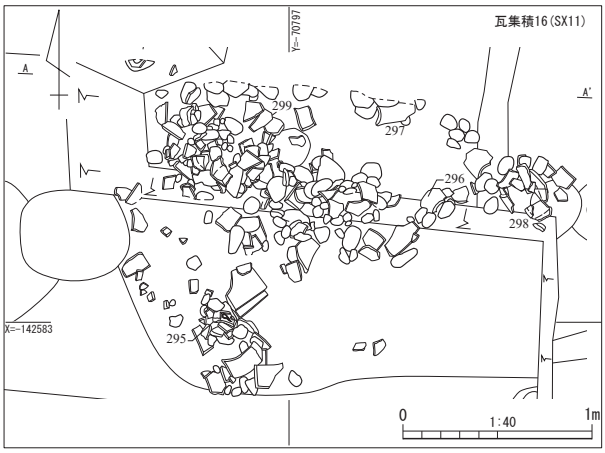


Fig.93　瓦集積13（SX05）・瓦集積14（SX10）出土遺物

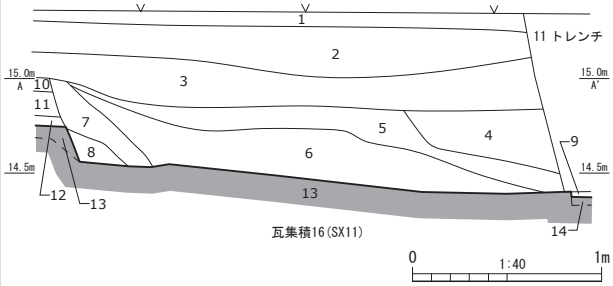
Fig.94　瓦集積12（SX12）検出状況（北東から）

Fig.95　瓦集積13（SX05）検出状況（北東から）





19 トレンチ北壁

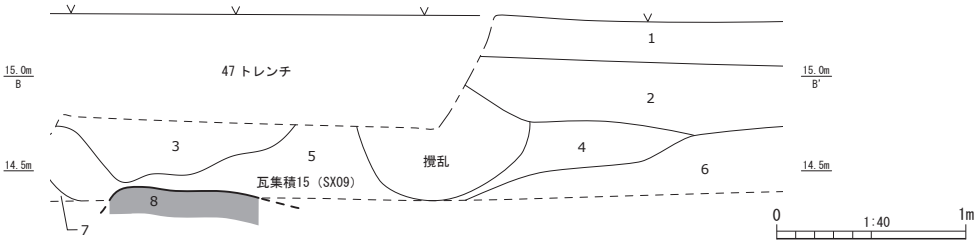


Ⅰ層　現代
1　にぶい黄褐色砂　（しまりあり）
2　褐色土　（しまりあり、煉瓦・コンクリート含む）
3　褐色土　（しまりあり、φ15cmの礫多量に含む）

Ⅴ層　近世
4　灰黄褐色シルト　（しまりあり、砂礫微量に含む）
5　灰黄褐色シルト　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
6　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ15cmの礫・瓦多量に含む、瓦集積16）
7　褐色土　（しまりあり、φ15cmの礫・瓦微量に含む、瓦集積16）
8　黒褐色土　（しまりあり、砂礫・炭化物含む）
9　暗褐色土　（しまりあり、φ1cm 砂礫・瓦含む）
10　黄橙色粘土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
11　明褐色砂礫土　（しまりあり、φ15cmの砂礫多量に含む）
12　黒褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫・炭化物多量に含む）

Ⅶ層　基盤層
13　明褐色粘質土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
14　灰黄褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫・炭化物含む）

47 トレンチ西壁



Ⅰ層　現代
1　褐色土　（しまり中、φ5～10 cmの礫多量に含む、表土）
2　黄褐色土　（しまりなし、φ5～10 cmの礫多量に含む）
3　暗褐色土　（しまりなし、φ5～10 cmの礫多量に含む　瓦少量含む、撹乱）

Ⅴ層　近世
4　暗褐色土　（しまり中、炭化物多量に含む）
5　暗褐色土　（しまり中、φ5～10 cmの礫極少量含む、瓦多量に含む、φ0.5 cmの炭化物少量含む、瓦集積15）
6　褐色土　（しまり中、φ5 ～ 10 cmの礫極少量含む）
7　にぶい黄褐色土　（しまりなし、炭化物・砂礫多量に含む）

Ⅶ層　基盤層
8　赤褐色土　（しまり中）

Fig.96　瓦集積15（SX09）・瓦集積16（SX11）詳細図

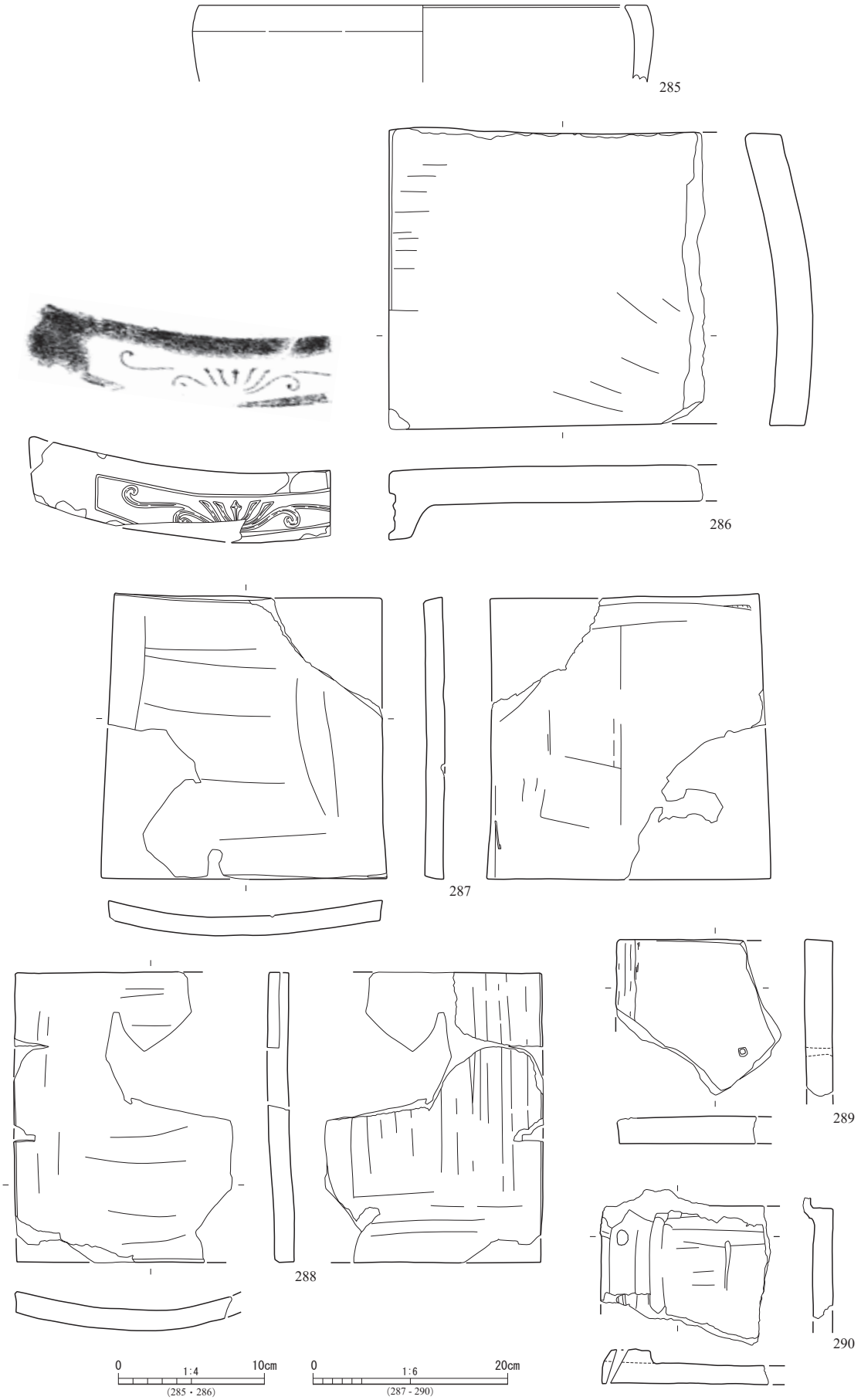


Fig.97　瓦集積15（SX09）出土遺物（１）

291 は繋九目結紋が施された鬼瓦である。幅 51.7cm、高さ 19.1cm、厚さ 6.0cm を測る。瓦当面は、頭の縁が平面的に造られ、胴は波紋で造られている。頭の頂部は欠損しているが、同じ形の鬼瓦である 292 からすると、平坦な形に復元できる。頭両端の形状から丸張形と考えられる。頭部と胴部の境には猪目紋が左右に施されている。胴は左側の先端が一部欠損しているが、右側はほぼ残存している。鬼瓦の下端は若干の彎曲が認められるものの、ほぼ直線的に造られている。瓦当面は、本庄松平氏の家紋である繋九目結紋があしらわれている。９つの目結紋のうち、４つが残存し、他は欠損している。家紋の施紋箇所には地紋として、４条の波状沈線紋を最上部と最下部へ横方向に施したのち、竹管文が施されている。施文の状況から、家紋を造ったのちに波状文と竹管文を施したと考えられる。裏面は、窪みを持つ裏なし型で造られている。裏面中央には縦方向に幅 3.8cm の仕切りが付けられ、その側面中央に穴が開けられている。穴の一部以外は欠損しており、全体形状は不明である。この穴は鬼瓦を固定する際に銅線を結ぶための龍頭と考えられる。

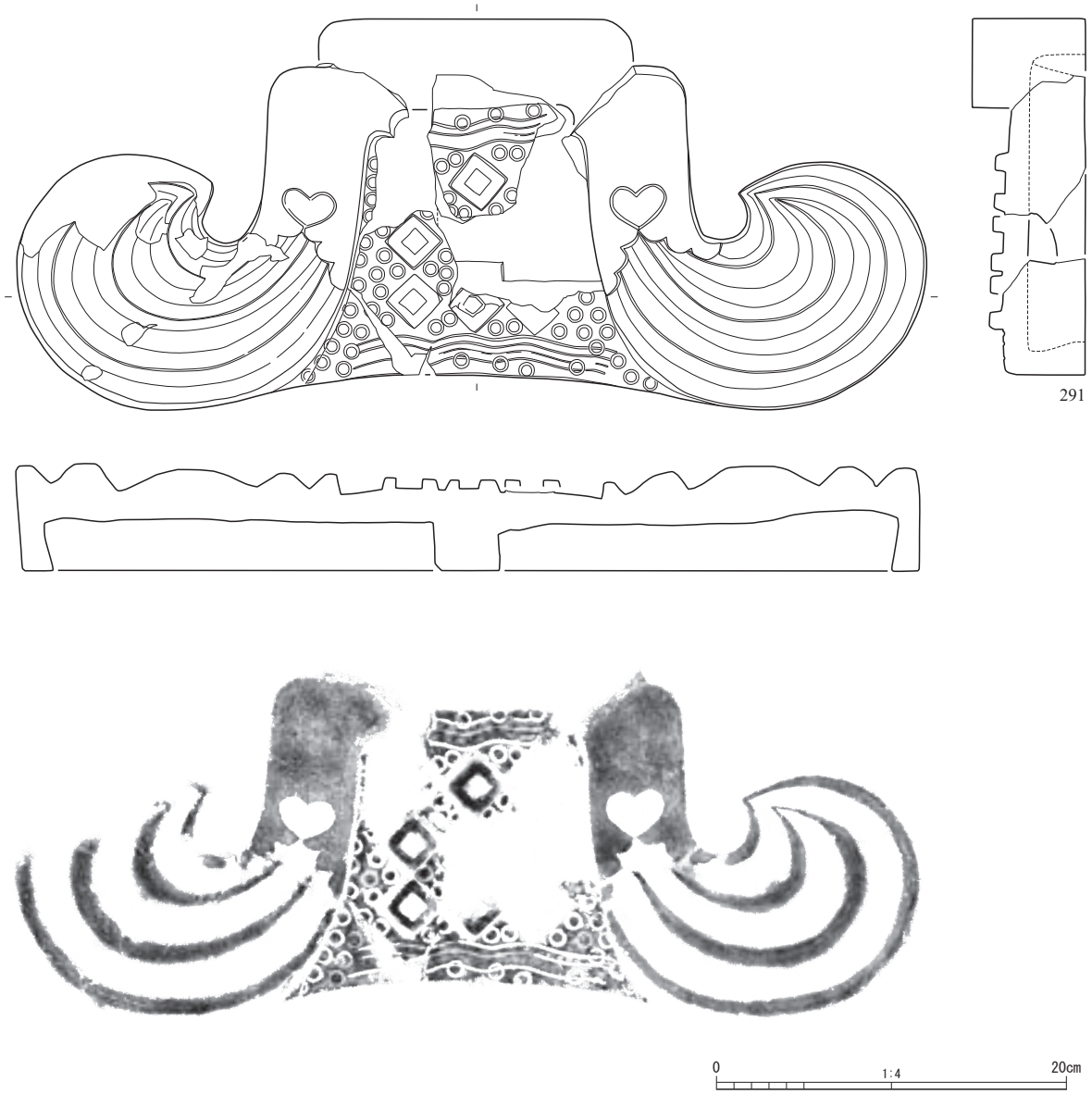


Fig.98　瓦集積15（SX09）出土遺物（２）

292 も繋九目結紋が施された鬼瓦である。幅 43.4cm、高さ 23.0cm、厚さ 6.5cm を測る。瓦当面の造りは 291 と同様である。頭の頂部は一部欠損しているが、残存部から頂部は平坦面であることが推定でき、丸張形も残存部から確認できる。猪目紋は、右は上部を残しほぼ欠損しているが、291 と同様に両側にあったと考えられる。胴は左側の３分の２が欠損し、右側も胴の付け根部が欠損している。鬼瓦の下端は 291 ほどではないが若干の彎曲が認められるものの、ほぼ直線的に造られている。瓦当面の繋九目結紋は、９つの菱形紋のうち、７つが残存し、他は欠損している。４条の波状文を最上部と最下部に施したのち、竹管文が施されている。施文の状況から、施文の順序は 291 と同様に家紋を施したのちに波状文と竹管文を施している。裏面は、裏なし型で造られている。裏面中央には縦方向に幅 3.8cm の仕切りが付けられ、その側面中央に龍頭と考えられる幅 3.0cm、高さ 2.4cm の不定形な穴が開けられている。

この 291・292 の鬼瓦は、下部が直線であるため、降棟や隅棟、寄棟屋根の大棟の端に使用されたと想定できる。

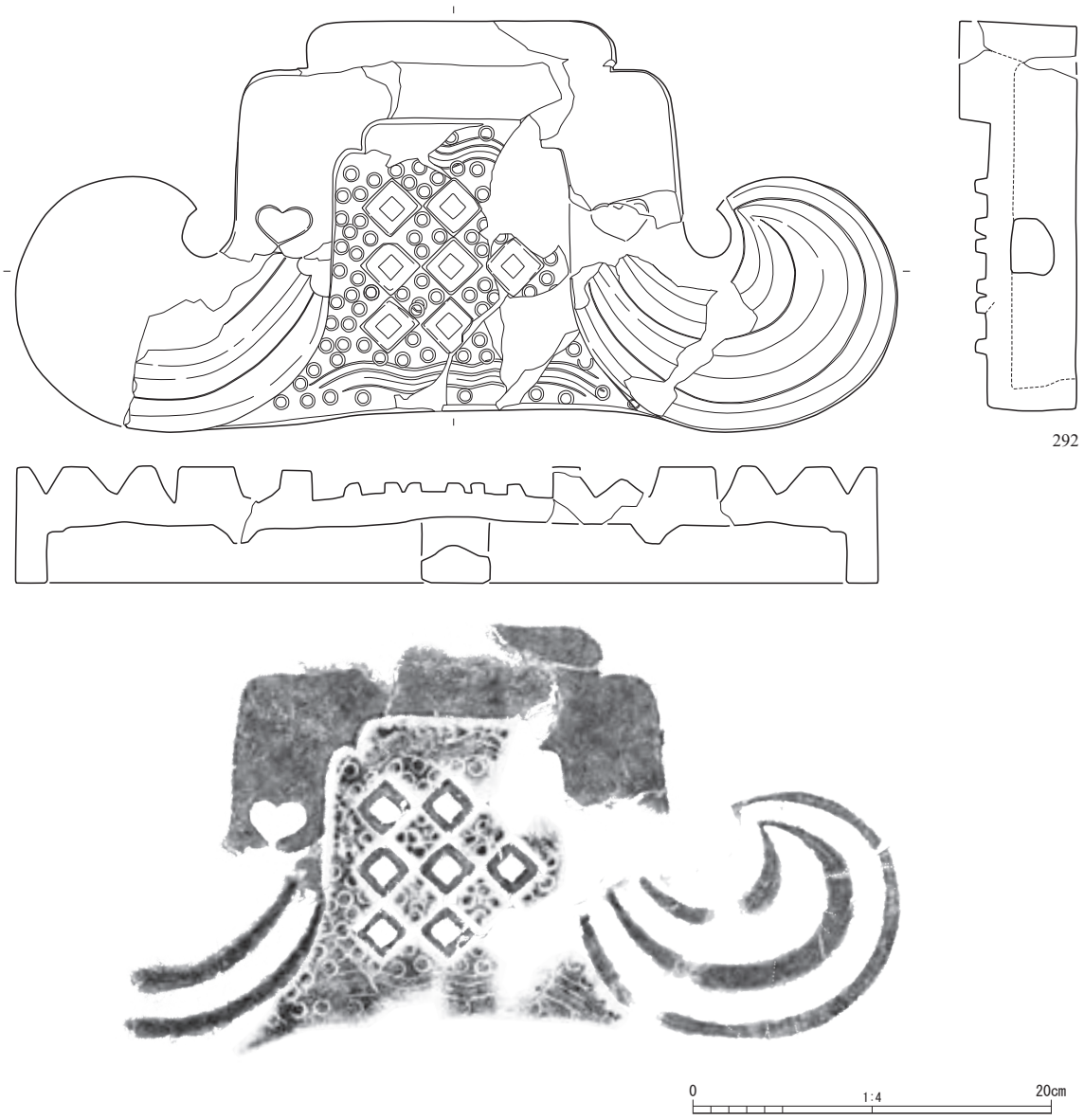


Fig.99　瓦集積15（SX09）出土遺物（３）

瓦集積16（SX11）出土遺物　293は陶器の丸皿である。口径は9.5cmに復元できる。底部も含め内外面に灰釉が掛かっている。低く扁平な高台がつく。瀬戸美濃産と考えられ、大窯第３段階後半に位置づけられる。294は美濃産の向付である。型押しでつくられている。内外面に長石釉が掛けられ、底部は露胎である。美濃IIIa期に位置づけられる。

295は軒平瓦である。中心飾りは確認できないが、巻きの弱い重線の唐草紋が２つ認められることから、三葉紋２反転均整唐草紋と考えられる。296 ～ 298は丸瓦である。296は凸面に縄目タタキの痕跡が認められ、タタキの後に縦方向のミガキが施されている。凹面はコビキＡ技法、細かい布目が認められる。側面端部は２回面取りが行われる。297の凸面は縦方向のミガキが認められる。凹面にはコビキＢ技法、粗い布目、袋とじ痕が認められる。側面端部は面取りが１回行われる。298の凸面は縦方向のミガキが認められる。凹面は粗い布目と棒状刺突痕が認められる。側面端部の面取りは２回行われる。299・300は目板瓦である。299は円形の釘穴が１箇所認められる。右側に桟の立ち上がりが確認できる。釘穴の位置から、目板瓦上部に２箇所目釘穴があけられていたと考えられる。300も円形の目釘穴が１箇所認められる。

瓦集積17（SX15）　瓦集積17は、23トレンチ中央で検出した。削平されたSD03の北側肩部の上に、南から北に向かって土が堆積している。その中で、瓦を含む土層が堆積している。SD03が埋没し

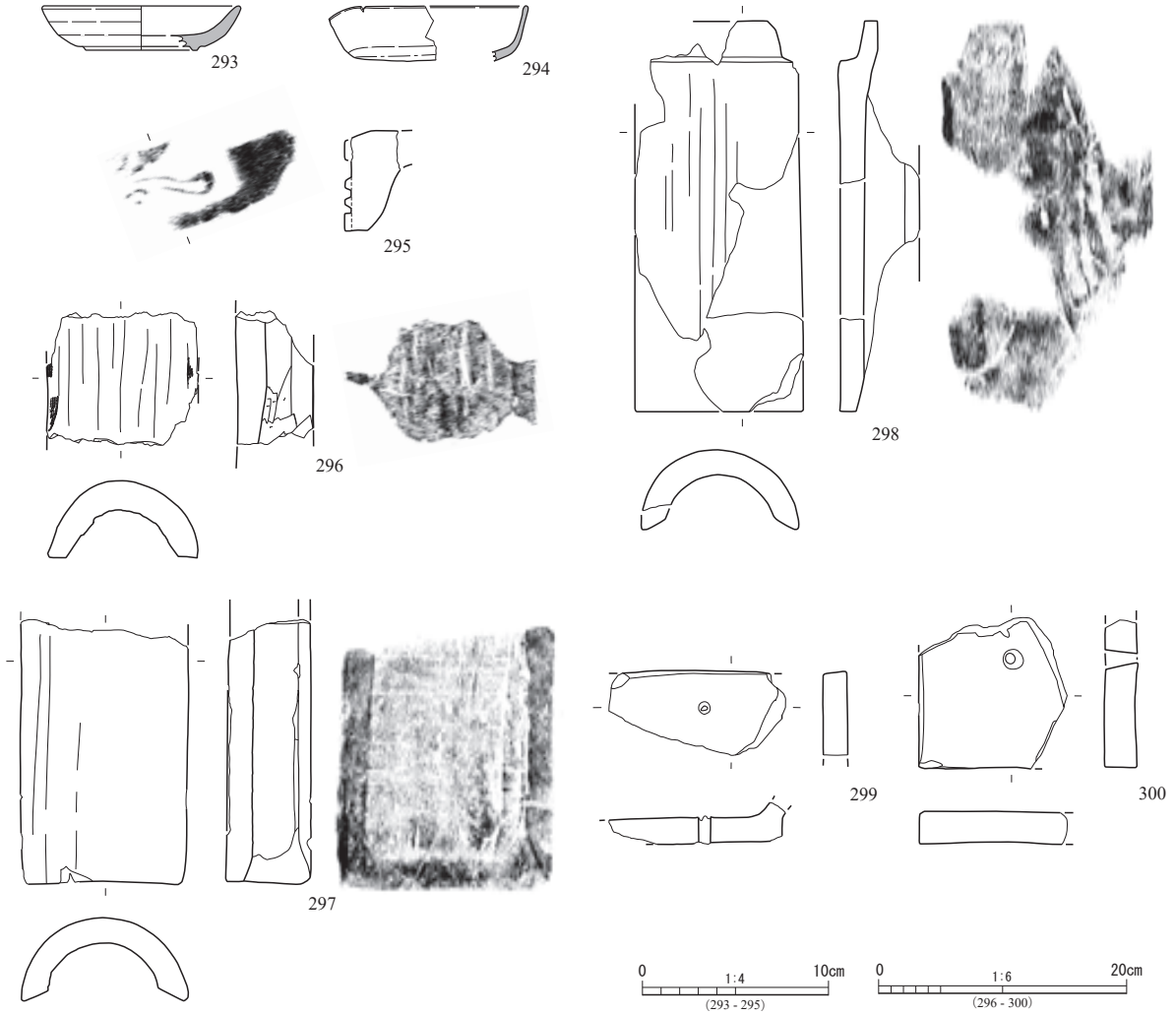
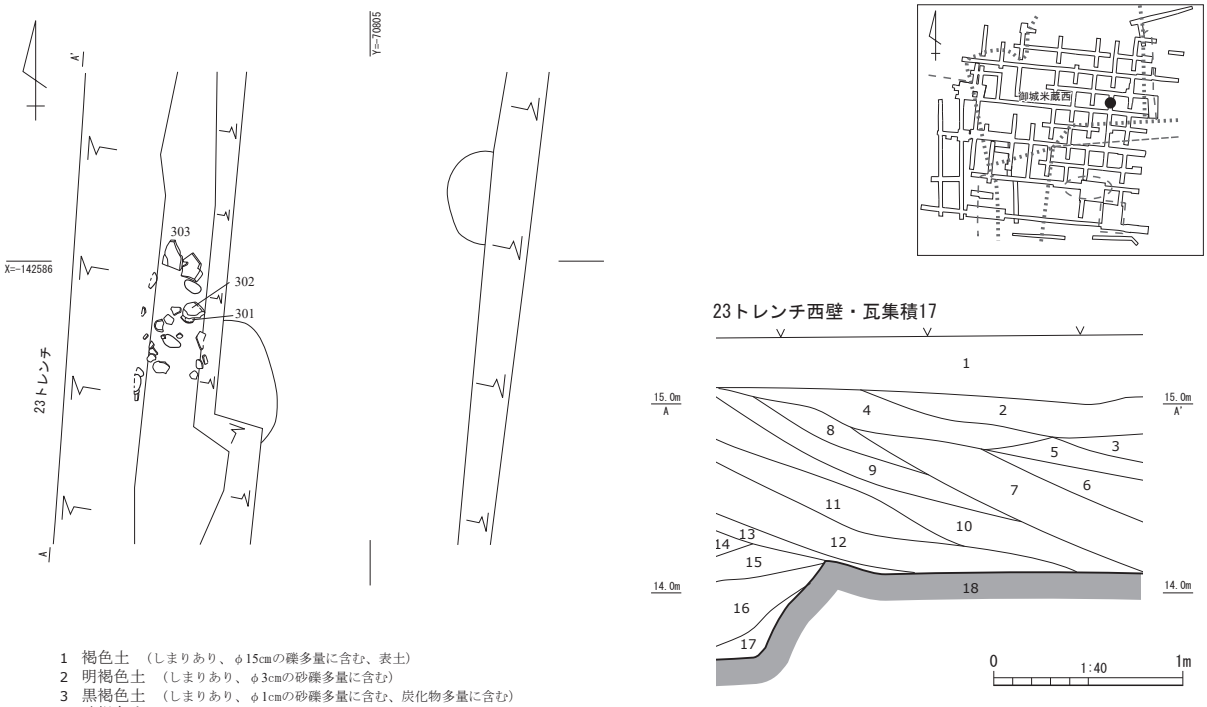


Fig.100　瓦集積16（SX11）出土遺物

た江戸時代以降に、SD03の北側肩部が削られ、その後堆積した土層と考えられる。検出した規模は南北0.7m、東西0.4mを測る小規模な瓦集積である。瓦集積は基盤層直上で検出した。

瓦集積を検出した12層を含む10 ～ 12層中では、他の土層に比べて瓦が多く出土した。江戸時代以降にSD03とその周辺において削平を伴う造成が行われ、二次的に形成された瓦集積とみられる。遺構の形成時期は、桔梗紋軒丸瓦が出土したことから、17世紀中葉以降と考えられる。

瓦集積17(SX15)出土遺物　301は桔梗紋軒丸瓦である。桔梗の花弁が立体的に表現されている。瓦当面に離型剤(砂)が認められる。太田氏在城期の17世紀後葉の所産と考えられる。302は丸瓦である。凹面には吊紐痕と棒状刺突痕が認められる。側面端部は２回面取りが行われる。凸面は縦方向のミガキが施されている。303は平瓦である。凹面にハケ調整が認められる。



1　褐色土　(しまりあり、φ15cmの礫多量に含む、表土)
2　明褐色土　(しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む)
3　黒褐色土　(しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む、炭化物多量に含む)
4　暗褐色土　(しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む、炭化物多量に含む、コンクリート片含む)
5　黒褐色土　(しまりあり、φ1cmの砂礫・瓦・炭化物含む、焼土粒(赤褐色)多量に含む)
6　暗褐色土　(しまりあり、砂礫・炭化物含む)
7　褐灰色土　(しまりあり、φ3cmの砂礫含む)
8　にぶい黄褐色土　(しまりあり、φ5cmの砂礫含む)
9　暗褐色土　(しまりあり、φ10cmの砂礫多量に含む)
10　褐色土　(しまりあり、φ5cmの砂礫含む、瓦多量に含む、瓦集積17)
11　褐色土　(しまりあり、φ10cmの砂礫・瓦多量に含む、瓦集積17)
12　暗褐色土　(しまりあり、φ15cmの礫・瓦多量に含む、瓦集積17)
13　褐灰色シルト　(しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む)
14　赤褐色土　(しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む、SD03)
15　にぶい黄褐色土　(しまりあり、φ3cmの砂礫多量に含む、SD03)
16　黒褐色土　(しまりあり、φ10cmの砂礫多量に含む、SD03)
17　灰黄褐色粘質土　(しまりあり、砂礫微量に含む、SD03)
18　明褐色土　(しまりあり、φ5cmの砂礫多量に含む)

Fig.101　瓦集積17(SX15)詳細図

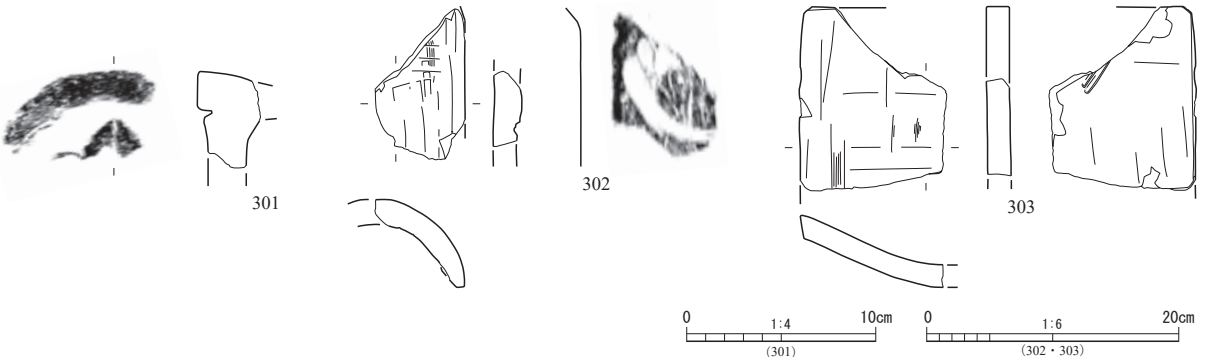


Fig.102　瓦集積17(SX15)出土遺物

瓦集積18(SX04)　瓦集積18は、4トレンチ東側で検出した。掘り込みは確認できなかった。検出した規模は南北1.6m、東西3.6mを測る。南西から北東方向にかけて堆積する。遺構の年代は登窯第３段階第８小期の土瓶が出土したことから、江戸時代後期以降と考えられる。

瓦集積18(SX04)出土遺物　304は登窯第３段階第８小期に位置づけられる土瓶である。濾し穴は３箇所つくられている。江戸時代後期に位置づけられる。

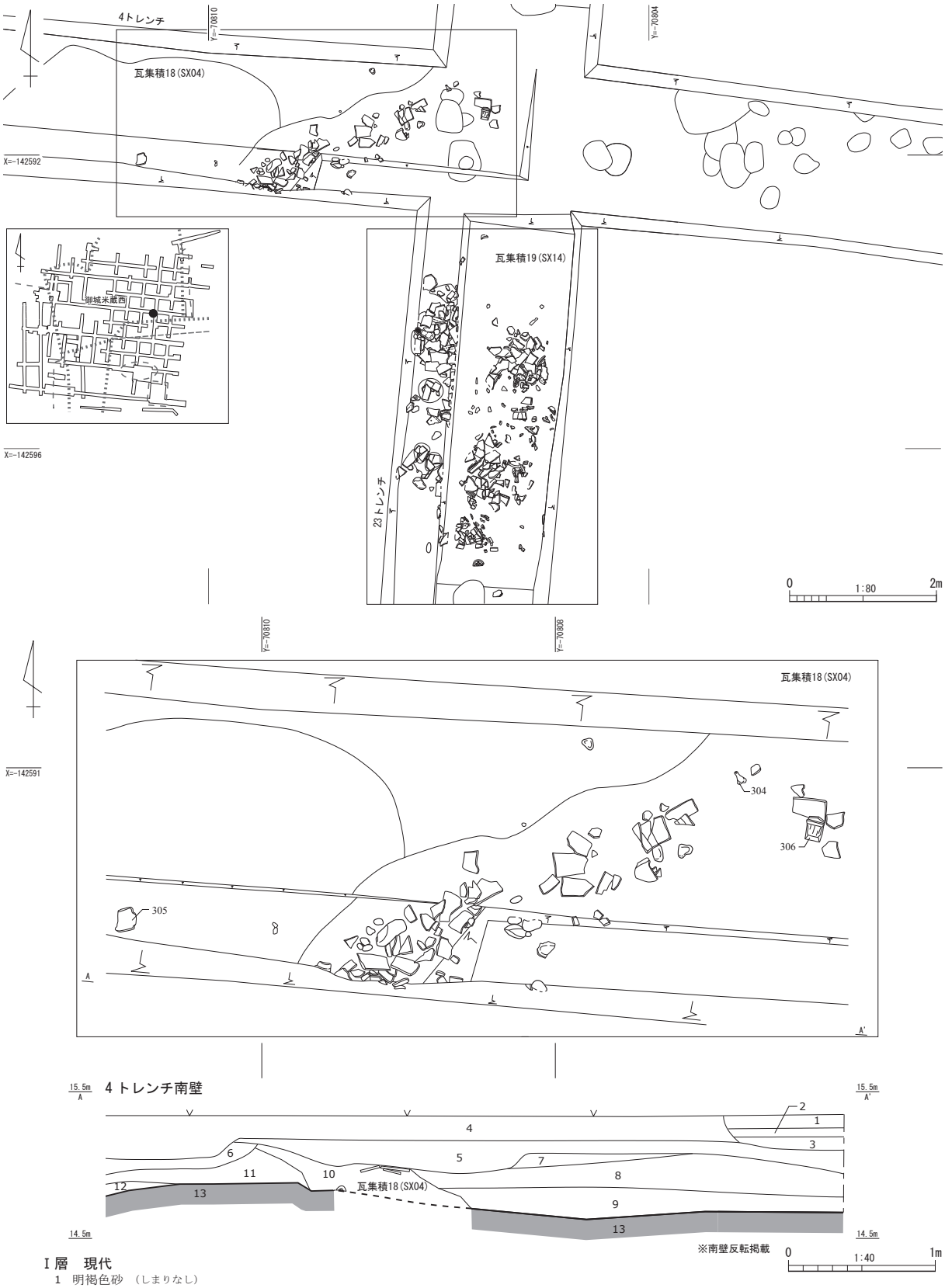
305・306は丸瓦である。305は凹面に細かい布目と棒状刺突痕が認められる。側面端部は２回面取りが行われる。306は凹面にコビキＢ技法、細かい布目が認められる。側面端部は面取りが２回行われる。307は割り痕が認められる熨斗瓦である。308は斜め置きに作られたなまこ瓦である。小口にハナレ砂が認められる。

瓦集積19(SX14)　瓦集積19は、23トレンチ中央付近で検出した。検出した範囲は南北5.0m、東西2.2mを測り、明確な掘り込みは確認できなかった。軒桟瓦や目板瓦を中心とした瓦集積で、繋九目結紋軒丸瓦が含まれていることから、遺構の形成時期は18世紀以降と考えられる。

瓦集積19(SX14)出土遺物　309はロクロ成形のかわらけである。310は灰釉陶器の碗である。311は山茶碗の碗である。312は天目茶碗である。大窯第４段階後半に位置づけられる。313は鉄絵鉢である。314は近代の瀬戸美濃産の白磁の型打ち皿である。見込みに陰刻が施されている。315は三ツ巴紋軒丸瓦である。珠文は１個残っているが、欠損部分が大きく、珠文の全体数や三ツ巴紋の巻きの方向は不明である。316は繋九目結紋軒丸瓦である。瓦当の直径は14.0cmを測る。家紋が厚く、丸みを帯びている。317は三葉紋２反転均整唐草紋軒平瓦である。唐草の巻きが弱く重線で表現されている。318は中心飾りは不明だが、残存している文様から、菊紋３反転均整唐草紋の可能性が考えられる。唐草はすべて接している。319は右巻きの三ツ巴紋軒桟瓦である。子巴のみ残存している。320・321は軒桟瓦の垂れ破片である。320は菊紋唐草紋が施されている。322 ～ 325は丸瓦である。322･323は凹面にコビキＢ技法、粗い布目が認められる。側面端部は面取りが２回行われる。焼成のムラと扁平化が認められる。324は凸面に銀化が認められる。凹面にはコビキＢ技法、細かい布目、吊紐痕が認められる。側面端部は面取りが２回行われる。また、焼成にムラがある。325は凹面に粗い布目、ユビナデ、打欠き痕が認められる。側面端部の面取りは２回行われる。扁平化が認められる。326 ～ 329は桟瓦である。326・327は切込みが長さ8.5cm、幅4.0cmを測る。326は裏面にハナレ砂が認められる。328は切込みが長さ4.0cm、幅4.0cmを測る。330は熨斗瓦である。尻部に割れ痕が認められる。331・332は目板瓦である。331は尻部に釘穴が２箇所開けられている。右小口付近に水切りの溝が施されている。332は中央に釘穴が１箇所開けられている。裏面にハナレ砂が認められる。

Fig.103　瓦集積18(SX04)検出状況(北西から)

Fig.104　瓦集積19(SX14)検出状況(南東から)



Ⅰ層　現代

1　明褐色砂　（しまりなし）
2　黒褐色砂　（しまりなし、溶融スラグ含む）
3　にぶい黄橙色砂礫　（しまりなし、φ5cmの礫多く含む
4　暗褐色土　（しまりなし、タイル・コンクリート等含む、表土）

Ⅲ層　近代

5　黒褐色土　（しまりなし、φ2cmの砂礫多量に含む、炭化物含む）
6　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫多量に含む）

Ⅴ層　近世

7　暗褐色土　（しまりなし、φ1cmの砂礫含む）
8　明黄褐色砂質土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）
9　にぶい黄褐色砂質土　（しまりあり、φ15cmの礫少量含む）
10　黄褐色砂質土　（しまりあり、φ2cmの砂礫含む、瓦多量に含む、瓦集積18）
11　黒褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
12　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ2cmの砂礫多量に含む）

Ⅶ層　基盤層

13　明褐色粘質土　（しまりあり、砂礫少量含む）

Fig.105　瓦集積18（SX04）詳細図

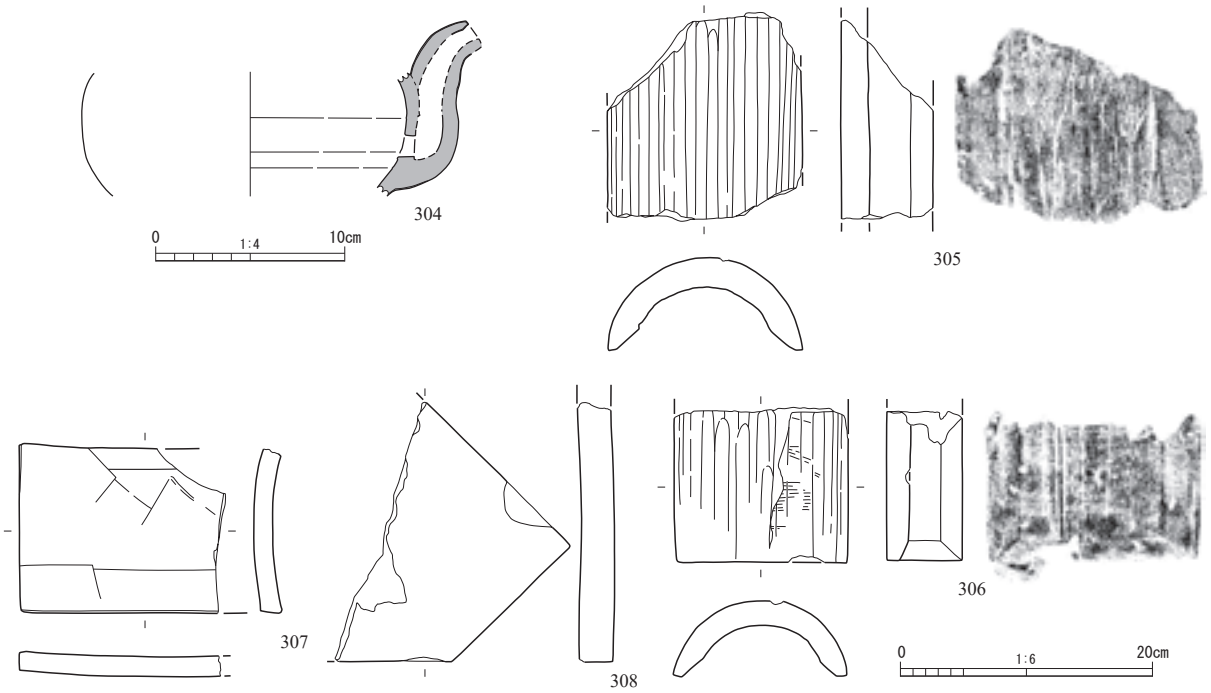
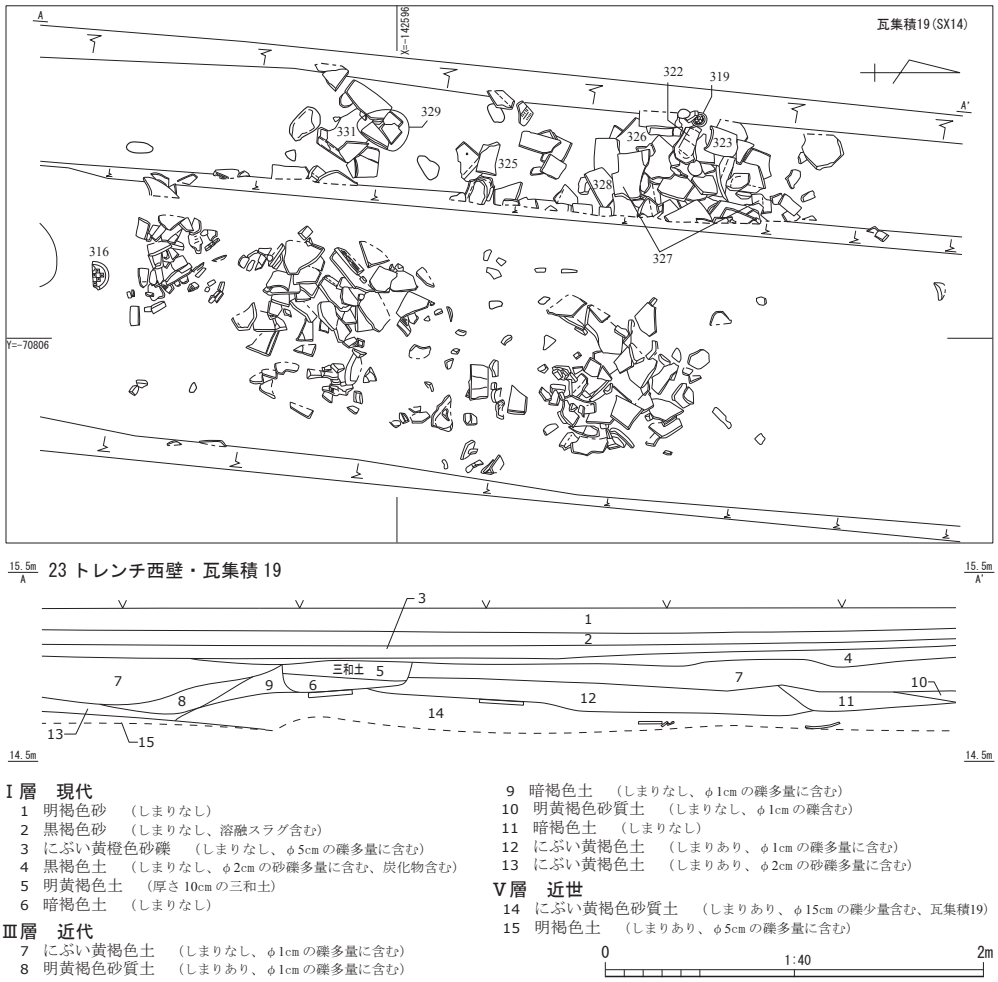


Fig.106　瓦集積18（SX04）出土遺物



Ⅰ層　現代
1　明褐色砂　（しまりなし）
2　黒褐色砂　（しまりなし、溶融スラグ含む）
3　にぶい黄橙色砂礫　（しまりなし、φ5cm の礫多量に含む）
4　黒褐色土　（しまりなし、φ2cm の砂礫多量に含む、炭化物含む）
5　明黄褐色土　（厚さ 10cm の三和土）
6　暗褐色土　（しまりなし）

Ⅲ層　近代
7　にぶい黄褐色土　（しまりなし、φ1cm の礫多量に含む）
8　明黄褐色砂質土　（しまりあり、φ1cm の礫多量に含む）
9　暗褐色土　（しまりなし、φ1cm の礫多量に含む）
10　明黄褐色砂質土　（しまりなし、φ1cm の礫含む）
11　暗褐色土　（しまりなし）
12　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ1cm の礫多量に含む）
13　にぶい黄褐色土　（しまりあり、φ2cm の砂礫多量に含む）

Ⅴ層　近世
14　にぶい黄褐色砂質土　（しまりあり、φ15cm の礫少量含む、瓦集積19）
15　明褐色土　（しまりあり、φ5cm の礫多量に含む）

0　1:40　2m

Fig.107　瓦集積19（SX14）詳細図

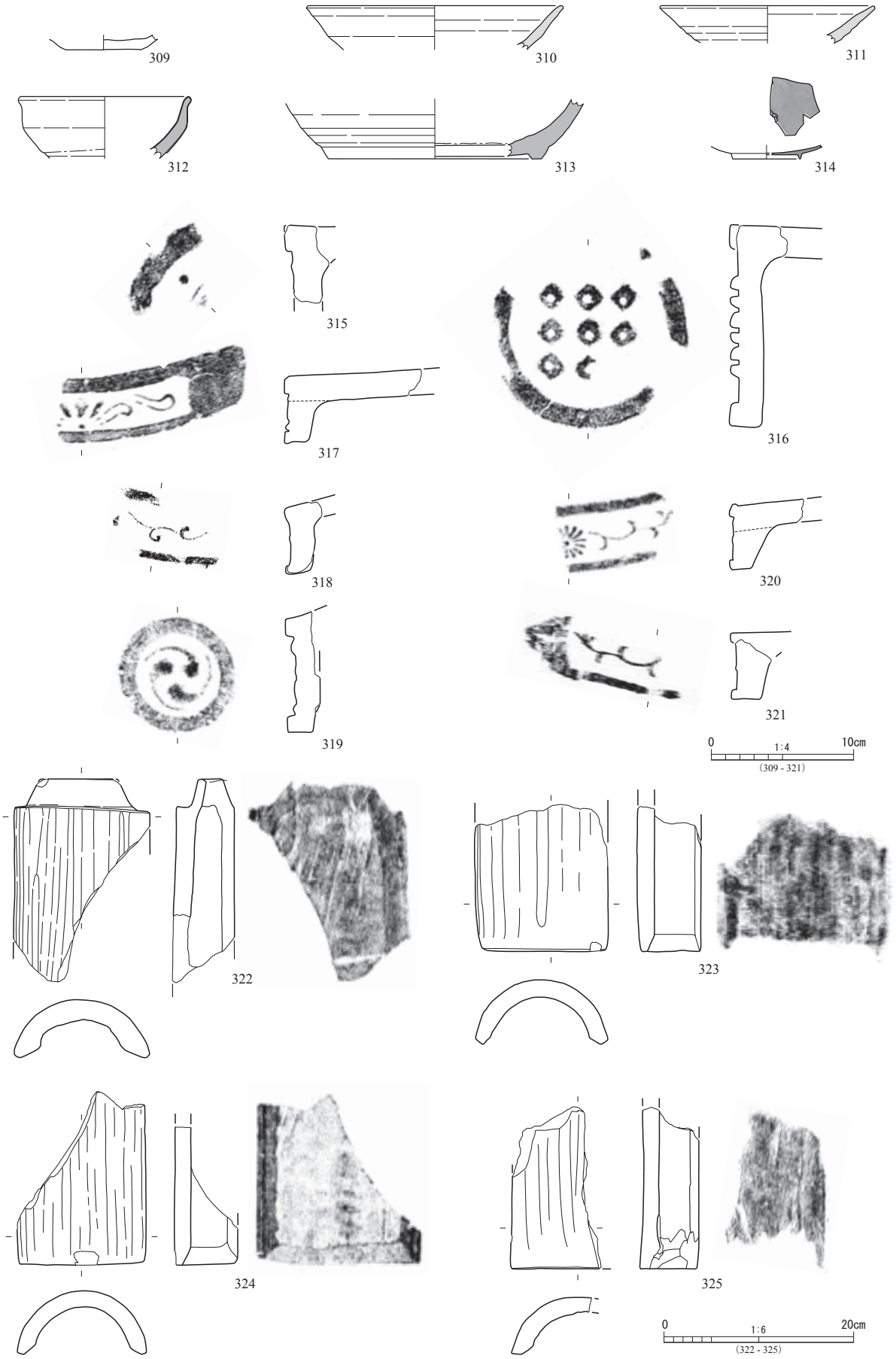


Fig.108　瓦集積19（SX14）出土遺物（１）

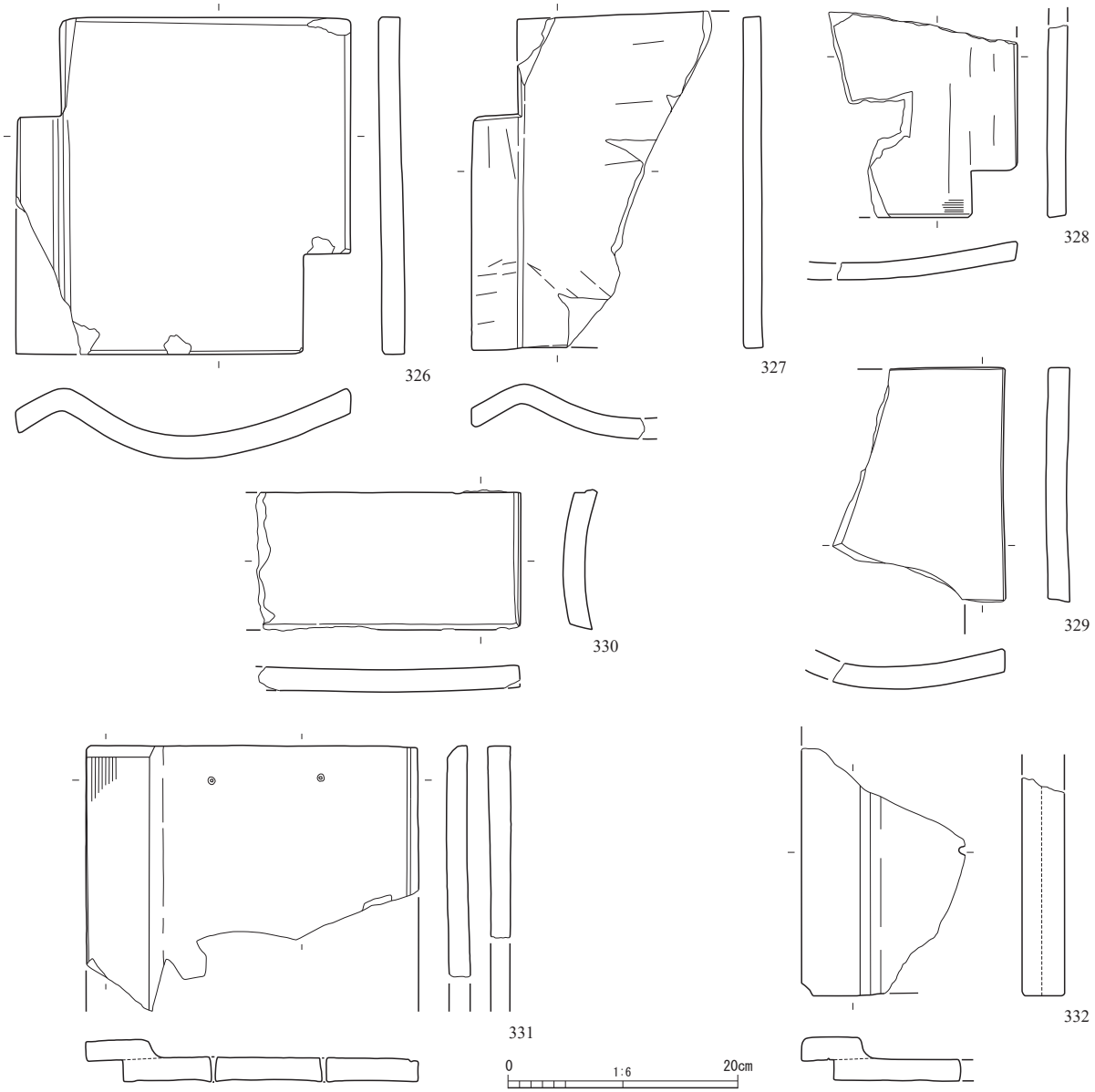


Fig.109　瓦集積19(SX14)出土遺物(２)

瓦集積20(SX07)　瓦集積20は、10トレンチ御城米蔵西南端で検出した。近世の土層を掘り込んで形成されており、南側は近代以降の東西に並ぶ石列によって切られている。検出した規模は南北1.4m、東西1.4mを測る。また完形に近い個体や遺存部分が大きい個体が多く、それぞれが南から北に重なって出土していることから、付近の瓦葺きの建造物が倒壊して瓦が堆積した可能性が考えられる。瀬戸美濃産の丸碗が出土したことから、遺構の年代は江戸時代後期以降と考えられる。

瓦集積20(SX07)出土遺物　333は瀬戸美濃産の丸碗である。江戸時代後期に位置づけられる。334は軒桟瓦である。顎貼付技法の顎部が接合部から剥がれた破片で、瓦当面に離型剤のキラコが付着している。335は軒桟瓦である。顎貼付技法で、垂れ瓦当面の顎部が剥がれた上半部のみ残存している。336・337は丸瓦である。両者とも側面端部には２回面取りが施されている。336の凹面は粗い布目、棒状刺突痕が認められる。337の凹面は棒状刺突痕と円形の釘穴が認められる。瓦の焼成は甘い。338は平瓦である。４辺残存しており、瓦の縦横比は0.87を測る。凸面にはハナレ砂が認められる。

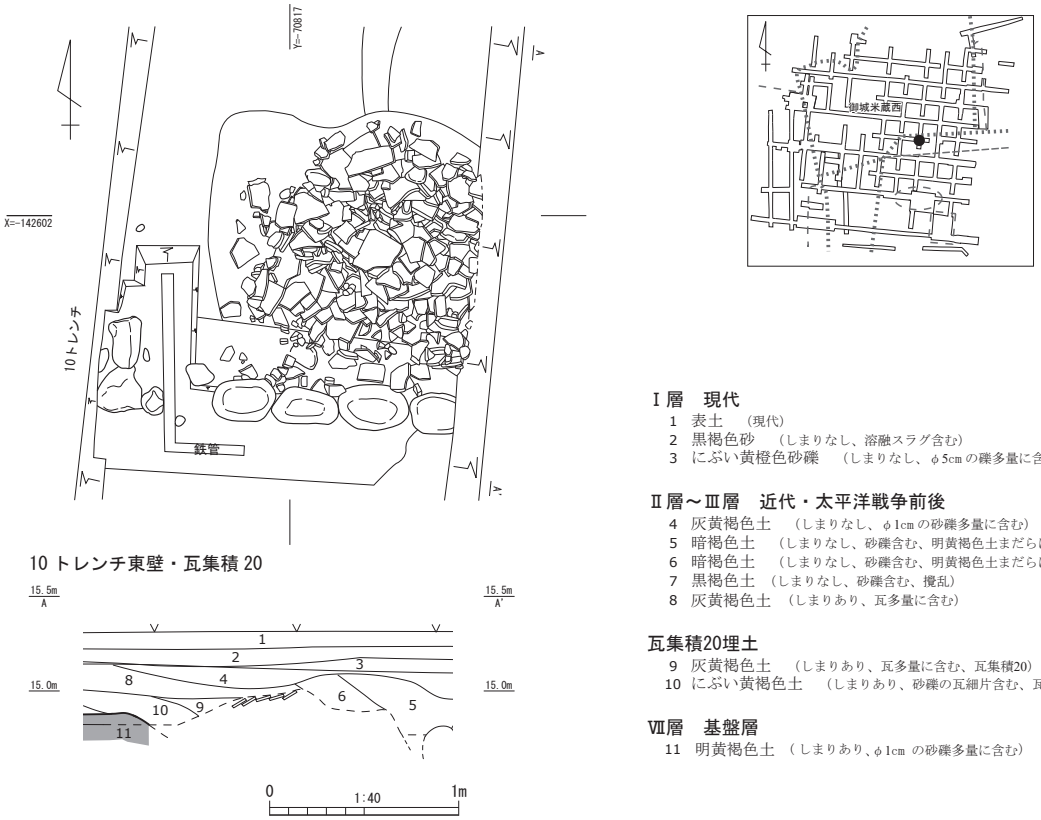


Fig.110　瓦集積20（SX07）詳細図

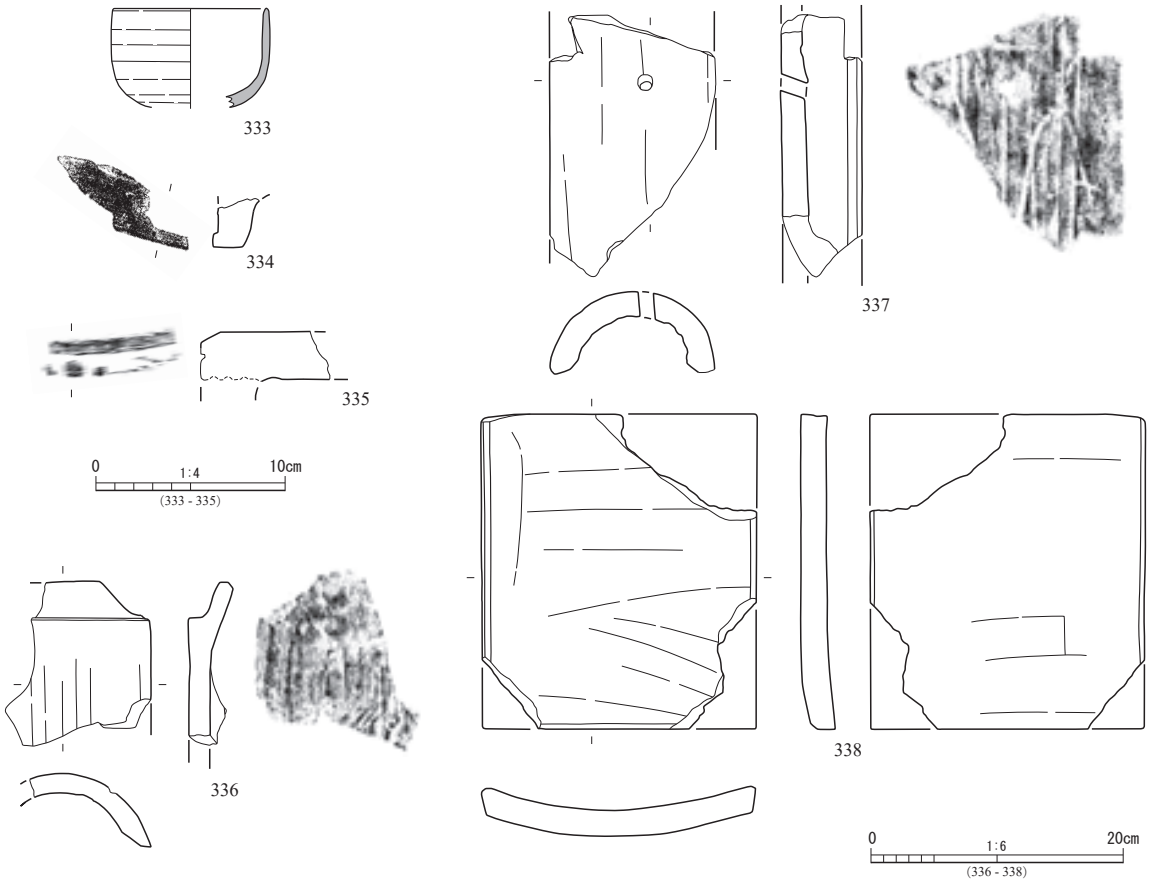
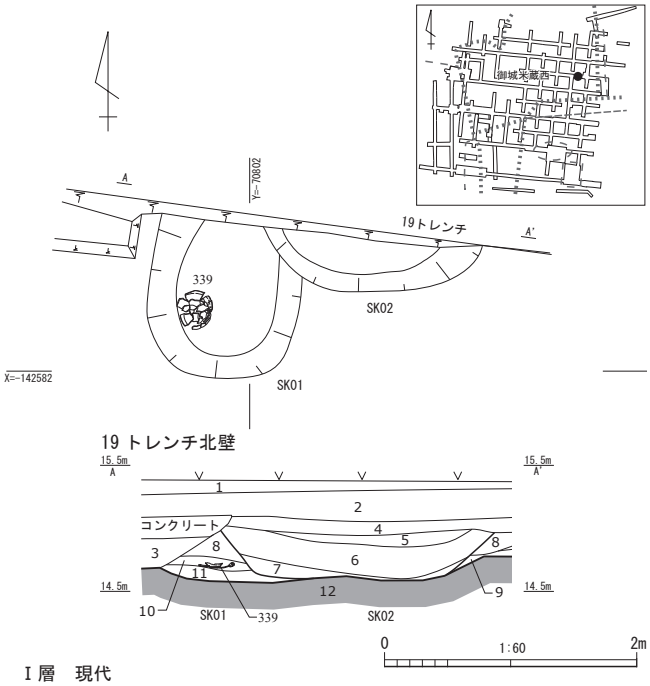


Fig.111　瓦集積20（SX07）出土遺物

SK01　SK01は、19トレンチ東端で検出した。検出した規模は長軸1.3 m、短軸1.2 mで北側はトレンチ外に延びる。また北東部はSK02に切られている。平面形状は隅丸長方形を呈すると考えられる。残存する深さは0.4 mである。大窯第２段階前半の内耳鍋が潰れた状態で出土した。遺構の年代は16世紀前半と考えられる。

SK01出土遺物　339は内耳鍋である。くの字形内耳鍋に分類される（鈴木1996）。底部外面はケズリ調整がされている。大窯第２段階前半に位置づけられる。340は鍋である。南伊勢系鍋で底部外面はケズリ調整がされている。外面はススが厚く付着している。

SK02　SK02は、19トレンチ東端で検出した。SK01を切っている。大部分がトレンチ北側にあるため、平面形状は不明であるが、検出した規模は南北0.4 m、東西1.25 mである。深さは0.35 mで、断面形状は皿形を呈する。埋土には炭化物が多く含まれ、鉄滓もわずかながら含まれている。また羽口も出土したことから、鍛冶に関係する遺構の可能性がある。



Ⅰ層　現代
1　明褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
2　黒褐色土　（しまりあり、炭化物・φ3cmの砂礫多量に含む、瓦・陶器・鉄滓含む）
3　暗褐色土　（しまりなし、φ15cmの円礫多量に含む、コンクリート基礎）
Ⅲ層　近代
4　黒褐色土　（しまりあり、炭化物・φ3cmの砂礫多量に含む）
SK02埋土
5　明褐色土　（しまりあり、φ1cmの砂礫多量に含む）
6　黒褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫・炭化物多量に含む、瓦・陶器・鉄滓含む）
7　黒褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫・炭化物多量に含む）
Ⅴ層　近世
8　黄橙色粘土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む、近世造成土）
9　黒褐色土　（しまりあり、φ3cmの砂礫・炭化物多量に含む）
SK01埋土
10　明褐色砂礫土　（しまりあり、φ15cmの礫多量に含む）
11　黒褐色土　（しまりあり、砂礫・炭化物含む、内耳鍋・鉄滓含む）
Ⅶ層　基盤層
12　明褐色粘質土　（しまりあり、φ1cmの砂礫含む）

Fig.112　SK01・SK02詳細図

羽口のほか、火鉢、かわらけが出土しているが、遺構の年代は不明である。

SK02出土遺物　341・342はかわらけである。両者ともロクロ成形で、底部は回転糸切り痕が認められる。口径はそれぞれ14.4cm（341）、14.0cm（342）を測る。343は瓦器の火鉢である。底部片で脚がつく。脚の数は不明である。

344は羽口である。調整は絞りとユビオサエが認識できる。

SK03　SK03は、10トレンチ御城米蔵西中央で検出された。西半はトレンチ外に延びる。検出した規模は南北4.3 m、東西1.1 mで、平面形状は長楕円形を呈する。深さは0.5 mで、掘り方は底部から緩やかに立ち上がり、途中で垂直になる。埋土は礫を含む灰黄褐色粘質土を主体とし、北から南に堆積する。

天目茶碗や、菊皿、鉄絵鉢、広東碗が出土したことから、遺構の年代は17世紀後半以降と考えられる。

SK03出土遺物　345･346は天目茶碗である。内外面とも鉄釉が施されている。347は菊皿である。内面に布目が認められる。登窯第２段階第５小期に位置づけられる。348は鉄絵鉢である。登窯第１段階第３・４小期に位置づけられる。349は広東碗である。外面に呉須模様が認められる。

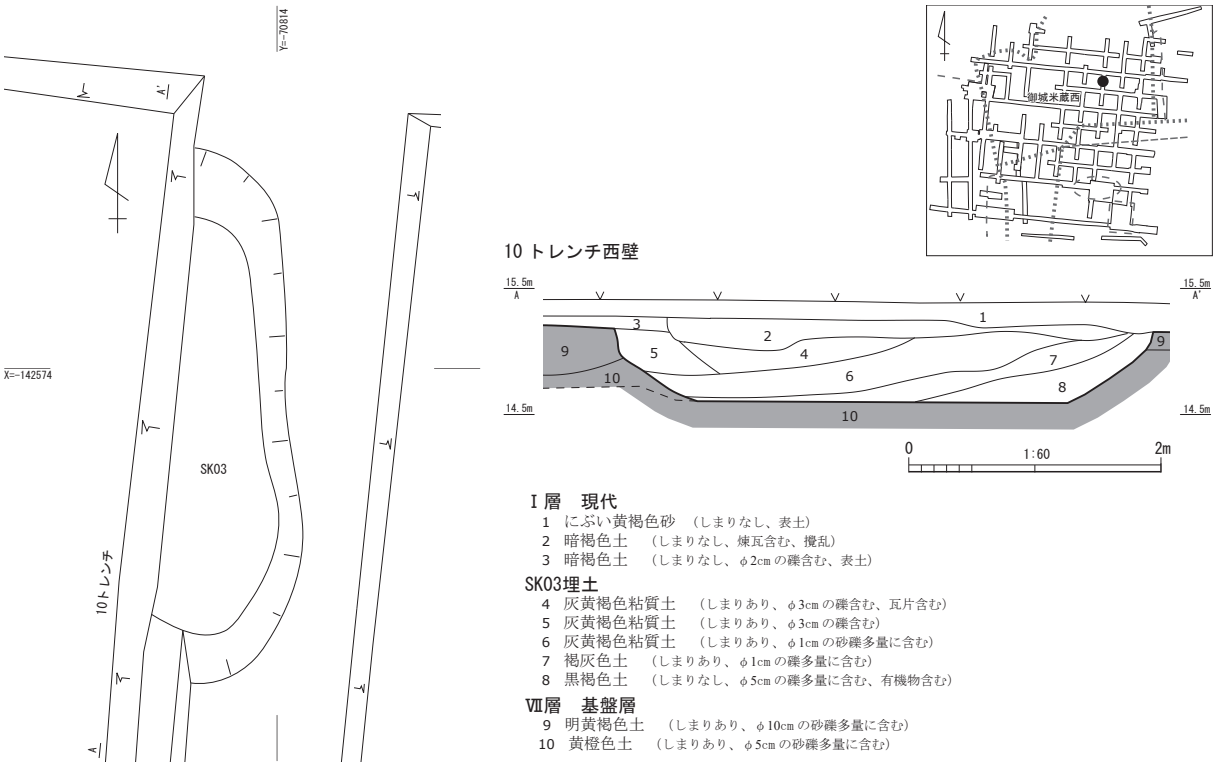


Fig.113　SK03詳細図

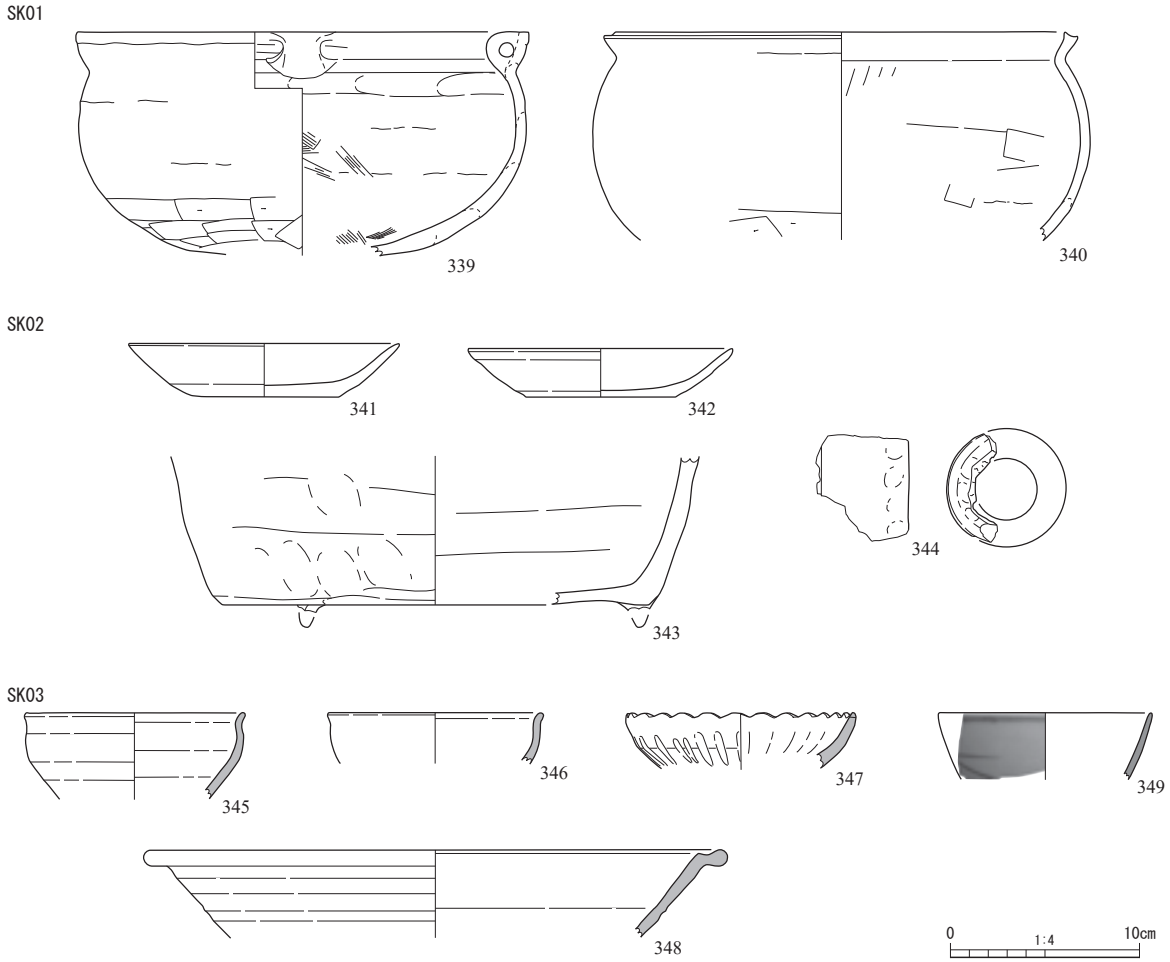


Fig.114　SK01・SK02・SK03出土遺物

SA01　SA01は、18トレンチの御城米蔵西南端で検出した小穴列である。11基が東西方向に並ぶ。小穴列はSD03・SD05にほぼ主軸を揃え、N-87°-Eとなる。構成する小穴はほぼ円形を呈する。直径は最大で0.3 m、最小で0.18 mを測る。いずれの小穴も塀などの構造物の柱穴と考えられる。遺物は出土しなかったが、SD03・SD05と同時期の可能性が高い。遺構の年代は不明である。

SA02　SA02は、SA01の0.7 m南で検出した小穴列である。主軸はSA01と平行し、N-87°-Eである。９基の小穴で構成される。小穴の平面形状は円形を呈し、直径は最大で0.4 m、最小で0.2 mを測る。SA01と同様で、いずれの小穴でも柱痕跡は認められなかったが、塀などの構造物の柱穴と考えられる。遺物は出土しなかったが、SD03・SD05と同時期の可能性が高い。遺構の年代は不明である。

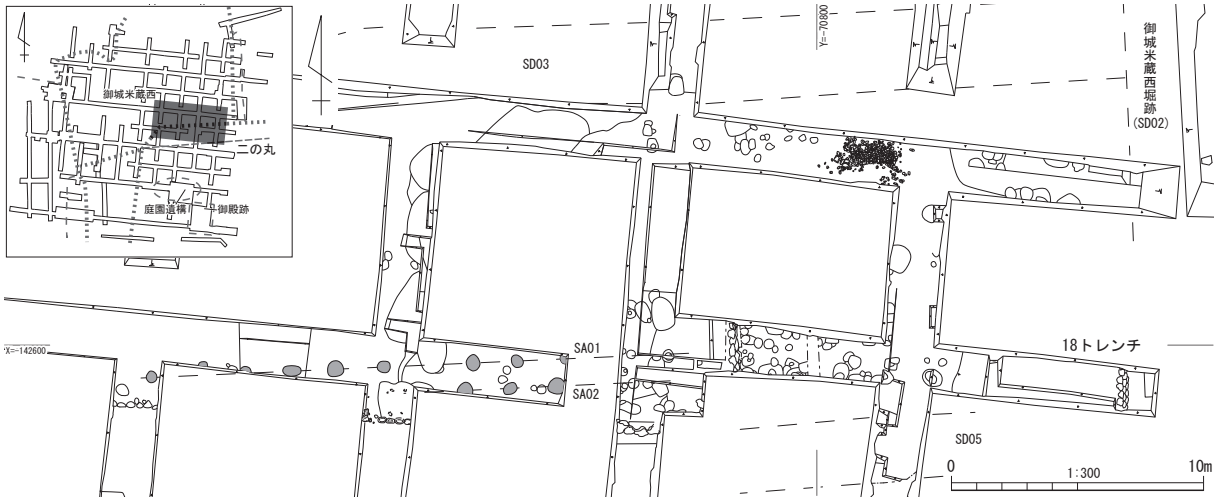


Fig.115　SA01・SA02図

42トレンチ　調査区北東部に幅2mで、東端まで延びるトレンチを設け、絵図に御城米蔵西側の堀として描かれている堀跡を確認することを目的に調査を行った。調査の結果、堀を検出することは出来なかったが、複数の小穴の存在を確認した(SP17～SP20)。遺物が出土しなかったため、遺構の年代は不明であるが、近世以前と捉えられる。

44トレンチ　42トレンチ同様、御城米蔵に東西方向のトレンチを設け、御城米蔵西堀跡を確認する目的で調査を実施した。現地表面から1m以上の攪乱が確認され、その下から少なくとも７基の小穴を検出した(SP21～SP27)。いずれも、20～40cmの径を有する不整形な円形小穴である。遺物が出土しなかったため、遺構の年代は不明であるが、近世以前と捉えられる。

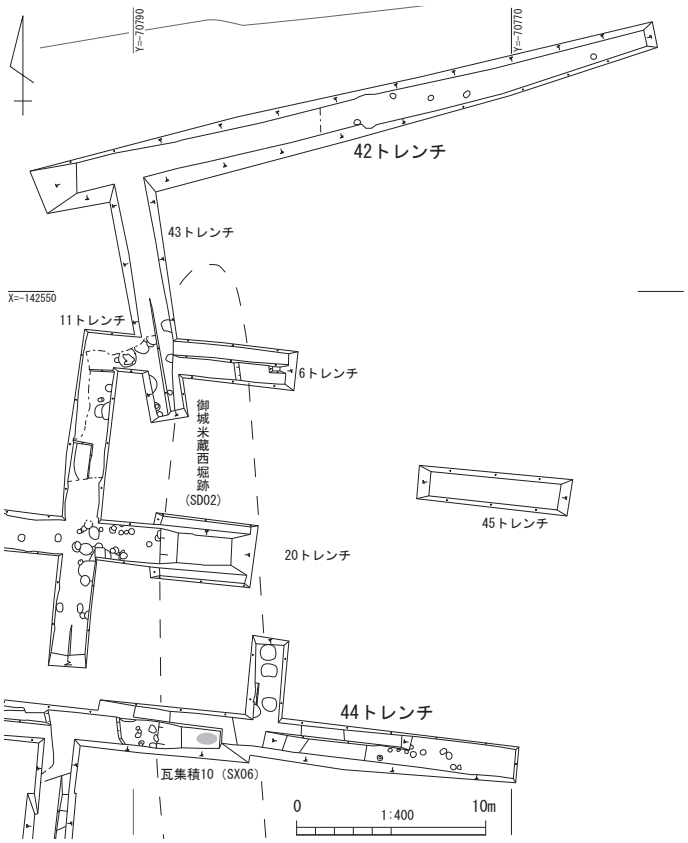
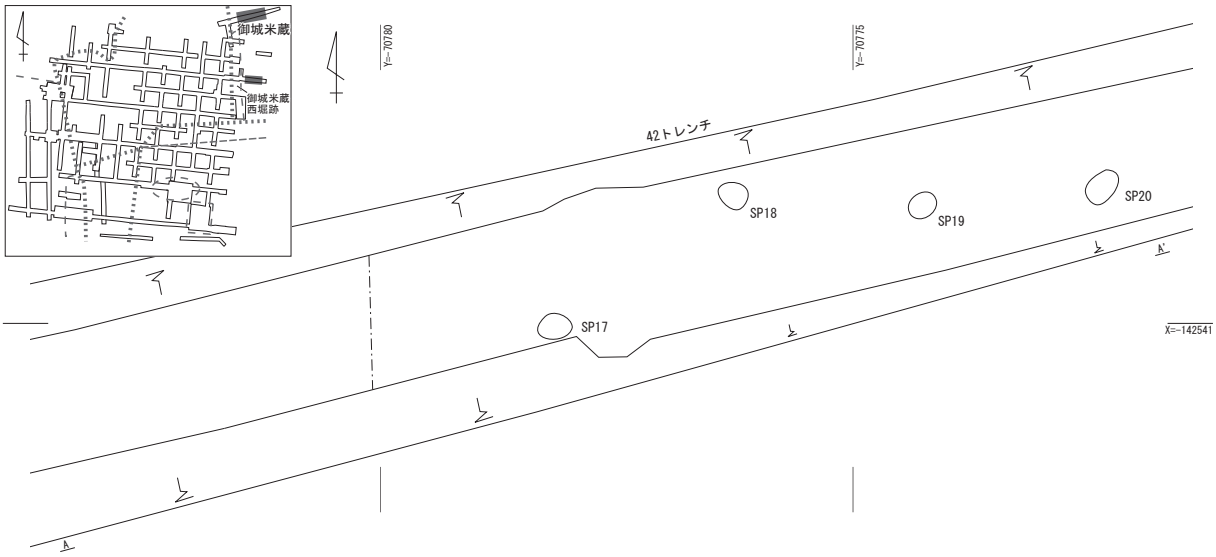
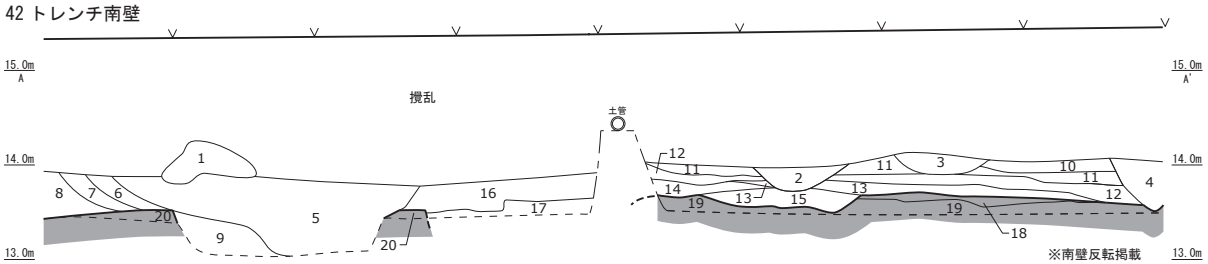


Fig.116　42・44トレンチ全体図



42 トレンチ南壁



Ⅰ層　現代

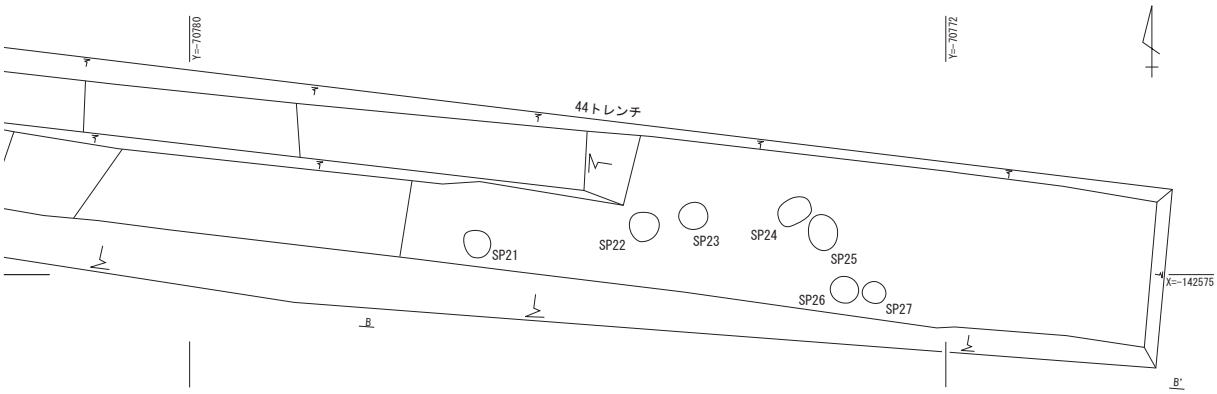
1　黄褐色土　（しまり中）
2　暗褐色土　（しまりなし、φ5cmの礫少量含む）
3　暗褐色土　（しまり中、粘性のある黄褐色土が帯状に入る）
4　暗褐色土　（しまり中、φ5cmの礫含む）
5　暗褐色土　（近現代　撹乱）
6　暗褐色土　（しまりなし、黄褐色土塊含む）
7　暗褐色土　（しまりなし、黄褐色土塊含む）
8　暗褐色土　（煉瓦あり、撹乱）
9　暗褐色土　（しまり中、炭化物含む）
10　暗褐色土　（しまりなし、φ5cmの礫含む）
11　暗褐色土　（しまりなし、φ10cmの礫少量含む）
12　暗黄褐色土　（しまりなし、φ5cmの礫含む）
13　黄褐色土　（しまりなし、部分的に暗褐色土含む）
14　暗褐色土　（しまり中）
15　暗黄褐色土　（しまりなし）
16　暗褐色土　（しまり中、φ1cmの砂礫少量含む）

Ⅴ層　近世

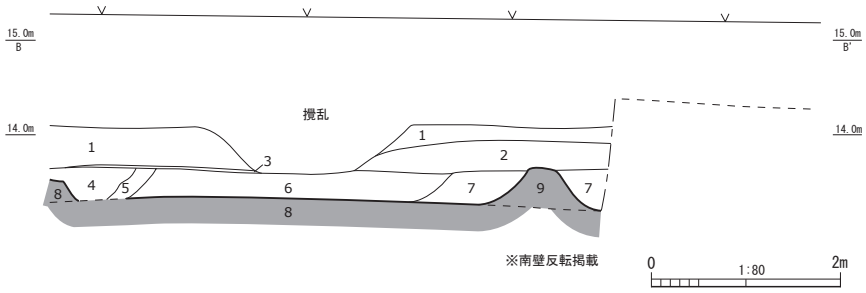
17　赤褐色土　（しまり中、炭化物少量含む）

Ⅶ層　基盤層

18　黄褐色土　（しまり中、φ1cmの砂礫少量含む）
19　黄褐色土　（しまり中、φ5～8cmの礫少量含む）
20　黄褐色土　（しまり中）



44 トレンチ南壁



Ⅲ層　近代

1　褐色土　（しまりなし）
2　暗褐色土　（しまり中、黄褐色土塊含む）

Ⅴ層　近世

3　暗灰褐色土　（しまりあり、φ2cmの砂礫多量に含む、硬化面が面的に広がる、旧表土）
4　暗褐色土　（しまりなし、φ2cmの砂礫少量含む）
5　褐色土　（しまりなし、φ1cmの黄褐色土塊少量含む）
6　褐色土　（しまり中）
7　暗褐色土　（しまり中）

Ⅶ層　基盤層

8　暗灰黄褐色土　（しまり中）
9　黄褐色土　（しまり中）

Fig.117　調査対象地北東隅（42・44トレンチ）詳細図

SP04　SP04 は、19 トレンチ中央で検出した。北側は SP28 に切られ、南半はトレンチ外に延びる。直径は 0.25 m で円形を呈する。平面検出に止めたため深さは不明である。平面検出時に完形品のかわらけが出土した。遺構の年代は不明確だが、近世以前と捉えられる。

SP04 出土遺物　350 は完形品のかわらけである。遺構中央から正位置で出土した。ロクロ成形で、底部に回転糸切り痕が確認できる。

御城米蔵西出土遺物　351 は手づくね土器の壺である。352 ～ 359 はかわらけである。352 ～ 355 は非ロクロ成形、356 ～ 359 はロクロ成形である。352・354 は口縁形状が整わず、指頭圧痕を顕著に残す。底部と口縁部の屈曲も不明瞭である。355 は底部にスノコ痕、359 は回転糸切り痕がそれぞれ確認できる。357 は口縁部内外面にススが付着している。灯明皿として使用されていたと考えられる。口径は、計測および復元できるものは、非ロクロ成形の 352 ～ 355 は 10 ～ 11cm 前後である。ロクロ成形の 356 ～ 359 は、10cm のもの（359）と 12cm 以上（356 ～ 358）とに分けられる。

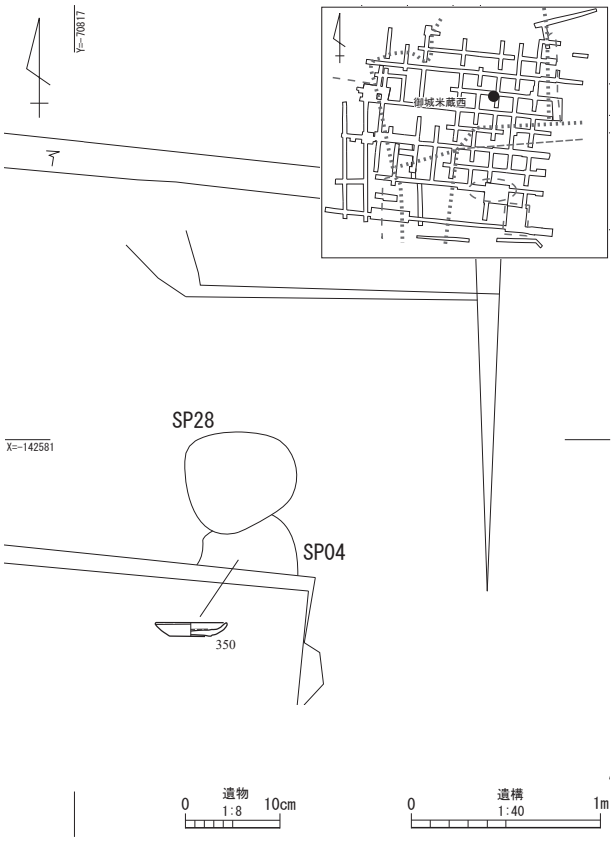


Fig.118　SP04詳細図

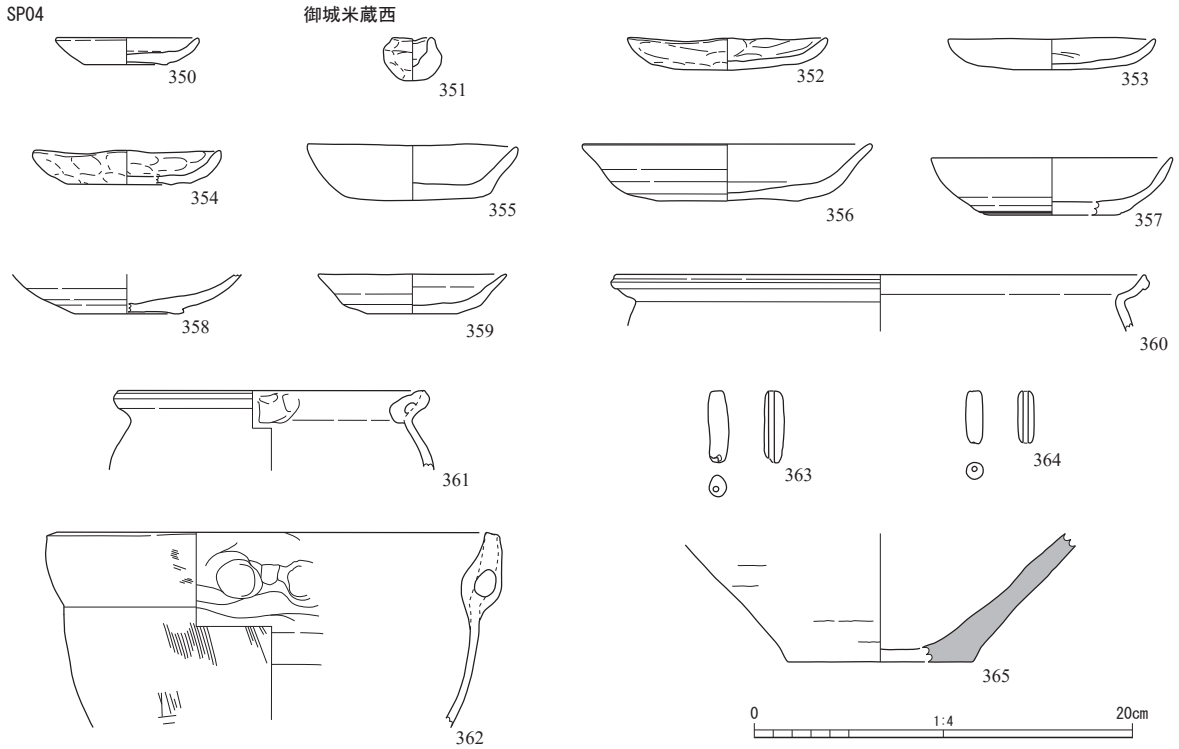


Fig.119　SP04・御城米蔵西出土遺物

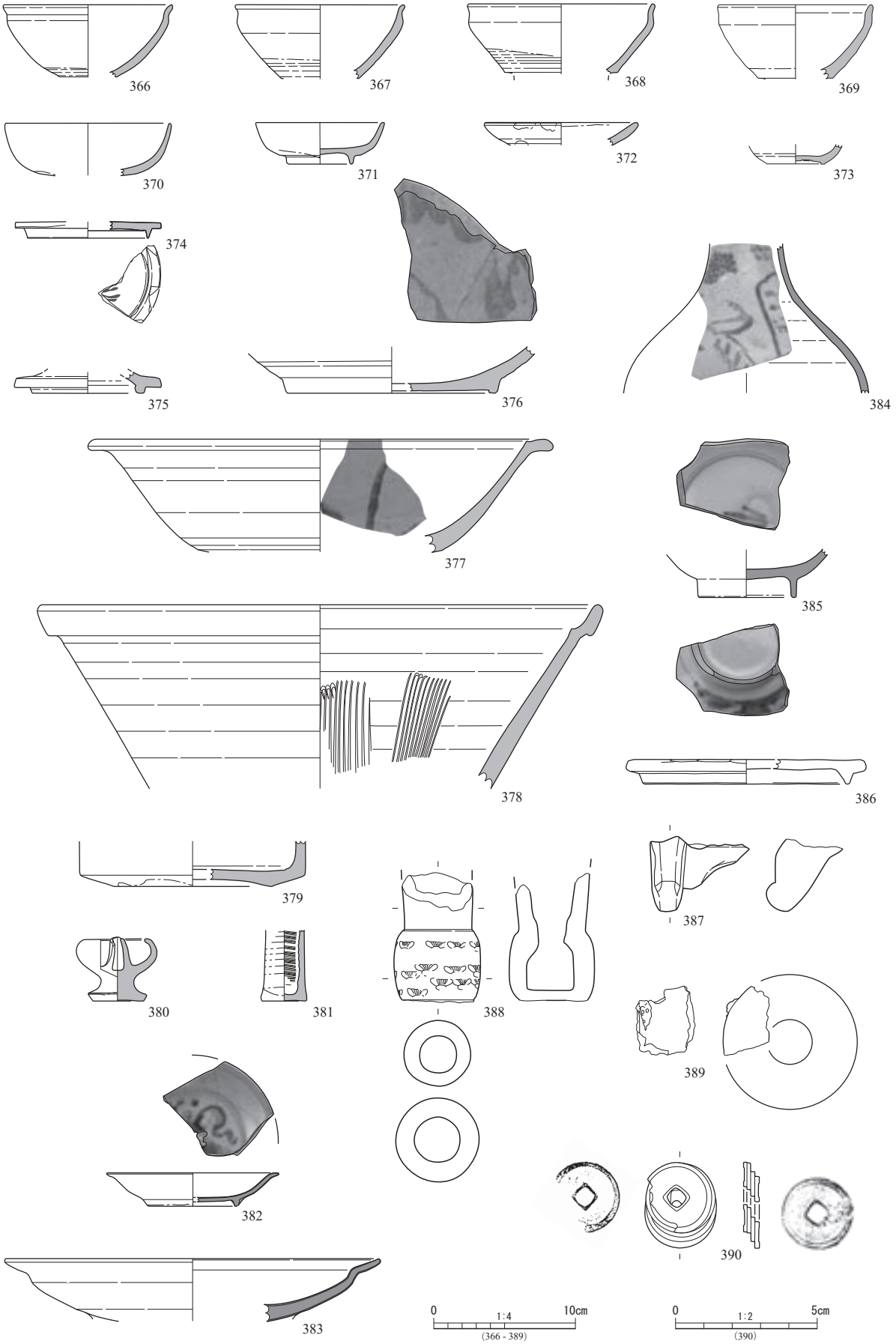


Fig.120　御城米蔵西出土遺物（２）

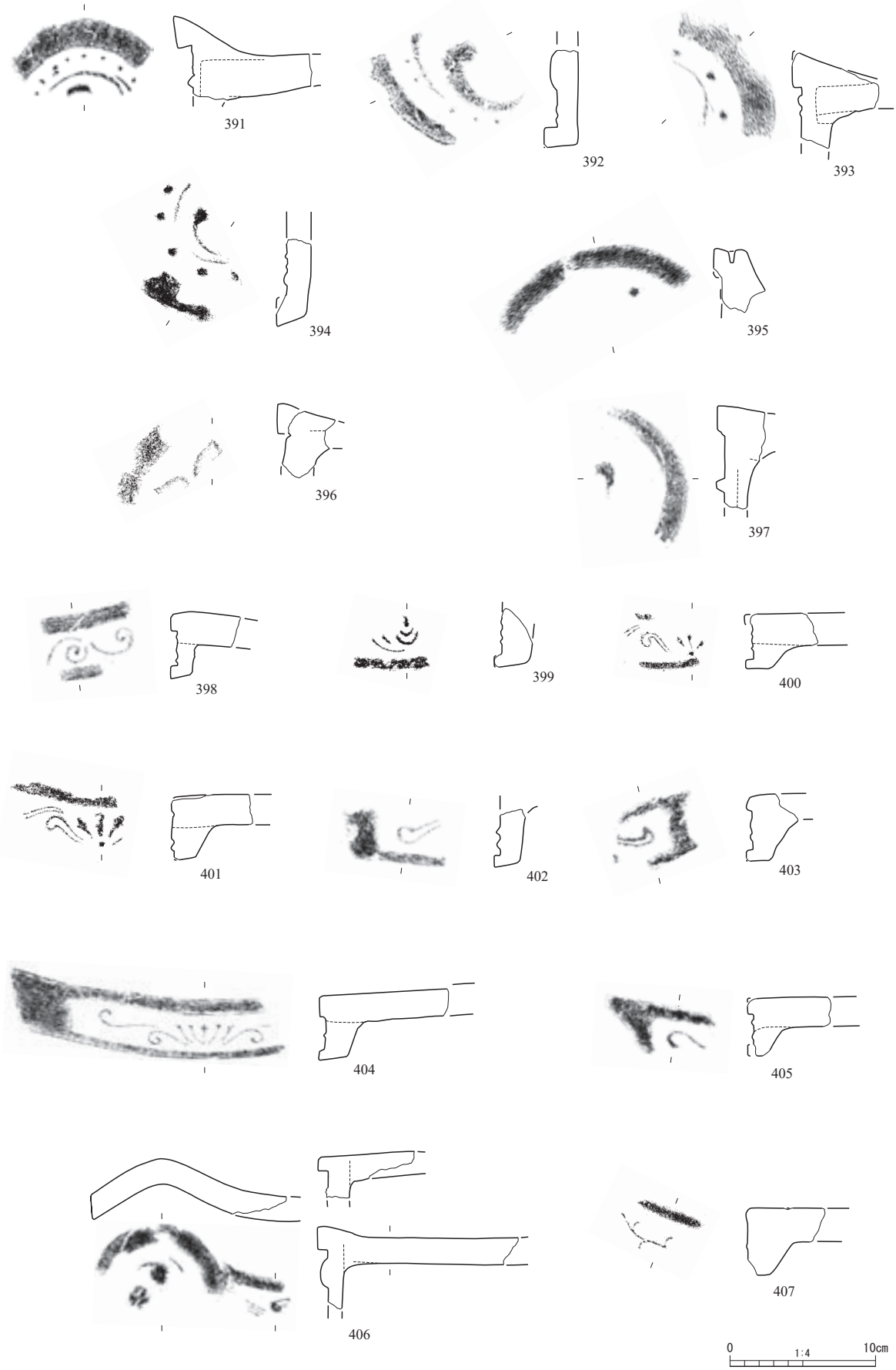


Fig.121　御城米蔵西出土遺物（３）

360 ～ 362 は内耳鍋である。360 はくの字形内耳鍋、361 は南伊勢系鍋が在地化したものと考えられる。362 は内彎形内耳鍋である。363･364 は土錘である。長さはそれぞれ 3.8cm（363）と 2.8cm（364）を測る。365 は擂鉢である。内外面とも摩滅が激しく、詳細は不明である。366 ～ 369 は天目茶碗である。いずれも高台は欠損している。366 は大窯第２段階後半に、367 は大窯第３段階前半、368 は大窯第４段階後半、369 は大窯第３段階に位置づけられる。370 は型打ち皿である。摺絵が施されており、美濃Ⅲ c 期に位置づけられる。

371 は梅紋皿である。内外面に施釉されており、底部は露胎である。江戸時代後期に位置づけられる。372 は皿である。内外面に施釉されていると考えられるが、剥離が激しい。古瀬戸後期様式Ⅳ期に位置づけられる。373 は小皿である。内外面に施釉されており、底部は削出高台である。初山窯産と考えられ、大窯第３・４段階に位置づけられる。374 は水注蓋である。外面に施釉されており、内面は露胎である。内面に墨書が認められるが、判読はできない。瀬戸美濃産で江戸後期に位置づけられる。375 は蓋である。瓦質で最大径 10.4cm を測る。376・377 は鉄絵鉢である。376 は江戸時代前期に、377 は登窯第１段階第３・４小期にそれぞれ位置づけられる。378 は擂鉢である。瀬戸産で登窯第２段階第６小期に位置づけられる。

379 は水盤もしくは香炉である。産地は不明であるが、登窯第２段階第５・６小期に位置づけられる。380 は完形品の秉燭である。全内外面に鉄釉が施釉され、底部外面のみ露胎である。登窯第３段階第８・９小期に位置づけられる。381 は玩具の徳利である。筒状の形態をしており、外面には緑色の釉薬が施されている。底部外面には静止糸切り痕が認められる。

382 は青花皿である。見込みに二重線がめぐり、文様が描かれている。口縁は外反している。断面には漆継ぎの痕跡が確認できる。高台端部に窯体の一部や砂粒が付着している。景徳鎮産の貿易陶磁で、16 世紀前半に位置づけられる。

383 は初期伊万里の皿である。三つ脚付の大皿で、剥離痕から底部に径 1cm 前後の脚がつくと考えられる。1620 ～ 1640 年代に位置づけられる。384 は延宝様式の水注とみられる。外面には柿右衛門様式に比べ不十分ではあるが、乳白手が施され、花鳥文の色絵が描かれる。頸部の割れ口に漆継ぎの痕跡が認められることから、修復しながら使用されていたことがわかる。385 は鉢もしくは大皿である。内面底に染付が施されている。肥前産で 18 世紀前葉に位置づけられる。

386 は瓦質の蓋である。土瓶の蓋で、火消し

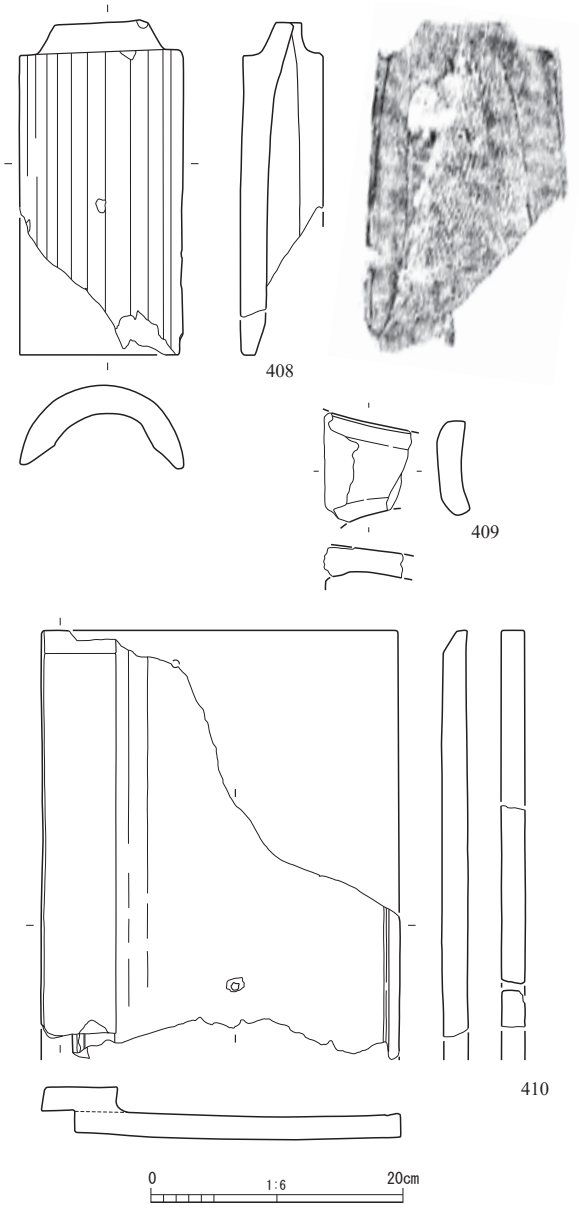


Fig.122　御城米蔵西出土遺物（４）

壺と考えられる。387 は瓦質鉢の獣脚である。388 は瓦質鉢の脚と考えられる。脚部下部には花柄のスタンプが複数施されている。脚の内部は空洞となっている。下端部は欠損しており、さらに脚が続く可能性がある。

389 は羽口である。内側の酸化色と外側の還元色が確認できる。外面には一部ガラス質の融着物が認められる。

390 は銅銭で、４枚が融着した状態で出土した。いずれも銭銘は不明である。

391 は鳥伏間瓦である。瓦当面には右巻きの三ツ巴紋が施される。瓦当の直径は 13cm に復元できる。392 は右巻きの三ツ巴紋軒丸瓦である。珠文は５個残っており、全体で 23 個以上あったと考えられる。393 は鳥伏間瓦である。瓦当面には右巻きの三ツ巴紋が施される。珠文は３個残っており、全体の数は 10 個以上であったと推定される。瓦当面には離型剤（砂）も認められる。394 は右巻きの三ツ巴紋軒丸瓦である。珠文は５個残っており、全体の数は 10 個であったと考えられる。395 は三ツ巴紋軒丸瓦である。珠文は１個残存している。周縁端部に穿孔が２箇所認められる。

396・397 は家紋瓦である。396 は桔梗紋軒丸瓦である。桔梗の花弁は立体的に表現されている。太田氏の家紋瓦であることから、17 世紀中頃に位置づけられる。397 は無字銭紋軒丸瓦である。４分の１程度しか残存していないが、残存部から無字銭紋と判断できる。青山氏の家紋瓦で、17 世紀後半に位置づけられる。

398 ～ 405 は軒平瓦である。398 は中心飾りは欠損しているが、均整唐草が２つ確認できる。これらから三葉紋３反転均整唐草紋軒平瓦と考えられる。399 は中心飾りの宝珠紋が確認できる。周縁が細く作られており、唐草紋は欠損しているが、宝珠紋２反転唐草紋軒平瓦と考えられる。400 は周縁が細く作られ、中心飾りの三葉紋と巻きの強い重線唐草が２つ確認できる。三葉紋２反転均整唐草紋軒平瓦である。401 ～ 403 は巻きが弱い唐草紋が確認できる。401 は三葉紋の中心飾りが確認できる。いずれも三葉紋２反転均整唐草紋軒平瓦と考えられる。404 は瓦当面の残りが比較的良好である。中心飾りが五葉紋で唐草も連続している。五葉紋２反転均整唐草紋軒平瓦である。405 は唐草が１つ確認できるが欠損部分が多く、紋様の詳細は不明である。

406・407 は軒桟瓦である。406 は右巻きの三ツ巴紋軒桟瓦である。垂れの中央飾りは欠損しており不明である。407 は軒桟瓦の垂れ破片である。唐草が連続する形状から菊紋唐草紋の可能性が考えられる。408 は丸瓦である。凹面にはコビキＢ技法、粗い布目、吊紐痕が認められる。側面端部の面取りは１回行われる。

409 は道具瓦と考えられる。鯱瓦の可能性もあるが、詳細は不明である。410 は目板瓦である。頭部付近中央と尻部左側にそれぞれ釘穴が１箇所開けられている。

御城米蔵西の成果　御城米蔵西において９つの瓦集積を検出した。瓦集積を検出した数は、調査対象地内においてもっとも多い。瓦集積は 18 世紀初頭までの特徴を持つ瓦や陶器で構成される瓦集積 13・17 と 18 世紀以降の特徴を持つ瓦や陶磁器を含む瓦集積 12・15・16・18・19・20 があり、瓦集積形成には、18 世紀初頭とそれ以降の２つ時期があったと捉えられる。また、御城米蔵西における表土掘削時には、近世の陶磁器や瓦が多く出土した。御城米蔵西の広い範囲が、18 世紀以降を中心に瓦などの廃棄場所として用いられたことを示す事象と捉えられる。このほか、戦国時代に遡る遺構が近世遺構とほぼ同一面で検出できることを確認した点も重要な成果である。

御城米蔵西には、小穴列 SA01・SA02 や 16 世紀後葉から 17 世紀初頭までの間に埋没したとみられる SD03・SD05 のように城内通路等の区画に関わる遺構と捉えられるものも含まれており、調査の成果の蓄積を待って、区域区分を検討する必要がある。

第３章　分　析

１　二の丸御殿庭園遺構における池内堆積土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

（１）概　要

43 次調査で近世の庭園遺構を検出し、三和土を用いた枯池等を確認した。庭園遺構の年代や周辺の植生・古環境復元に関する情報を取得するため分析を行った。

43 次調査で採取した池内の堆積土壌を対象に、放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、植物遺体抽出・同定を実施した。

（２）試　料（Tab.2・Fig.123）

放射性炭素年代測定　放射性炭素年代測定は、試料中に含まれる分析可能な試料をすべて分析した。結果が出たのは、試料番号①、②－２、③－１の３点である。

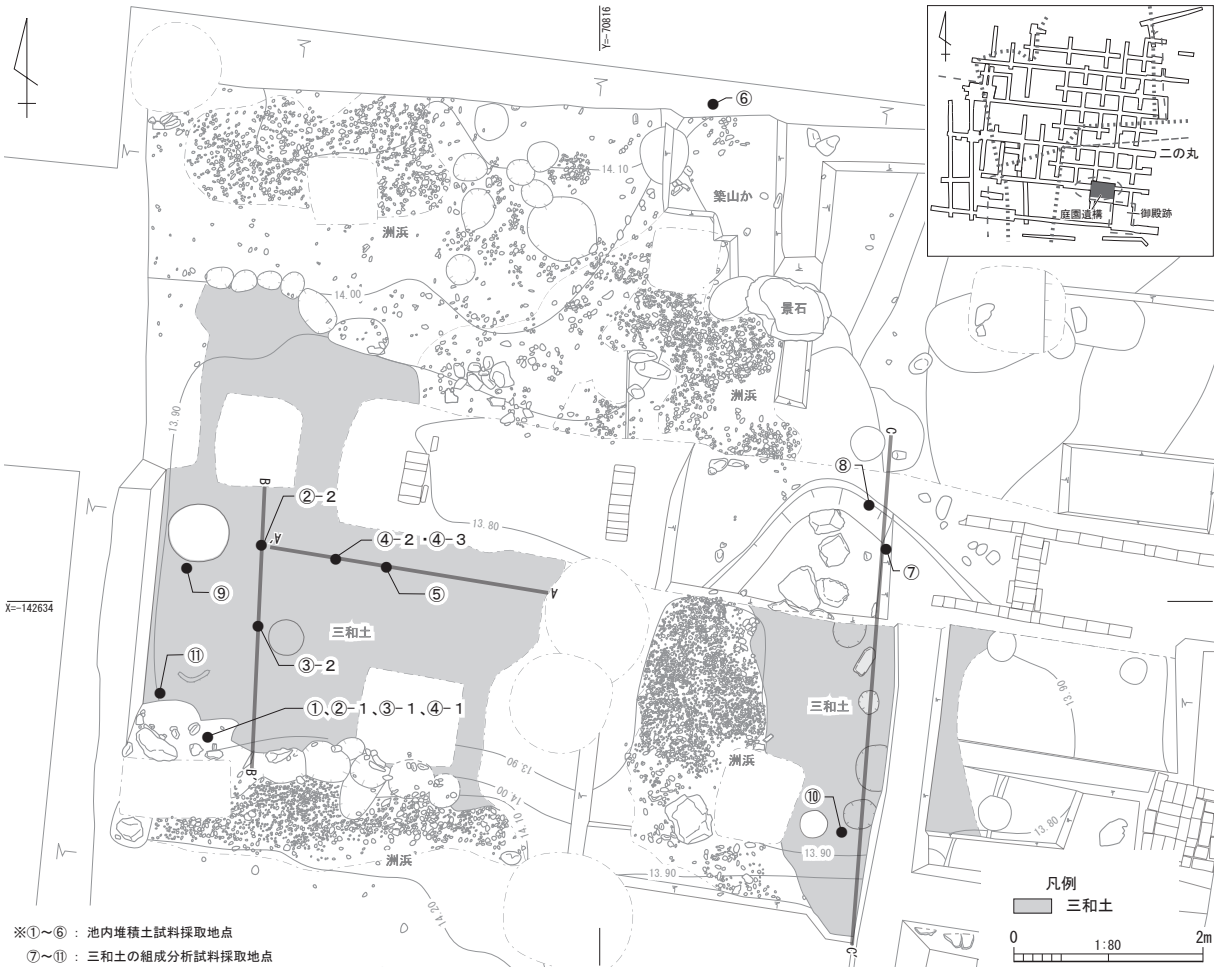
珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析　珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析の対象とした試料は、池内堆積物とされる試料番号①、②－２、③－１、③－２、④－１、④－２、④－３、⑤の計９点である。

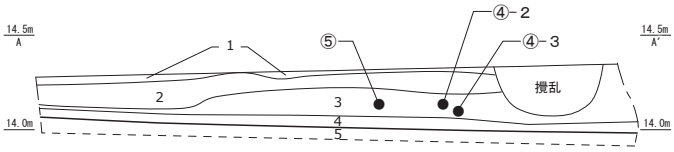
植物遺体抽出・同定　植物遺体抽出・同定の対象とした試料は、いずれも肉眼で観察可能な炭化物が含まれている。これらは脆弱であるため、水洗によって溶出する恐れがあったため、試料 10 点（試料番号①、②－１、②－２、③－１、③－２、④－１、④－２、④－３、⑤、⑥）を未水洗のまま乾燥させて土壌中から 4mm 以上の炭化物を拾い出し、樹種同定試料とする。

Tab.2　池内堆積土分析試料一覧

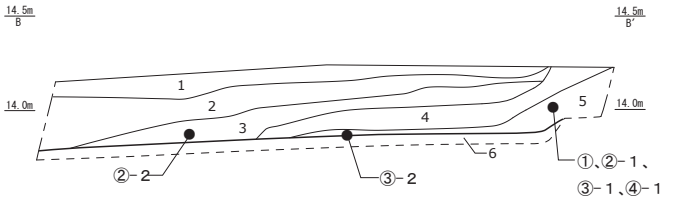
試料番号	種類	分析項目				
		放射性炭素年代測定	珪藻分析	花粉分析	植物珪酸体分析	樹種同定
①	堆積土	○	○	○	○	○
②－１	堆積土	―	○	○	○	○
②－２	堆積土	○	○	○	○	○
③－１	堆積土	○	○	○	○	○
③－２	堆積土	―	○	○	○	○
④－１	堆積土	―	○	○	○	○
④－２	堆積土	―	○	○	○	○
④－３	堆積土	―	○	○	○	○
⑤	堆積土	―	○	○	○	○
⑥	石炭	―	―	―	―	○

※結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

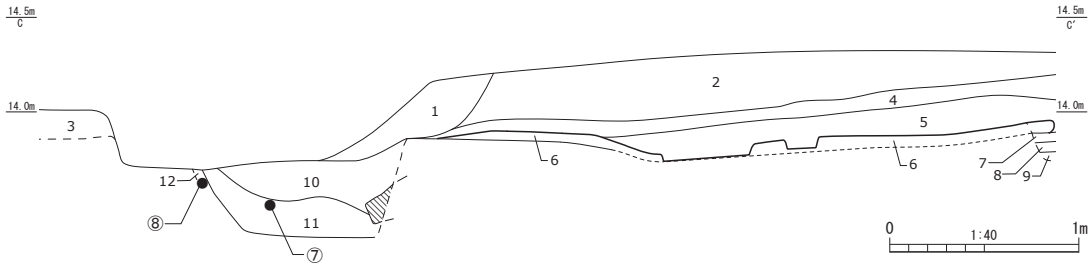




1　暗褐色土　（しまりあり、粒子細かい）
2　褐色土　（しまりあり、黄褐色土含む）
3　灰褐色砂礫土　（しまりなし）
4　暗褐色土　（しまり中、炭化物少量含む）
5　三和土　（枯池床）



1　褐色土　（しまり中）
2　褐色土　（しまりあり）
3　灰褐色砂層　（しまり中、粒子粗い、赤褐色土が少量入る）
4　灰褐色砂層　（しまりなし、粒子細かい、遺物多量に含む）
5　暗褐色土　（しまりあり）
6　三和土　（枯池床）



1　橙色土　（しまり中）
2　明黄褐色土　（しまりあり、黄褐色土少量含む）
3　にぶい褐色土　（しまりあり、φ1～3㎝の砂礫含む）
4　暗褐色土　（しまりあり、φ0.5㎝の炭化物少量含む、φ5㎝の礫少量含む）
5　灰黄褐色土　（しまり中、φ5㎝の礫少量含む、瓦片含む）
6　橙色土　（しまり中、三和土、枯池床）
7　明緑灰色土　（しまり中、粘土）
8　黒褐色土　（しまり中、粘土の粒子細かい）
9　黄橙色土　（しまり中、暗褐色土少量含む）
10　暗褐色土　（しまりあり、φ0.5㎝の砂礫含む）
11　黒色土　（しまり中、粘性強の土層（暗褐色）が縞状に2本入る、間に赤褐色土層）
12　橙色土　（しまりあり、石灰少量含む、粘質土）

Fig.123　土壌サンプル採取位置

（３）放射性炭素年代測定

分析方法　試料の表面に付着した泥などの不純物を削り落として 50mg に調整する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から

Tab.3　放射性炭素年代測定結果

試料名	方法	補正年代（暦年較正用）	δ 13C（‰）	校正年代値						Code No
					年代値				確率%	
①	AaA(0.05M)	190 ± 20 (189 ± 20)	−23.83 ± 0.26	σ	cal AD	1665-1681	285-270	calBP	16.3	YU-16698
					cal AD	1739-1753	211-197	calBP	14.3	
					cal AD	1763-1784	188-166	calBP	23.6	
					cal AD	1794-1800	156-150	calBP	5.2	
					cal AD	1939-1950	11-0	calBP	8.9	
				2σ	cal AD	1660-1688	290-263	calBP	21.0	
					cal AD	1730-1807	220-143	calBP	58.9	
					cal AD	1925-1950	25-0	calBP	15.5	
②－２	AAA(1M)	180 ± 20 (180 ± 20)	−28.41 ± 0.25	σ	cal AD	1668-1683	282-268	calBP	13.1	YU-16699
					cal AD	1736-1782	214-169	calBP	40.7	
					cal AD	1798-1802	152-148	calBP	3.2	
					cal AD	1936-1950	14-0	calBP	11.3	
				2σ	cal AD	1661-1693	290-257	calBP	19.5	
					cal AD	1726-1810	224-140	calBP	56.6	
					cal AD	1919-1950	32-0	calBP	19.3	
③－１	AAA(1M)	175 ± 20 (175 ± 20)	−22.78 ± 0.43	σ	cal AD	1670-1683	281-267	calBP	11.4	YU-16700
					cal AD	1735-1780	215-170	calBP	38.0	
					cal AD	1799-1803	152-148	calBP	3.2	
					cal AD	1930-1950	21-0	calBP	15.6	
				2σ	cal AD	1661-1695	289-256	calBP	18.9	
					cal AD	1725-1813	225-138	calBP	55.2	
					cal AD	1839-1843	111-107	calBP	0.4	
					cal AD	1873-1877	78-74	calBP	0.4	
					cal AD	1916-1950	35-0	calBP	20.6	

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2）BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差 σ（測定値の 68.2% が入る範囲）を年代値に換算した値。
4）AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。
5）暦年の計算には、OxCal v4.4 を使用
6）暦年の計算には 1 桁目まで示した年代値を使用。
7）較正データーセットは、IntCal20 を使用。
8）較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
9）統計的に真の値が入る確率は、σ が 68.2%、2σ が 95.4% である。

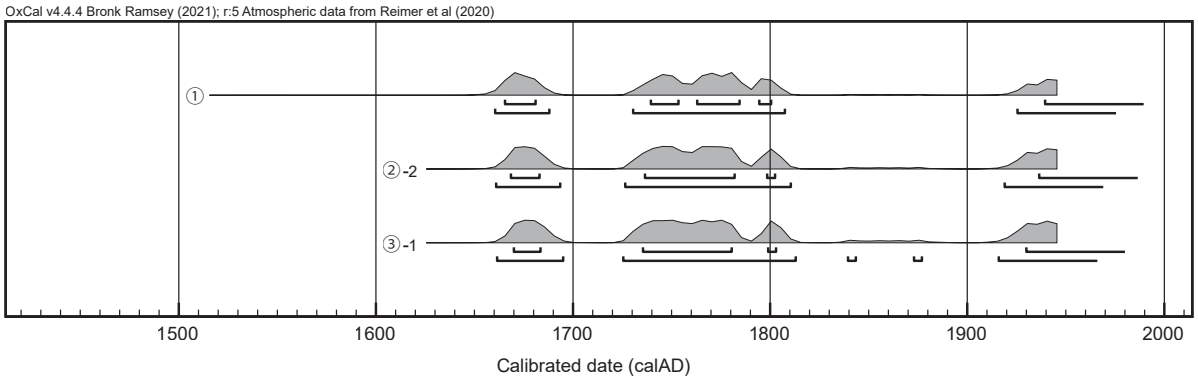


Fig.124　暦年較正結果

提供される標準試料（HOX- Ⅱ）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6 等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。δ ^{13}C は試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用した。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、OxCal4.4（Bronk,2009）、較正曲線は IntCal20（Reimer et al.,2020）である。

分析結果　結果を Tab.3、Fig.124 に示す。炭化材は定法での分析処理が可能であり、測定に必要なグラファイトは十分得られている。同位体補正を行った値は、①が 190 ± 20BP、②－２が 180 ± 20BP、③－１が 175 ± 20BP である。

暦年較正は、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、その後訂正された半減期（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、IntCal20（Reimer et al.,2020）を用いる。2 σ の値は、①が calAD1660 ～、②－２が calAD1661 ～、③－１が calAD1661 ～である。

（４）珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析

分析方法　珪藻分析は、湿重約 5g をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を４～５回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が 200 個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200 個体が産出した後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

花粉分析は、料約 10g を、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理･化学的処理を施して花粉を濃集する。

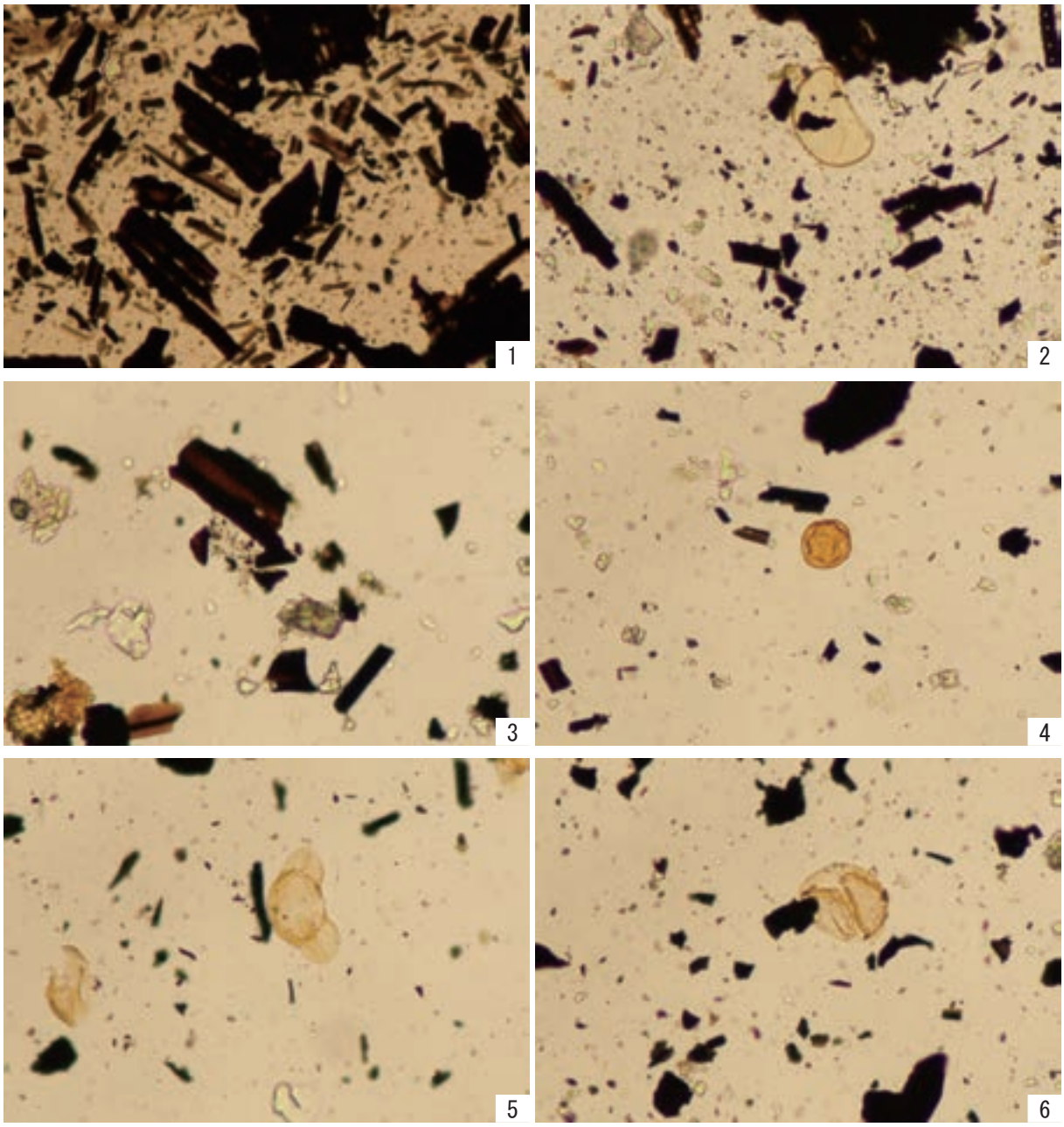


Fig.125　花粉化石分析プレパラート内の状況
（1：①、2：②－2、3：③－2、4：④－1、5：④－3、6：⑤）

残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定･計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）、三好ほか（2011）等を参考にする。

花粉分析結果　植物珪酸体分析は、各試料を過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理し、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾

Tab.4　花粉分析結果

種 類	43 次　池内堆積土								
	①	②－１	②－２	③－１	③－２	④－１	④－２	④－３	⑤
木本花粉									
モミ属	-	-	3	-	-	-	-	1	-
マツ属	-	1	3	3	-	-	9	13	9
スギ属	-	-	-	-	1	-	-	2	1
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	-	2	-
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-
草本花粉									
イネ科	-	-	-	-	-	1	-	-	-
カヤツリグサ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アカザ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ナデシコ科	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
キク亜科	-	-	1	-	-	-	-	-	-
タンポポ亜科	-	-	1	-	1	1	2	-	3
シダ類胞子									
シダ類胞子	8	18	25	23	34	37	34	20	16
合　計									
木本花粉	0	1	6	3	1	0	9	19	10
草本花粉	0	0	2	0	2	3	3	1	3
シダ類胞子	8	18	25	23	34	37	34	20	16
合　計	8	19	33	26	37	40	46	40	29

土１g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土１g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個 /g 未満は「< 100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め（100 単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

分析結果　珪藻分析の結果は、いずれの試料においても、珪藻化石は 1 個体も産出しなかった。

花粉分析の結果を Tab.4 に示す。いずれの試料においても検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。また、わずかに検出された花粉化石も、花粉外膜が破損している、あるいは溶解の影響を受けているなど、全体的に保存状態が悪い。

なお、検出された種類は、モミ属、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属などの木本花粉、イネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科、タンポポ亜科などの草本花粉である。

植物珪酸体分析の結果を Tab.5、Fig.127 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出され、保存状態も概ね良好である。

池内堆積土９点（①、②－１、②－２、③－１、③－２、④－１、④－２、④－３、⑤）での産状はほぼ同様であり、メダケ属を含むタケ亜科の産出が目立つ。④－２や⑤では、シバ属も見られる。また各試料から、栽培植物であるイネ属が僅かながらも産出する。珪化組織片として、籾（穎）に形成される穎珪酸体や葉部の短細胞列も検出される。

なお各試料からはイネ科起源（棒状珪酸体、長細胞起源、毛細胞起源）も検出されるが、分類群の特定には至らなかった。

Tab.5　植物珪酸体分析結果

種　類	43 次　池内堆積土								
	①	②－１	②－２	③－１	③－２	④－１	④－２	④－３	⑤
イネ科葉部短細胞珪酸体									
イネ属	<100	-	<100	-	-	200	<100	<100	<100
メダケ属	100	-	200	<100	-	-	-	-	-
タケ亜科	500	700	1,600	1,200	700	800	1,100	1,000	1,600
コムギ連	-	-	100	-	-	-	-	-	100
不明	200	600	900	500	<100	200	1,500	1,000	400
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
イネ属	100	200	400	<100	<100	100	100	100	200
メダケ属	300	-	200	200	100	-	300	200	300
タケ亜科	1,500	800	1,300	1,500	800	500	1,800	1,200	2,400
シバ属	-	-	-	-	-	-	<100	-	100
不明	700	600	1,800	1,000	400	800	2,200	1,100	1,200
合　計									
イネ科葉部短細胞珪酸体	900	1,300	2,900	1,800	700	1,200	2,700	2,000	2,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	2,600	1,600	3,700	2,700	1,400	1,400	4,400	2,600	4,200
植物珪酸体含量	3,500	2,900	6,600	4,500	2,100	2,600	7,100	4,600	6,400
珪化組織片									
イネ属穎珪酸体	-	-	＊	-	-	-	＊	＊	-
イネ属短細胞列	＊	-	＊	-	-	＊	-	-	＊
イネ科起源（その他）									
棒状珪酸体	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊
長細胞起源	＊	-	-	＊	-	-	-	-	-
毛細胞起源	-	＊	＊	＊	＊	-	＊	-	＊

含量は、10 の位で丸めている（100 単位にする）
合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている
<100：100 個 /g 未満
－：未検出、＊：含有

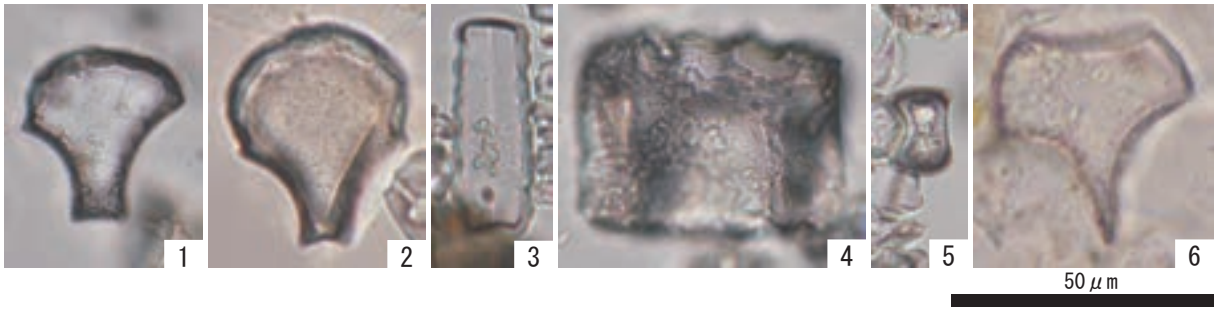
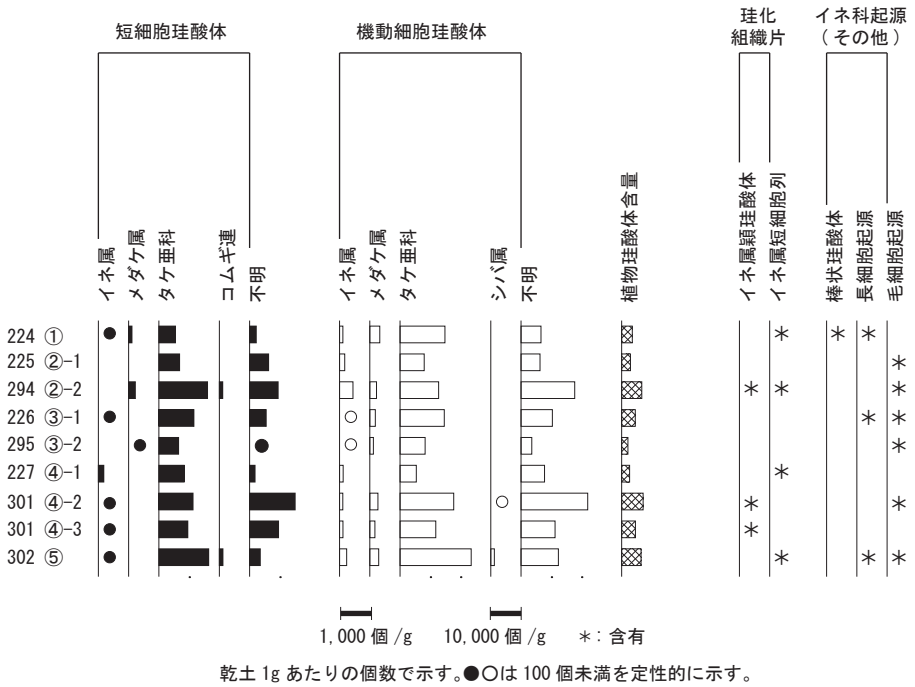


Fig.126　植物珪酸体

１ イネ属機動細胞珪酸体（②－２）２ イネ属機動細胞珪酸体（⑤）３ コムギ連短細胞珪酸体（②－２）
４ メダケ属機動細胞珪酸体（②－２）５ タケ亜科短細胞珪酸体（②－２）６ シバ属機動細胞珪酸体（⑤）



乾土 1g あたりの個数で示す。●○は 100 個未満を定性的に示す。

Fig.127　植物珪酸体含有量

（５）樹種同定

分析方法　分析試料のうち、試料⑥は石炭のため、分析対象から除外する。残りの９試料を、炭化材の概査し、１試料中に複数種含まれていないかどうか確認する。１種類の場合は最も状態の良いものを、複数種含まれていた場合は、種類ごとに状態の良いものを抽出し、同定を行う。剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３割断面を作成し、走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。材組織の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

Tab.6　樹種同定結果

No	試料名	種　類
①	43 次　224	トチノキ属
		コナラ亜属コナラ節
②－１	43 次　225	サカキ
②－２	43 次　294	サカキ
③－１	43 次　226	トチノキ属
③－２	43 次　295	コナラ亜属コナラ節
④－１	43 次　227	アカガシ亜属
		サクラ属
④－２	43 次　301	コナラ亜属コナラ節
④－３	43 次　301	コナラ亜属コナラ節
⑤	43 次　302	トチノキ属
⑥	43 次　360	石炭

分析結果　（Tab.6）同定の結果、広葉樹５種類（ハンノキ属、コナラ亜属コナラ節、アカガシ亜属、サクラ属、サカキ）が検出された。以下に検出された種類の解剖学的特徴を述べる。

【ハンノキ属（Alnus）　カバノキ科】

散孔材で、道管は単独または２～４個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 20 細胞高。木材組織はヤシャブシ亜属 (subgen Alnaster) に近い。

【コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Quercus sect. Prinus）　ブナ科】

環孔材で、孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔、壁孔は交互状に配列。放射組織は同性、単列、1 ～ 20 細胞高程度のものと複合放射組織とがある。

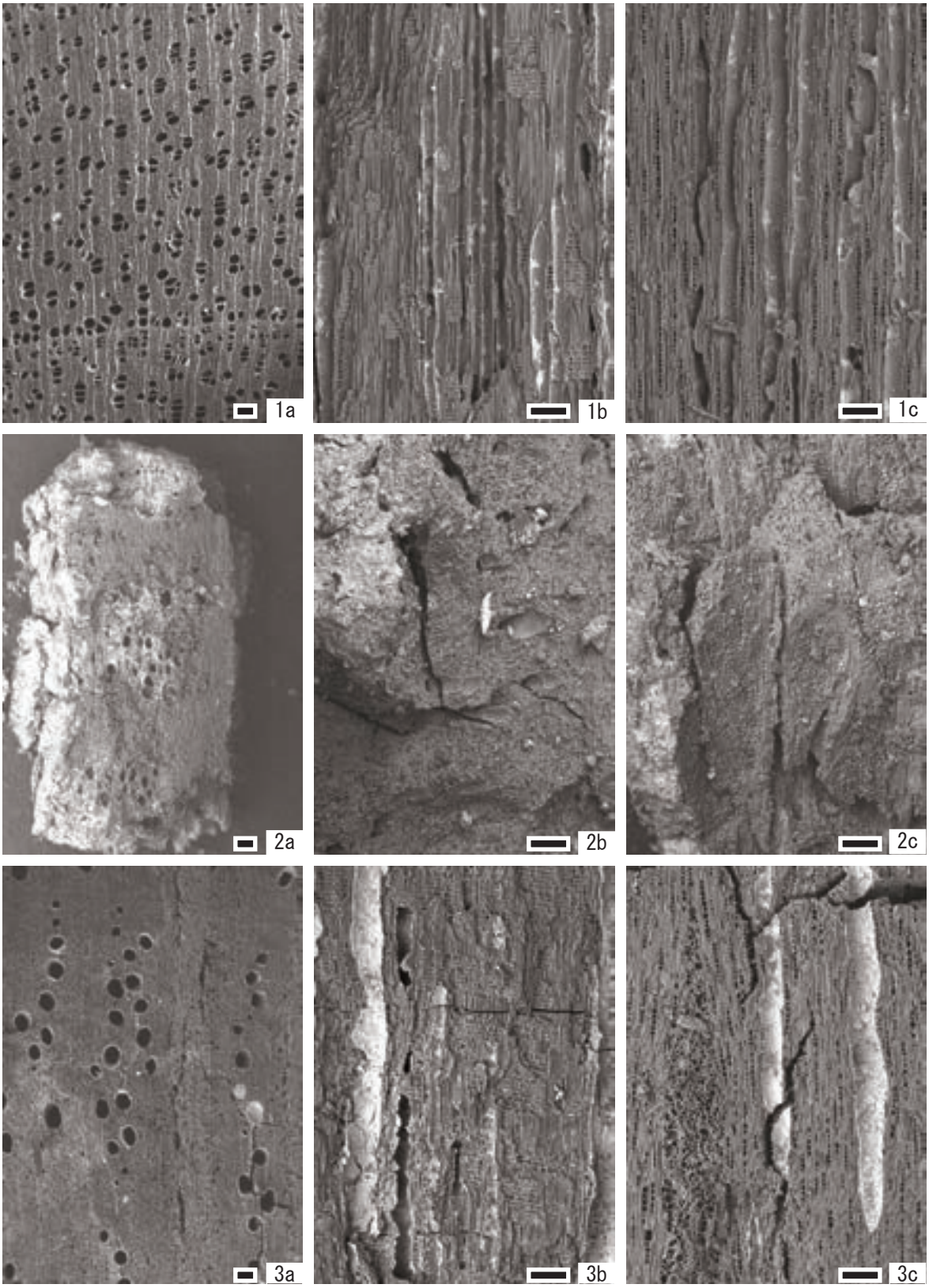


Fig.128　炭化材（１）

１ ハンノキ属（③－１）　２ コナラ亜属コナラ節（④－３）　３ アカガシ亜属（④－１）

a: 木口　b: 柾目 c: 板目　スケールは 100 μ m

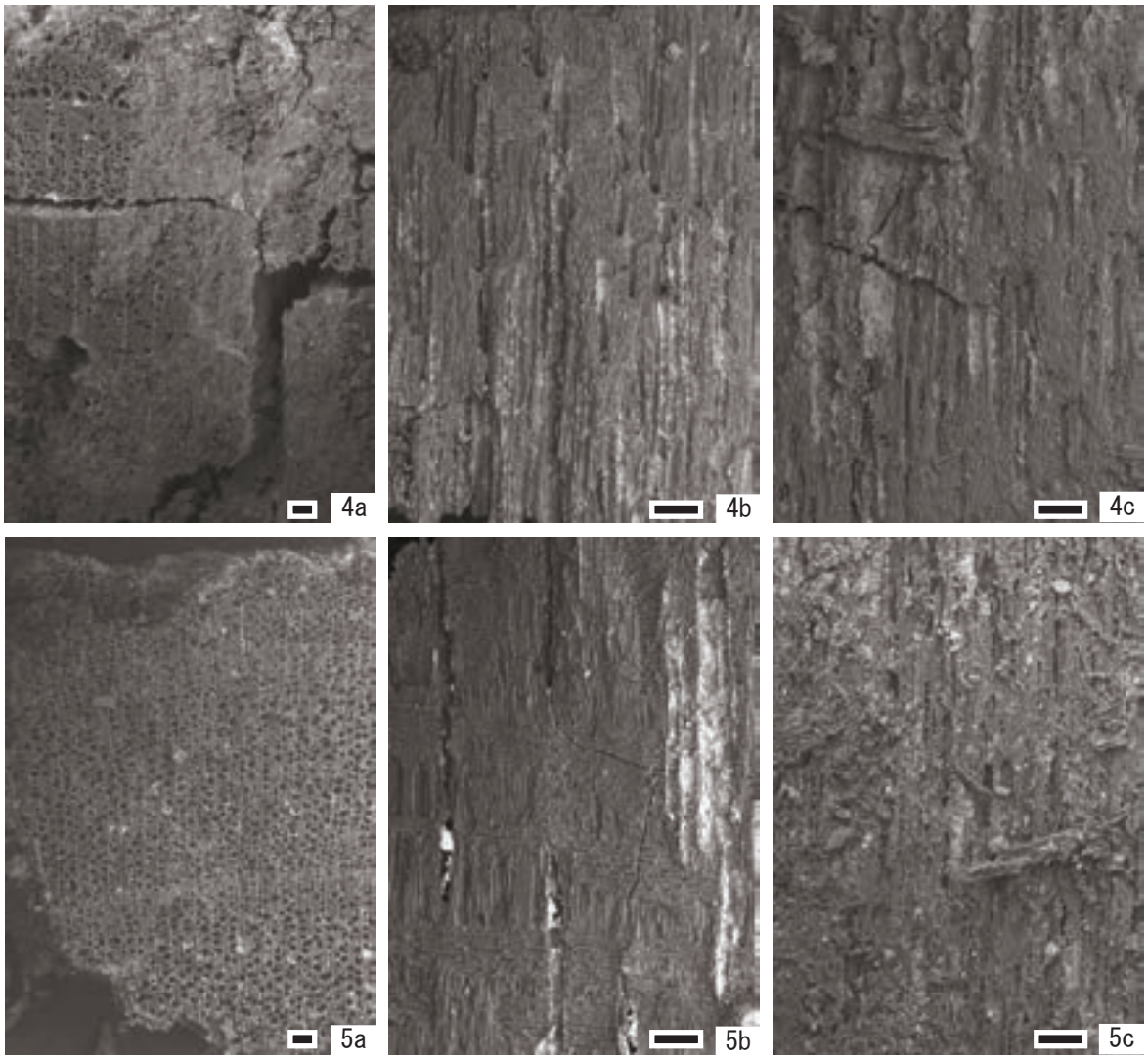


Fig.129　炭化材（２）

４ サクラ属（④－１）　５ サカキ（②－１）a: 木口　b: 柾目 c: 板目　スケールは 100 μ m

【コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）　ブナ科】

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有す。放射組織は同性、単列で 1 ～ 15 細胞高のものと、複合放射組織とがある。

【サクラ属（Prunus）　バラ科】

散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状。内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1 ～ 6 細胞幅、1 ～ 60 細胞高。

【サカキ（Cleyera japonica Thunb.）　ツバキ科サカキ属】

散孔材で、小径の道管が単独または２～３個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1 ～ 20 細胞高。

（６）池内堆積土分析結果の考察

放射性炭素年代測定　年代測定結果を暦年代でみると、年代幅が広い。これは、近世以降の較正曲線がのこぎり状になっていることや、産業革命以降の化石燃料の消費による同位対比の変動などが関係している。測定年代を参考にすれば、いずれの試料も18世紀頃と考えるのが妥当と推測される。

堆積環境　分析したすべての試料から、珪藻化石は産出しなかった。珪藻化石の生態性や群集の生育特性による、直接的な堆積環境の推定は困難である。経験的には、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。次に、珪藻化石を構成するシリカ鉱物は、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度指数が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている（千木良 1995）。また、小杉（1986）によると、珪藻の遺骸は、堆積する際には、その大きさからシルトと挙動を共にするとされている。このことから、粗粒な堆積物の場合、珪藻殻は取り込まれにくいと推定できる。

本分析試料の場合は、好気的環境下で取り込まれた珪藻化石は、堆積後に分解・消失した可能性が高く、枯池とする所見と矛盾しない。

周辺植生　43次池内堆積土試料から、花粉化石はほとんど検出されなかったため、古植生推定を目的とした定量解析を行うことはできなかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失すると考えられている（中村 1967、徳永・山内 1971、三宅・中越 1998 など）。検出された花粉化石のほとんどは保存状態が悪く、花粉外膜に破損や溶解が認められた。また、検出される種類も、比較的分解に強い種類やある程度分解の影響を受けても同定可能な種類である。以上のことから、堆積時に取り込まれた花粉やシダ類胞子は、堆積後の経年変化により分解・消失したと考えられる。

なお、検出された種類から、モミ属、マツ属、スギ属などの針葉樹、コナラ属コナラ亜属など広葉樹は、当時の周辺の里山林などを構成していた樹木である可能性がある。また、他の種類と比べて多く認められるマツ属は、木材の有用性や樹形の美しさなどから植林や植栽されることが多く、古くから城や寺院、庭園などに植栽されてきた種類である。このことから、当時の浜松城内に植栽されていた可能性は高い。

草本植生は、イネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科、タンポポ亜科などが認められている。いずれも開けた明るい場所に生育する種を含むことから、当時の池周辺などに生育していた可能性がある。

一方、植物珪酸体分析の結果によると、池内堆積土９点（①、②－１、②－２、③－１、③－２、④－１、④－２、④－３、⑤）での植物珪酸体の産状から、枯池の内部が埋積する過程で周辺にメダケ属を含むタケ亜科などのイネ科が生育していたと考えられる。なお、タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており（近藤 1982、杉山・藤原 1986）、他の種類よりも残留しやすいことが知られている。今回もタケ亜科が土層中に相対的に多く残留したために、その産出が際立つ結果になったと考えられる。

また、④－２や⑤の付近にはシバ属も生育していたと思われる。なお湿潤な場所に生育するヨシ属が見られなかった点は、枯池とする所見と矛盾しない。

池内堆積土からは、栽培植物であるイネ属も僅かに産出した。イネ属は、その植物体である籾殻や稲藁などが土木工事に利用され易かったことがうかがえる。今回の場合は、調査区内で稲作が行われたとは考えにくく、庭園造成の際にイネ属の植物体が利用されていたことを反映すると考えられる。

植物利用　ハンノキ属の木材はやや重硬で、加工性は普通である。日本各地に自生するため、器具材、建築材、土木材、薪炭材等として広く利用される。アカガシ亜属は非常に重硬な木材である。このため加工が難しく、用途は硬さを生かした農工具などに使われる。西日本を中心とした温暖な地域に多い植物である。コナラ亜属コナラ節は、重硬な木材であり、加工が容易で水湿に強いので建物の柱材などの構造材に多用される。その他、家具、建具、屋根、器具等様々な用途で使われる。この他、火持ちが良いことから薪炭材としても優良である。サクラ属は種類が多く、日本各地に分布する。木材はやや重硬で、木材の耐久性は高い。加工は容易で、器具や挽物として利用される。また、樹皮は工芸品や生薬に使われる。サカキは温暖な地域に生育する常緑樹で葉が神事に用いられる。サカキが身近に存在しない地域ではヒサカキやソヨゴ等を神事に用いるが、これらを「サカキ」と呼ぶことがあるため注意が必要である。材は緻密で強靭であるので、器具材（柄、槌、棒など）として用いられる。検出された種類は、いずれも堀から出土している。有用な木材が多いことから、当時城内で利用されたものが被熱し残存したとみられる。

樹種構成は、サカキとアカガシ亜属が常緑広葉樹で暖地に多いため、周囲に分布していたものと思われる。本地域は海岸に近いことから、現在でも自然度の高い森林では常緑樹が分布する。コナラ亜属コナラ節は、クリやクヌギ節などと共に人里に多い樹木で、里山林を構成する。里山林は、適度な伐採や粗朶の収奪などにより維持管理される森林（二次林）で、萌芽による更新が容易な陽樹で構成される。おそらく、当時人里近くにこのような二次林が存在し、そこから木材を得ていたと思われる。サクラ属は明るい林地を好み、二次林などによくみられる。ハンノキ属の仲間は湿地に生育するものが多いが、ヤシャブシ亜属など開けた場所に二次林を構成する種類もある。木材組織からみて、ヤシャブシ亜属の可能性があることから、サクラ属と同様、里山林などの人里近くに二次林を構成していたと考えられる。以上のことから、今回検出された種類は付近で得やすい木材であると考えられる。

木製品用材データベース（伊東・山田編 2012）をみると、県内の沿岸部で検出された炭化材は、アカガシ亜属、コナラ亜属が多く、少量ではあるがサカキもみられる。これらは、用途が広く、多用されたためと考えられるが、他方で、不完全燃焼を起こして炭になりやすいことや、硬く土壌中で残存しやすいことも、多く検出される要因であると推測される。

２　三和土の組成分析

（１）概　要

43 次調査検出した庭園遺構は枯池を三和土を用いて表現した枯山水庭園とみられる。枯池の三和土を対照とし、成分と組成を分析し、岩石学的な特徴を明らかにするための分析を実施した。

（２）試料（Tab.7（サンプル採取箇所は Fig.123 参照））

浜松城跡 43 次調査 32 区で検出した三和土から採取したのは、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪の試料計５点である。一般的に三和土とは、土に消石灰、にがり、スサなどを混ぜ、締め固めて施工されるものと定義されている。

Tab.7　三和土組成成分分析試料一覧

試料番号	種類
⑦	土壌
⑧	土壌
⑨	土壌
⑩	土壌
⑪	土壌

（３）分　析

薄片作製鑑定　薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、三和土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

観察結果は松田ほか（1999）の方法に従って表記する。これは、三和土中の砕屑物について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。以下にその手順を述べる。

砕屑物の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径 0.5mm 以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砕屑物の粒径組成ヒストグラム、砕屑物・基質・孔隙の割合を示す棒グラフを呈示する。

Ｘ線回折分析　試料は、乾燥器において 60℃以下で 12 時間以上乾燥させる。乾燥した試料は、鉄乳鉢を用いて軽く粗粉砕し、目開き 63 μ m のステンレス篩いを用いて篩い、通過した細粒分を供試する。回収した細粒試料は、メノウ乳鉢を用いて微粉砕する。微粉試料は、Ｘ線回折用アルミニウムホルダーに充填し、以下の条件でＸ線回折試験を実施する。

装　置：理学電気製 MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Cu（Kα）	Scattering Slit：1°
Monochrometer：湾曲 Graphite	Recieving Slit：0.3mm
Voltage：40KV	Scanning Speed：2°/min
Current：40mA	Scanning Mode：連続法
Detector：SC	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：2 ～ 61°

分析結果　薄片作製鑑定の結果を Tab.8、Fig.130、Fig.131 に示す。砕屑物の鉱物・岩石組成は、⑧と、⑦、⑨、⑩、⑪とで大きく２種類のグループに分けることができる。前者は、石灰岩の岩片を多く

Tab.8　三和土中砕屑物の計数結果

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																			合計
			鉱物片						岩石片											その他		
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	白雲母	黒雲母	チャート	頁岩	砂岩	石灰岩	凝灰岩	多結晶石英	花崗岩類	結晶片岩	ホルンフェルス	粘板岩	変質岩	土塊	化石片	
⑦	砂	細礫																				0
		極粗粒砂												1								1
		粗粒砂	2											7	4							13
		中粒砂	6		2	1		2	2					4	3							20
		細粒砂	11	2	1		2	1	1	1				3	2							24
		極細粒砂	15	3	1			5						1								25
		粗粒シルト	6					2														8
		中粒シルト																				0
	基質		基質は粘土鉱物、珪長質鉱物、雲母鉱物などで埋められる。植物珪酸体あり。基質に炭酸塩鉱物は認められない。石灰岩あり。																			503
	孔隙		孔隙に充填鉱物は認められない。楕円形状を示し、弱い定向配列を示す。																			31
⑧	砂	細礫																				0
		極粗粒砂										22										22
		粗粒砂										37										37
		中粒砂										21										21
		細粒砂								1		16										17
		極細粒砂	2					1				6										9
		粗粒シルト																				0
		中粒シルト																				0
	基質		基質は粘土鉱物、珪長質鉱物、雲母鉱物などで埋められる。斜長石あり。																			84
	孔隙		孔隙に充填鉱物は認められない。																			10
⑨	砂	細礫									1											1
		極粗粒砂							4	3	1			2					1		4	15
		粗粒砂	12	1				1	12	7	5			9	5	1	1		2	1	2	59
		中粒砂	21	2				2	3	2	1			5	5							41
		細粒砂	9	1			1	2	2				1	7	1							24
		極細粒砂	12		1		1	1						1	1							17
		粗粒シルト	4																			4
		中粒シルト																				0
	基質		基質は、粘土鉱物、炭酸塩鉱物などで埋められる。植物片あり。植物片は炭酸塩鉱物によって置換されている。																			403
	孔隙		孔隙は不定形状を呈し、配向性は認められない。孔隙の周縁部に沿って、炭酸塩鉱物が分布する。																			19
⑩	砂	細礫									1											1
		極粗粒砂																				0
		粗粒砂	2						2	1	1	1		4	3				1		1	16
		中粒砂	3					2	1	1	1			2	2							12
		細粒砂	4		1		1	1		3	1			3	1							15
		極細粒砂	3				1	1														5
		粗粒シルト																				0
		中粒シルト																				0
	基質		基質は、粘土鉱物、炭酸塩鉱物などで埋められる。																			122
	孔隙		孔隙に充填鉱物は認められない。																			4
⑪	砂	細礫							1													1
		極粗粒砂	1						3	1	2			5	5	2		1		1	1	22
		粗粒砂	10	1					7	3	3			9	4	2			1			40
		中粒砂	9	1	1				10	4	1			11	3							40
		細粒砂	7	1	1		1	2	1					5	1							19
		極細粒砂	8	1	1			1														11
		粗粒シルト	1																			1
		中粒シルト																				0
	基質		基質は、粘土鉱物、炭酸塩鉱物、雲母鉱物、非晶質物質などで埋められる。植物片あり。炭酸塩鉱物は結晶性良好のものから、結晶性不良のものまで認められる。																			619
	孔隙		孔隙に充填鉱物は認められない。																			33

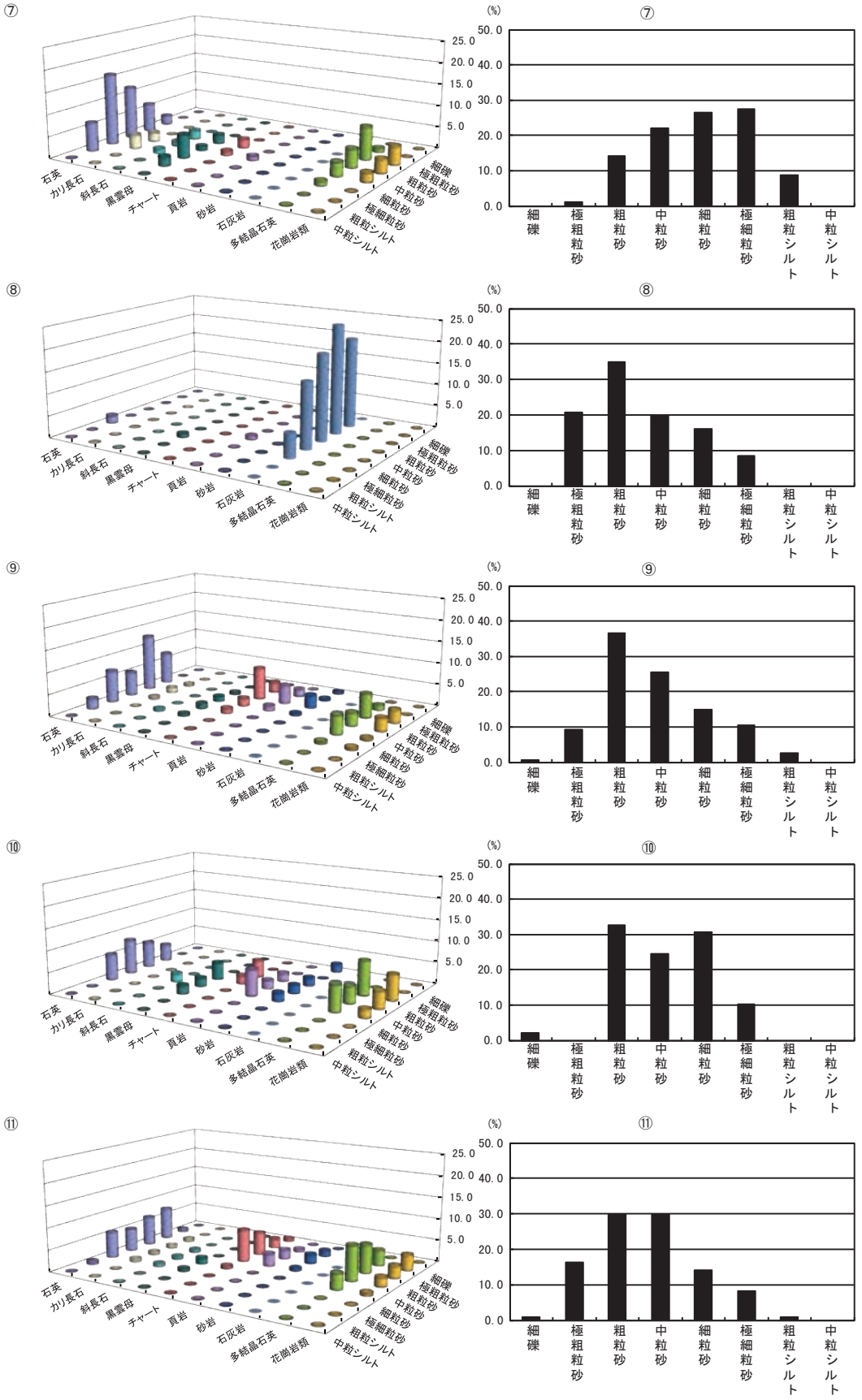


Fig.130　胎土中の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（１）

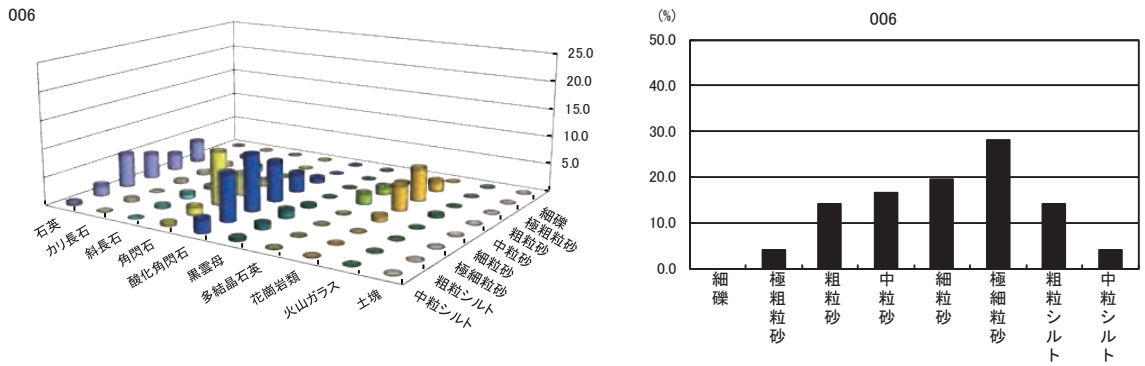


Fig.131　胎土中の砕屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成（２）

Tab.9　X線回折分析による検出鉱物

試料番号	検出鉱物						
	石英	カリ長石	斜長石	ハロイサイト	方解石	アラゴナイト	シデライト
⑦	◎	±	±	±			
⑧	△		±	±	○		
⑨	○	±	＋	±	△	±	±
⑩	○	±		±	△		
⑪	○	±	±	±	△	±	±

量比
　◎：多量 (＞5,000cps)，○：中量 (2,500 ～ 5,000cps)，　△：少量 (500 ～ 2,500cps)，
　＋：微量 (250 ～ 500cps)，±：きわめて微量 (＜250cps).
X 線回折チャート上で使用した pdf データの鉱物名
　石英：quartz　カリ長石：microcline　斜長石：albite　ハロイサイト：halloysite
　方解石：calcite　アラゴナイト：aragonite　シデライト：siderite

含む組成である。後者のグループは、石英の鉱物片、多結晶石英および花崗岩の岩片を多く含み、黒雲母の鉱物片、チャート、頁岩の岩片を伴うという組成を示す。また、後者のグループは、基質に炭酸塩鉱物を含まない⑦と、基質に炭酸塩鉱物を含む⑨、⑩、⑪とに細分される。

粒径組成は、⑦は極細粒砂、⑧、⑨、⑩、⑪は粗粒砂の多い組成であり、⑦とそれ以外の試料間で粒径組成が異なっている。

砕屑物・基質・孔隙の割合は、⑦、⑪が 15% 程度、⑧が約 50% あるのに対して、⑨、⑩は 30% 弱である。

試験結果の同定解析は、X線粉末回折線解析プログラム JADE を用い、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物を PDF（Powder Diffraction File）データから検索し、同定した。結果は一覧表として Tab.9 に示し、X線回折チャートは Fig.132 ～ 136 に示した。図中の最上段が試料の回折チャートであり、下段が同定された結晶性鉱物もしくは化合物の回折パターンである。量比は､最強回折線の回折強度（cps）から、多量（＞5,000cps）、中量（2,500 ～ 5,000cps）、少量（500 ～ 2,500cps）、微量（250 ～ 500cps）およびきわめて微量（＜250cps）という基準で判定した。結果は次のとおり。

1）⑦　不定方位法では、多量の石英およびきわめて微量のカリ長石・斜長石・ハロイサイトが検出される。

2）⑧　不定方位法では、中量の方解石、少量の石英およびきわめて微量の斜長石・ハロイサイトが検出される。
3）⑨　不定方位法では、中量の石英、少量の方解石、微量の斜長石およびきわめて微量のカリ長石・ハロイサイト・アラゴナイト・シデライトが検出される。
4）⑩　不定方位法では、中量の石英、少量の方解石およびきわめて微量のカリ長石・ハロイサイトが検出される。
5）⑪　不定方位法では、中量の石英、少量の方解石およびきわめて微量のカリ長石・斜長石・ハロイサイト・アラゴナイト・シデライトが検出される。

（4）三和土組成分析結果の考察

浜松城周辺の台地や低地を構成する堆積物は、主に天竜川水系の河川によってもたらされた砕屑物により構成されていると考えられる。天竜川は、諏訪湖を水源とし、扇状地性の浜松平野を形成して太平洋（遠州灘）に流下する河川である。牧本ほか（2004）の記載によれば、上流域の赤石山地は、白亜紀前期・後期に形成された領家帯の花崗岩類が分布する。中流域には、三波川帯の泥質片岩・苦鉄質片岩、古第三紀－白亜紀の四万十帯の砂岩、泥岩、チャートなどが分布する。赤石山地の南部には、ジュラ紀の秩父帯の砂岩、泥岩、チャート、玄武岩溶岩・同質火砕岩、石灰岩などが分布する。したがって、天竜川流域の堆積物には、石英および黒雲母の鉱物片と多結晶石英、チャートおよび花崗岩の岩片とが相対的に多く含まれていると考えられる。

X線回折分析からは、Tab.9 に示される鉱物が検出された。試料⑦においては砂粒～シルトとして含まれているとみられる石英、カリ長石、斜長石が検出され、石英が卓越している。他には粘土鉱物のハロイサイトも検出される。これらは、土壌の構成鉱物であり、三和土に関連する鉱物は含まれていない。一方、試料⑧～⑪においては、石英、カリ長石、斜長石、ハロイサイトなどのほかに方解石が明瞭に検出されている。特に試料⑧において顕著である。三和土に混ぜこまれた消石灰（$Ca(OH)_2$）は経年的に炭酸化し、方解石（$CaCO_3$）が生成することになる。

今回の試料における鉱物種と岩石種による分類のうち、基質に炭酸塩鉱物を含まないという点を除外すれば、⑦、⑨～⑪は、天竜川流域の地質学的背景を反映していると考えられる。⑦は、⑨～⑪に含まれる鉱物片や岩片の組成は類似しているものの、細粒砂を主体とすることと、基質に炭酸塩鉱物を含まないという点で差異が認められる。炭酸塩鉱物は、X線回折分析においても検出されていないことから、⑦は三和土ではなく、土壌とみられる。
⑧は、石灰岩の岩片を多く含み、⑦、⑨～⑪とは異なる。分析前の試料を見ると、石灰岩の中礫も含まれていることから、消石灰の材料のひとつである石灰岩が、人為的に多く混ぜ込まれている試料ということができる。

⑨、⑩、⑪は、粗粒砂を主体とする砕屑物を含む。石英の鉱物片、多結晶石英および花崗岩の岩片を多く含むという点では⑦と類似しているが、黒雲母の鉱物片やチャートの岩片が多く含まれるという点で差異が認められる。⑦との違いは、材料採取地のより局地的な違い（粗粒砂を多く含む堆積物）に起因することが推定される。また、基質は、粘土と炭酸塩鉱物が混在して分布する状況が確認されていることから、試料⑨～⑪において検出された方解石は三和土を施工するために混ぜられた消石灰に由来するものと推測することができる。したがって⑨、⑩、⑪は、三和土とみなすことができる。⑨、⑩、⑪は、スサに由来する植物片に乏しいか、植物片の検出が認められない試料もあることから、施工時にスサを混ぜ込まないタイプの三和土と判断される。

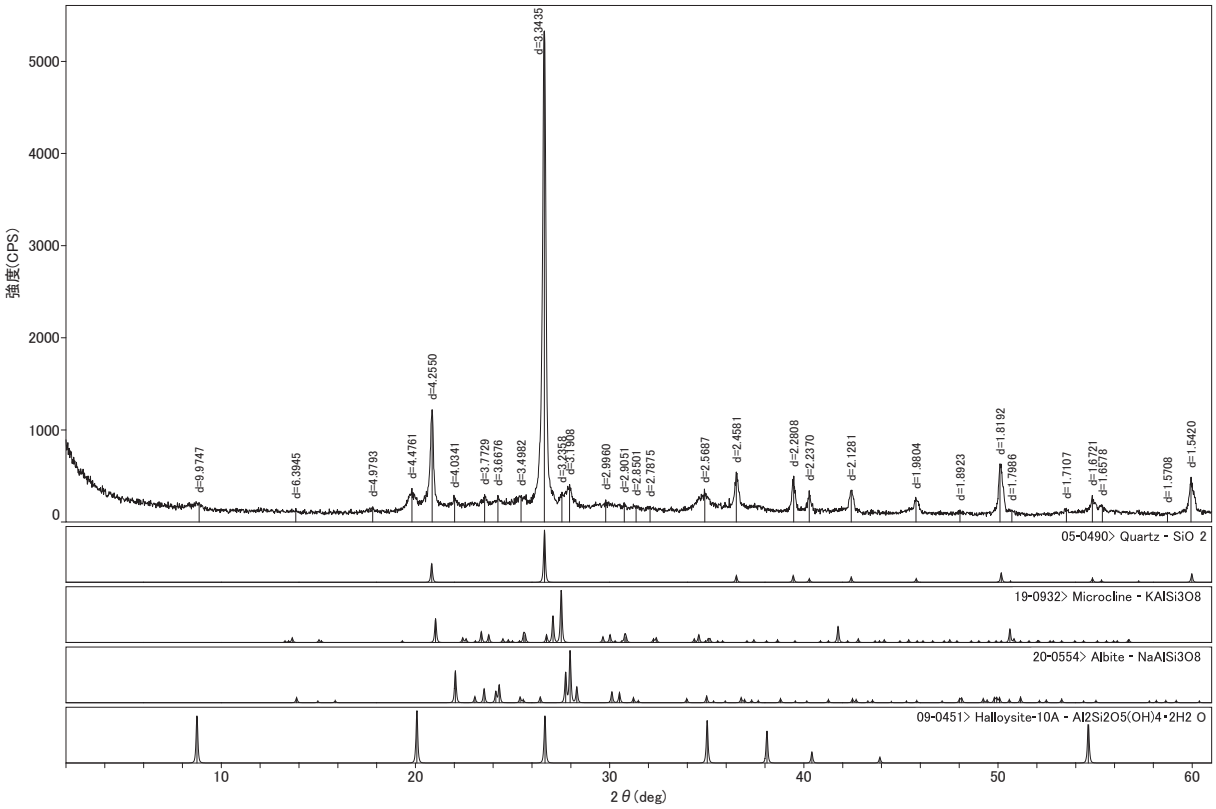


Fig.132　⑦の不定方位法Ｘ線回折チャート

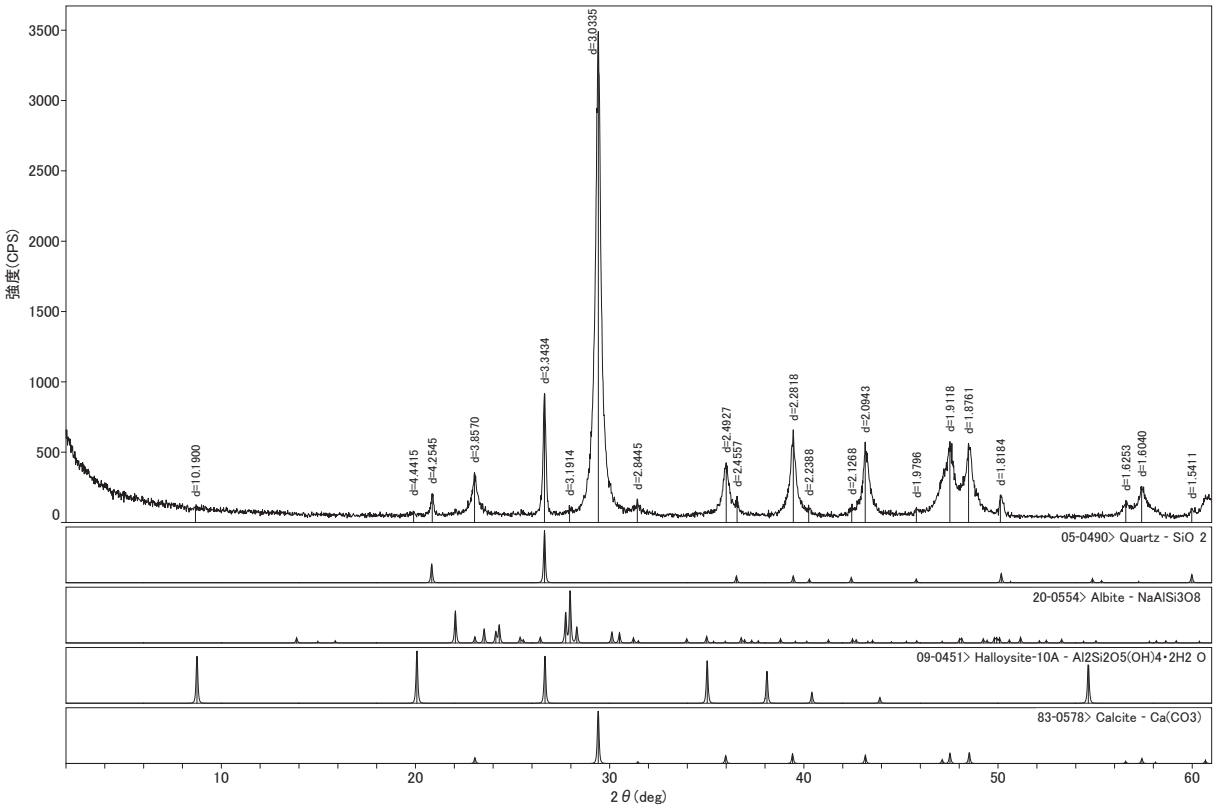


Fig.133　⑧の不定方位法Ｘ線回折チャート

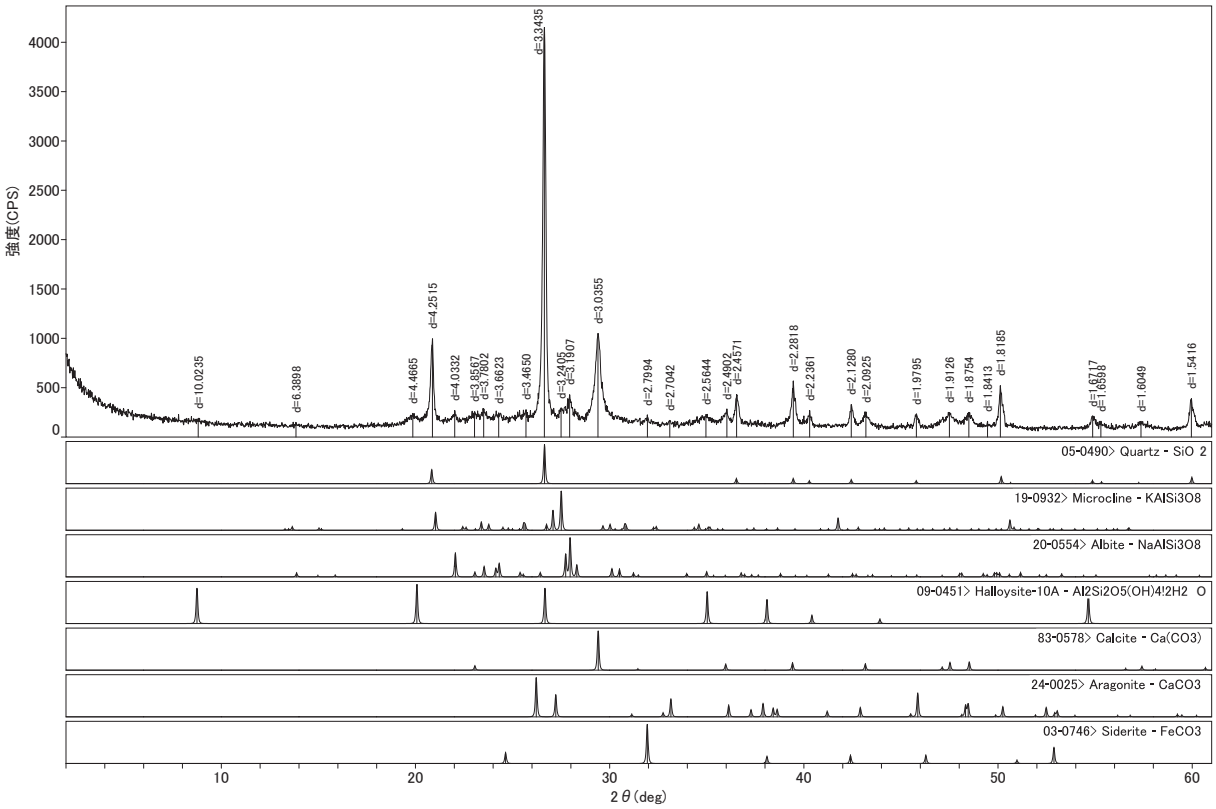


Fig.134　⑨の不定方位法Ｘ線回折チャート

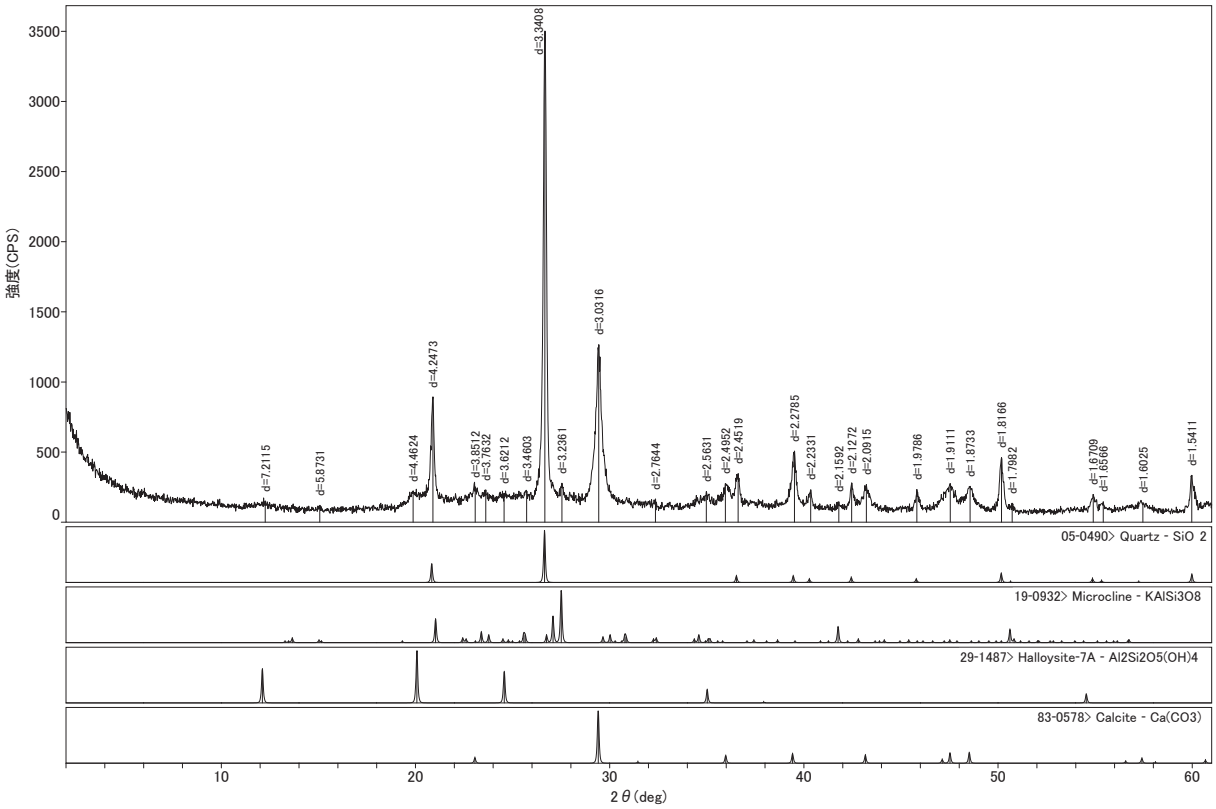


Fig.135　⑩の不定方位法Ｘ線回折チャート

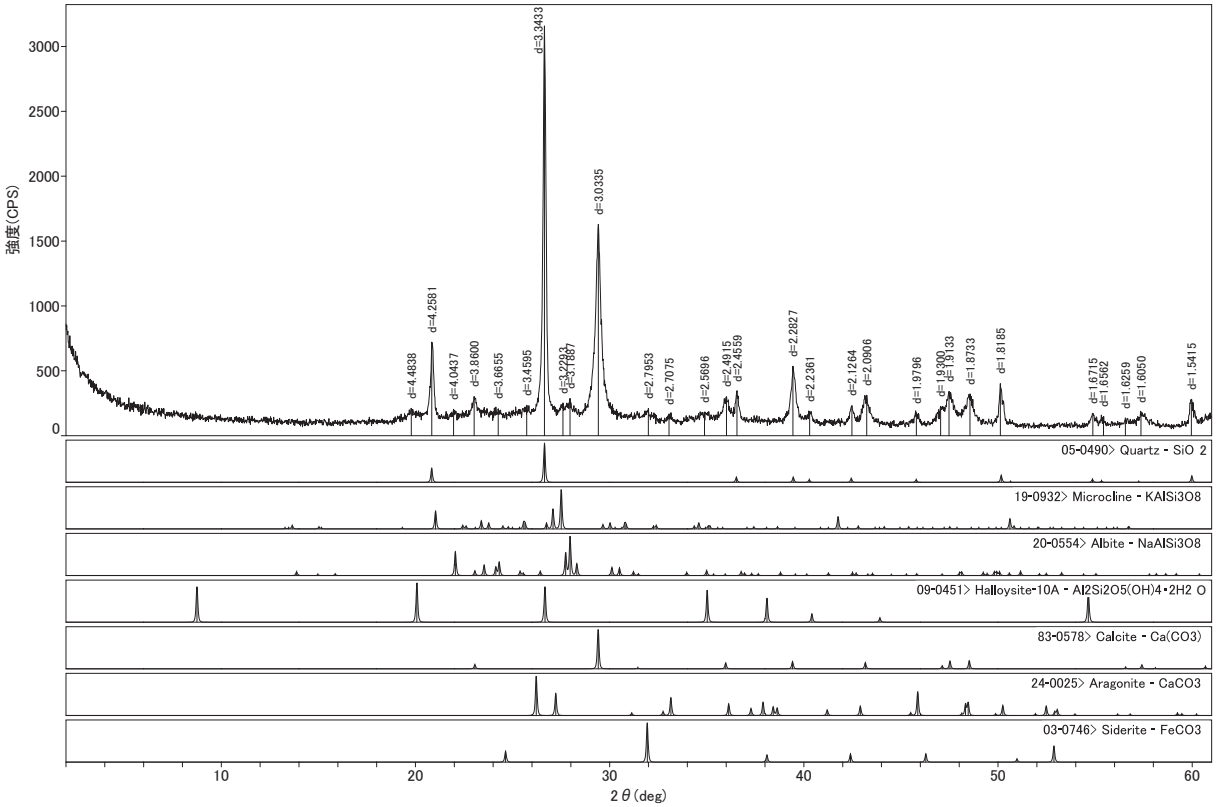


Fig.136　⑪の不定方位法Ｘ線回折チャート

［引用文献］

千木良雅弘　1995『風化と崩壊』近未来社　204p

林昭三　1991『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ｉ」『木材研究・資料』31　京都大学木質科学研究所　pp.81-181

伊東隆夫　1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32　京都大学木質科学研究所　pp.66-176

伊東隆夫　1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33　京都大学木質科学研究所　pp.83-201

伊東隆夫　1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34　京都大学木質科学研究所　pp.30-166

伊東隆夫　1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35　京都大学木質科学研究所　pp.47-216

伊東隆夫・山田昌久編　2012『木の考古学　出土木製品用材データベース』海青社　449p

Ri chter H. G. , Grosser D. , Heinz I. and Gasson P. E. 編　2006『針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修）海青社　70p［Richter H. G. , Grosser D. , Heinz I. and GassonP. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］

小杉正人 1986「陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－」『植生史研究』１　pp.9-44.

近藤錬三　1982「Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究」『昭和 56 年度科学研究費 (一般研究Ｃ) 研究成果報告書』 32p

近藤錬三　2010『プラント・オパール図譜』北海道大学出版会　387p

三宅尚・中越信和　1998「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』６　pp.15-30

三好教夫・藤木利之・木村裕子　2011『日本産花粉図鑑』北海道大学出版会 824p

中村純　1967『花粉分析』古今書院　232p

中村純　1980「日本産花粉の標徴Ｉ・Ⅱ (図版)」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』 第 12・13 集　91p

島倉巳三郎　1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第 5 集 60p

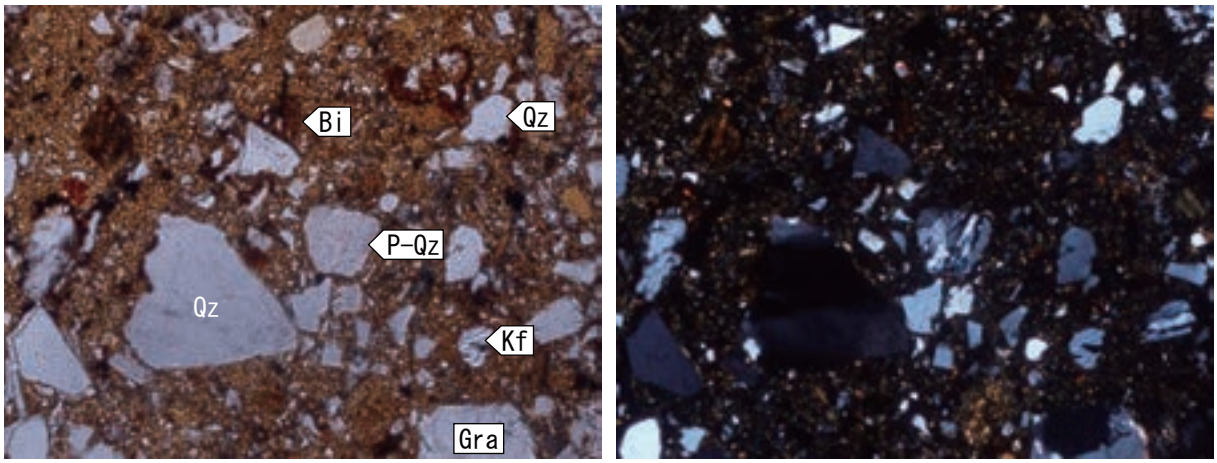
島地謙・伊東隆夫　1982『図説木材組織』地球社　176p

杉山真二・藤原宏志　1986「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」『考古学と自然科学』19　pp.69-84

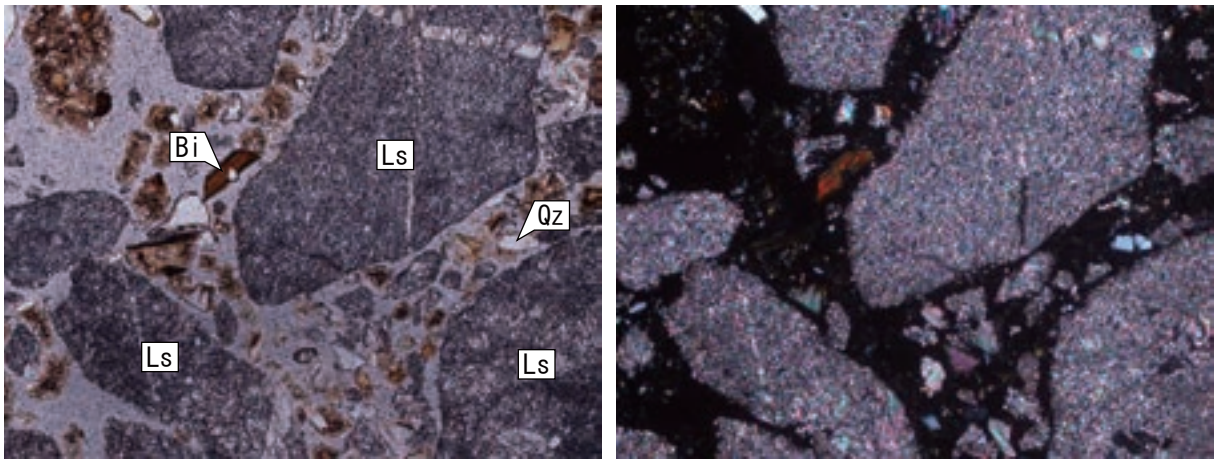
徳永重元・山内輝子　1971『花粉・胞子化石の研究法』共立出版株式会社　pp.50-73

Wheeler E. A. , Bass P. and Gasson P. E. 編　1998『広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩（日本語版監修）海青社 122p［Wheeler E. A. , Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］

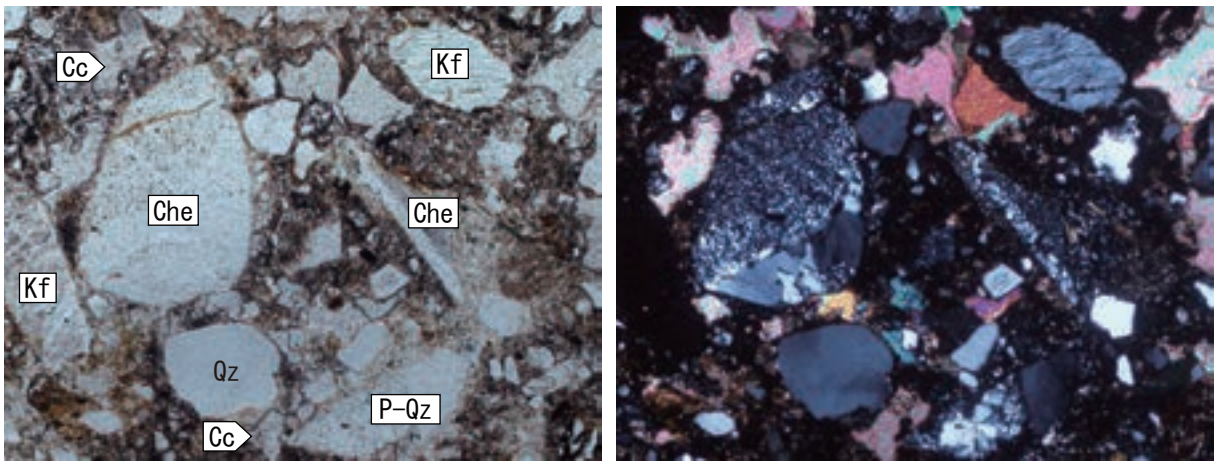
牧本博・山田直利・水野清秀・高田亮・駒沢正夫・須藤定久　2004『20 万分の 1 地質図幅「豊橋及び伊良湖岬」』産業技術総合研究所地質調査総合センター



1. 試料⑦



2. 試料⑧

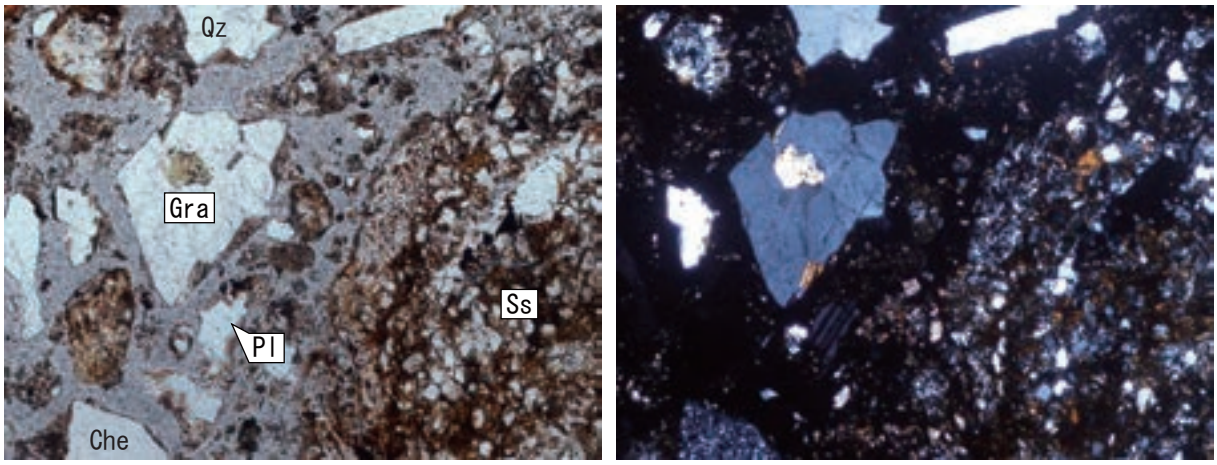


3. 試料⑨

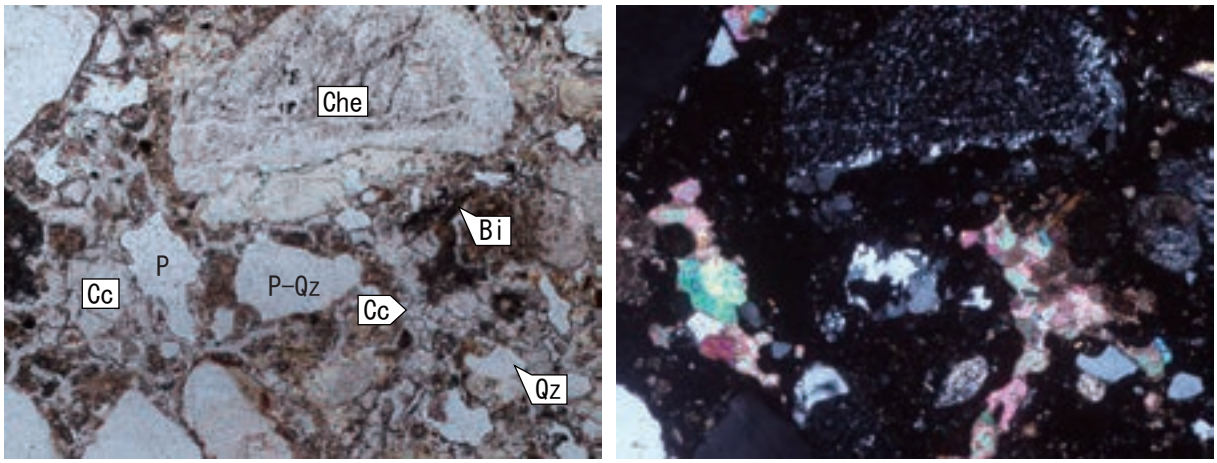
0.5mm

Fig.137　薄片（１）

Qz: 石英．Kf: カリ長石．Bi: 黒雲母．Cc: 方解石．Che: チャート．Ls: 石灰岩．P-Qz: 多結晶石英．Gra: 花崗岩．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



4. 試料⑩



5. 試料⑪

0.5mm

Fig.138　薄片（２）

Qz: 石英．Pl: 斜長石．Bi: 黒雲母．Cc: 方解石．Che: チャート．Ss: 砂岩．P-Qz: 多結晶石英．Gra: 花崗岩．P: 孔隙．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

３　浜松城跡出土遺物のＸ線写真撮影

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、35 次調査及び 43 次調査で出土した金属製の遺物を対象に実施した、Ｘ線写真撮影の結果を報告する。

（１）試　料

対象試料は、浜松城跡 43 次調査で出土した３点（⑫、⑬、⑭）及び、35 次調査で出土した１点（⑮）の、計４点である。

（２）分析方法

試料を事前に写真撮影し、観察する。その後、Ｘ線透過撮影を行った。撮影は電圧が 300KV、電流が３mA、照射時間が 120 秒間、照射距離が１ｍ、ステンレス２mm のフィルター使用、という条件で行った。

（３）結　果

試料外観を Fig.140 に、Ｘ線透過写真を Fig.141 に示す。

浜松城跡 43 次調査で出土した⑫、⑬及び⑭は、Ｘ線透過写真の観察から細い針金状のものが結束されている様子を確認できる。特に⑫は、針金状のものが束になっている様子が確認できた。

一方、35 次調査で出土した⑮は、特に構造を示すものは認められず、金属が詰まった状態が確認された。底面が湾曲していることから、るつぼなどの底に溜まった鉄塊の可能性がある。

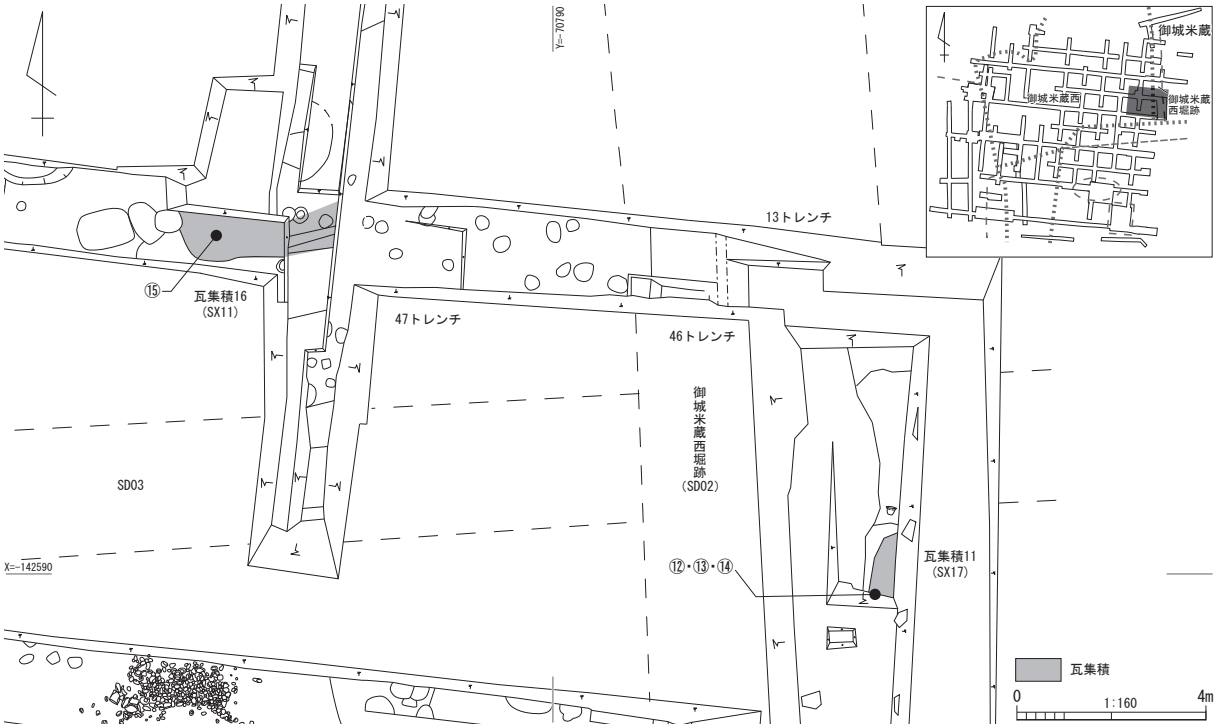
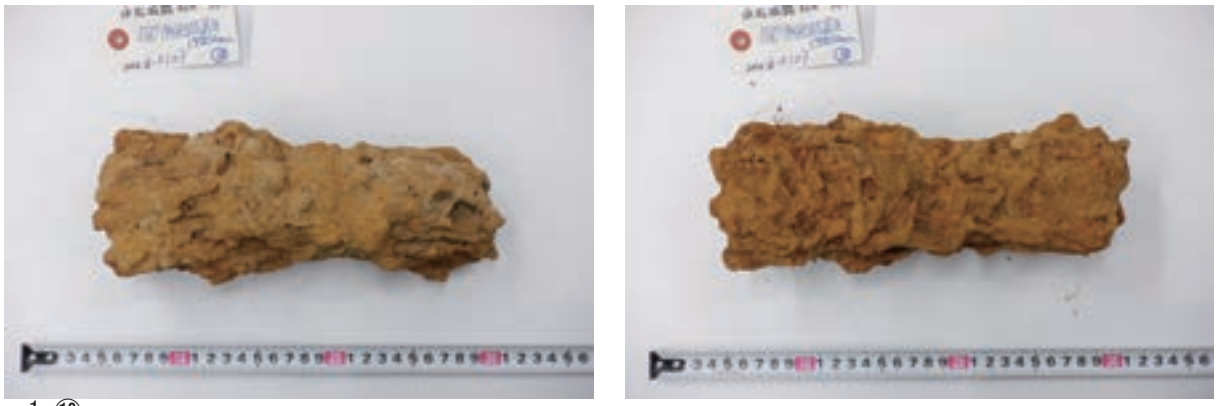
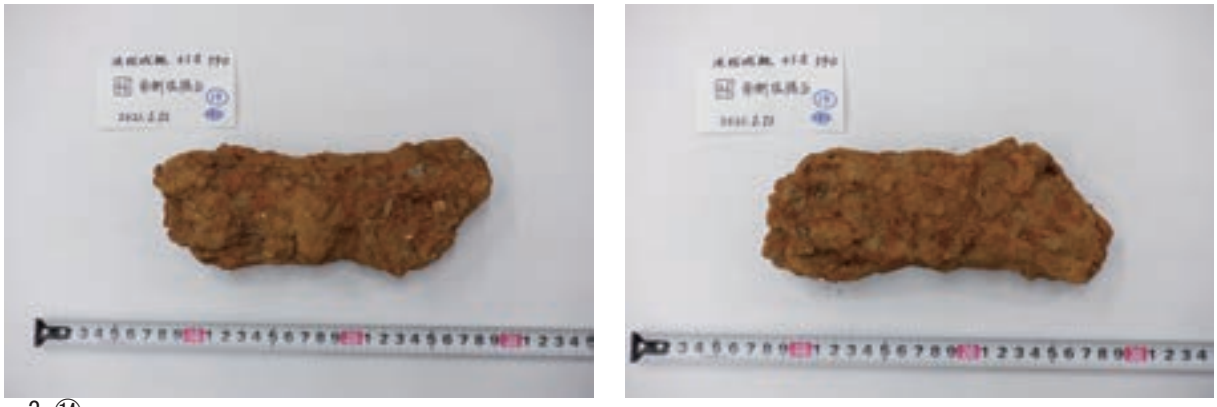


Fig.139　試料採取位置



1. ⑫

2. ⑬



3. ⑭

4. ⑮

Fig.140　試料外観

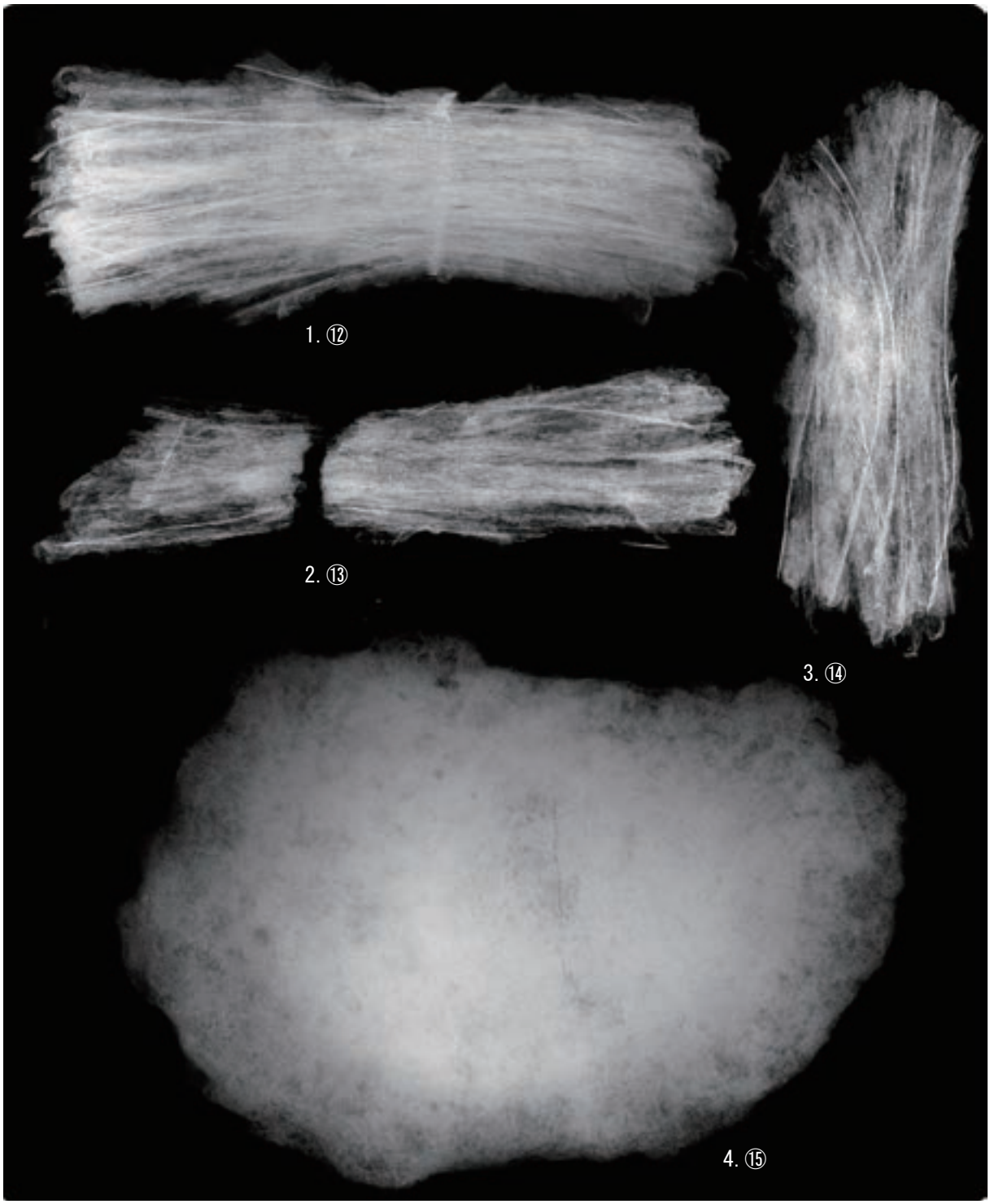


Fig.141　Ｘ線透過写真

4　本丸石垣石材の採取地推定

楠　賢司・三須寛希・竹林知大・
酒井瑞帆・佐竹凌汰（静岡大学）

（1）方　法

調査対象とした本丸石垣石材　浜松城跡 35 次発掘調査により、本丸の北東隅及び東側において石垣が出土した。この内、調査対象石材は、北東隅については、石垣の上部一列及び角に位置した比較的大きい 22 試料（A1 ～ 22）とした（Fig.142）。一方、東側については、崩落した石垣石材の内、北半分に位置した比較的大きい 30 試料（B1 ～ 30）とした（Fig.143）。即ち、計 52 試料を対象とした。尚、調査対象試料は全て巨角礫であった。加えて、それらには採取跡及び加工跡が認められなかった。これらのことを鑑みると、調査対象とした本丸石垣石材は自然石（転石）であると考えられる。

採取地推定の調査範囲　築城のための石材が領内に存在すれば、そこから調達される（加藤 2017）。このことを踏まえると、本丸石垣に用いられた石材は当時城主であった堀尾吉晴の領内から運搬されたと考えられる。因みに、堀尾領は現在の浜松市域と概ね一致する（浜松市博物館 2012；Fig.144）。一般的に、城郭近辺に利用可能な石材が認められない場合は遠方より運搬されるが、この際効果的なのは水運の利用である（香川 2018、中井 2019）。浜松城近辺には出土したサイズの巨礫が存在しないこと、又、堀尾領内には浜名湖（Fig.144）及び天竜川（Fig.144）という比較的大きな水域があることを踏まえると、両水域の何れか又はその両方を石材輸送に利用したと考えられる。このことは露頭が浜名湖北部の都田川流域及び浜松市天竜区二俣町二俣以北の天竜川流域に広く分布し（Fig.144）、その近辺には出土したサイズの巨礫が普遍的に認められることからも支持される。又、当時、浜名湖では中村家（現在の浜松市西区雄踏町宇布見）、天竜川では田代家（現在の浜松市天竜区二俣町鹿島）が水運を営んでいたことからもその可能性は十分あると言える。尚、両家をはじめ、当時の浜松城の石垣石材運搬に関する史料はこれまでに発見されていないため、本仮説の古記録的検証は不可能である。

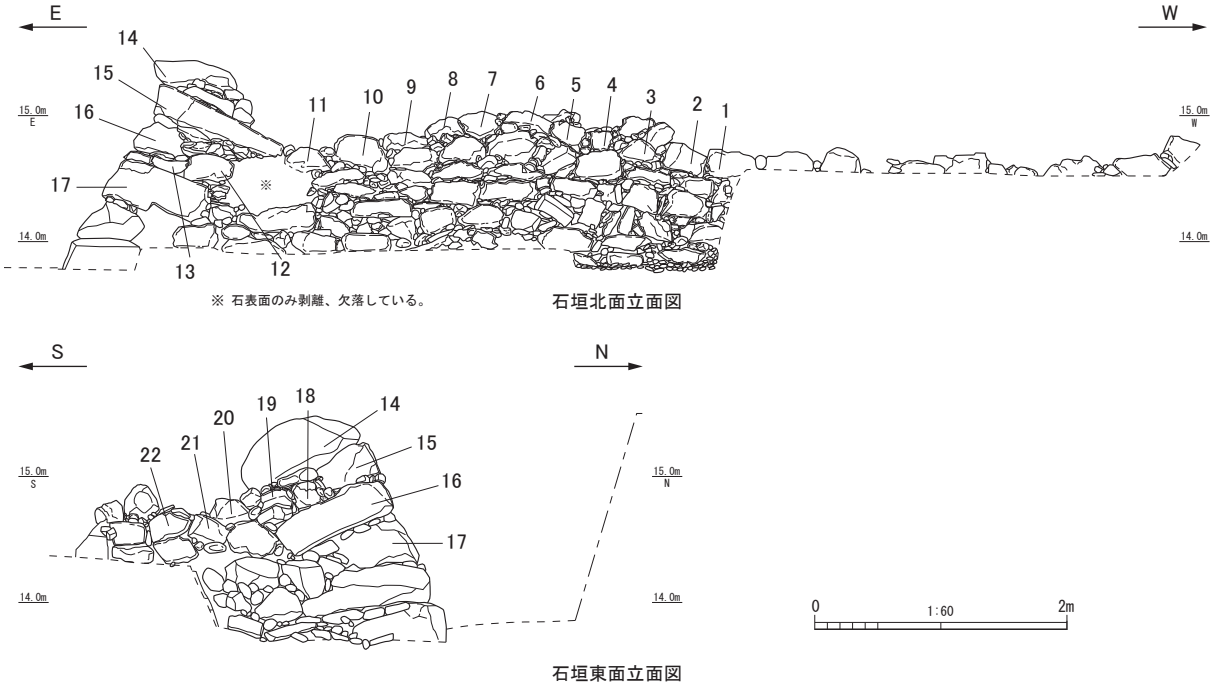


Fig.142　本丸北東隅石垣に用いられた調査対象石材 22 試料（A1 ～ 22）の位置

先述の通り、調査対象とした本丸石垣石材は全て自然由来の巨角礫であった。このことを鑑みると、それらは露頭付近から採取されたと考えられる。言い換えれば、本丸石垣石材の産地露頭を解明できれば、その近辺を採取地としても差し支えないと判断できる。以上より、本調査では堀尾領の内、本丸石垣石材に用いられた岩石種が分布する都田川流域及び天竜川流域の各種地質帯（秩父帯、四万十帯、三波川帯：Fig.144）の露頭を対象とした。露頭からの試料採取に当たっては、20 万分の１地質図幅「豊橋及び伊良湖岬」（牧本ほか 2004）、５万分の１地質図幅「浜松」（礒見・井上 1972）・「豊橋及び田原」（中島ほか 2008）・「三河大野」（斎藤 1952）・「秋葉山」（斎藤・礒見 1955）及び狩野（1984）を用いた。採取した試料の中には本調査中に見出した露頭のものも一部含まれている。

研磨断面及び岩石薄片の作製　採取した岩石試料をダイヤモンドカッターで切断した。この際、面構造を有する試料については、組織の構造解析が可能になるように極力面に対して垂直に切断した。次に、切断面を各種研磨粉（炭化珪素系＃ 80、150、320、600；アルミナ系＃ 1000、3000）を用いて段階的に平滑にすることで肉眼観察用及び化学分析用の研磨断面を得た。

研磨した岩石試片を約 130℃のホットプレート上で約２時間乾燥後、研磨面とスライドグラスをエポキシ樹脂で接着させた。その後、岩石面を前述の各種研磨粉を用いて段階的に研磨し、約 0.03mm の薄片にした。得られた岩石薄片は５分間超音波洗浄後、更にダイヤモンドヤスリ（＃ 10000）で表面研磨を行い、検鏡試料とした。

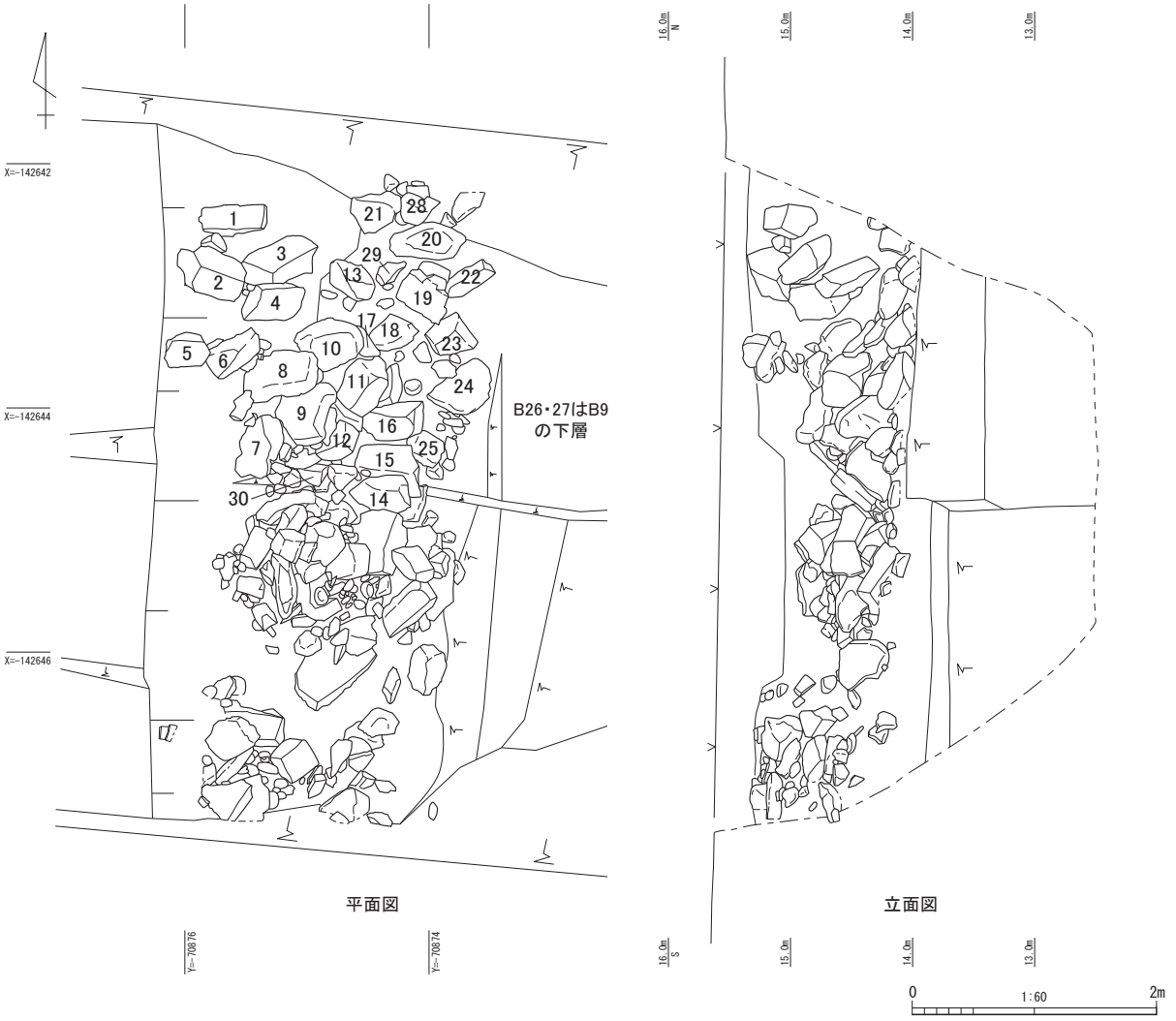


Fig.143　本丸東石垣に用いられた調査対象石材 30 試料（B1 ～ 30）の位置

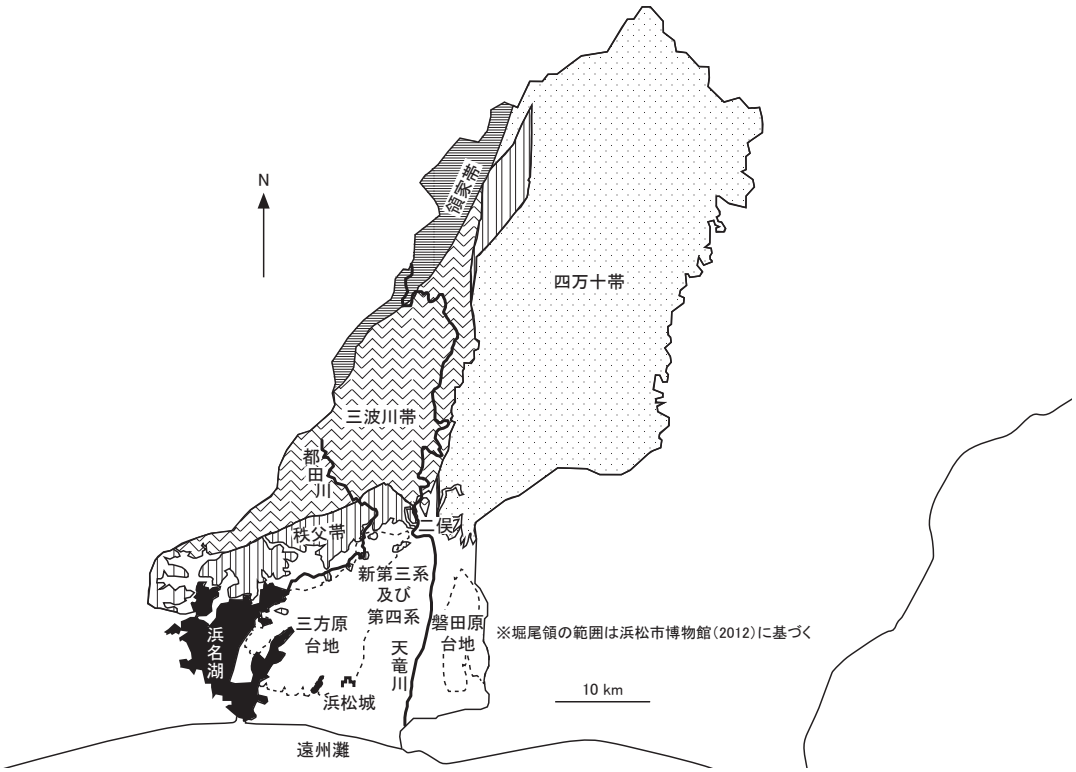


Fig.144　堀尾領に分布する主な水域及び地質図（牧本ほか 2004 より）

化学分析　化学分析には前小々節の研磨断面（仕上げ研磨粉：アルミナ系＃ 3000）を用いた。同断面中の代表的な部分の直径 10mm 内をエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（SHIMADZU、EDX-8000；以降、EDX と称す）により測定した。

石灰質片岩を除く岩石の化学分析は、狩野ほか（2021）及び楠ほか（2022）に準じた。即ち、Fundamental Parameter 法（FP 法）によって SiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3（全 Fe）、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5 の総濃度が 100wt.% になるように分析した。本法による地質調査所（現産業技術総合研究所地質調査総合センター）が調整した岩石標準試料 JCh-1（チャート）、JG-1a（花崗閃緑岩）及び JB-1a（玄武岩）中における上記 10 元素濃度の回収率及び繰り返し測定による相対標準偏差（以降、RSD と称す）の結果を Tab.10 に示す。JCh-1 及び JB-1a の P_2O_5 を除く 9 元素の濃度は 68 ～ 138% の範囲で一致し、RSD は JCh-1 の MgO と Na_2O を除けば 3.6% 以下であった。特に SiO_2 濃度の JCh-1、JG-1a 及び JB-1a の回収率はそれぞれ 100%、100% 及び 101%、RSD についてもそれぞれ 0%、0.2% 及び 0.8% と非常に良好であった。一方、JCh-1 の P_2O_5 濃度は回収率及び RSD が共に著しく不良であり、JB-1a の P_2O_5 濃度については回収率が不良であったため、珪質岩（チャート、石英片岩）及び玄武岩質岩を原岩とする苦鉄質片岩の産地解析に P_2O_5 を用いないことにした。又、JCh-1 の MgO 及び Na_2O 濃度の RSD はそれぞれ 15.3% 及び 21.1% と著しく不良であったため、珪質岩（チャート、石英片岩）の産地解析に両元素を用いないことにした。尚、JCh-1 の TiO_2、MnO 及び Al_2O_3 濃度の回収率は 120 ～ 130% 台とやや高かったが、RSD については２～３% 台と良好であったため、チャートの産地解析に同３元素を用いることは差し支えないと判断した。加えて、JB-1a の MgO 濃度の回収率についても 68% とやや低かったが、RSD については 1.8% と良好であったため、玄武岩質岩を原岩とする苦鉄質片岩の産地解析に同元素を用いることは差し支えないと判断した。

一方、石灰質片岩は検量線法によって Ca、Mg 及び Sr 濃度を調べた。３元素の内、Ca 及び Sr 濃度は地質調査所（現産業技術総合研究所地質調査総合センター）調整の岩石標準試料 JCt-1（シャ

Tab.10　岩石標準試料中の各元素濃度の回収率及び相対標準偏差(RSD)

	JCh-1		JG-1a		JB-1a	
	回収率 (%, n = 5)	RSD (%, n = 5)	回収率 (%, n = 5)	RSD (%, n = 5)	回収率 (%, n = 5)	RSD (%, n = 5)
SiO_2	100	0.0	100	0.2	101	0.8
TiO_2	128	2.2	109	0.5	106	2.5
Al_2O_2	137	2.6	106	0.3	115	0.7
Fe_2O_3	103	2.7	100	0.6	105	3.1
MnO	138	3.5	117	1.3	117	3.6
MgO	88	15.3	98	1.7	68	1.8
CaO	104	3.3	118	0.5	101	1.5
Na_2O	108	21.1	88	2.0	96	2.2
K_2O	113	2.3	107	0.6	110	1.2
P_2O_5	0	—	76	2.4	157	3.3

	JLs-1	
	回収率 (%, n = 3)	RSD (%, n = 3)
Ca	103	0.1
Mg	91	4.8
Sr	103	1.6

管電圧，管電流
Si：15kV, Auto Ti：50kV, Auto Al：15kV, Auto
Fe：50kV, Auto Mn：50kV, Auto Mg：15kV, Auto
Ca：15kV, Auto Na：15kV, Auto K：15kV, Auto
P：15kV, Auto Sr：50kV, Auto (Auto：1～1000 μA)

コガイ)、Mg 濃度については JG-1a（花崗閃緑岩）の標準値を基にした検量線を作成することによって定量化した。本法による同機関が調整した岩石標準試料 JLs-1（石灰岩）中における上記３元素濃度の回収率及び RSD の結果を Tab.10 に示す。Ca、Mg 及び Sr 濃度は、91 ～ 103% 以内で一致し、RSD についても 4.8% 以下と良好であった。

（２）結　果

調査対象とした本丸石垣石材の岩石鑑定

試料 A1、A2、A3、A4、A6、A7、A8、A9、A10、A12、A14、A15、A16、A17、A18、A19、A20、A22、B1、B2、B3、B4、B6、B7、B9、B12、B16、B19、B22、B23、B24、B27、B28、B29

研磨断面を肉眼観察した結果、色調は茶、白、灰、黒、赤色等を呈し、同断面は緻密且つ塊状であった（Fig.145）。薄片を偏光顕微鏡観察した結果、A1、A2、A3、A4、A6、A7、A8、A9、A14、A15、A16、A17、A18、A19、A22、B1、B2、B3、B4、B6、B7、B9、B12、B16、B19、B22、B23、B24、B27、B28、B29 の基質は結晶粒子が確認できないほど微細であった（非結晶質；Fig.146）。一方、A10 及び A20 は細粒、A12 は細粒～中粒の石英の結晶で満たされていた（結晶質；Fig.146）。化学組成は一般的なチャート（SiO_2：90wt.% 以上、Al_2O_3：1 ～数 wt.%、Fe_2O_3：1wt.% 前後；堀ほか 2000）と類似した。以上のことを踏まえると、これら 34 試料はチャートであると判断される。

試料 A5

研磨断面を肉眼観察した結果、色調は深緑色を呈し、同断面には弱い面構造が認められた（Fig.145）。偏光顕微鏡観察の結果、面構造は片理であった（Fig.146）。薄片内には、緑泥石、緑簾石及び斜長石が普遍的に認められた（Fig.146）。この内、緑泥石は概ね一定方向に配列していた。化学分析の結果、SiO_2 濃度（53.4wt.%）及び $Na_2O + K_2O$ 濃度（4.5wt.%）は、玄武岩質安山岩の範疇（Le Bas et al. 1986）であった。以上のことを踏まえると、A5 は玄武岩質安山岩を原岩とした苦鉄質片岩であると判断される。

試料 A11、A21、B8、B13、B14、B17、B25、B30

研磨断面を肉眼観察した結果、色調は灰～黒色を呈し、同断面には面構造が認められた（Fig.145）。偏光顕微鏡観察の結果、面構造は片理であった（Fig.146）。薄片内は、石英及び雲母が優占的であり、所々に長石（カリ長石、斜長石）が認められ、それらは概ね一定方向に配列していた（Fig.146）。又、鏡下観察の結果、粒度は A11、A21、B17 の方が B8、B13、B14、B25、B30 より比較的大きかった（Fig.146）。化学分析の結果、SiO_2 濃度は A11、A21、B17（82 ～ 90wt.%）＞ B8、B13、B14、B25、B30（68 ～

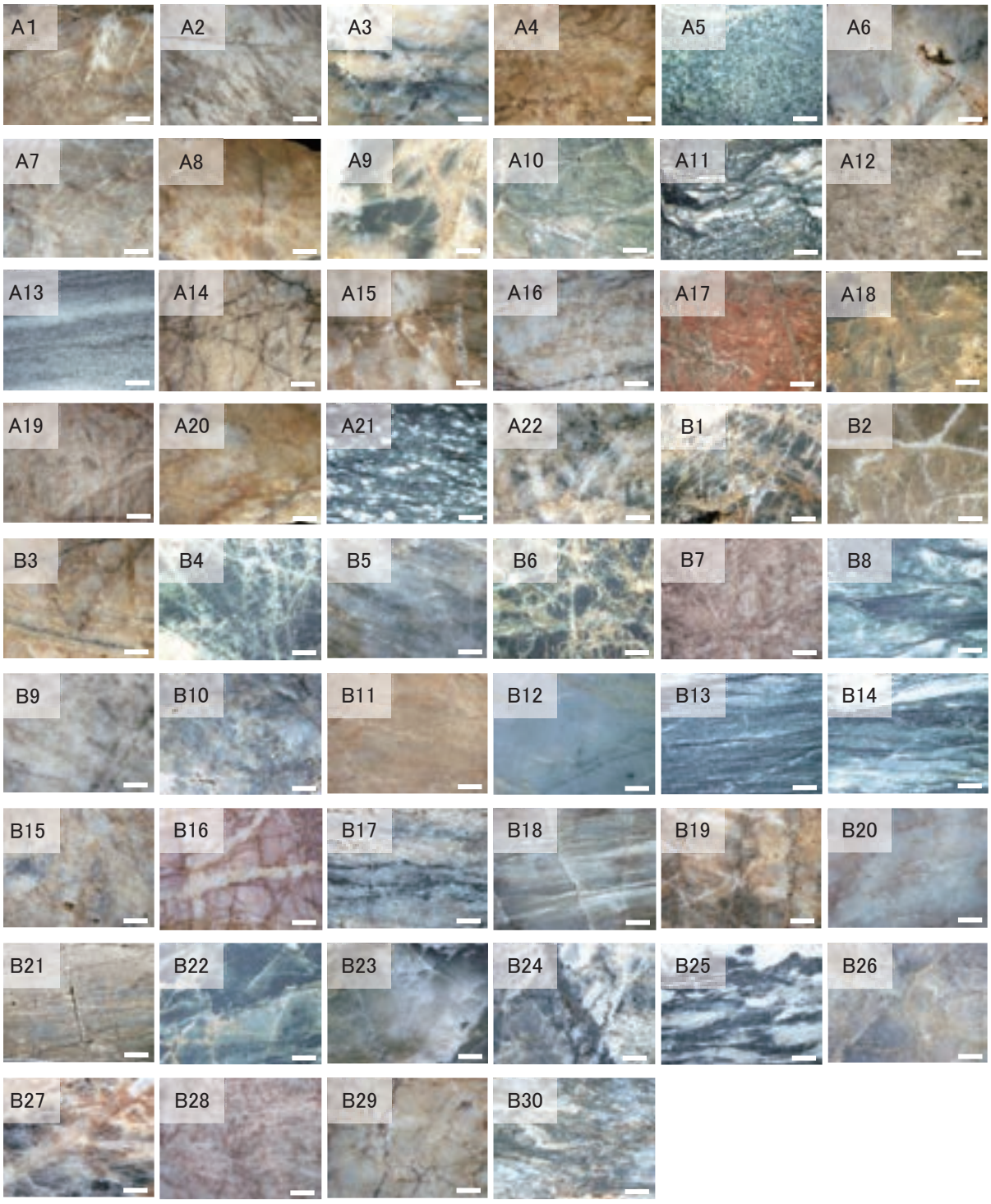


Fig.145　本丸石垣に用いられた調査対象石材の研磨断面写真（スケールバー：2mm）

75wt.%）であった。以上のことを踏まえると、A11、A21、B17 は砂岩を原岩とした砂質片岩、一方 B8、B13、B14、B25、B30 は泥岩を原岩とした泥質片岩であると判断される。

試料 A13

研磨断面を肉眼観察した結果、色調は灰色を呈し、同断面には面構造が認められた（Fig.145）。偏光顕微鏡観察の結果、面構造は片理であった（Fig.146）。薄片内は長径 0.2mm 程度の等粒状の方解石で満たされており、それらは概ね一定方向に配列していた（Fig.146）。Ca 濃度を $CaCO_3$ 濃度に換算すると石灰岩の下限値（50wt.%；藤貫 1973）を超過していた。以上のことを踏まえると、A13

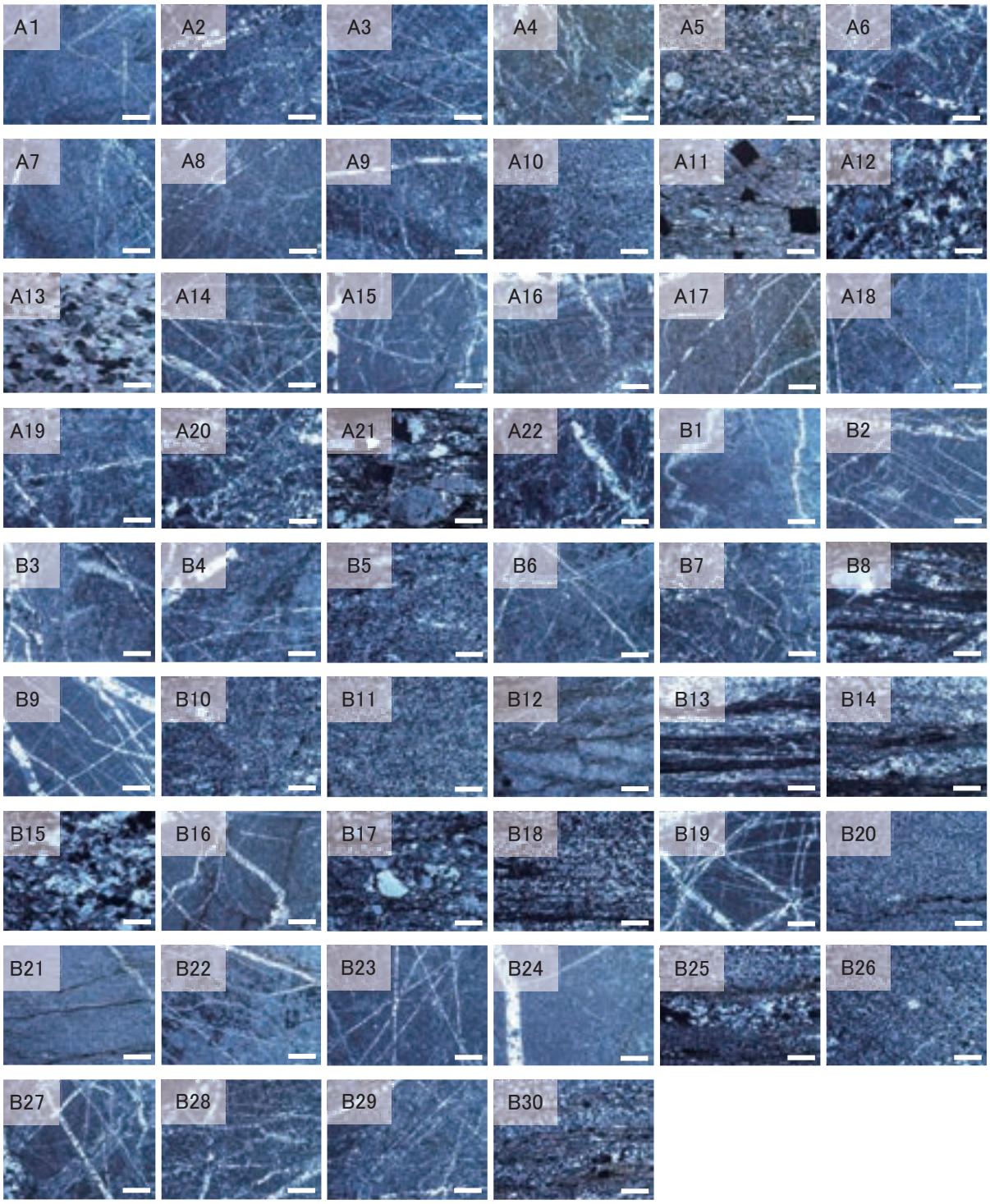


Fig.146　本丸石垣に用いられた調査対象石材の偏光顕微鏡写真（クロスニコル、スケールバー：0.5mm）

は石灰岩を原岩とした石灰質片岩であると判断される。

試料 B5、B10、B11、B15、B18、B20、B21、B26

研磨断面を肉眼観察した結果、色調は茶、灰、白色等を呈し、同断面は緻密であり、面構造が認められた（Fig.145）。偏光顕微鏡観察の結果、面構造は片理であった（Fig.146）。薄片内は大部分が石英で満たされ、雲母が散在し、両鉱物はほぼ一定方向に配列していた（Fig.146）。SiO_2 濃度はチャートの下限値（90wt.%；堀ほか 2000）を超過していた。以上のことを踏まえると、これら８試料はチャートを原岩とした石英片岩であると判断される。

調査対象とした本丸石垣石材の岩石種組成　前小々節の肉眼観察、偏光顕微鏡観察及び化学分析の結果に基づく本丸石垣の調査対象石材 52 試料（北東隅：22 試料、東：30 試料）の岩石鑑定結果を Tab.11 にまとめて示す。この鑑定結果に基づくと、調査対象とした本丸石垣石材の岩石種組成は、チャート 65.4%（34 試料）、石英片岩 15.4%（８試料）、泥質片岩 9.6%（５試料）、砂質片岩 5.8%（３試料）、苦鉄質片岩 1.9%（１試料）、石灰質片岩 1.9%（１試料）と割り出された（Fig.147）。このように、チャート 65.4%（34 試料）以外は全て片岩 34.6%（18 試料）であった。岩石の中で比較的硬質である珪質岩（チャート、石英片岩）は全体の 80.8%（42 試料）を占めた（Fig.147）。

調査対象とした本丸石垣石材の岩石種を出土した場所別（北東隅、東）に比較した。その結果、本丸北東隅石垣における岩石種組成は、チャート 81.8%（18 試料）、砂質片岩 9.1%（２試料）、苦鉄質片岩 4.5%（１試料）、石灰質片岩 4.5%（１試料）であった（Fig.147）。一方、本丸東石垣における岩石種組成は、チャート 53.3%（16 試料）、石英片岩 26.7%（８試料）、泥質片岩 16.7%（５試料）、砂質片岩 3.3%（１試料）であった（Fig.147）。このように、チャート（堆積岩）の占める割合は本丸北東隅石垣の方が本丸東石垣より約 30% 大きく、逆に片岩（変成岩）の占める割合は本丸東石垣の方が本丸北東隅石垣より約 30% 大きく、両者の岩石種組成には大差が認められた。しかし、両石垣石材は共にチャートが大半を占め（北東隅：81.8%、東：53.3%）、又、珪質岩（チャート、石英片岩）の占める割合が類似する（北東隅：81.8%、東：80.0%）と言う共通点が認められた（Fig.147）。

Tab.11　本丸石垣に用いられた調査対象石材の岩石種

本丸北東隅石垣		本丸東石垣	
試料	岩石種	試料	岩石種
A1	チャート（堆積岩）	B1	チャート（堆積岩）
A2	チャート（堆積岩）	B2	チャート（堆積岩）
A3	チャート（堆積岩）	B3	チャート（堆積岩）
A4	チャート（堆積岩）	B4	チャート（堆積岩）
A5	苦鉄質片岩（変成岩）	B5	石英片岩（変成岩）
A6	チャート（堆積岩）	B6	チャート（堆積岩）
A7	チャート（堆積岩）	B7	チャート（堆積岩）
A8	チャート（堆積岩）	B8	泥質片岩（変成岩）
A9	チャート（堆積岩）	B9	チャート（堆積岩）
A10	チャート（堆積岩）	B10	石英片岩（変成岩）
A11	砂質片岩（変成岩）	B11	石英片岩（変成岩）
A12	チャート（堆積岩）	B12	チャート（堆積岩）
A13	石灰質片岩（変成岩）	B13	泥質片岩（変成岩）
A14	チャート（堆積岩）	B14	泥質片岩（変成岩）
A15	チャート（堆積岩）	B15	石英片岩（変成岩）
A16	チャート（堆積岩）	B16	チャート（堆積岩）
A17	チャート（堆積岩）	B17	砂質片岩（変成岩）
A18	チャート（堆積岩）	B18	石英片岩（変成岩）
A19	チャート（堆積岩）	B19	チャート（堆積岩）
A20	チャート（堆積岩）	B20	石英片岩（変成岩）
A21	砂質片岩（変成岩）	B21	石英片岩（変成岩）
A22	チャート（堆積岩）	B22	チャート（堆積岩）
		B23	チャート（堆積岩）
		B24	チャート（堆積岩）
		B25	泥質片岩（変成岩）
		B26	石英片岩（変成岩）
		B27	チャート（堆積岩）
		B28	チャート（堆積岩）
		B29	チャート（堆積岩）
		B30	泥質片岩（変成岩）

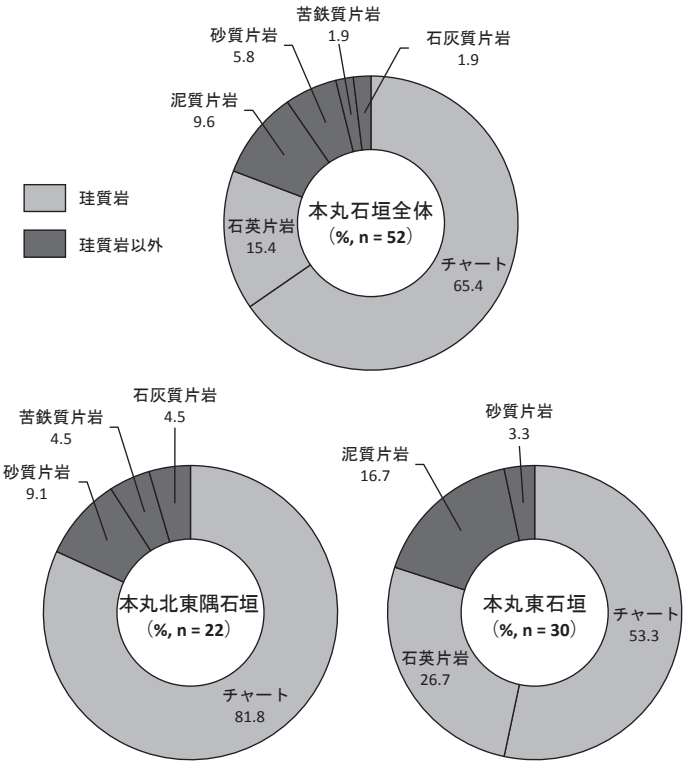


Fig.147　本丸石垣に用いられた調査対象石材の岩石種組成

（３）考　察

本丸石垣から採取した石材は、チャート、石英片岩、泥質片岩、砂質片岩、苦鉄質片岩及び石灰質片岩の６種であった（Tab.11、Fig.147）。この内、チャート、石英片岩、苦鉄質片岩及び石灰質片岩の４種は一般的に鉱物組成が比較的均質である。一方、泥質片岩及び砂質片岩の鉱物組成は一般的に同一薄片内のみならず、同一露頭内においても比較的大きく異なることが多々ある。このような特性を有する泥質片岩及び砂質片岩の産地解析は困難である。加えて、本丸石垣から採取した同片岩２種は片理に対する垂直面の厚さが約１～２cm しかなく、このような試料に基づく産地解析結果は信頼性が低い。そこで本調査では泥質片岩及び砂質片岩を除いたチャート、石英片岩、苦鉄質片岩及び石灰質片岩の４種を対象とし、それらの産地解析結果を基に本丸石垣石材の採取地を推定することにした。

チャート（A1、A2、A3、A4、A6、A7、A8、A9、A10、A12、A14、A15、A16、A17、A18、A19、A20、A22、B1、B2、B3、B4、B6、B7、B9、B12、B16、B19、B22、B23、B24、B27、B28、B29）の産地　Murray（1994）は世界各地のチャートの主要元素存在比と堆積環境（海嶺付近、遠洋域、大陸縁辺域）との関係を調査し、100 × Al_2O_3 / SiO_2 ― 100 × Fe_2O_3 / SiO_2 図、Al_2O_3 /（100 − SiO_2）― Fe_2O_3 /（100 − SiO_2）図及び Al_2O_3 /（Al_2O_3 + Fe_2O_3）― Fe_2O_3 / TiO_2 図が堆積環境の判別に有効であることを示した。これらの指標の内、Al_2O_3 /（100 − SiO_2）を Al_2O_3 /（Al_2O_3 + Fe_2O_3）で除したもの、即ち（Al_2O_3+ Fe_2O_3）/（100 − SiO_2）は、本丸北東隅石垣のチャート 18 試料（A1、A2、A3、A4、A6、A7、A8、A9、A10、A12、A14、A15、A16、A17、A18、A19、A20、A22）及び本丸東石垣のチャート 16 試料（B1、B2、B3、B4、B6、B7、B9、B12、B16、B19、B22、B23、B24、B27、B28、B29）共に、ほぼ一定値を示した（北東隅：平均値 ± 1σ = 0.777 ± 0.041、東：平均値 ± 1σ = 0.770 ± 0.040）。両者の同値を比較したところ、有意差があるとは言えなかった（$P > 0.05$、Mann Whitney's U-test）。これは、本丸の北東隅及び東側の石垣に用いられたチャートは同一地区起源であることを示唆している。従って、チャートの産地は両石垣試料を合わせて解析することにした。

調査対象地域に分布するチャートの露頭から 325 試料（Ch1 ～ 325）を採取した（Fig.148）。採取地点は、各地点が属する地質帯、各地点間の距離の他、周辺の尾根や谷などの地形を考慮して 11 地区に分類した（知波田地区 22 試料、上尾奈地区 23 試料、平山地区 19 試料、大谷大地 49 試料、細江地区 36 試料、庄内地区 28 試料、都田地区 43 試料、鹿島地区 29 試料、山東地区 32 試料、春野地区 14 試料、水窪地区 30 試料；Fig.148）。尚、11 地区の内、春野地区のみが四万十帯に属し、それ以外の地区は秩父帯に属する。採取した試料の SiO_2 濃度は全てチャートの下限値（90wt.%；堀ほか 2000）を超過していた。これらの調査対象地域から採取したチャート試料についても先述の（Al_2O_3 + Fe_2O_3）/（100 − SiO_2）を調べ、本丸石垣試料と比較した。その結果、本丸石垣のチャート（平均値 ± 1σ = 0.774 ± 0.040）は、平山地区（平均値 ± 1σ = 0.757 ± 0.040）、細江地区（平均値 ± 1σ = 0.773 ± 0.108）及び庄内地区（平均値 ± 1σ = 0.754 ± 0.042）との間に有意差があるとは言えなかった（$P > 0.05$、Mann Whitney's U-test; Fig.149）。一方、それ以外の知波田地区（平均値 ± 1σ = 0.748 ± 0.020）、上尾奈地区（平均値 ± 1σ = 0.746 ± 0.046）、大谷地区（平均値 ± 1σ = 0.732 ± 0.038）、都田地区（平均値 ± 1σ = 0.704 ± 0.079）、鹿島地区（平均値 ± 1σ = 0.744 ± 0.034）、山東地区（平均値 ± 1σ = 0.796 ± 0.042）、春野地区（平均値 ± 1σ = 0.702 ± 0.080）、水窪地区（平均値 ± 1σ = 0.706 ± 0.098）との間には有意差が認められた（$P < 0.05$、Mann Whitney's U-test；Fig.149）。これは、本丸石垣から採取したチャートは、主に平山地区、細江地区及び庄内地区の露頭起源の可能性があることを示唆している。

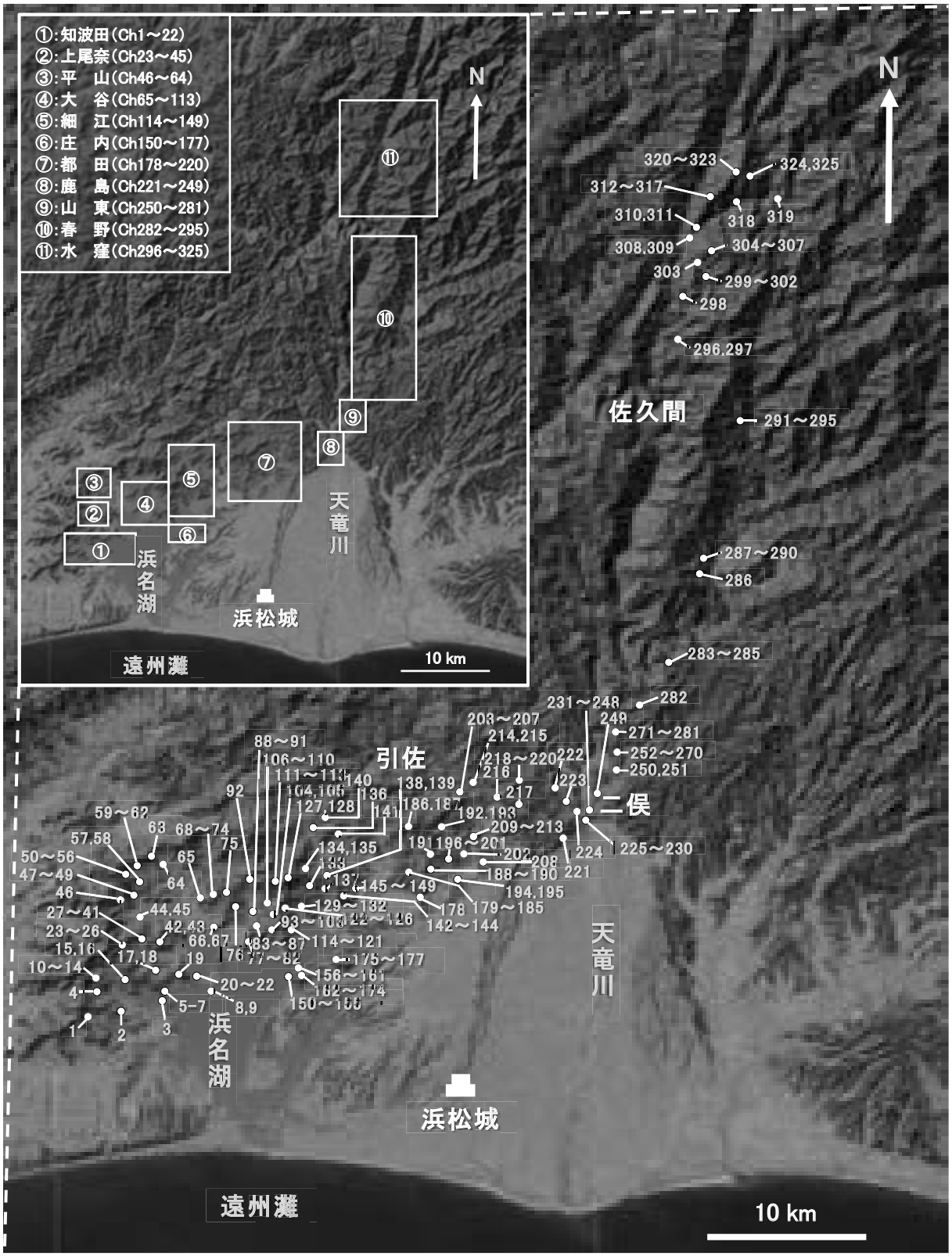


Fig.148　調査対象地域から採取したチャート 325 試料(Ch1 ～ 325)の位置(地理院地図に加筆)

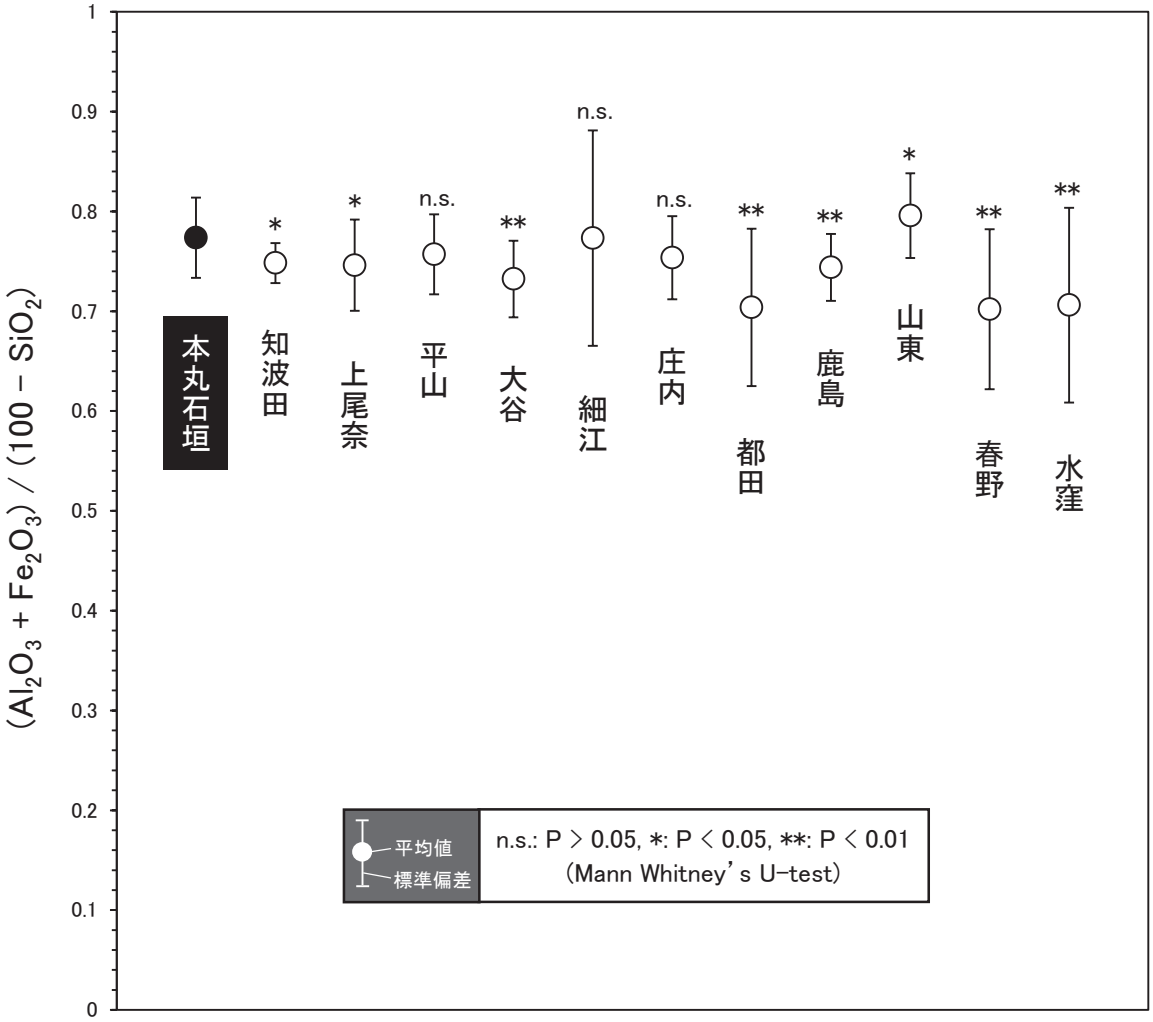


Fig.149　本丸石垣と各地区におけるチャート中の（$Al_2O_3 + Fe_2O_3$）/（100 − SiO_2）の比較

石英片岩（B5、B10、B11、B15、B18、B20、B21、B26）の産地　石英片岩はチャートを起源とし（橋本 1987）、それが温度・圧力の上昇によって変成することで形成される。このことを踏まえると、石英片岩は原岩であるチャートの化学組成を反映していると考えられる。そこで石英片岩の産地についても前小々節のチャートと同様に（$Al_2O_3 + Fe_2O_3$）/（100 − SiO_2）を用いて解析することにした。

調査対象地域に分布する石英片岩の露頭から 48 試料（QS1 ～ 48）を採取した（Fig.150）。採取地点は、各地点間の距離のみならず、周辺の尾根や谷などの地形を考慮して 6 地区に分類した（米沢地区 11 試料、東藤平地区 8 試料、西藤平地区 10 試料、阿寺地区 6 試料、熊地区 8 試料、大嶺地区 5 試料；Fig.150）。尚、採取した試料の SiO_2 濃度は全てチャートの下限値（90wt.%：堀ほか 2000）を超過していた。

石英片岩中の（$Al_2O_3 + Fe_2O_3$）/（100 − SiO_2）を調べた結果、本丸石垣（平均値 ± 1σ = 0.747 ± 0.035）は、米沢地区（平均値 ± 1σ = 0.737 ± 0.020）及び東藤平地区（平均値 ± 1σ = 0.700 ± 0.061）との間に有意差があるとは言えなかった（P > 0.05、Mann Whitney's U-test；Fig.151）。一方、それ以外の西藤平地区（平均値 ± 1σ = 0.696 ± 0.053）、阿寺地区（平均値 ± 1σ = 0.694 ± 0.058）、熊地区（平均値 ± 1σ = 0.704 ± 0.028）、大嶺地区（平均値 ± 1σ = 0.677 ± 0.014）との間には有意差が認められた（P < 0.05、Mann Whitney's U-test；Fig.151）。これは、本丸石垣から採取した石英片岩は、主に米沢地区及び東藤平地区の露頭起源の可能性があることを示唆している。

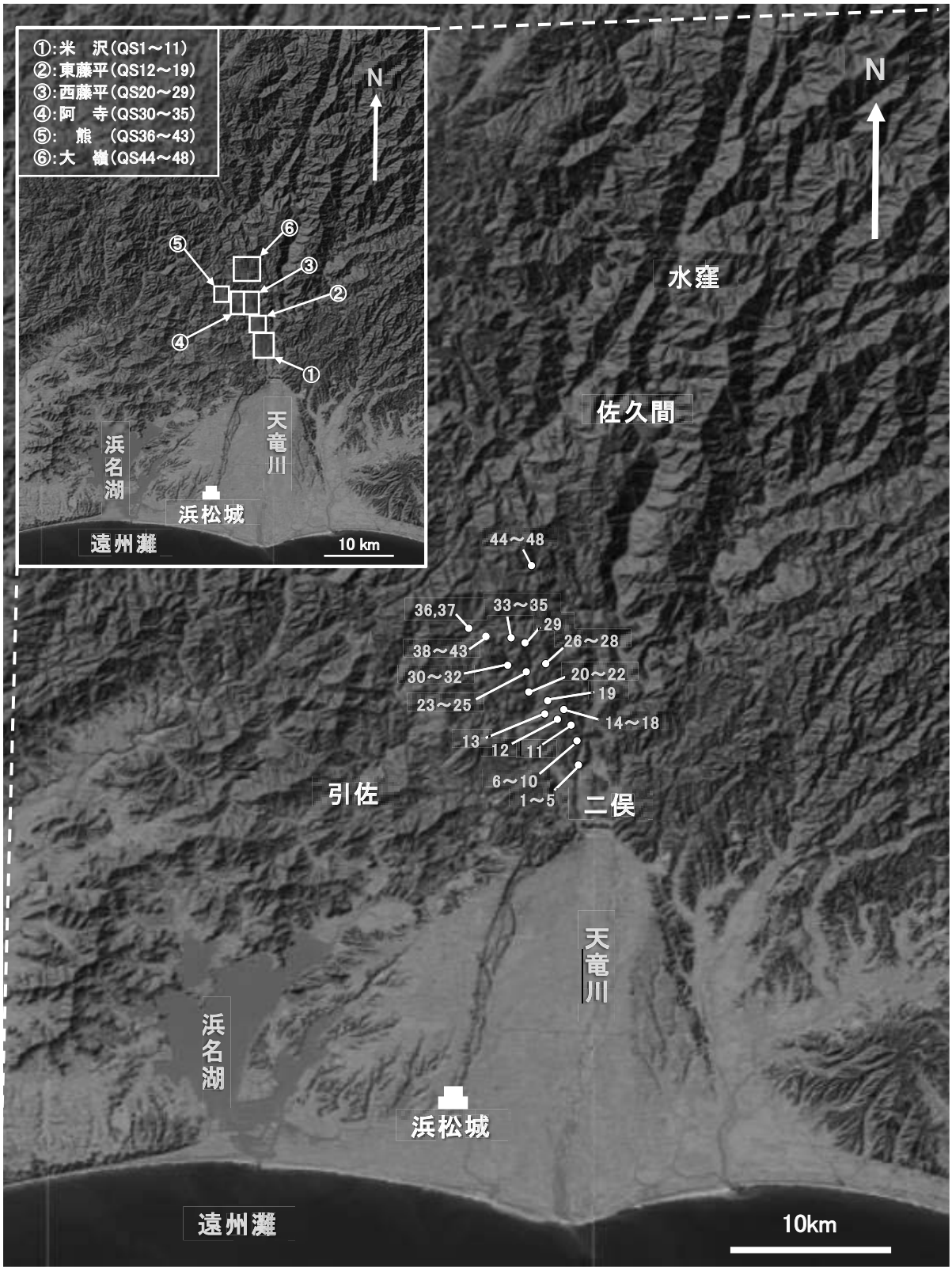


Fig.150　調査対象地域から採取した石英片岩 48 試料(QS1 ～ 48)の位置(地理院地図に加筆)

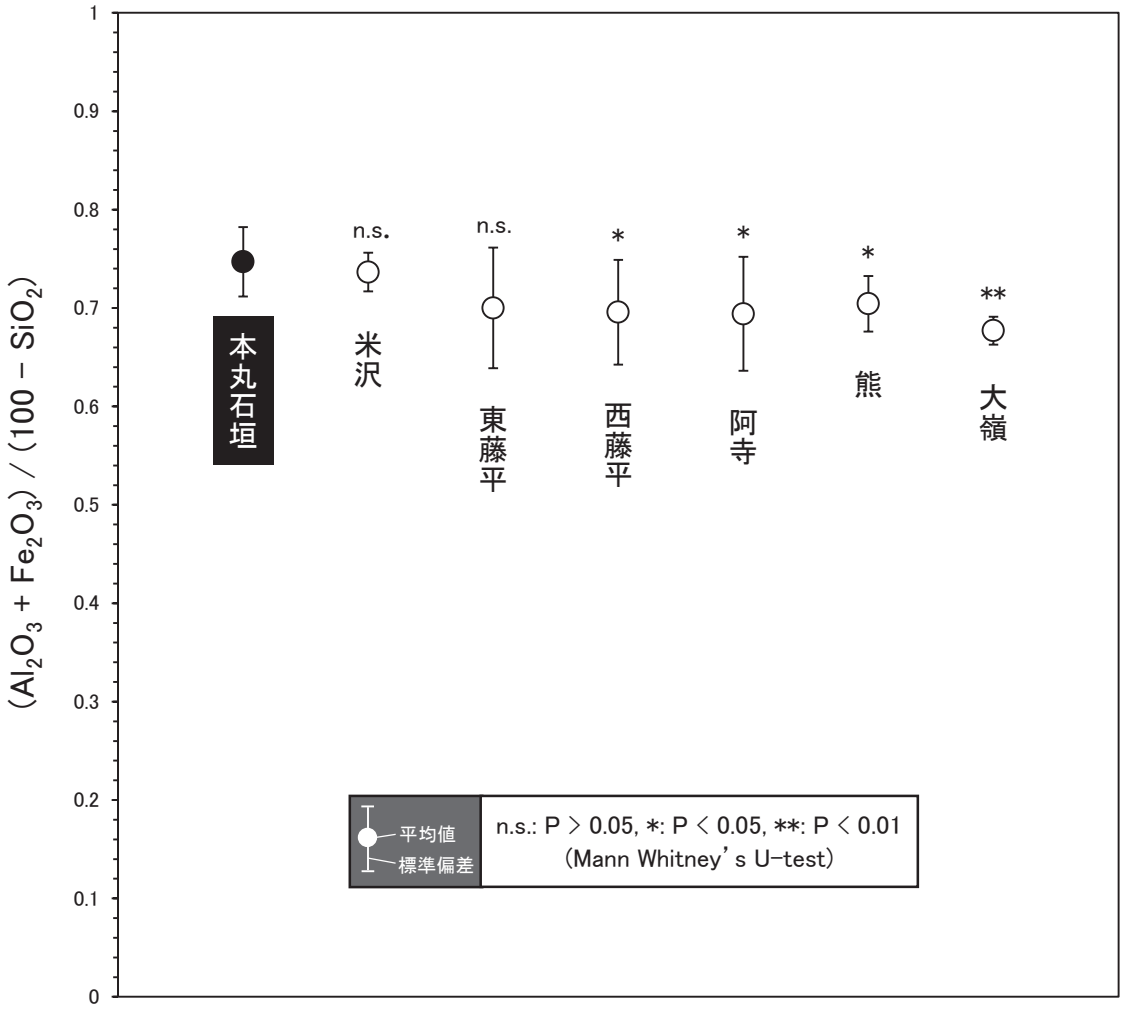


Fig.151　本丸石垣と各地区における石英片岩中の（$Al_2O_3 + Fe_2O_3$）/（100 − SiO_2）の比較

苦鉄質片岩（A5）の産地　苦鉄質片岩は玄武岩や同質の火山砕屑物を起源とし（橋本 1987）、前小々節の石英片岩と同様に物質移動なしに物理的変化（温度・圧力上昇）によって生成される。このことを踏まえると、苦鉄質片岩の化学組成は原岩を生成した玄武岩質マグマの化学組成を反映していると考えられる。玄武岩質マグマは、SiO_2（Macdonald & Katsura、1964；Kuno1966；Miyashiro1974）、$Na_2O + K_2O$（Macdonald & Katsura1964；Kuno1966）、Σ FeO / MgO（Miyashiro1974；周藤ほか 1985）、Al_2O_3（青木・伊東 1968）、TiO_2（青木・伊東 1968；周藤ほか 1985）、100 × MgO /（MgO + FeO + Na_2O + K_2O）（Kuno1957）などの化学的指標を用いて分類されている。そこで、これら６指標を用いて本丸石垣から採取した苦鉄質片岩の産地を解析することにした。

調査対象地域に分布する苦鉄質片岩の露頭から 174 試料（MS1 ～ 174）を採取した（Fig.152）。採取した各試料の上記６指標値を全 174 試料の各指標平均値で規格化した。本丸石垣の苦鉄質片岩の６指標値についても同様に規格化し、調査対象地域から採取した各試料の規格化した値と比較した。尚、ここで規格化したのは、値が大きい指標（例えば、SiO_2、Al_2O_3）が相関に強く影響を及ぼすためである。その結果、本丸石垣の苦鉄質片岩は、15 試料との間に有意な正の相関が認められた（MS12 : $r^2 = 0.81$、$P < 0.05$; MS25 : $r^2 = 0.71$、$P < 0.05$; MS48 : $r^2 = 0.79$、$P < 0.05$; MS50 : $r^2 = 0.86$、$P < 0.01$; MS53 : $r^2 = 0.85$、$P < 0.01$; MS54 : $r^2 = 0.81$、$P < 0.05$; MS67 : $r^2 = 0.84$、$P < 0.05$; MS81 : $r^2 = 0.71$、$P < 0.05$; MS84 : $r^2 = 0.74$、$P < 0.05$; MS116 : $r^2 = 0.84$、$P < 0.05$; MS121 : $r^2 = 0.68$、$P < 0.05$; MS145 : $r^2 = 0.74$、

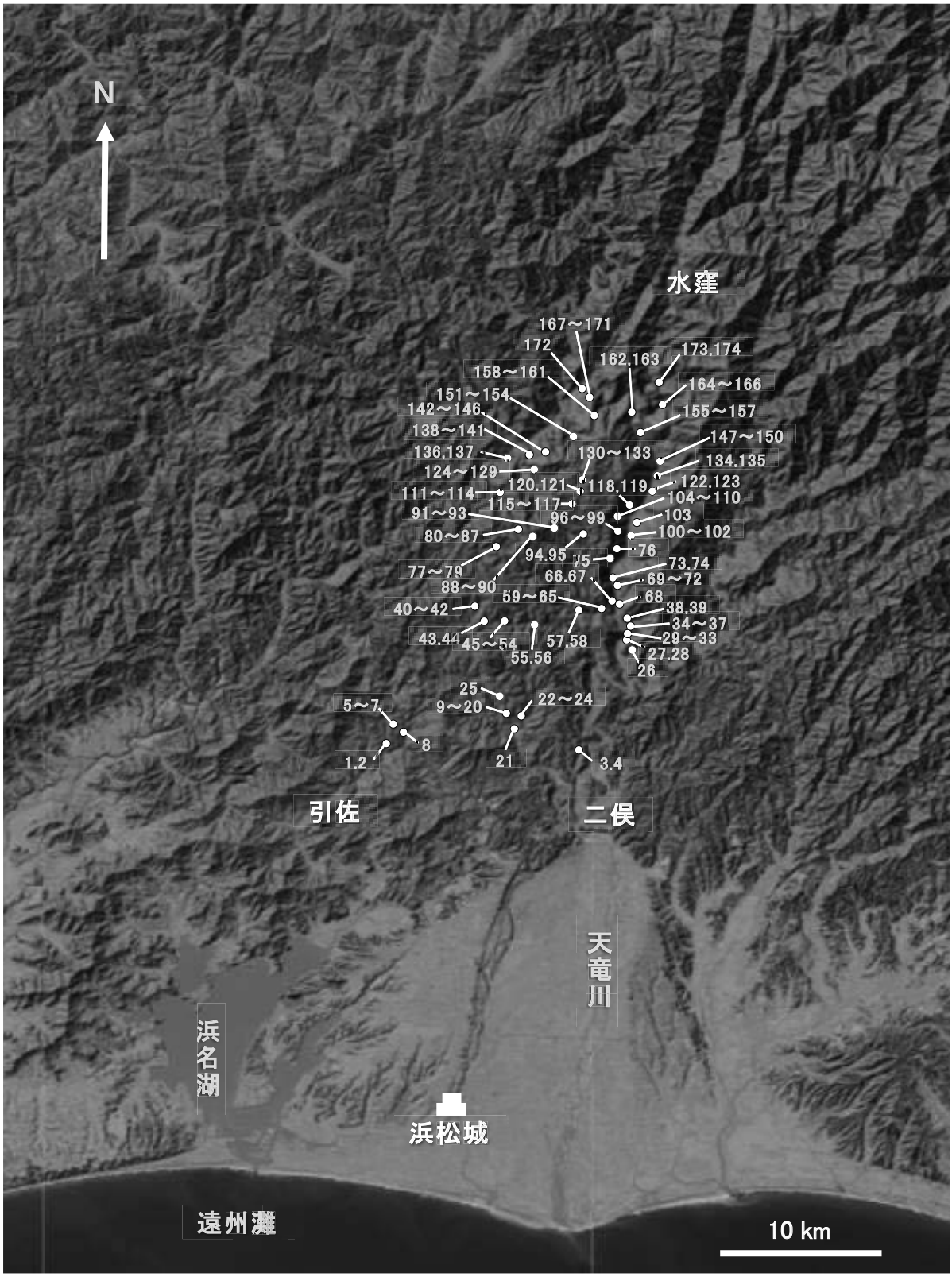


Fig.152　調査対象地域から採取した苦鉄質片岩 174 試料（MS1 ～ 174）の位置（地理院地図に加筆）

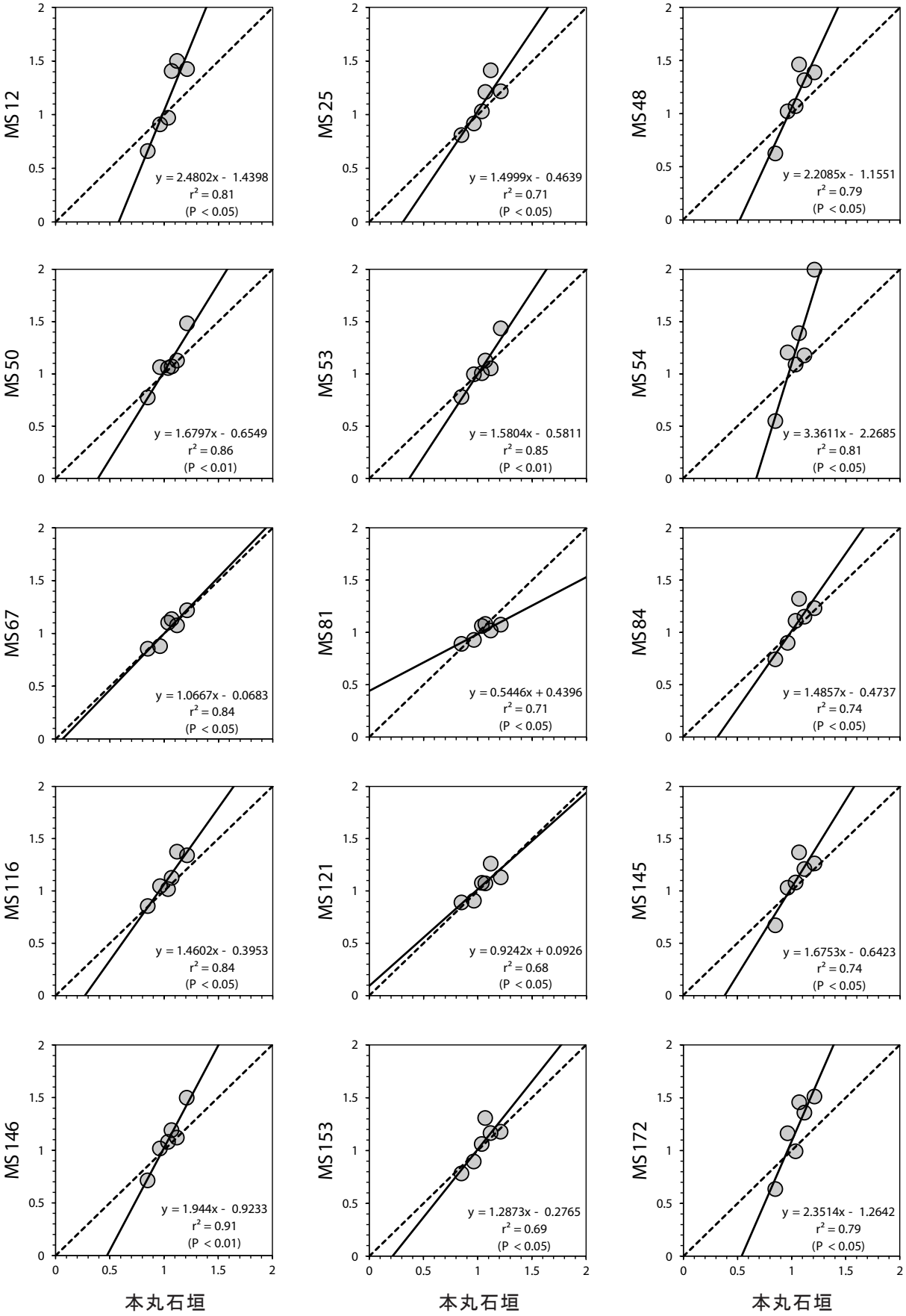


Fig.153　本丸石垣と各地点における苦鉄質片岩中の規格化された各種指標値の相関

P < 0.05 ; MS146 : r^2 = 0.91、P < 0.01 ; MS153 : r^2 = 0.69、P < 0.05 ; MS172 : r^2 = 0.79、P < 0.05 ; Fig.153)。一方、これら 15 試料以外との間にはそのような有意な関係があるとは言えなかった（P > 0.05)。

本丸石垣から採取した苦鉄質片岩の起源露頭付近の試料であれば、Fig.153 の近似式は y = x（傾き：1、切片：0）と類似しなければいけない。そこで各試料の近似線の傾きと切片の値（Fig.153）を基にクラスター分析（サンプル間の距離計算：基準値のユークリッド距離、クラスター間の距離計算：ウォード法）を行った。その結果、① 本丸石垣・MS67・MS121、② MS81、③ MS25・MS84・MS116・MS153、④ MS50・MS145・MS53、⑤ MS146、⑥ MS12・MS48・MS172、⑦ MS54 の 7 クラスター間に有意差が認められた（P < 0.01 ; Fig.154)。これは、本丸石垣から採取した苦鉄質片岩は、MS67（大嶺地区）及び MS121（瀬尻地区）の露頭起源の可能性があることを示唆している。

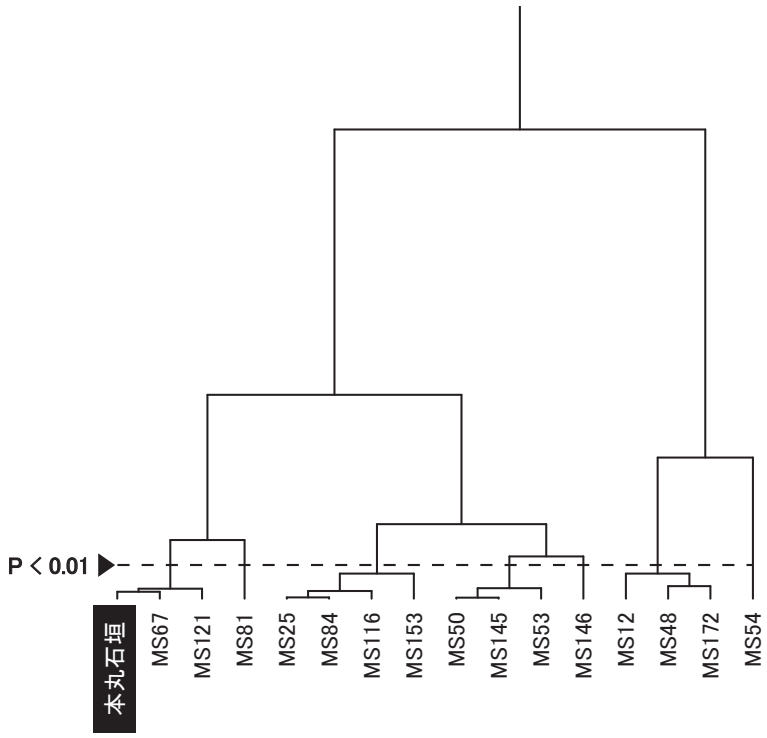


Fig.154　規格化された各種指標値に基づく苦鉄質片岩試料の分類（クラスター分析）

石灰質片岩（A13）の産地　石灰質片岩は石灰岩を起源とし、前々小々節の石英片岩及び前小々節の苦鉄質片岩と同様に物質移動なしに物理的変化（温度・圧力上昇）によって生成される。このことを踏まえると、石灰質片岩の化学組成は原岩である石灰岩の化学組成を反映していると考えられる。原岩である石灰岩中の Ca、Mg、Sr、Mg / Ca 及び Sr / Ca は生成時環境の影響を受ける（藤貫 1968・1973 ; 北野 1990)。そこで、これら 5 指標を用いて本丸石垣から採取した石灰質片岩の産地を解析することにした。

調査対象地域に分布する石灰質片岩の露頭から 22 試料（CS1 ～ 22）を採取した（Fig.155)。採取した各試料の上記 5 指標値を全 22 試料の各指標平均値で規格化した。本丸石垣の石灰質片岩の 5 指標値についても同様に規格化し、調査対象地域から採取した各試料の規格化した値と比較した。尚、ここで規格化したのは、値が大きい指標（例えば、Ca、Mg）が相関に強く影響を及ぼすためである。その結果、本丸石垣の石灰質片岩は、6 試料との間に有意な正の相関が認められた（CS10: r^2 = 0.88、P < 0.05 ; CS12 : r^2 = 0.96、P < 0.005 ; CS17 : r^2 = 0.87、P < 0.05 ; CS19 : r^2 = 0.95、P < 0.005 ; CS21 : r^2 = 0.94、P < 0.01 ; CS22 : r^2 = 0.92、P < 0.01 ; Fig.156)。一方、これら 6 試料以外との間にはそのような有意な関係があるとは言えなかった（P > 0.05)。

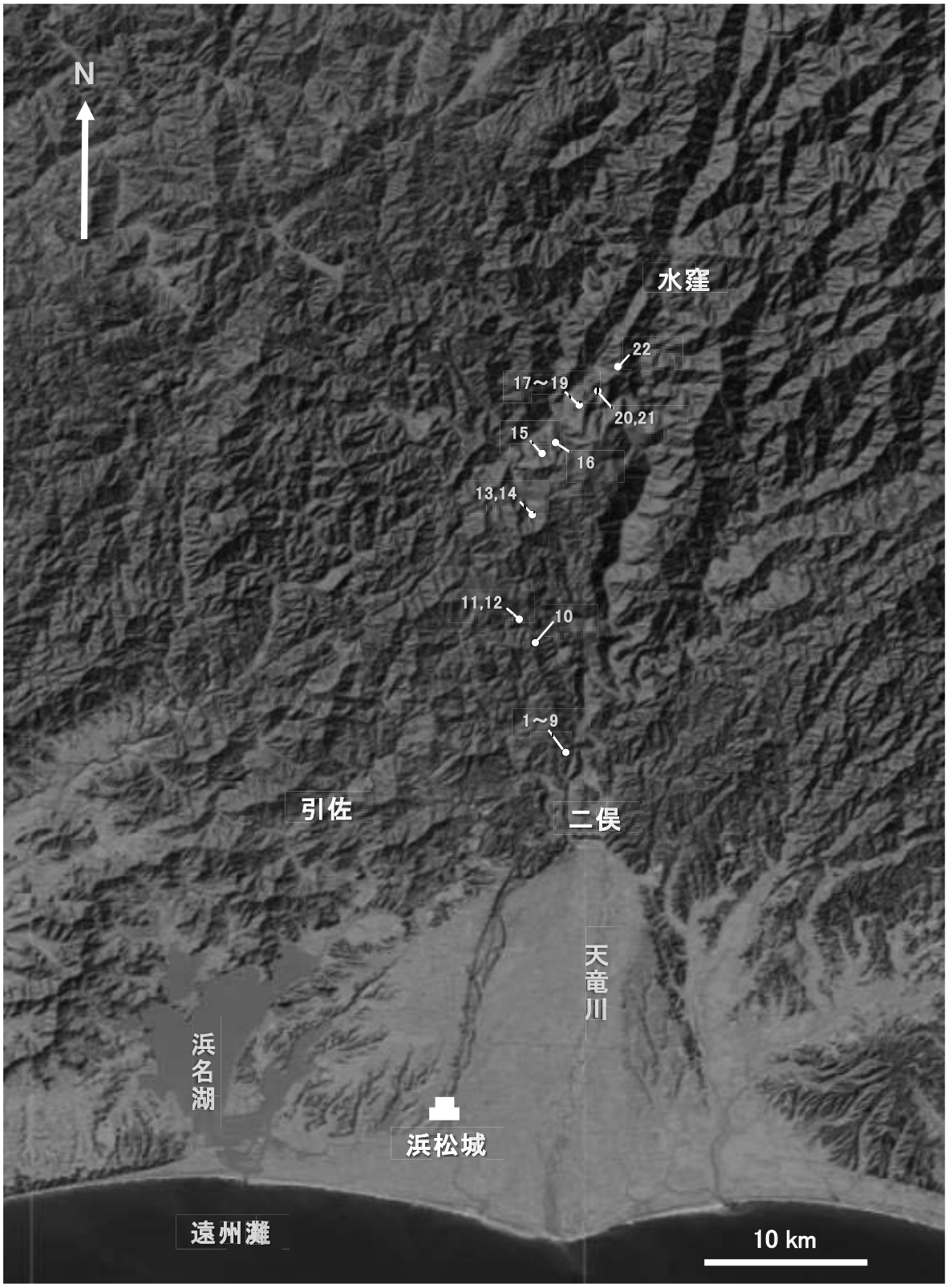


Fig.155　調査対象地域から採取した石灰質片岩 22 試料（CS1 ～ 22）の位置（地理院地図に加筆）

本丸石垣から採取した石灰質片岩の起源露頭付近の試料であれば、Fig.156 の近似式は y = x（傾き ： 1、切片：0）と類似しなければいけない。そこで各試料の近似線の傾きと切片の値（Fig.156）を基にクラスター分析（サンプル間の距離計算：基準値のユークリッド距離、クラスター間の距離計算：ウォード法）を行った。その結果、① 本丸石垣・CS10、② CS12・CS22・CS19、③ CS17・CS21 の 3 クラスター間に有意差が認められた（P < 0.01 ; Fig.157）。これは、本丸石垣から採取した石灰質片岩は、CS10（横山地区）の露頭起源の可能性があることを示唆している。

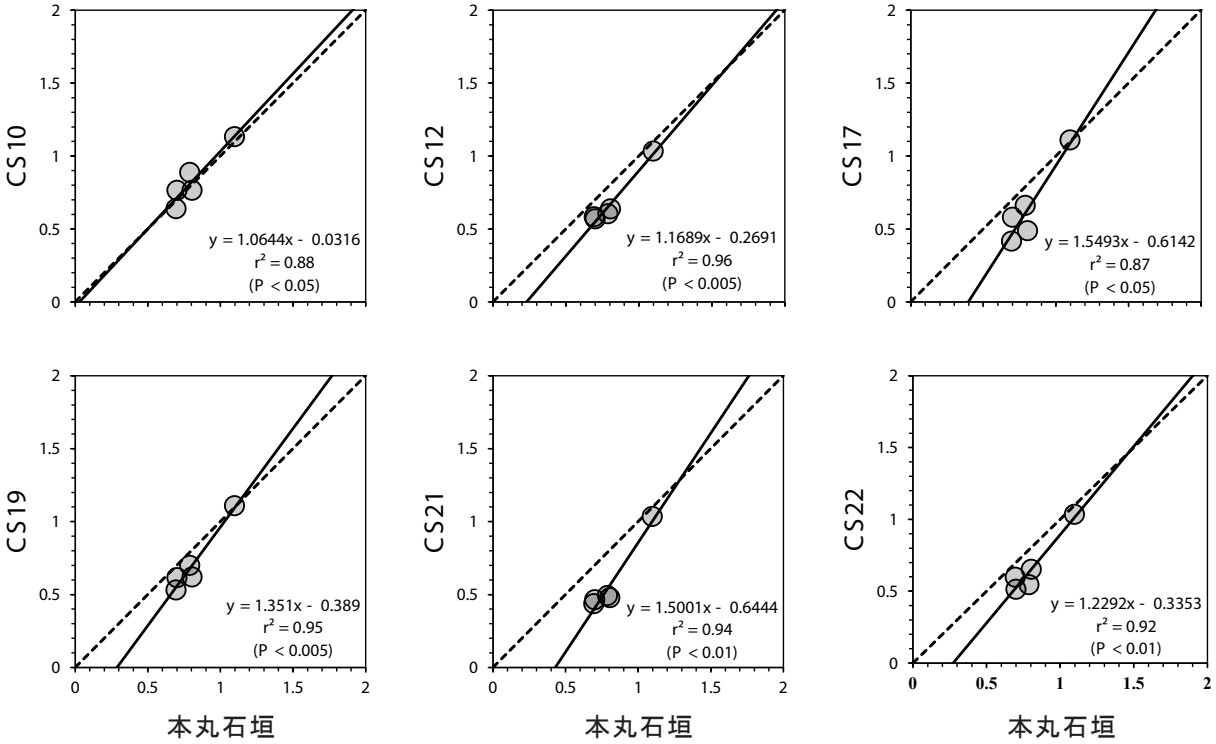


Fig.156　本丸石垣と各地点における石灰質片岩中の規格化された各種指標値の相関

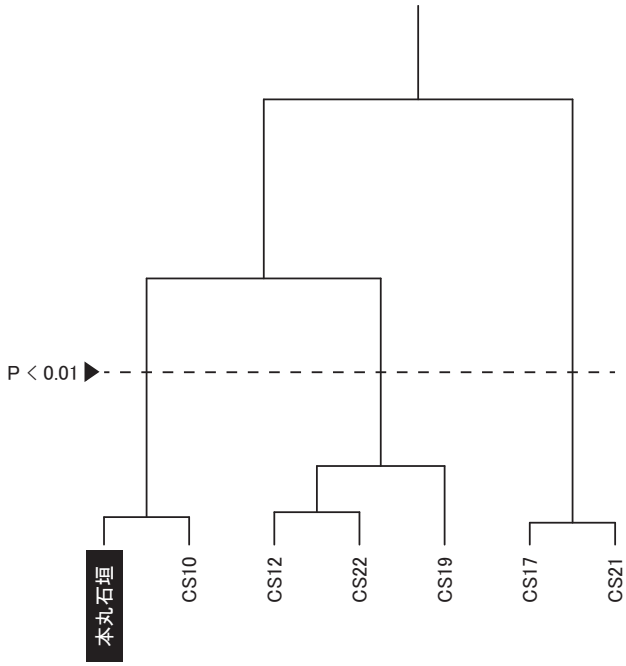


Fig.157　規格化された各種指標値に基づく石灰質片岩試料の分類（クラスター分析）

本丸石垣石材の採取地推定　先述の通り、本丸石垣から採取した試料の内、チャートは主に平山地区、細江地区及び庄内地区の露頭起源の可能性があると考えられた。又、出土した石材は全て巨角礫であったことを踏まえると、本丸石垣に用いられたチャートの採取候補域として、それら３地区周辺（Fig.158）が挙げられる。太田（1996）は、チャートは浜名湖北部に広く分布することから、浜松城の石垣石材に用いられたチャートは浜名湖の北西岸に位置する宇津山（Fig.158）付近及び北東岸に位置する大草山（Fig.158）付近で採取したと推定した。本調査でチャートの採取候補域と推定された３地区周辺の内、平山地区は浜名湖北西部、一方、細江地区及び庄内地区は浜名湖北東部に位置する（Fig.158）。このように、本調査結果は太田（1996）の推定と概ね合致した。採取候補域と推定された３地区周辺は共に都田川流域であることから、チャートについては浜名湖を介して浜松城へ運搬されたと推察される（Fig.158）。

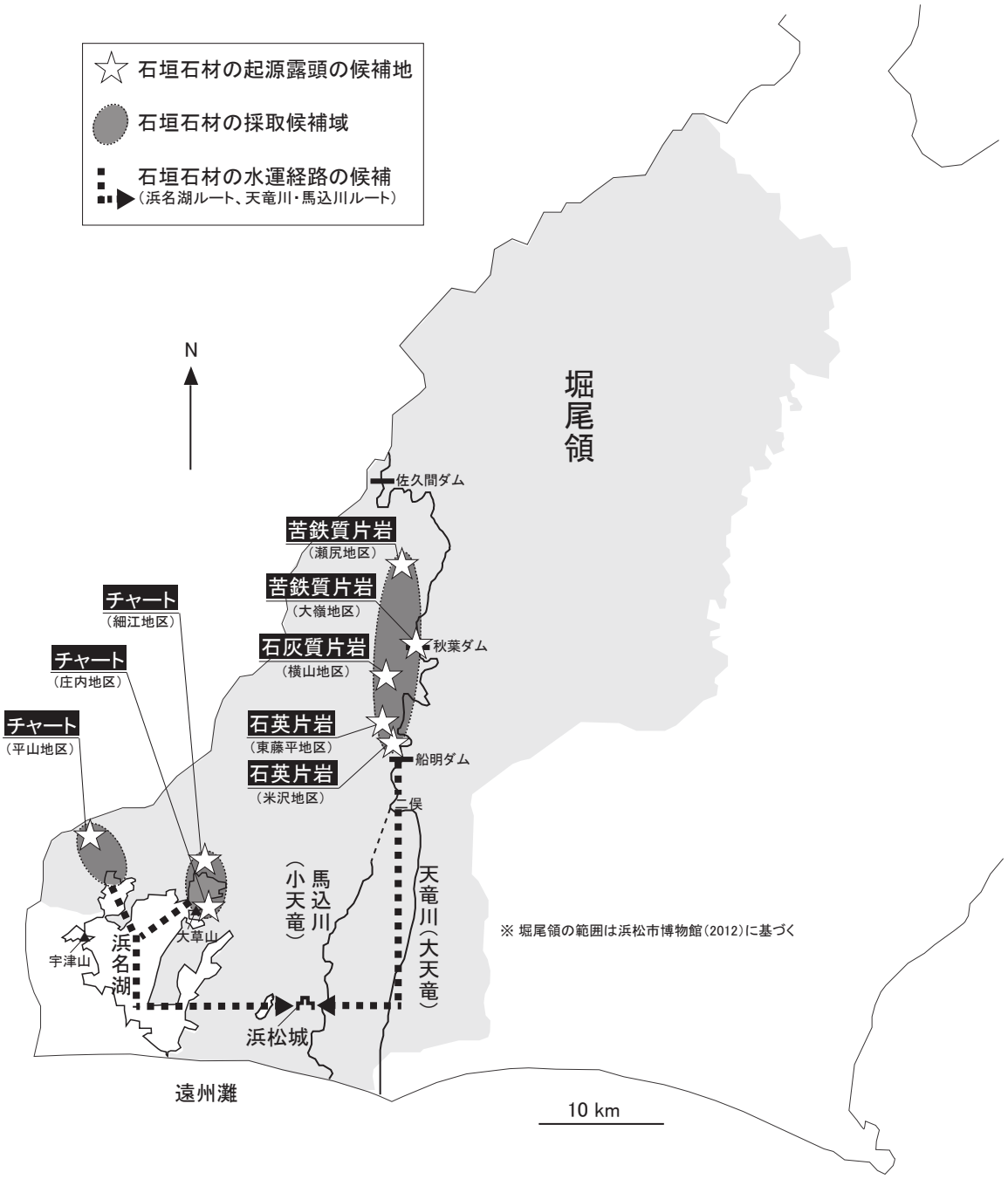


Fig.158　本丸石垣石材の採取候補域

一方、本丸石垣から採取した試料の内、石英片岩は主に米沢地区及び東藤平地区、苦鉄質片岩は大嶺地区及び瀬尻地区、石灰質片岩は横山地区の露頭起源の可能性があると考えられた。又、出土した石材は全て巨角礫であったことを踏まえると、本丸石垣に用いられた同片岩３種の採取候補域は、それら５地区周辺、即ち現在の船明・秋葉ダム湖の西 5km 内（Fig.158）と推定される。太田（1996）は、浜松城の石垣には浜名湖周辺には認められない輝緑凝灰岩などの岩石が利用されていることから、細江や三ヶ日を含む奥浜名湖及び二俣（Fig.158）付近の天竜川支流も石材調達の候補として想定するべきとした。このように、本調査結果は太田（1996）の指摘を支持するものであった。採取候補域と推定された５地区周辺は共に天竜川流域であることから、片岩類については天竜川（当時の大天竜）及び馬込川（当時の小天竜）を利用して浜松城へ運搬されたと推察される（Fig.158）。

謝　辞

本調査は令和４年度静岡大学地域連携応援プロジェクトの助成を受けたものです。林野庁関東森林管理局天竜森林管理署には浜松市天竜区春野町に位置する入地沢の入林及び同沢における試料採取の許可をして頂きました。静岡大学の増田俊明名誉教授には岩石鑑定の際にご助言を頂きました。化学分析は静岡大学浜松キャンパス共同利用機器センターの装置を使用させて頂くと共に、同大学の三宅亜紀博士にご指導を頂きました。これらの方々に厚くお礼申し上げます。

［引用文献］

青木　斌・伊東正喜　1968「海洋地域の岩石―Ⅰ．高アルミナ玄武岩―」『地球科学』第 22 巻　24-31
礒見　博・井上正昭　1972「浜松」『5 万分の 1 地質図幅』地質調査所（現産業技術総合研究所地質調査総合センター）
太田好治　1996『浜松市指定文化財　浜松城跡　考古学的調査の記録』浜松市教育委員会
香川元太郎　2018「第 2 章　城の縄張」『オールカラー徹底図解　日本の城』学研プラス
加藤理文　2017「第 10 章　普請」『よくわかる　日本の城　日本城郭検定公式参考書』学研プラス
狩野謙一　1984「光明層群―赤石山地最南部の四万十帯白亜紀―」『静岡大学地球科学研究報告』第 10 巻　55-85
狩野謙一・宮坂　晃・山本玄珠・楠　賢司　2021「諏訪盆地南西側斜面の下部更新統塩嶺累層安山岩溶岩の K-Ar 年代」『地学雑誌』第 130 巻　615-632
北野　康　1990『炭酸塩堆積物の地球科学　生物の生存環境の形成と発展』東海大学出版会
楠　賢司・増田俊明・酒井瑞帆・牛島咲季　2022「第 3 章　石室石材の岩石鑑定」『石ノ塔古墳』浜松市教育委員会　41-46
斎藤正次　1952「三河大野」『5 万分の 1 地質図幅』地質調査所（現産業技術総合研究所地質調査総合センター）
斎藤正次・礒見　博　1955「秋葉山」『5 万分の 1 地質図幅』地質調査所（現産業技術総合研究所地質調査総合センター）
周藤賢治・伊崎利夫・八島隆一　1985「栃木県茂木町北方地域に産する第三紀高 TiO_2 ソレアイト」『岩鉱』第 80 巻　246-262
中井　均　2019「第 3 章　城の造り方の絵事典」『戦国の城の絵事典』成美堂出版
中島　礼・堀　常東・宮崎一博・西岡芳晴　2008「豊橋及び田原」『5 万分の 1 地質図幅』産業技術総合研究所地質調査総合センター（旧地質調査所）
橋本光男　1987「2　緑色岩から角閃岩まで」「4　チャートおよび石英片岩」『日本の変成岩』 岩波書店
浜松市博物館　2012「第 2 章　吉晴浜松へ」『浜松城主　堀尾吉晴』浜松市博物館
藤貫　正　1968「石灰岩の地球化学的研究（1）―赤坂石灰岩鉱床における微量元素について―」『地質調査月報』第 19 巻　603-624
藤貫　正　1973「炭酸塩岩中の微量成分」『鉱山地質』第 23 巻　295-306
堀　利栄・樋口　靖・藤木　徹　2000「付加体層状チャート―化学組成からのアプローチ―」『地質学論集』第 55 巻　43-59
牧本　博・山田直利・水野清秀・高田　亮・駒沢正夫・須藤定久　2004「豊橋及び伊良湖岬」『20 万分の 1 地質図幅』 産業技術総合研究所地質調査総合センター（旧地質調査所）
Kuno H., Yamasaki K., Iida C., Nagashima K. 1957 Differentiation of Hawaiian magmas. Japanese Journal of Geology and Geography, vol.28, 179-218.
Kuno H. 1964 Lateral variation of basalt magma type across continental margins and Island Arcs. Bulletin of Volcanology, Vol.29 195-222.
Le Bas, M. J., Le Maitre, R. W., Streckeisen, A. and Zanettin, B. 1986 A chemical classification of volcanic rocks based on the total alkali-silica diagram. Journal of Petrology, Vol. 27, 745-750.
Macdonald G. A. and Katsura T. 1964 Chemical composition of Hawaiian lavas. Journal of Petrology, Vol.5 82-133.
Miyashiro A. 1974 Volcanic rock series in island arcs and active continental margins. American Journal of Science, Vol.274 321-355.
Murray R. W. 1994 Chemical criteria to identify the depositional environment of chert: general principles and applications. Sedimentary Geology, Vol.90 213-232.

第４章　総　括

１　発掘調査の成果

（１）調査成果の概要

調査対象地の広い範囲において、石垣や堀跡、段差などをはじめとした遺構を検出した。発掘調査成果と近世浜松城を描いた絵図の対比により、本丸・御誕生場・二の丸・御城米蔵・御城米蔵西の位置や構造が定点をもって復元できるようになった意義は大きい。また、二の丸では御殿の礎石や礎石据付穴、瓦列による雨落ち溝、庭園遺構を検出し、二の丸御殿奥御殿の様相の一端が明らかになった点も重要な成果である。このほか､近世浜松城より前の引間城の時代を含む浜松城（以下、中世浜松城とする）に関わる遺構・遺物も認められた。以下、中世浜松城と近世浜松城に関わる調査成果を分けて整理する。

（２）中世浜松城に関わる調査成果

近世浜松城の絵図に表現されず、かつ、16 世紀代を中心に構築され、17 世紀前葉までに廃絶した遺構を中世浜松城の遺構とする。中世浜松城に関わる遺構は近世浜松城の下層に埋もれているため全体像の把握は困難であるが、浜松城の構造と変遷を検討する上で重要な成果である。

城内通路　SD03・SD05 と SA01・SA02 により区画され東西方向に延びる城内通路は、天守台の東側正面にあたる。これらの遺構は､遅くとも 17 世紀前葉には廃絶したと捉えられる。天守台（天守）への見通しを意識して設定されており、大手筋として整備された可能性もあろう。

二の丸下層遺構等　二の丸下層遺構は、造成土によって近世二の丸の遺構面と明確に検出面が分離された溝跡や小穴等である。御城米蔵や御城米蔵西では、近世遺構と同一面において中世遺構を検出した。

（３）近世浜松城に関わる調査成果

本　丸　調査対象地西側が本丸の一部に相当すると想定されていたが、後世の土地利用が顕著であり､本丸の範囲は不明確な状態であった。発掘調査によって本丸北東隅石垣や本丸東堀跡（SD01）を検出し、石垣や堀跡の裾部を基準にすると本丸は、南北約 135m、東西約 90m の規模であることが判明した。「安政元年浜松城絵図」には本丸裏門付近に石垣高さ二間と表記がある。天守門の石垣と同じ高さの表記であり、本丸裏門の石垣の高さを記載したものと捉えられる。本丸北東隅石垣の高さは不明だが、いずれの絵図にも本丸に段がある表現がなく、本丸と同等の高さまで石垣が構築されていたと推定できる。石垣の特徴は、二俣城跡や鳥羽山城跡と類似し、同時期（堀尾氏在城期）に構築されたと捉えられる。また、本丸北東隅石垣北側や本丸東堀跡では石垣崩落痕跡を検出した。廃城直前の浜松城を記録した「浜松城郭」には、本丸東側の石垣が表現されておらず、安政地震発災（1854）から明治５年（1872）までの間に本丸東側の石垣は失われたと捉えられる。

御誕生場　二代将軍・秀忠の誕生伝承地のひとつである御誕生場は、本丸東堀跡とその北端の検出や御誕生場・二の丸境界の段差の検出により、位置と範囲が明らかになった。本丸東半と同様に御誕生場上面も後世の土地利用の影響を受けているが、本丸東堀跡や７次調査 SE01 のように大規模な遺構は残存していることが明らかになった。

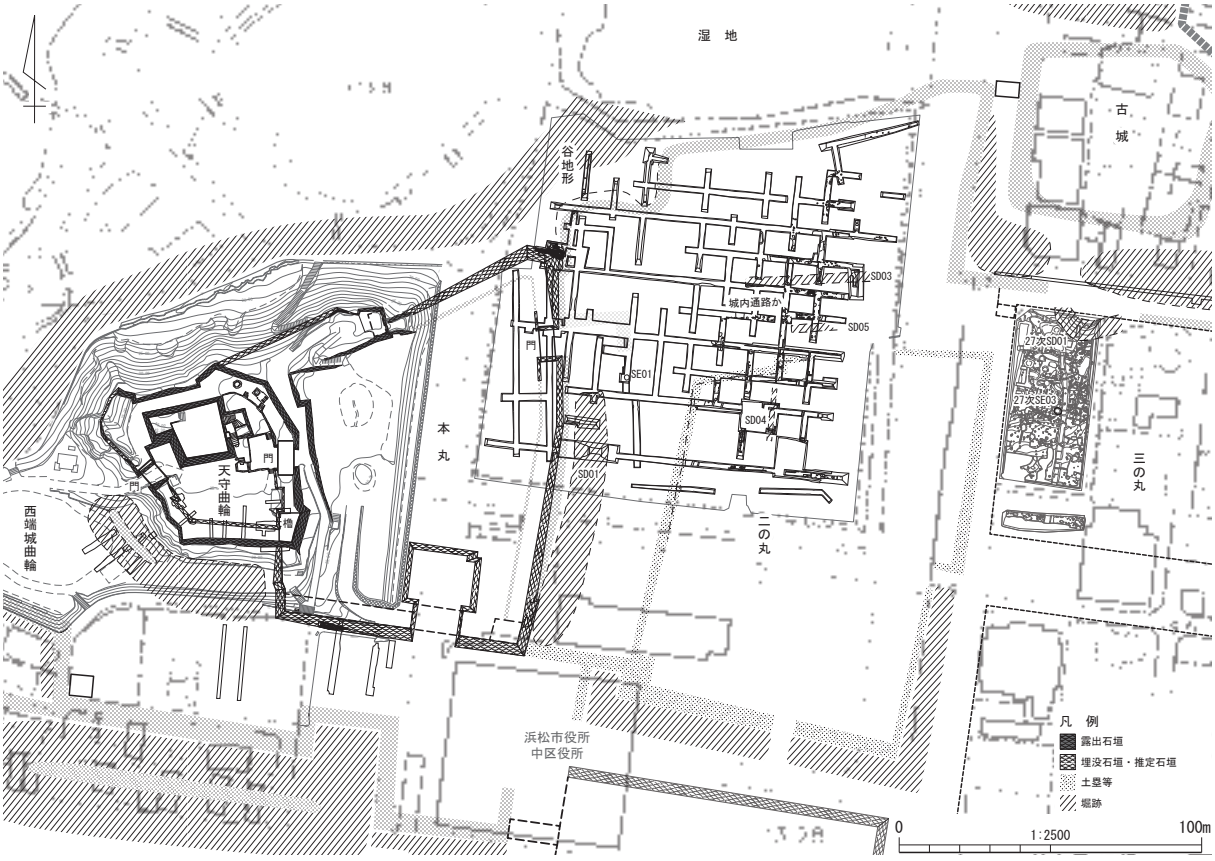
二の丸　調査対象地南東部は二の丸の一部にあたると想定されてきた。発掘調査により西側に隣接する御誕生場や北側に隣接する城内通路との境界部に段差があることが明らかになった。段差の規模や形状は絵図に表現された二の丸の範囲と整合的である。二の丸が御誕生場や北側に比べて一段低い地形であることや、調査対象地が二の丸北半（奥御殿）にあたることが明確になった。

二の丸における検出遺構は、御殿建物の基礎である礎石や礎石据付穴、雨落ち溝、庭園遺構等である。二の丸御殿礎石は、隣り合う礎石の中心間の距離が約 2 mであり、御殿は京間を基準とした建物であったことが明らかになった。礎石列の北側では、礎石列に並行する瓦列を伴う雨落ち溝を検出した。絵図と対比する際の定点になりうる構造物であり、二の丸御殿の構造を明らかにする上で重要な成果である。なお、二の丸の南半分は調査区外にあたり、関連遺構が市役所駐車場の地下に残存している可能性がある。

二の丸北西部では、庭園遺構を検出した。庭園遺構は、絵図等の史料では表現されておらず、発掘調査により存在が明らかになった。検出状況と堆積物の分析から洲浜と三和土による枯池等を持つ江戸時代の枯山水庭園と捉えられる。また、庭園遺構直上の出土遺物や枯池内に堆積した炭化物が示す年代はいずれも 19 世紀前葉までである。枯山水庭園の廃絶は 19 世紀前葉から 19 世紀中頃にかけてのこととみられる。庭園遺構上には瓦列や瓦集積の形成が認められ、枯山水庭園の廃絶後に御殿建物の構造変化があったことがうかがえる。なお、枯山水庭園の下層には苑池の可能性がある不定形な遺構が認められ、前身の庭園が存在した可能性がある。

Fig.159　二の丸の調査成果

安土桃山時代（堀尾氏在城期）を中心とした時期の遺構　※一部に戦国時代の遺構を含む、建物と構造は推定含む



江戸時代の遺構　※御殿等の建物の位置は推定

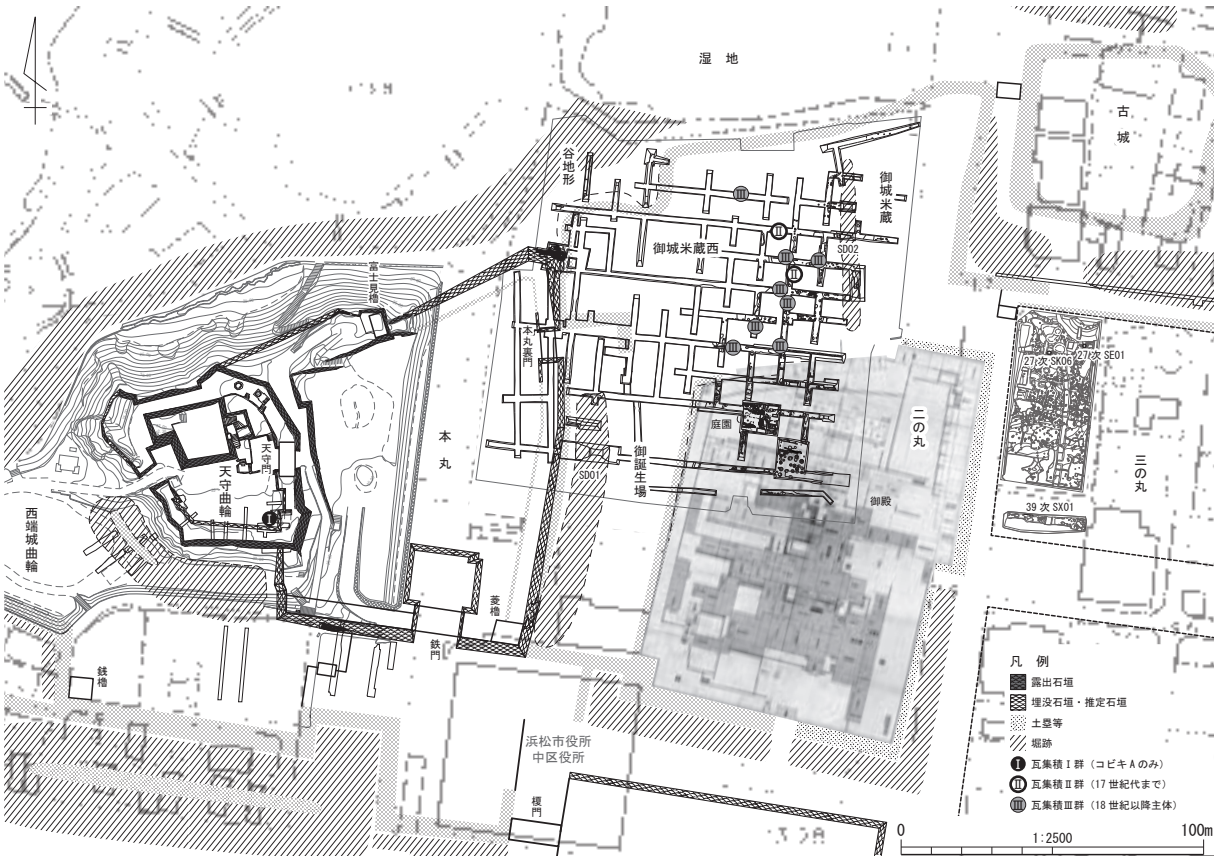


Fig.160　浜松城中枢部の構造と変遷

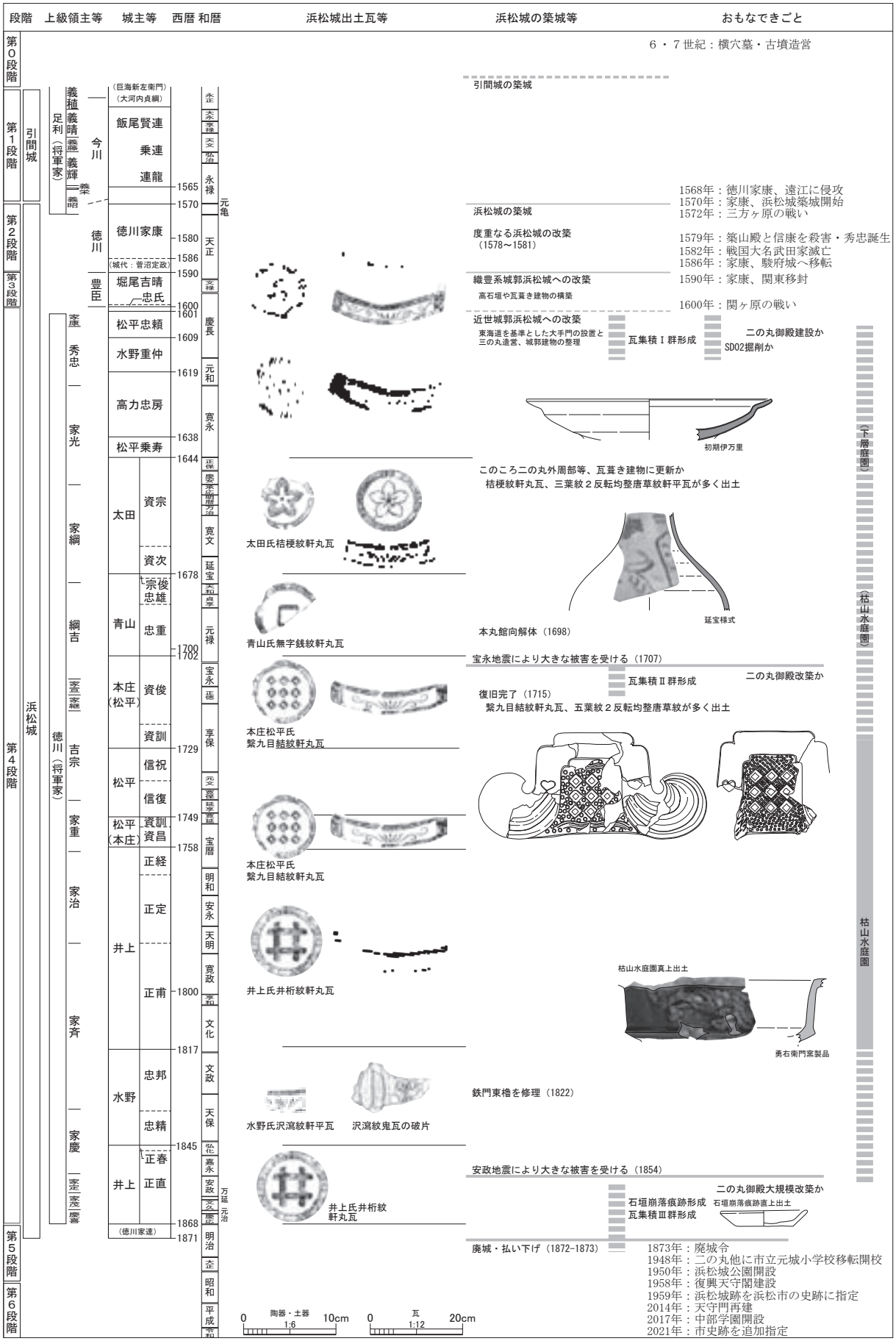


Fig.161　発掘調査成果と浜松城のできごと

御城米蔵　御城米蔵は、調査対象地北東部にあたり、御城米蔵西堀跡（SD02）の検出により、位置と範囲を定点をもって示すことが可能になった。蔵に関わる建物基礎遺構の検出には至らなかったが、御城米蔵の範囲内において、近世以前の遺構や遺物が多く認められ、関連遺構が残存している可能性が高い。

御城米蔵西　調査対象地北側のうち、本丸北東部の谷地形と東に位置する御城米蔵に挟まれた空間を御城米蔵西とした。明治５年作成の「浜松城郭」等では御城米蔵西部分に花畑と記載がある。御城米蔵西の北辺は塀に囲まれ、さらに北側は崖と浜松城北堀を兼ねた湿地が広がる。御城米蔵西の東部を中心に数多くの瓦集積を検出したほか、撹乱中や近・現代の造成土中からも近世の瓦や陶磁器が数多く出土しており、御城米蔵西に数多く廃棄遺構が形成されていたことが明らかになった。出土遺物の中には、延宝様式の瓶類や初期伊万里等が含まれ、二の丸御殿を含めた中枢部で使用されたものの廃棄に利用された空間であったと捉えられる。瓦集積には、桔梗紋軒丸瓦をはじめ17世紀代までの遺物で構成されるもの（瓦集積Ⅱ群）と、繋九目結紋鬼瓦や軒丸瓦をはじめ18世紀から19世紀前半の遺物を主体とするもの（瓦集積Ⅲ群）がある。瓦集積の形成時期は、それぞれ、瓦集積Ⅱ群が宝永地震の発災（1707）、瓦集積Ⅲ群が安政地震の発災（1854）や廃城（1873）といった事象との関連がうかがえる。

近世浜松城の形成時期　二の丸下層遺構やSD03等の廃絶年代と近世遺構の時期から、近世浜松城の成立は17世紀前葉のことと捉えられる。また、近世城郭としての浜松城の成立にあたっては、24次調査SX01の形成（瓦集積Ⅰ群）にみられる城郭建物の整理と造成（浜松市教委2019）や南堀の構築（浜松市教委2022）に加え、二の丸の大規模な造成や御城米蔵西堀の掘削とSD03等の埋立てなどの大規模な土木・建築工事が伴ったことが明らかになった。

２　調査の意義と今後の展望

調査対象地である旧元城小学校跡地は、近世浜松城における本丸や二の丸といった中枢部に該当すると想定されてきたが、後世の地形改変や土地利用が顕著であったため、調査前には遺構や遺物をはじめとした歴史情報の残存状況や内容は不明瞭であった。しかし、平成23年（2011）に実施した7次調査及び３年間にわたり実施した26次・35次・43次発掘調査により、調査対象地内には、引間城の時代を含めた浜松城の遺構や遺物が良好な状態で埋没していることが明らかになった。

発掘調査の成果は、本丸の範囲を明確にした本丸北東隅石垣や本丸東堀、御誕生場と二の丸の境界を示す段差、二の丸御殿の礎石や礎石据付穴といった建物基礎、二の丸御殿の奥御殿に築かれた庭園、御城米蔵西堀の検出等、近世浜松城の構造や変遷を明らかにするうえで重要な成果が数多く含まれる点が特筆できる。また、本丸北東隅石垣や本丸東石垣の石垣崩落痕跡の検出は幕末における城郭管理の様子を示す一例として注目できる。このほか、近世の二の丸御殿の下層をはじめ、引間城の時代を含めた浜松城に関わる遺構や遺物が数多く認識できた点も重要な成果である。

26次・35次・43次発掘調査は、地中に埋もれた引間城の時代を含めた浜松城の残存状況と内容の概要把握を目的として実施した限定的な調査である。本丸北東隅石垣や二の丸御殿の礎石・庭園検出をはじめとした重要遺構の発見が注目されるが、あくまでもこれらの歴史情報が良好な状態で残存していることの把握に留まる。より詳細な内容を把握するためには、計画的かつ綿密な調査研究が必要である。また、今後の活用にあたっては、調査対象地がもつ近世浜松城中枢部という歴史的特徴と重要性を踏まえた適切な検討と実施が望まれる。

［参考文献・引用文献］

伊藤裕偉　1996「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
小野正敏　1984「「第 4 回貿易陶磁研究集会」、その成果と課題」『貿易陶磁研究』No.4　貿易陶磁研究会
加藤理文　1994「浜松城をめぐる諸問題」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集　向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会
加藤理文　1997「二俣城・鳥羽山城の創築、修築・廃城」『研究紀要』5　静岡県埋蔵文化財調査研究所
壁谷奈央　2022「33・34 次調査出土の軒瓦について」『浜松城跡 14』浜松市教育委員会
北村和宏　1996a「尾張の「伊勢型鍋」」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
北村和宏　1996b「尾張の羽釜」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
栗原雅也　2005「初山焼」『陶磁器から見る静岡県の中世社会 資料集』発表要旨・論考編　菊川シンポジウム実行委員会
小林謙一　2019「焜炉」『考古調査ハンドブック 19　江戸の土器』ニューサイエンス社
静岡県　1930『静岡県史』第 1 巻（旧版）
静岡県　1992『静岡県史』史料編 9　近世一
鈴木一有　2014「遠江における守護所と城下町の様相」『新・清州会議資料集』 新・清州会議実行委員会
鈴木一有　2019「浜松城跡における軒瓦と鯱瓦について」『浜松城跡 13』浜松市教育委員会
鈴木一有　2021「浜松城の歴史と都市形成の歩み」『区画整理』第 64 巻 12 号　公益社団法人 街づくり区画整理協会
鈴木正貴　1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
田口昭二　1994「美濃窯の様相」『瑞浪陶磁資料館研究紀要 第 6 号』瑞浪陶磁資料館
富原文庫　2017『富原文庫蔵陸軍省城絵図』－明治五年の全国城郭存廃調査記録　戎光祥出版
浜松市教育委員会　1968『浜松城と浜松藩』
浜松市教育委員会　1984『浜松城天守曲輪周辺の発掘調査について』
浜松市教育委員会　1996『浜松市指定文化財　浜松城跡－考古学的調査の記録－』
浜松市教育委員会　2013a『浜松城跡 8 次』
浜松市教育委員会　2013b『浜松城跡 9 次』
浜松市教育委員会　2013c『平成 23 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2014『平成 24 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2015a『平成 25 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2015b『浜松城跡 10』
浜松市教育委員会　2016a『浜松城跡 11』
浜松市教育委員会　2016b『浜松における中世城館の調査』
浜松市教育委員会　2016c『平成 26 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2017a『平成 27 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2017b『二俣城跡・鳥羽山城跡総合調査報告書』
浜松市教育委員会　2017c『浜松城下町遺跡』
浜松市教育委員会　2018a『浜松城跡 12』
浜松市教育委員会　2018b『平成 28 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2019『浜松城跡 13』
浜松市教育委員会　2020a『平成 30 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2020b『浜松城跡 26 次調査の概要』
浜松市教育委員会　2021a『令和元年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2021b『浜松城跡 14』
浜松市教育委員会　2021c『浜松城跡 35 次調査の概要』
浜松市教育委員会　2022a『浜松城跡 15』
浜松市教育委員会　2022b『令和２年度　浜松市文化財年報』
浜松市教育委員会　2022c『浜松城跡 43 次調査の概要』
浜松市教育委員会　2022d『浜松城跡 16』
浜松市教育委員会　2023『令和３年度　浜松市文化財年報』
浜松市博物館　1995『浜松城のイメージ』
浜松市博物館　2020『浜松城』－築城から現代へ－
㈶浜松市文化協会　2002『恒武西宮遺跡』
㈶浜松市文化振興財団　2010『浜松城跡 4 次』
㈶浜松市文化振興財団　2011『浜松城跡 5 次』
㈶浜松市文化振興財団　2012a『浜松城跡 6 次』
㈶浜松市文化振興財団　2012b『浜松城跡 7 次』
藤沢良祐　2007「総論」『愛知県史 別編 窯業２ 中世・近世 瀬戸系』 愛知県
松江歴史館　2018『松江歴史館蔵　極秘諸国城図　図版集』
向坂鋼二　1976「浜松市動物園内作左山横穴墳」『森町考古』10
山崎信二　2008『近世瓦の研究』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

出土遺物観察表

凡　例

反転：「反」は反転実測、「一反」は一部反転実測したもの

大きさの単位は cm

計測値：括弧内は残存値

色調：『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修に準拠した

Fig.	No.	トレンチ	地　区	遺　構	種　別	細　別	反転	口径幅(cm)	器高長さ(cm)	底径厚さ(cm)	色　調	備　　考
23	1	27	本丸	本丸北東隅石垣	須恵器	短頸壺	反	13.3	(2.1)		灰	
23	2	27	本丸	本丸北東隅石垣	土師器	かわらけ		9.2	1.8	6.2	浅黄橙	ロクロ成形
23	3	27	本丸	本丸北東隅石垣	陶器	灯明皿		6.7	4.2	4.5	灰白	貫入、京(信楽)、19C(近世)
23	4	27	本丸	本丸北東隅石垣	磁器	青花碗			(1.3)	2.6	明緑灰	「大明年造」、貿易陶磁、16C前後
23	5	27	本丸	本丸北東隅石垣	瓦	軒丸瓦				2.3	浅黄	連珠三ツ巴紋、珠文推定12、軒丸瓦Ⅱa類 瓦当復元径16cm、離型剤(砂)か
23	6	27	本丸	本丸北東隅石垣	瓦	丸瓦		12.6		2.0	灰	コビキA、面取り２回、布目10本/㎠、吊紐痕 横目縫取痕、棒状刺突痕、扁平化
23	7	27	本丸	本丸北東隅石垣	瓦	丸瓦				2.4	灰	コビキB、面取り２回、棒状刺突痕
23	8	27	本丸	本丸北東隅石垣	瓦	不明				1.7	にぶい赤褐	
23	9	27	本丸	本丸北東隅石垣	瓦	鬼瓦					黒	
23	10	27	本丸	本丸北東隅石垣	瓦	目板瓦				2.1	灰	
24	11	27	本丸	瓦集積1(SX18)	土師器	かわらけ	反		(2.0)	8.5	にぶい橙	ロクロ成形
24	12	27	本丸	瓦集積1(SX18)	磁器	徳利	反		(3.6)	3.4	灰白	近代
24	13	27	本丸	瓦集積1(SX18)	瓦	軒桟瓦				2.1	灰	三ツ巴紋(右巻き)
24	14	27	本丸	瓦集積1(SX18)	瓦	丸瓦		15.0		2.4	灰	面取り１回、布目４～７本/㎠、棒状刺突痕
24	15	27	本丸	瓦集積1(SX18)	瓦	丸瓦		14.3		2.5	黄灰	コビキB、面取り２回、吊紐痕、棒状刺突痕
24	16	27	本丸	瓦集積1(SX18)	瓦	丸瓦				1.9	灰	コビキB、面取り２回、布目３～４本/㎠ 袋とじ痕か、ハナレ砂
24	17	27	本丸	瓦集積1(SX18)	瓦	丸瓦				2.2	灰	面取り２回、布目７～10本/㎠、吊紐痕 横目縫取痕、銀化顕著
24	18	27	本丸	瓦集積1(SX18)	瓦	桟瓦			32.8	1.7	灰	切込み4.0×4.0㎝
24	19	27	本丸	瓦集積1(SX18)	瓦	桟瓦				1.8	灰	切込み
24	20	27	本丸	瓦集積1(SX18)	瓦	雁振瓦				2.1	灰	
24	21	27	本丸	瓦集積1(SX18)	瓦	雁振瓦				1.7	灰黄	凹面ハナレ砂
24	22	27	本丸	瓦集積1(SX18)	瓦	雁振瓦				1.7	黒灰	凸面平滑、凹面ハナレ砂
24	23	27	本丸	瓦集積1(SX18)	瓦	雁振瓦				2.2	灰黄	凹面ハナレ砂
25	24	8	本丸	谷地形	瓦	雁振瓦				1.8	灰黄	釘穴□
30	25	1	本丸	包含層	須恵器	長頸瓶	一反		(7.8)		暗灰	
30	26	14	本丸	本丸東堀跡(SD01)	山茶碗	碗	反		(1.8)	7.0	灰白	
30	27	14	本丸	本丸東堀跡(SD01)	瓦	軒丸瓦				2.4	灰	連珠三ツ巴紋(左巻き)、珠文推定20、軒丸瓦Ⅰa類
30	28	1	本丸	本丸東堀跡(SD01)	瓦	鳥伏間瓦					灰	連珠三ツ巴紋
30	29	14	本丸	本丸東堀跡(SD01)	瓦	軒丸瓦				4.5	灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)
30	30	14	本丸	本丸東堀跡(SD01)	瓦	軒桟瓦				1.7	オリーブ黒	三葉紋唐草紋、東海式、軒桟瓦Ⅰ類
30	31	14	本丸	本丸東堀跡(SD01)	瓦	軒桟瓦				2.0	灰	菊紋唐草紋か、軒桟瓦Ⅱ類か
30	32	14	本丸	本丸東堀跡(SD01)	瓦	軒桟瓦				2.2	灰	菊紋唐草紋か、軒桟瓦Ⅱ類か
30	33	14	本丸	本丸東堀跡(SD01)	瓦	丸瓦				14.1	灰	面取り２回、棒状刺突痕
30	34	14	本丸	本丸東堀跡(SD01)	瓦	鬼瓦					灰	
30	35	14	本丸	本丸東堀跡(SD01)	瓦	鬼瓦					灰	
30	36	2	本丸	本丸東堀跡(SD01)	瓦	鬼瓦					灰	
30	37	32	本丸	本丸東堀跡(SD01)	瓦	鯱瓦				3.2	灰	C字形スタンプ
31	38	14	本丸	本丸東堀跡(SD01)	瓦	目板瓦		28.1		2.0	灰	釘穴○×２、右重ね、面取り短い
31	39	14	本丸	本丸東堀跡(SD01)	瓦	目板瓦		29.8		2.0	灰	釘穴○×２、左重ね、水切り
32	40	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	軒丸瓦				2.5	黄灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)、珠文推定12、 軒丸瓦Ⅱa類
32	41	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	軒丸瓦				1.6	黄灰	繋九目結紋、軒丸瓦Ⅴa類
32	42	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	軒平瓦				2.4	灰黄	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴb類
32	43	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	軒平瓦				2.0	黄灰	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴb類
32	44	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	軒桟瓦					灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)
32	45	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	軒桟瓦					灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)
32	46	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	軒桟瓦					灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)
32	47	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	軒桟瓦				2.0	灰	三ツ巴紋(右巻き)
32	48	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	軒桟瓦					橙	三ツ巴紋(右巻き)、離型剤(キラコ)
32	49	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	軒桟瓦				1.8	黄灰	軒桟瓦Z類
32	50	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	軒桟瓦				1.8	灰	軒桟瓦Z類
32	51	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	丸瓦				2.8	黄灰	コビキB、面取り２回、布目３本/㎠、吊紐痕
33	52	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	鬼瓦				2.0	灰	

Fig.	No.	トレンチ	地　区	遺　構	種　別	細　別	反転	口径幅(cm)	器高長さ(cm)	底径厚さ(cm)	色　調	備　　考
33	53	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	鯱瓦				2.4	灰	背鰭か
33	54	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	鯱瓦				2.2	灰	背鰭か、釘穴
33	55	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	鯱瓦				5.0	灰	鰭(両面)
33	56	12	本丸	瓦集積2(SX20)	瓦	鯱瓦				2.5	黄灰	鰭(片面)
41	57	34	二の丸	SX21	土師器	かわらけ	反	9.6	(2.6)	5.2	浅黄橙	ロクロ成形、16C後葉
41	58	34	二の丸	SX21	土師器	かわらけ	反		(2.1)	5.3	にぶい褐	ロクロ成形、16C後葉
41	59	1	二の丸	SP01	陶器	天目茶碗	反	11.8	(5.3)		黒褐	錆釉、大窯第１段階
41	60	1	二の丸	SP02	磁器	碗			(1.2)		灰白	貿易陶磁、16C後半～17C前半
41	61	23	二の丸	SD04	土師器	甕	反	23.0	(2.2)		灰褐	スス付着
41	62	23	二の丸	SD04	土師器	内耳鍋	一反	20.0	(10.0)		にぶい橙	スス付着 くの字形内耳鍋、内耳鍋Ａ１類、15C中葉～後葉
41	63	23	二の丸	SD04	土師器	内耳鍋	反	19.0	(5.8)		灰白	スス付着 内彎形内耳鍋、内耳鍋Ｂ類、16C後葉～17C前葉
41	64	23	二の丸	SD04	陶器	擂鉢	反	25.6	(2.8)		にぶい黄橙	大窯第１段階後半か
41	65	23	二の丸	SD04	陶器	擂鉢	反	24.4	(3.6)		にぶい赤褐	大窯第２段階後半か
41	66	23	二の丸	SD04	磁器	青花碗	反		(2.3)	3.9	灰白	染付碗Ｅ群か、貿易陶磁か、16C中葉
41	67	23	二の丸	SD04	磁器	青磁碗	反	2.4	(2.4)		オリーブ灰	青磁蓮弁文碗か、貿易陶磁か、15C末～16C中葉
45	68	34	二の丸	御殿跡	土師器	蓋	反	25.4	(3.6)		にぶい橙	
45	69	34	二の丸	御殿跡	土師器	甕	反	24.0	(3.6)	23.0	浅黄橙	南伊勢系、16C
45	70	34	二の丸	御殿跡	土師器	内耳鍋	反	19.0	(2.3)		にぶい黄褐	くの字形内耳鍋、内耳鍋Ａ類、15C中葉～16C後葉
45	71	11	二の丸	御殿跡	土師器	茶釜			(5.4)		橙	スス付着顕著、南伊勢系、16C
45	72	34	二の丸	御殿跡	土師器	小型壺か	反		(1.1)	3.6	浅黄橙	磨滅顕著
45	73	1	二の丸	御殿跡	土師器	不明	反	4.5	(2.3)		灰白	
45	74	3	二の丸	包含層	陶器	壺蓋	反	10.8	(2.6)		褐	志戸呂
45	75	1	二の丸	御殿跡	陶器	片口	反	16.6	(2.2)		灰オリーブ	片口部分ほぼ欠損、登窯第３段階第９小期か、瀬戸
45	76	34	二の丸	御殿跡	陶器	行平鍋	反	14.1	(3.0)		灰白	益子、近代
45	77	11	二の丸	御殿跡	磁器	碗			(1.0)	3.0	灰白	肥前、17C第３四半期
45	78	34	二の丸	御殿跡	石製品	砥石		5.3	8.9	1.0	灰オリーブ	線刻「三月十」「三」「千」か
45	79	34	二の丸	御殿跡	瓦	軒平瓦				2.3	灰	軒平瓦Ｚ類
45	80	34	二の丸	御殿跡	瓦	軒平瓦				2.0	灰	軒平瓦Ｚ類
45	81	34	二の丸	御殿跡	瓦	軒桟瓦					灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)
45	82	34	二の丸	御殿跡	瓦	軒桟瓦				1.8	灰	菊紋唐草紋、軒桟瓦Ⅱ類、顎貼付技法
45	83	34	二の丸	御殿跡	瓦	軒桟瓦				2.0	灰	軒桟瓦Ｚ類、離型剤(キラコ)
45	84	34	二の丸	御殿跡	瓦	軒桟瓦				2.1	灰	軒桟瓦Ｚ類
46	85	34	二の丸	御殿跡	瓦	丸瓦		14.2	30.7	2.6	灰	コビキＡ、面取り２回、吊紐痕、横目縫取痕
46	86	34	二の丸	御殿跡	瓦	丸瓦		13.1	28.0	1.7	灰	コビキＢ、面取り２回、布目10本/㎠、棒状刺突痕 凸面格子目タタキ
46	87	34	二の丸	御殿跡	瓦	丸瓦				2.0	灰	面取り１回、棒状刺突痕、縄目痕か
46	88	34	二の丸	御殿跡	瓦	平瓦			25.7	2.0	灰	
46	89	34	二の丸	御殿跡	瓦	平瓦			25.7	2.3	灰	
46	90	34	二の丸	御殿跡	瓦	平瓦		20.5		2.3	灰	
46	91	34	二の丸	御殿跡	瓦	熨斗瓦				1.4	灰	
46	92	34	二の丸	御殿跡	瓦	熨斗瓦				1.5	灰	
46	93	34	二の丸	御殿跡	瓦	隅瓦か				2.4	灰	
46	94	34	二の丸	御殿跡	瓦	道具瓦			29.8	1.9	灰	
47	95	34	二の丸	瓦集積3(SX19)	土師質土器	五徳	反	7.2	(5.6)	1.7	明褐灰	復元直径12.4㎝
47	96	34	二の丸	瓦集積3(SX19)	瓦	軒丸瓦		14.0	4.5	1.9	灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)、珠文７、軒丸瓦Ⅱc類 瓦当径15.5㎝、面取り２回、扁平化
47	97	34	二の丸	瓦集積3(SX19)	瓦	軒丸瓦				2.6	灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)、珠文推定７ 軒丸瓦Ⅱc類、范傷
47	98	34	二の丸	瓦集積3(SX19)	瓦	軒丸瓦		13.4	13.0	2.2	灰	繋九目結紋、軒丸瓦Ⅴa類、瓦当径14.0㎝ コビキＢ、面取り２回、離型剤(砂)顕著、扁平化
47	99	34	二の丸	瓦集積3(SX19)	瓦	軒丸瓦		15.1	8.6	2.5	灰黄	繋九目結紋、軒丸瓦Ⅴb類、瓦当径15.7㎝,コビキＢ 面取り２回、布目5～6本/㎠、ハナレ砂顕著
48	100	34	二の丸	瓦集積3(SX19)	瓦	丸瓦				1.8	灰	コビキＢ、面取り２回、布目10～12本/㎠、棒状刺突痕
48	101	34	二の丸	瓦集積3(SX19)	瓦	丸瓦				3.4	灰	コビキＢ、面取り２回、布目５本/㎠、棒状刺突痕 ユビナデ
48	102	34	二の丸	瓦集積3(SX19)	瓦	丸瓦				2.0	灰	コビキＢ、面取り２回、布目６本/㎠、吊紐痕 棒状刺突痕、釘穴
48	103	34	二の丸	瓦集積3(SX19)	瓦	丸瓦				1.8	灰	コビキＢ、面取り１回、棒状刺突痕、釘穴
48	104	34	二の丸	瓦集積3(SX19)	瓦	平瓦				2.0	灰	

Fig.	No.	トレンチ	地　区	遺　構	種　別	細　別	反転	口径幅(cm)	器高長さ(cm)	底径厚さ(cm)	色　調	備　　考
48	105	34	二の丸	瓦集積3(SX19)	瓦	桟瓦				1.7	灰	
48	106	34	二の丸	瓦集積3(SX19)	瓦	目板瓦				2.2	灰	水切り
48	107	34	二の丸	瓦集積3(SX19)	瓦	目板瓦				2.1	灰	
54	108	23	二の丸	庭園遺構	土師器	かわらけ	反	9.6	(2.0)		浅黄橙	非ロクロ成形
54	109	32	二の丸	庭園遺構	土師器	火鉢か	反		(2.9)	24.4	にぶい橙	17C中葉～後葉
54	110	32	二の丸	庭園遺構	土師器	火鉢か	反		(6.5)	20.0	にぶい橙	17C中葉～後葉
54	111	32	二の丸	庭園遺構	陶器	天目茶碗	反	11.6	(6.1)		浅黄橙	登窯第１段階第３・４小期、瀬戸
54	112	23	二の丸	庭園遺構	陶器	丸皿	反	10.2	1.8	6.2	オリーブ黄	貫入 大窯第３段階後半～第４段階前半
54	113	32	二の丸	庭園遺構	陶器	折縁盤	反		(6.9)		淡黄	脚付きか、雲龍文 登窯第３段階第８・９小期、勇右衛門
54	114	2	二の丸	庭園遺構	磁器	蓋	反	14.8	(2.9)		灰白	両面に絵付け、瀬戸美濃、近代
54	115	32	二の丸	庭園遺構	土製品	羽口		6.6	(5.1)		にぶい黄褐	
54	116	32	二の丸	庭園遺構	石製品	砥石		6.0	7.2			被熱痕
55	117	23	二の丸	庭園遺構	瓦	軒丸瓦				2.0	黄橙	桔梗紋、軒丸瓦Ⅲa類
55	118	23	二の丸	庭園遺構	瓦	軒平瓦				1.1	灰	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴb類
55	119	32	二の丸	庭園遺構	瓦	軒平瓦					浅黄	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴb類
55	120	32	二の丸	庭園遺構	瓦	軒桟瓦					灰	連珠三ツ巴紋
55	121	32	二の丸	庭園遺構	瓦	軒桟瓦				1.7	灰	連珠三ツ巴紋(左巻き)
55	122	32	二の丸	庭園遺構	瓦	軒桟瓦				1.6	灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)
55	123	32	二の丸	庭園遺構	瓦	丸瓦		14.7		2.6	灰	コビキＢ、面取り２回、布目３～４本/㎠、 断面マーブル
55	124	23	二の丸	庭園遺構	瓦	丸瓦				2.6	灰	コビキＢ、面取り１回、布目３～４本/㎠
55	125	23	二の丸	庭園遺構	瓦	平瓦		20.6	25.0	1.8	黄灰	縦横比１：0.83以下、凹面ハナレ砂、打欠き痕
56	126	23	二の丸	瓦集積5(SX16)	瓦	丸瓦		13.3		1.9	暗灰	コビキＢ、面取り２回、布目３本/㎠、吊紐痕、 袋とじ痕か
56	127	23	二の丸	瓦集積5(SX16)	瓦	平瓦		21.0		2.0	灰	
56	128	23	二の丸	瓦集積5(SX16)	瓦	目板瓦				1.9	灰	釘穴○×１、右重ね、面取り長い
56	129	23	二の丸	瓦集積5(SX16)	瓦	目板瓦				2.0	黄灰	
56	130	23	二の丸	瓦集積5(SX16)	瓦	目板瓦				2.5	灰黄	水切り
60	131	3	二の丸	瓦集積7(SX13)	陶器	甕	反	25.2	(13.0)		灰褐	大窯段階、志戸呂か初山
60	132	23	二の丸	瓦集積7(SX13)	瓦	軒丸瓦				2.4	灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)、珠文推定12、軒丸瓦Ⅱ類 瓦当復元径16cm
60	133	23	二の丸	瓦集積7(SX13)	瓦	軒丸瓦				1.7	灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)、珠文推定12、軒丸瓦Ⅱ類 瓦当復元径16cm
60	134	23	二の丸	瓦集積7(SX13)	瓦	軒桟瓦				1.7	灰	三葉紋唐草紋、軒桟瓦Ⅰ類
60	135	23	二の丸	瓦集積7(SX13)	瓦	丸瓦		14.0		2.1	灰	コビキＢ、面取り１回、布目６～７本/㎠、吊紐痕
60	136	23	二の丸	瓦集積7(SX13)	瓦	丸瓦				1.8	灰	コビキＢ、面取り２回、布目６本/㎠、吊紐痕 袋とじ痕
60	137	23	二の丸	瓦集積7(SX13)	瓦	平瓦				2.0	黄灰	
60	138	23	二の丸	瓦集積7(SX13)	瓦	目板瓦		28.0		2.1	黄灰	釘穴○×１
60	139	23	二の丸	瓦集積7(SX13)	瓦	雁振瓦				2.1	黄灰	凸面ハナレ砂
60	140	23	二の丸	瓦集積7(SX13)	石製品	砥石		7.8	(11.2)	4.0		砂岩
60	141	3	二の丸	瓦集積8(SX03)	陶器	皿か	反	10.4	(0.9)		灰白	志野、織部か
60	142	3	二の丸	瓦集積8(SX03)	瓦	目板瓦				2.1	灰白	
62	143	3	二の丸	瓦集積9(SX02)	土師器	かわらけ	反	11.4	1.9	6.5	にぶい橙	ロクロ成形　口縁部スス付着、灯明皿
62	144	3	二の丸	瓦集積9(SX02)	磁器	碗	反	9.4	5.3	4.1	灰白	肥前、18C前半
62	145	10	二の丸	包含層	瓦	軒丸瓦				1.8	灰	桔梗紋、軒丸瓦Ⅲa類
62	146	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反	19.2	(6.9)		橙	
62	147	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反	16.4	(5.4)		橙	
62	148	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反	10.6	(5.3)		にぶい橙	
62	149	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反	11.4	(4.9)		橙	
62	150	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉			(3.0)		橙	
62	151	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉			(6.0)		灰	
62	152	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉			(3.6)		灰	復元径11.0cm
62	153	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉			(6.5)		褐灰	
62	154	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反		(5.7)	16.8	褐灰	
62	155	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反		(2.0)	17.0	橙	
62	156	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反	10.0	(1.0)		橙	

Fig.	No.	トレンチ	地　区	遺　構	種　別	細　別	反転	口径幅(cm)	器高長さ(cm)	底径厚さ(cm)	色　調	備　　考
62	157	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反		(2.0)	7.0	にぶい黄橙	
62	158	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反		(3.4)	11.6	にぶい橙	底部に沈線、穿孔×推定５
62	159	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反	9.4	3.4	9.4	にぶい橙	
62	160	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反		(2.3)	12.0	浅黄橙	貼付部の穿孔は器壁に対して斜め 底部に沈線、穿孔
62	161	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反	3.7	(6.5)	0.7	浅黄橙	底部に沈線、穿孔×推定５
62	162	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反	15.0	(3.0)		にぶい橙	
62	163	17	二の丸	SP03	土師質土器	焜炉	反		(2.0)	13.8	にぶい橙	
62	164	17	二の丸	SP03	土師質土器	把手	反	2.8	(6.3)	2.2	橙	
64	165	1	二の丸	包含層	須恵器	壺	反		(2.9)	13.2	灰	
64	166	11	二の丸	包含層	土師器	かわらけ	反	10.0	1.7	7.4	灰白	ロクロ成形
64	167	11	二の丸	包含層	土師器	かわらけ	反	12.0	2.9		灰白	非ロクロ成形、粘土紐巻上げ
64	168	17	二の丸	包含層	土師器	羽釜	反	22.6	(2.5)		にぶい橙	
64	169	23	二の丸	包含層	土師器	内耳鍋	反	24.0	(5.5)		にぶい橙	スス付着、内彎形内耳鍋、内耳鍋Ｂ類
64	170	23	二の丸	包含層	土師器	内耳鍋	反	21.0	(7.0)		橙	スス付着、内彎形内耳鍋、内耳鍋Ｂ類
64	171	17	二の丸	包含層	土師質土器	焜炉か	反	16.0	4.0	15.0	浅黄橙	
64	172	17	二の丸	包含層	土師質土器	焜炉か	反	14.8	(2.8)		浅黄橙	
64	173	17	二の丸	包含層	土師質土器	焜炉か	反	17.2	(4.2)		灰白	
64	174	17	二の丸	包含層	土師質土器	蓋か	反	14.4	(1.4)		橙	穿孔
64	175	17	二の丸	包含層	土師質土器	蓋か	反	18.4	(2.4)		橙	
64	176	17	二の丸	包含層	土師質土器	蓋か	反	5.6	3.3		にぶい橙	穿孔
64	177	3	二の丸	包含層	陶器	天目茶碗	反	11.6	(5.8)		暗赤褐	大窯第１段階
64	178	17	二の丸	包含層	陶器	天目茶碗	反	10.4	(4.2)		黒	大窯第４段階後半
64	179	3	二の丸	包含層	陶器	皿	反		(1.2)	6.2	浅黄	端反皿か丸皿 大窯第３・４段階
64	180	17	二の丸	包含層	陶器	大皿か			(2.9)		暗褐	志戸呂か、錆釉か
64	181	3	二の丸	包含層	陶器	馬目皿	反	23.8	(3.8)		灰白	江戸後期
64	182	23	二の丸	包含層	陶器	甕	反	29.4	(4.4)		にぶい橙	口縁内面スス付着
64	183	17	二の丸	包含層	陶器	甕			(3.2)		にぶい赤褐	大窯段階
64	184	17	二の丸	包含層	陶器	擂鉢			(2.9)		黒褐	登窯第２段階第６小期、瀬戸
64	185	17	二の丸	包含層	陶器	水注	反		(3.5)	24.0	褐	大窯第３・４段階、美濃
64	186	3	二の丸	包含層	磁器	碗	一反	8.2	5.1	3.3	灰白	肥前、19C前半、焼成不良
64	187	17	二の丸	包含層	磁器	稜花皿	反	12.4	(2.6)		灰白	龍泉窯、15C後半～16C前半
64	188	2	二の丸	包含層	磁器	端反皿	反	11.0	(1.3)		灰白	貿易陶磁、16C
64	189	2	二の丸	包含層	磁器	青磁盤			(3.4)		灰オリーブ	龍泉窯、14～15C
64	190	2	二の丸	包含層	磁器	合子か			1.2		灰白	合子か香炉
65	191	1	二の丸	包含層	瓦	軒丸瓦				2.2	灰	桔梗紋、軒丸瓦Ⅲa類
65	192	10	二の丸	包含層	瓦	軒平瓦				2.2	灰	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴb類
65	193	11	二の丸	包含層	瓦	軒平瓦					黄灰	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴa類
65	194	17	二の丸	包含層	瓦	軒桟瓦				1.6	黄橙	三ツ巴紋(右巻き)
65	195	11	二の丸	包含層	瓦	軒桟瓦				1.7	灰	三ツ巴紋(右巻き)
65	196	11	二の丸	包含層	瓦	鬼瓦					灰	
65	197	2	二の丸	包含層	瓦	目板瓦		27.9	42.3	2.1	黄灰	釘穴○×３、左重ね、打欠き痕
65	198	2	二の丸	包含層	瓦	目板瓦		28.6		1.9	灰	釘穴○×１、左重ね
78	199	13	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	土師器	かわらけ	反	10.0	1.9	4.9	浅黄橙	非ロクロ成形
78	200	13	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	土師器	かわらけ	反	10.5	(2.1)		浅黄橙	ロクロ成形
78	201	13	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	土師器	盤か皿	反		(1.7)	13.2	にぶい橙	赤彩付着
78	202	20	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	陶器	天目茶碗	反	10.8	5.6	3.9	にぶい橙	大窯第３段階後半～第４段階前半、内反り、 高台脇削り
78	203	13	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	陶器	尾呂茶碗	反	11.7	(5.0)		釉　褐	美濃Ⅲa・b期
78	204	13	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	陶器	鉄絵鉢	反	30.0	7.2	15.3	灰黄	登窯第１段階第２・３小期　口縁の折れが弱い(古相)
78	205	20	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	陶器	擂鉢	反	31.3	(2.7)		暗赤褐	古瀬戸後期様式Ⅳ期新
78	206	20	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	陶器	擂鉢	反	34.6	(3.3)		灰褐	登窯第３段階第11小期
78	207	20	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	瓦	軒丸瓦					灰	桔梗紋、軒丸瓦Ⅲa類
78	208	46	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	瓦	軒丸瓦				2.3	灰	繋九目結紋、軒丸瓦Ⅴb類、18C前半～中頃

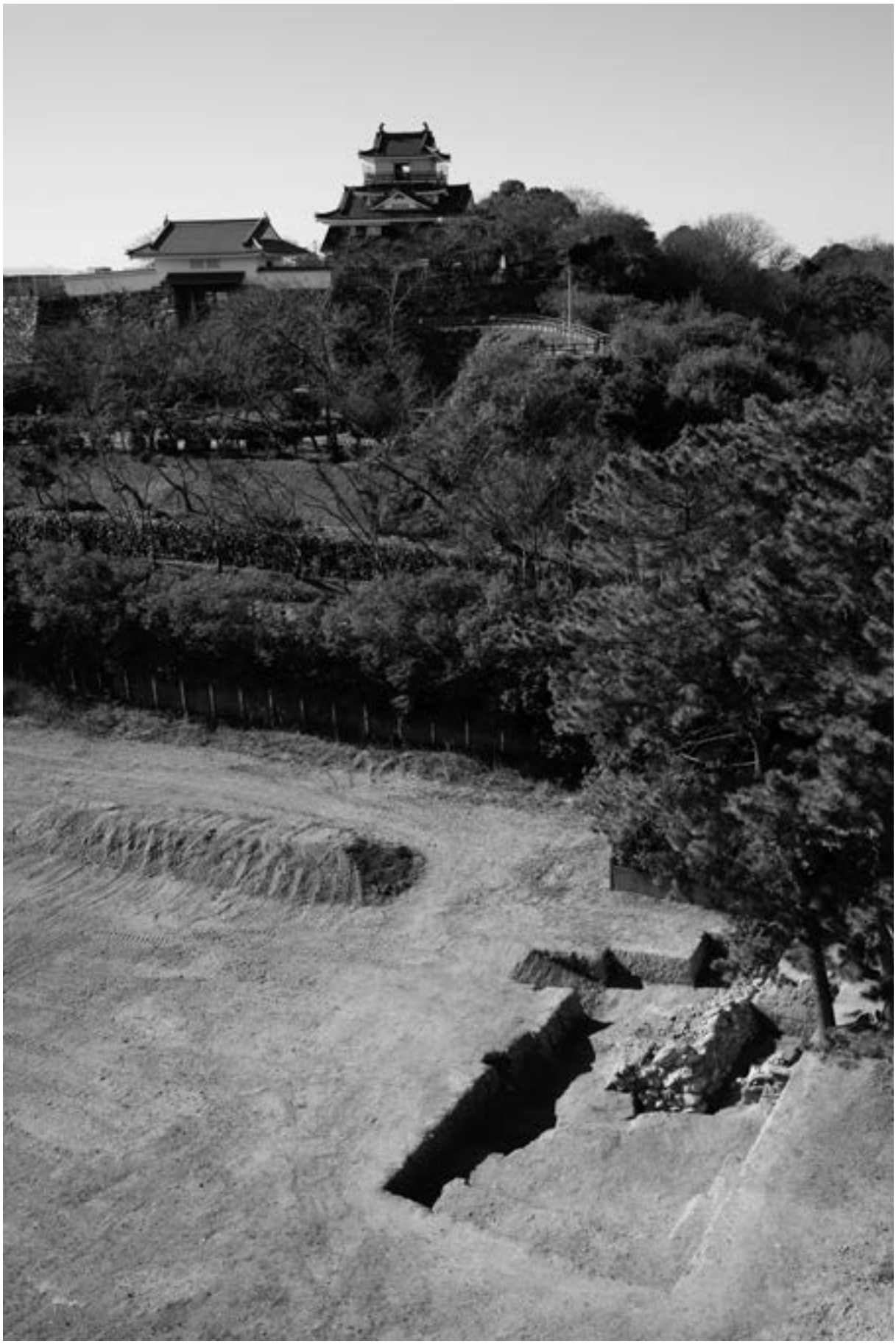
Fig.	No.	トレンチ	地　区	遺　構	種　別	細　別	反転	口径幅(cm)	器高長さ(cm)	底径厚さ(cm)	色　調	備　　考
78	209	6	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	瓦	軒平瓦				1.9	灰	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴa類
78	210	13	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	瓦	丸瓦		12.6		2.4	灰	コビキＢ、面取り２回、凹面ハケ、小型
78	211	13	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	瓦	雁振瓦		15.5	21.5	1.9	灰	
78	212	5	御城米蔵	御城米蔵西堀跡(SD02)	瓦	目板瓦		19.1	31.3	2.3	灰	釘穴○×１、右重ねか
81	213	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	土師器	かわらけ	反		(1.9)	10.0	浅黄橙	ロクロ成形、器壁厚い
81	214	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	土師器	かわらけ	反		(1.5)	8.0	浅黄橙	ロクロ成形
81	215	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	陶器	平碗	反	12.0	(1.5)		灰オリーブ	箔入、古瀬戸後期様式前半
81	216	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	陶器	大皿	反	27.9	(5.7)		暗褐	焼締大皿、錆釉、土は大皿特有のもの 大窯第３・４段階、瀬戸美濃
81	217	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	陶器	擂鉢			(3.1)		暗赤褐	大窯第４段階前半　瀬戸美濃
81	218	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	陶器	蓋か			(0.7)		にぶい赤褐	最大径10.3cm
81	219	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	陶器	三彩土瓶			(4.7)		灰白	京(信楽)、19C(近世)
81	220	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	磁器	碗	反		(4.0)	4.5	灰白	肥前、18～19C
81	221	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	軒丸瓦				2.3	灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)、珠文(大)９ 瓦当径16.0cm、コビキＢ、吊紐痕
81	222	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	軒丸瓦				2.6	灰	連珠三ツ巴紋、珠文(大)10か、軒丸瓦Ⅰb類か
81	223	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	軒平瓦				2.3	灰	軒平瓦Ｚ類
81	224	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	軒平瓦				2.1	灰	均整唐草2反転か、軒平瓦Ｚ類、中央部幅広面取り
82	225	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	丸瓦				2.1	灰	コビキＡ、面取り２回、吊紐痕、灰色硬質
82	226	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	丸瓦				2.1	灰	コビキＢ、面取り２回、布目10本/㎠、縄目痕 灰色硬質
82	227	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	丸瓦				2.1	灰	コビキＢ、面取り２回、布目10本/㎠、吊紐痕 断面マーブル、灰色硬質
82	228	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	丸瓦				2.2	灰	面取り１回、布目３～５本/㎠、吊紐痕 凸面「山」スタンプ×２
82	229	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	丸瓦				2.3	黄灰	コビキＢ、面取り２回、布目４～５本/㎠ 棒状刺突痕
82	230	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	丸瓦				2.2	灰	コビキＢ、面取り２回、吊紐痕、袋とじ痕 灰色硬質
82	231	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	平瓦				2.6	灰	両面ハナレ砂
82	232	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	平瓦				1.8	灰	両面ハナレ砂
83	233	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	平瓦		29.5		2.4	灰白	凸面ハナレ砂
83	234	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	平瓦				2.1	灰白	両面ハナレ砂、凸面指頭圧痕、頭端部に布目痕
83	235	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	平瓦				2.5	浅黄橙	断面マーブル
83	236	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	平瓦				2.2	灰	凹面ナデ、凸面ハケ
83	237	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	平瓦				2.2	灰黄	
83	238	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	平瓦				2.5	灰	凸面ハナレ砂
83	239	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	平瓦				2.4	灰	銀化、断面マーブル
83	240	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	平瓦				1.8	灰	断面マーブル
83	241	46	御城米蔵	瓦集積11(SX17)	瓦	平瓦				2.3	灰黄	両面ハナレ砂、側面にスタンプ×１
86	242	11	御城米蔵西	SD03	土師器	かわらけ	反	8.7	1.5		浅黄橙	非ロクロ成形
86	243	23	御城米蔵西	SD03	土師器	かわらけ		10.0	2.8		灰白	非ロクロ成形
86	244	23	御城米蔵西	SD03	土師器	かわらけ	反		(1.2)	6.0	灰白	ロクロ成形
86	245	11	御城米蔵西	SD03	土師器	羽釜	反	17.7	(4.5)		にぶい黄橙	羽釜Ⅱ-４、Ａ４類か、15C前
86	246	23	御城米蔵西	SD03	土師器	羽釜	反	19.6	(4.5)		浅黄橙	器壁非常に薄く歪み顕著、羽釜Ⅱ-４、Ａ４類か15C前
86	247	11	御城米蔵西	SD03	土師器	羽釜	反	22.5	(3.6)		にぶい橙	羽釜Ⅱ-４、Ａ４類か、15C前
86	248	23	御城米蔵西	SD03	土師器	羽釜	反	21.6	(3.1)		浅黄橙	穿孔、羽釜Ⅱ-４、Ａ４類か、15C前
86	249	11	御城米蔵西	SD03	土師器	内耳鍋	反	19.4	(11.0)		橙	くの字形内耳鍋 内耳鍋Ａ２類15C中葉～16C後葉
86	250	11	御城米蔵西	SD03	土師器	内耳鍋	反	20.7	(2.8)		にぶい橙	くの字形内耳鍋 内耳鍋Ａ類、15C中葉～16C後葉
86	251	23	御城米蔵西	SD03	土師器	内耳鍋			(4.7)		灰褐	内彎形内耳鍋 内耳鍋Ｂ２類、16C後葉～17C前葉
86	252	23	御城米蔵西	SD03	土師器	内耳鍋	反	22.0	(3.7)		にぶい褐	内彎形内耳鍋 内耳鍋Ｂ２類、16C後葉～17C前葉
86	253	23	御城米蔵西	SD03	土師器	内耳鍋	反	16.4	(4.0)		にぶい橙	半球形内耳鍋 内耳鍋Ｃ類、16C中葉～17C前葉
86	254	23	御城米蔵西	SD03	陶器	天目茶碗	反	12.3	(4.4)		釉　黒	鉄釉、縦に縞状、大窯第３段階前半
86	255	11	御城米蔵西	SD03	陶器	小皿		9.8	2.7	5.0	オリーブ黄	古瀬戸後期様式Ⅳ期新
86	256	11	御城米蔵西	SD03	陶器	反り皿	反	10.4	(2.1)		浅黄	大窯第２段階後半
86	257	11	御城米蔵西	SD03	陶器	甕	反	33.0	(6.9)		褐	常滑、14C後半
86	258	11	御城米蔵西	SD03	陶器	甕	反	22.0	(10.7)		黒褐	常滑、15C後半
86	259	11	御城米蔵西	SD03	陶器	擂鉢	反	30.1	(3.5)		暗赤褐	古瀬戸後期様式Ⅳ期新
86	260	23	御城米蔵西	SD03	陶器	擂鉢	反		(2.0)	7.3	明赤褐	大窯段階

Fig.	No.	トレンチ	地　区	遺　構	種　別	細　別	反転	口径幅(cm)	器高長さ(cm)	底径厚さ(cm)	色　調	備　　考
86	261	23	御城米蔵西	SD03	土製品	羽口		7.7	(7.2)		黄灰	推定内径６㎝
86	262	46	御城米蔵	包含層	土師器	内耳鍋		20.5	(11.5)		にぶい褐	スス付着、内彎形内耳鍋、内耳鍋Ｂ類
86	263	46	御城米蔵	包含層	陶器	段皿	反	11.9	(2.2)		にぶい黄橙	摩耗剝離顕著
86	264	42	御城米蔵	包含層	瓦	軒丸瓦				1.7	灰白	連珠三ツ巴(右巻き)、珠文11
86	265	42	御城米蔵	包含層	瓦	軒平瓦				2.5	灰	五葉紋３反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅱa類 顎貼付技法
89	266	20	御城米蔵西	瓦集積12(SX12)	陶器	筒形碗	反	8.9	(3.8)		赤褐	美濃Ⅱ期、美濃、17C中葉
89	267	20	御城米蔵西	瓦集積12(SX12)	瓦	丸瓦			28.0	2.0	灰	コビキＢ、面取り２回、布目３～４本/㎠ 吊紐痕、棒状刺突痕
89	268	20	御城米蔵西	瓦集積12(SX12)	瓦	平瓦			29.6	2.0	灰白	凸面ハナレ砂、断面マーブル
89	269	20	御城米蔵西	瓦集積12(SX12)	瓦	平瓦			27.0	2.1	灰	凸面ハケ
89	270	20	御城米蔵西	瓦集積12(SX12)	瓦	平瓦		20.9		2.0	灰	凸面ハナレ砂、断面マーブル
89	271	20	御城米蔵西	瓦集積12(SX12)	瓦	平瓦				2.0	灰	凸面ハケ
89	272	20	御城米蔵西	瓦集積12(SX12)	瓦	平瓦				1.9	灰	凸面ハナレ砂、未調整
89	273	20	御城米蔵西	瓦集積12(SX12)	瓦	平瓦				2.1	灰白	凹面板ナデ後ミガキ、凸面板ナデ、断面マーブル
90	274	20	御城米蔵西	瓦集積12(SX12)	瓦	鬼瓦		21.1	23.7	1.8	灰	繋九目結紋、切妻屋根用か
90	275	20	御城米蔵西	瓦集積12(SX12)	瓦	鬼瓦				2.5	灰黄	
90	276	20	御城米蔵西	瓦集積12(SX12)	瓦	なまこ瓦				4.6	灰白	両面化粧土、焼成不良、側面に釘穴□
90	277	20	御城米蔵西	瓦集積12(SX12)	瓦	なまこ瓦				3.3	灰	両面化粧土、焼成不良、側面に釘穴□
90	278	20	御城米蔵西	瓦集積12(SX12)	瓦	なまこ瓦				3.0	灰白	両面化粧土、焼成不良
93	279	5	御城米蔵西	瓦集積13(SX05)	陶器	鉄絵鉢	反	34.2	(2.9)		淡黄	登窯第１段階第３・４小期、瀬戸美濃か
93	280	5	御城米蔵西	瓦集積13(SX05)	瓦	軒丸瓦				1.5	灰	桔梗紋、軒丸瓦Ⅲa類
93	281	5	御城米蔵西	瓦集積13(SX05)	瓦	軒平瓦				1.7	灰	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴ類か
93	282	5	御城米蔵西	瓦集積13(SX05)	瓦	丸瓦				2.1	灰	面取り２回、布目痕
93	283	5	御城米蔵西	瓦集積13(SX05)	瓦	平瓦				1.8	灰	
93	284	19	御城米蔵西	瓦集積14(SX10)	陶器	鉢か	反	39.6	(8.1)		橙	常滑
97	285	47	御城米蔵西	瓦集積15(SX09)	瓦器	火鉢	反	33.6	(5.2)		灰	
97	286	47	御城米蔵西	瓦集積15(SX09)	瓦	軒平瓦		20.7		2.5	黄灰	五葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅵ類 右端切縮め
97	287	47	御城米蔵西	瓦集積15(SX09)	瓦	平瓦			29.6	1.9	灰白	凸面ハナレ砂
97	288	47	御城米蔵西	瓦集積15(SX09)	瓦	平瓦		22.4	29.9	2.1	灰	
97	289	47	御城米蔵西	瓦集積15(SX09)	瓦	目板瓦				2.9	灰	釘穴○×１
97	290	47	御城米蔵西	瓦集積15(SX09)	瓦	隅瓦				3.5	灰	釘穴○×１、裏面ハナレ砂
98	291	47	御城米蔵西	瓦集積15(SX09)	瓦	鬼瓦		51.7	19.1	1.8	灰	繋九目結紋
99	292	47	御城米蔵西	瓦集積15(SX09)	瓦	鬼瓦		43.4	23.0	2.1		繋九目結紋
100	293	19	御城米蔵西	瓦集積16(SX11)	陶器	丸皿	反	9.5	(4.7)		明緑灰	大窯第３段階後半、瀬戸美濃
100	294	19	御城米蔵西	瓦集積16(SX11)	陶器	向付	反		(1.0)		灰白	長石釉、型押し、美濃Ⅲa期、美濃
100	295	19	御城米蔵西	瓦集積16(SX11)	瓦	軒平瓦				2.6	灰	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴb類
100	296	19	御城米蔵西	瓦集積16(SX11)	瓦	丸瓦				2.4	灰	コビキＡか、面取り２回、布目10～12本/㎠ 凸面縄目タタキ
100	297	19	御城米蔵西	瓦集積16(SX11)	瓦	丸瓦		13.6		2.1	灰	コビキＢ、面取り１回、布目５本/㎠、袋とじ痕
100	298	19	御城米蔵西	瓦集積16(SX11)	瓦	丸瓦		13.3	31.5	2.0	灰	面取り２回、布目５本/㎠、棒状刺突痕
100	299	19	御城米蔵西	瓦集積16(SX11)	瓦	目板瓦				2.0	灰	釘穴○×１
100	300	19	御城米蔵西	瓦集積16(SX11)	瓦	目板瓦				2.5	灰	釘穴○×１
102	301	23	御城米蔵西	瓦集積17(SX15)	瓦	軒丸瓦				2.0	灰	桔梗紋、軒丸瓦Ⅲa類、離型剤(砂)、17C後半か
102	302	23	御城米蔵西	瓦集積17(SX15)	瓦	丸瓦				2.0	灰	面取り２回、吊紐痕、棒状刺突痕
102	303	23	御城米蔵西	瓦集積17(SX15)	瓦	平瓦				1.8	灰	凹面ハケか、凸面未調整
106	304	23	御城米蔵西	瓦集積18(SX04)	陶器	土瓶	反		(9.3)		にぶい褐	濾穴×３、登窯第３段階第８小期
106	305	4	御城米蔵西	瓦集積18(SX04)	瓦	丸瓦				2.2	灰	面取り２回、布目９本/㎠、棒状刺突痕 断面マーブル
106	306	23	御城米蔵西	瓦集積18(SX04)	瓦	丸瓦				2.0	灰	コビキＢ、面取り２回、布目９本/㎠
106	307	4	御城米蔵西	瓦集積18(SX04)	瓦	熨斗瓦			13.1	1.5	灰	割り痕
106	308	4	御城米蔵西	瓦集積18(SX04)	瓦	なまこ瓦				2.6	灰	斜め置き、側面ハナレ砂
108	309	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	土師器	かわらけ	反		(1.1)	5.2	浅黄橙	ロクロ成形
108	310	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	灰釉陶器	碗	反	19.2	(2.4)		灰白	
108	311	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	山茶椀	碗	反	14.9	(2.0)		灰白	
108	312	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	陶器	天目茶碗	反	11.8	(4.4)		黒	大窯第４段階後半

Fig.	No.	トレンチ	地　区	遺　構	種　別	細　別	反転	口径幅(cm)	器高長さ(cm)	底径厚さ(cm)	色　調	備　　考
108	313	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	陶器	鉄絵鉢	反		(4.2)	15.0	にぶい黄橙	
108	314	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	磁器	白磁型打ち皿	反		(1.0)	4.8	灰白	見込み陰刻、瀬戸美濃、近代
108	315	18	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	軒丸瓦				2.0	灰	連珠三ツ巴紋、軒丸瓦Ⅱc類か
108	316	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	軒丸瓦		14.4	14.3	2.3	灰	繋九目結紋、軒丸瓦Ⅴa類、瓦当径14.0㎝
108	317	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	軒平瓦				1.8	灰	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴb類 顎貼付技法
108	318	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	軒平瓦				1.6	灰	菊紋３反転均整唐草紋か、軒平瓦Ⅶ類か
108	319	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	軒桟瓦					灰	三ツ巴紋(右巻き)
108	320	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	軒桟瓦				1.6	灰	菊紋唐草紋、軒桟瓦Ⅱ類
108	321	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	軒桟瓦				2.2	灰	菊紋唐草紋、軒桟瓦Ⅱ類
108	322	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	丸瓦		14.3		2.2	暗灰	コビキB、面取り２回、布目５本/㎠、扁平化
108	323	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	丸瓦		14.0		1.9	黒褐	コビキB、面取り２回、布目５本/㎠、扁平化
108	324	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	丸瓦		13.6		1.7	灰	コビキB、面取り２回、布目８～９本/㎠ 吊紐痕、凸面銀化
108	325	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	丸瓦				1.8	灰	面取り２回、布目４～５本/㎠、ユビナデ 打欠き痕、扁平化
109	326	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	桟瓦		29.2	29.4	2.0	灰	切込み4.0×8.5㎝、裏面ハナレ砂
109	327	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	桟瓦			28.8	1.7	灰	切込み4.0×8.5㎝
109	328	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	桟瓦				1.6	暗灰	切込み4.0×4.0㎝
109	329	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	桟瓦				2.0	暗灰	切込み
109	330	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	熨斗瓦				1.6	灰	割り痕
109	331	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	目板瓦				2.0	灰	釘穴○×２、水切り、左重ね
109	332	23	御城米蔵西	瓦集積19(SX14)	瓦	目板瓦				1.8	暗灰	釘穴○×１、裏ハナレ砂
111	333	10	御城米蔵西	瓦集積20(SX07)	陶器	丸碗	反	8.0	(5.3)		灰白	瀬戸美濃、江戸後期
111	334	10	御城米蔵西	瓦集積20(SX07)	瓦	軒桟瓦				1.9	灰	離型剤(キラコ)、軒桟瓦Ｚ類
111	335	10	御城米蔵西	瓦集積20(SX07)	瓦	軒桟瓦				2.5	黄灰	三葉紋唐草紋、軒桟瓦Ⅰ類か、顎貼付技法
111	336	10	御城米蔵西	瓦集積20(SX07)	瓦	丸瓦				1.5	灰	面取り２回、布目５～６本/㎠、棒状刺突痕
111	337	10	御城米蔵西	瓦集積20(SX07)	瓦	丸瓦		13.1		2.0	褐灰	面取り２回、棒状刺突痕、釘穴
111	338	10	御城米蔵西	瓦集積20(SX07)	瓦	平瓦		21.9	25.0	2.0	灰	縦横比1：0.83以上、凸面ハナレ砂
114	339	19	御城米蔵西	SK01	土師器	内耳鍋	反	24.0	(11.8)		にぶい黄橙	スス付着、くの字形内耳鍋、内耳鍋Ａ類
114	340	19	御城米蔵西	SK01	土師器	鍋	反	23.8	(11.0)		にぶい橙	スス付着顕著、南伊勢系
114	341	19	御城米蔵西	SK02	土師器	かわらけ		14.4	2.8	7.8	にぶい橙	ロクロ成形
114	342	19	御城米蔵西	SK02	土師器	かわらけ	反	14.0	2.6	8.0	にぶい橙	ロクロ成形
114	343	19	御城米蔵西	SK02	瓦器	火鉢	反		(7.9)	22.8	黄灰	脚付き
114	344	19	御城米蔵西	SK02	土製品	羽口		5.7	(4.9)		にぶい橙	
114	345	10	御城米蔵西	SK03	陶器	天目茶碗	反	11.5	(4.5)		褐	
114	346	10	御城米蔵西	SK03	陶器	天目茶碗	反	11.2	(2.7)		にぶい黄褐	
114	347	10	御城米蔵西	SK03	陶器	菊皿	反	12.0	(3.0)		灰黄	貫入、登窯第２段階第５小期、美濃Ⅲa期 瀬戸美濃
114	348	10	御城米蔵西	SK03	陶器	鉄絵鉢	反	30.2	(4.6)		灰白	登窯第１段階第３・４小期
114	349	10	御城米蔵西	SK03	磁器	広東碗	反	11.3	(3.6)		白	呉須模様
119	350	19	御城米蔵西	SP04	土師器	かわらけ		7.6	1.4	4.4	にぶい橙	ロクロ成形
119	351	11	御城米蔵西	包含層	土製品	手づくね壺		2.0	2.3		橙	胴径3.1㎝
119	352	19	御城米蔵西	包含層	土師器	かわらけ		10.4	1.7		にぶい黄橙	非ロクロ成形
119	353	19	御城米蔵西	包含層	土師器	かわらけ	反	11.0	1.7	4.2	にぶい橙	非ロクロ成形
119	354	19	御城米蔵西	包含層	土師器	かわらけ		9.8	1.8		浅黄橙	非ロクロ成形
119	355	13	御城米蔵西	包含層	土師器	かわらけ		11.2	3.0	7.7	浅黄橙	非ロクロ成形、底部スノコ痕
119	356	18	御城米蔵西	包含層	土師器	かわらけ	反	15.2	3.0	7.5	灰白	ロクロ成形
119	357	23	御城米蔵西	包含層	土師器	かわらけ	反	12.8	3.1	6.8	にぶい橙	ロクロ成形、口縁部スス付着、灯明皿
119	358	11	御城米蔵西	包含層	土師器	かわらけ	反		(2.1)	6.0	橙	ロクロ成形
119	359	18	御城米蔵西	包含層	土師器	かわらけ	反	10.0	2.1	6.8	灰白	ロクロ成形
119	360	19	御城米蔵西	包含層	土師器	内耳鍋	反	28.0	(3.0)		橙	くの字形内耳鍋
119	361	20	御城米蔵西	包含層	土師器	内耳鍋	反	16.1	(4.2)		にぶい橙	南伊勢系、在地化
119	362	18	御城米蔵西	包含層	土師器	内耳鍋			(10.4)		灰黄褐	内彎形内耳鍋、内耳鍋Ｂ2類
119	363	11	御城米蔵西	包含層	土製品	土錘			3.8	1.1	橙	内径0.3㎝
119	364	11	御城米蔵西	包含層	土製品	土錘			2.8	0.9	橙	内径0.3㎝

Fig.	No.	トレンチ	地　区	遺　構	種　別	細　別	反転	口径幅(cm)	器高長さ(cm)	底径厚さ(cm)	色　調	備　　考
119	365	10	御城米蔵西	包含層	陶器	擂鉢	反		(6.8)	9.9	浅黄橙	
120	366	11	御城米蔵西	包含層	陶器	天目茶碗	反	11.8	(5.1)		褐	大窯第２段階後半
120	367	11	御城米蔵西	包含層	陶器	天目茶碗	反	11.8	(5.2)		黒	大窯第３段階前半
120	368	18	御城米蔵西	包含層	陶器	天目茶碗	反	12.9	(4.5)		黒褐	大窯第４段階後半
120	369	18	御城米蔵西	包含層	陶器	天目茶碗	反	10.7	(5.3)		暗褐	大窯第３段階、初山か
120	370	11	御城米蔵西	包含層	陶器	型打ち皿	反	11.6	(3.7)		灰白	美濃Ⅲc期
120	371	11	御城米蔵西	包含層	陶器	梅紋皿	反	9.0	(4.0)	4.0	灰白	江戸後期
120	372	22	御城米蔵西	包含層	陶器	皿	反	11.0	(1.6)		にぶい黄	釉部分はほぼ剝離、古瀬戸後期様式Ⅳ期
120	373	18	御城米蔵西	包含層	陶器	小皿	反		(1.4)	4.1	にぶい褐	削出高台、大窯第３・４段階、初山か
120	374	18	御城米蔵西	包含層	陶器	水注蓋	反		(1.2)	8.5	灰白	内面墨書、江戸後期、瀬戸美濃
120	375	19	御城米蔵西	包含層	瓦器	蓋	反	8.0	(1.5)		灰	最大径10.4㎝
120	376	23	御城米蔵西	包含層	陶器	鉄絵鉢	反		(3.3)	14.7	淡黄	江戸前期
120	377	19	御城米蔵西	包含層	陶器	鉄絵鉢	反	31.6	(8.0)		浅黄	登窯第１段階第３・４小期
120	378	19	御城米蔵西	包含層	陶器	擂鉢	反	39.4	(13.0)		褐	登窯第２段階第６小期後半、瀬戸
120	379	23	御城米蔵西	包含層	陶器	水盤か香炉	反		(3.2)	11.1	暗オリーブ	登窯第２段階第５・６小期、美濃Ⅲ期、瀬戸美濃
120	380	22	御城米蔵西	包含層	陶器	秉燭		4.4	4.5	3.6	黒	登窯第３段階第８・９小期
120	381	11	御城米蔵西	包含層	陶器	徳利 玩具			(5.1)	3.1	オリーブ	
120	382	11	御城米蔵西	包含層	磁器	青花皿	反	12.1	(2.4)	6.2	明緑灰	漆継ぎ、景徳鎮、16C前半
120	383	19	御城米蔵西	包含層	磁器	青磁大皿	反	26.4	(4.4)		明緑灰	三脚か（痕跡あり）、初期伊万里、1620～40年代
120	384	13	御城米蔵西	包含層	磁器	水注か	反		(10.6)		白	口縁割れ、漆継ぎ、延宝様式
120	385	19	御城米蔵西	包含層	磁器	鉢か大皿	反		(3.5)	6.8	白	肥前、18C前葉
120	386	11	御城米蔵西	包含層	瓦器	蓋	反	17.0	(1.8)		暗灰	火消壺の蓋か
120	387	22	御城米蔵西	包含層	瓦器	鉢			(5.3)		灰	鉢の獣脚
120	388	5	御城米蔵西	包含層	瓦器	鉢		6.1	(9.2)		黄灰	鉢の脚か、花柄スタンプ
120	389	18	御城米蔵西	包含層	土製品	羽口		4.9	(4.3)		灰	
120	390	11	御城米蔵西	包含層	貨幣	銅銭		2.6	3.1	0.6	オリーブ灰	
121	391	18	御城米蔵西	包含層	瓦	鳥伏間瓦				2.5	灰	連珠三ツ巴紋(左巻)、瓦当復元径13㎝
121	392	3	御城米蔵西	包含層	瓦	軒丸瓦				2.3	灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)、珠文(小)23
121	393	5	御城米蔵西	包含層	瓦	鳥伏間瓦				2.0	灰	連珠三ツ巴紋(左巻)、珠文10、離型剤(砂)
121	394	23	御城米蔵西	包含層	瓦	軒丸瓦				2.3	灰	連珠三ツ巴紋(右巻き)、珠文推定10、 軒丸瓦Ⅰb類か
121	395	23	御城米蔵西	包含層	瓦	軒丸瓦					暗褐	連珠三ツ巴紋、周縁上部に穿孔×２
121	396	19	御城米蔵西	包含層	瓦	軒丸瓦					暗灰黄	桔梗紋、軒丸瓦Ⅲa類、17C中頃
121	397	13	御城米蔵西	包含層	瓦	軒丸瓦				1.8	灰	無字銭紋、軒丸瓦Ⅳ類、17C後半
121	398	10	御城米蔵西	包含層	瓦	軒平瓦				2.2	灰	三葉紋３反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅰ類
121	399	19	御城米蔵西	包含層	瓦	軒平瓦					灰	宝珠紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅲ類
121	400	23	御城米蔵西	包含層	瓦	軒平瓦				2.2	にぶい黄	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴa類、 顎貼付技法
121	401	11	御城米蔵西	包含層	瓦	軒平瓦				2.1	灰	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴb類
121	402	23	御城米蔵西	包含層	瓦	軒平瓦				1.6	灰	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴb類 顎貼付技法
121	403	26	御城米蔵西	包含層	瓦	軒平瓦					浅黄	三葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅴb類
121	404	11	御城米蔵西	包含層	瓦	軒平瓦				18.0	灰	五葉紋２反転均整唐草紋、軒平瓦Ⅵ類
121	405	23	御城米蔵西	包含層	瓦	軒平瓦				2.0	黄灰	顎貼付技法、軒平瓦Ｚ類
121	406	11	御城米蔵西	包含層	瓦	軒桟瓦				1.7	灰	三ツ巴紋(右巻き)、軒桟瓦Ｚ類か
121	407	10	御城米蔵西	包含層	瓦	軒桟瓦				2.3	灰	菊紋唐草紋か、軒桟瓦Ⅱ類か
122	408	23	御城米蔵西	包含層	瓦	丸瓦		13.0	26.5	2.2	灰	コビキＢ、面取り１回、布目４本/㎠、吊紐痕か
122	409	23	御城米蔵西	包含層	瓦	道具瓦か				1.9	灰	
122	410	23	御城米蔵西	包含層	瓦	目板瓦		29.6		1.9	灰	釘穴○×２、左重ね、水切り、面取り短い

図　版
PLATE



本丸北東隅石垣（北東から）

PL.2

本丸北東隅石垣　石垣崩落痕跡検出状況（北西から）

1　本丸北東隅石垣検出状況（北東から）

2　北面石垣の詳細（北から）

1　石垣背面構造検出状況（南西から）

2　石垣隅角部構築状況（北から）

3　石垣隅角部構築状況（東から）

4　北面石垣構築状況（北東から）

1　石垣崩落痕跡検出状況（西から）

2　崩落痕跡上かわらけ(2)出土状況（南西から）

3　瓦集積１（SX18）検出状況（東から）

PL.6

本丸東側調査状況（35 次調査：北東から）

1　本丸東堀跡（SD01）検出状況（南東から）

2　本丸東石垣崩落痕跡検出状況（南東から）

3　本丸東石垣崩落痕跡検出状況（南から）

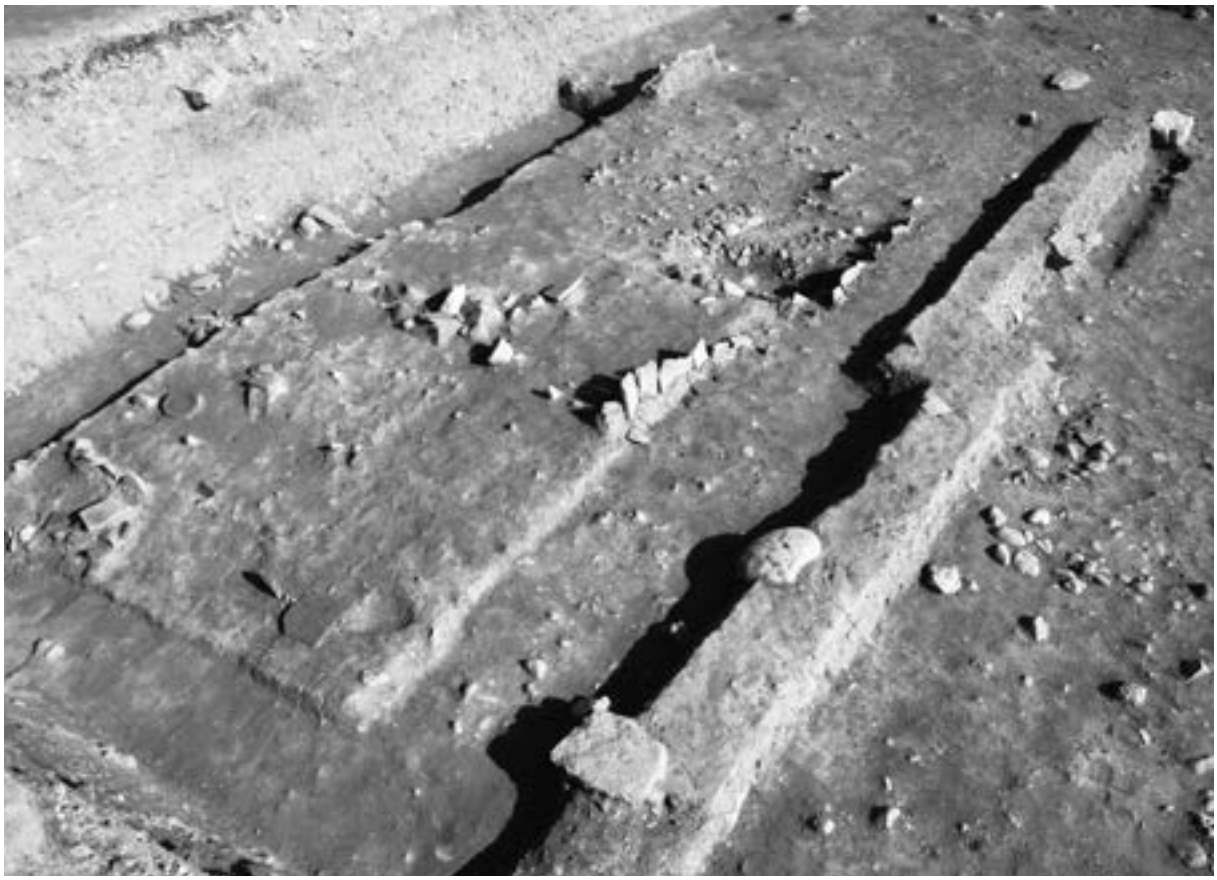
1　本丸東堀跡（SD01）検出状況（北東から）　※中層において瓦集積２（SX20）検出

2　御誕生場・二の丸間の段差検出状況（南東から）

3　７次調査検出井戸（SE01）再検出状況（南西から）

二の丸御殿跡検出状況（北東から）

1　二の丸御殿跡　調査区全景(南から)



2　礎石・雨落ち溝検出状況(南西から)

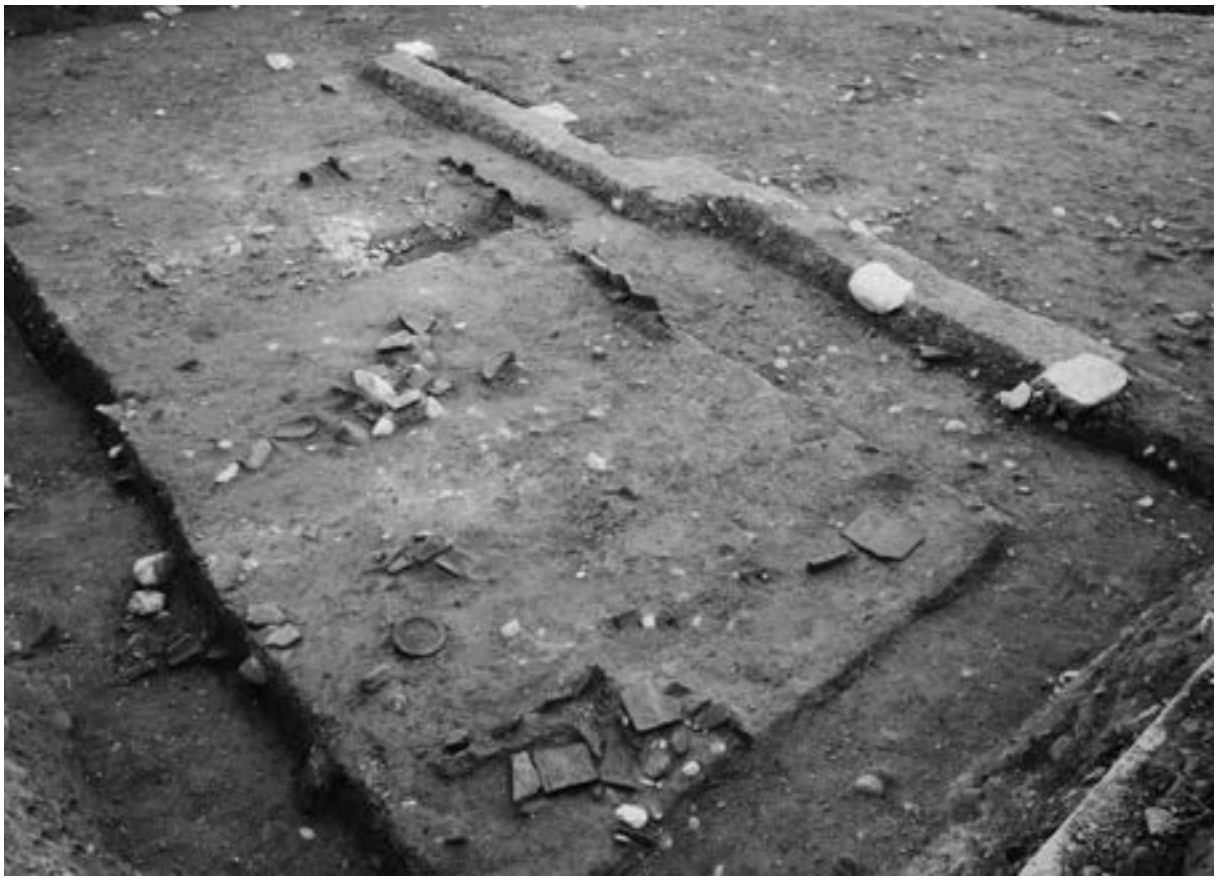
1　二の丸御殿跡　礎石検出状況（南東から）

2　礎石及び土層堆積状況（東から）

3　礎石据付穴 1 検出状況（東から）

4　礎石据付穴 11 検出状況（南から）

1　雨落ち溝・瓦集積 3（SX19）検出状況（南東から）



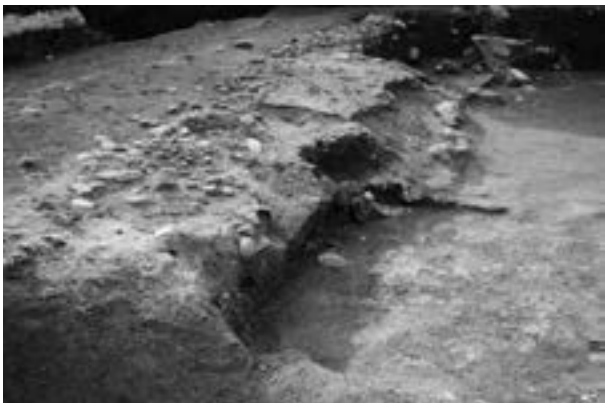
2　瓦集積 3（SX19）検出状況（北西から）

二の丸御殿跡　庭園遺構検出状況（北東から）

1　庭園遺構　枯池内遺物出土状況（南西から）

2　庭園遺構検出状況（南東から）

1　庭園遺構　景石検出状況（北から）



2　庭園遺構　護岸石組み痕跡検出状況（東から）

3　庭園遺構上面　瓦集積 5（SX16）検出状況（北から）

4　庭園遺構　下層遺構（SD04）検出状況（南から）

5　庭園遺構　下層遺構検出状況（北から）

小穴列（SA01・SA02）検出状況（北東から）

瓦集積 15（SX09）検出状況（北東から）

1　瓦集積 7（SX13）検出状況（北西から）

2　瓦集積 8（SX03）検出状況（南西から）

3　瓦集積 9（SX02）検出状況（北東から）

4　御城米蔵西堀跡（SD02）検出状況（北東から）

5　瓦集積 11（SX17）検出状況（西から）

6　御城米蔵　遺物出土状況（南西から）

1　SD03 検出状況（西から）

2　SD05 検出状況（南東から）

3　礎石 7・礎石 8 検出状況（南東から）

4　瓦集積 12（SX12）検出状況（北東から）

5　瓦集積 12（SX12）鬼瓦（274）出土状況（北西から）

6　瓦集積 13（SX05）検出状況（南東から）

1　瓦集積 15（SX09）検出状況（北東から）

2　瓦集積 15（SX09）検出状況（南東から）

3　瓦集積 20（SX07）検出状況（北西から）

4　瓦集積 19（SX14）検出状況（北西から）

5　対象地北東隅（42 トレンチ）遺構検出状況（北西から）

6　対象地北東隅（44 トレンチ）遺構検出状況（北から）

主要出土遺物

2

3

4

4

5

9

6

12（瓦集積１）

18（瓦集積１）

20（瓦集積１）

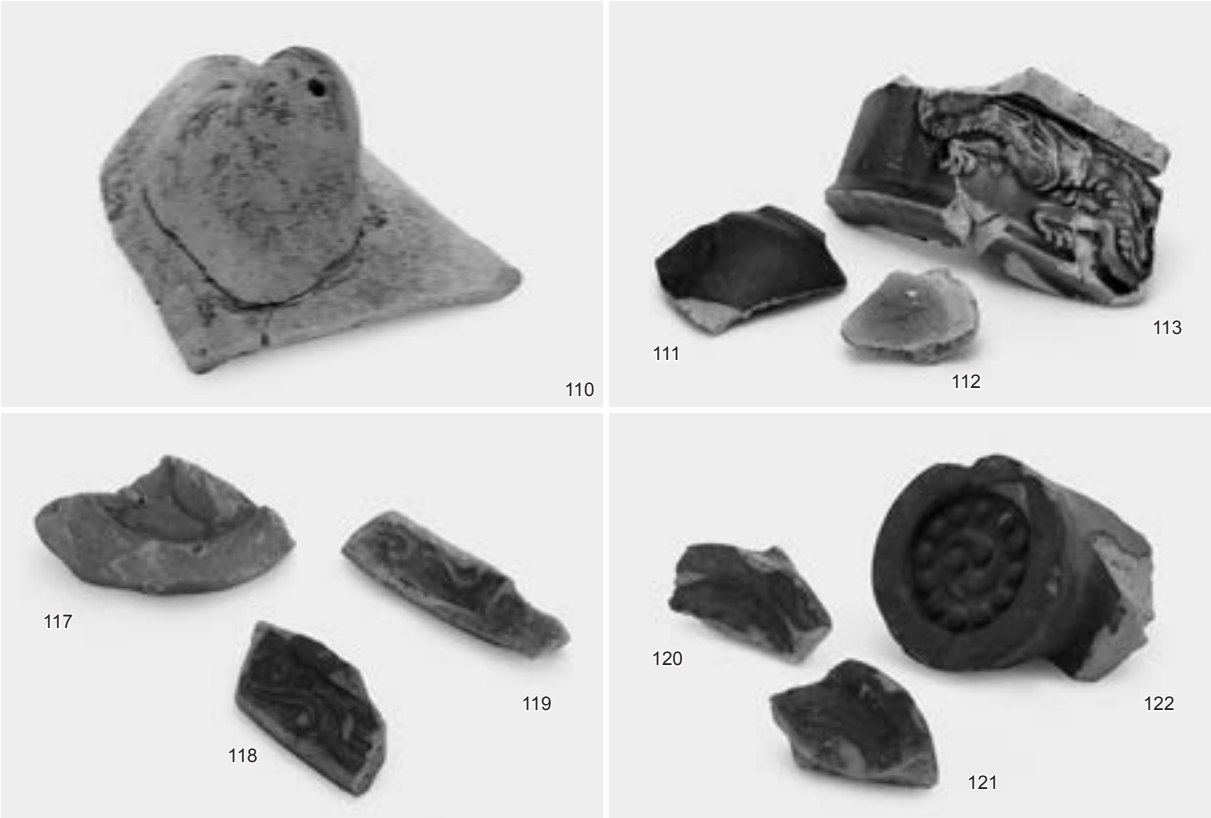
本丸北東隅石垣周辺出土遺物

1　本丸東堀跡（SD01）出土遺物

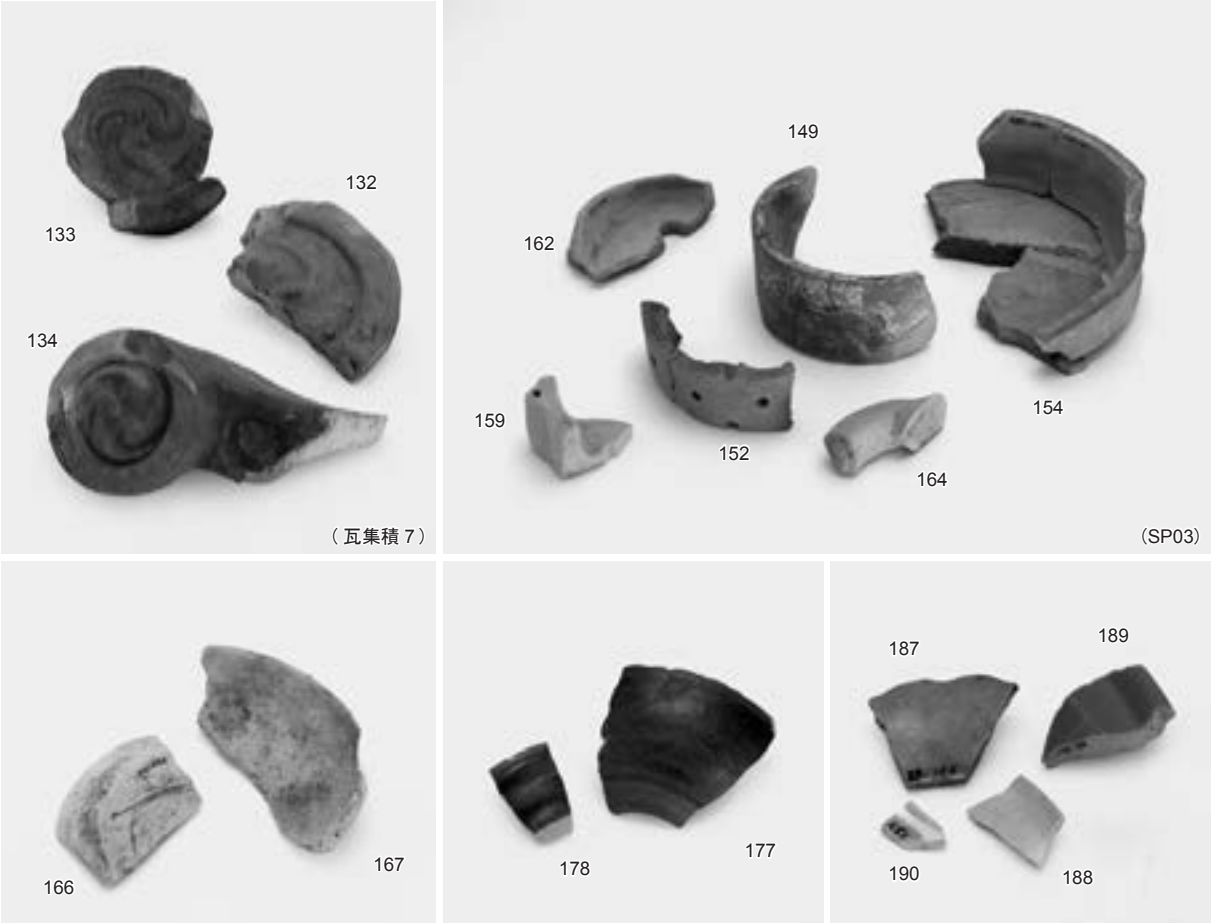
2　瓦集積2（SX20）出土遺物

1　中世遺構出土遺物

2　二の丸御殿跡出土遺物



1　二の丸御殿跡庭園遺構出土遺物

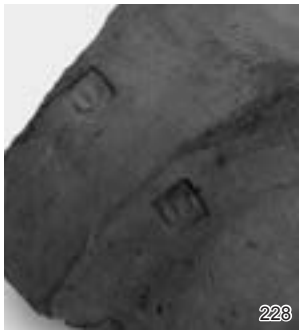


2　二の丸御殿域出土遺物

224
221
222
（瓦集積 11 ）

202
（SD02）

228
（瓦集積 11 ）


228

216
217
（瓦集積 11 ）

219
220
218
（瓦集積 11 ）

262

御城米蔵等出土遺物

主要出土鬼瓦

1　瓦集積15出土繋九目結紋鬼瓦(291)表面

2　瓦集積15出土繋九目結紋鬼瓦(291)裏面

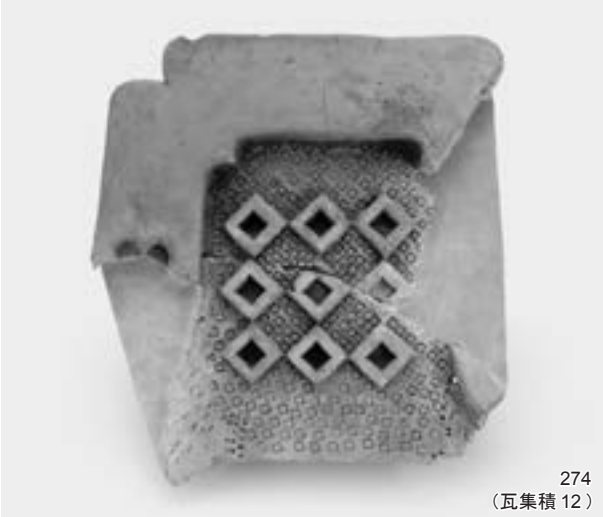
1　瓦集積15出土繋九目結紋鬼瓦(292)表面

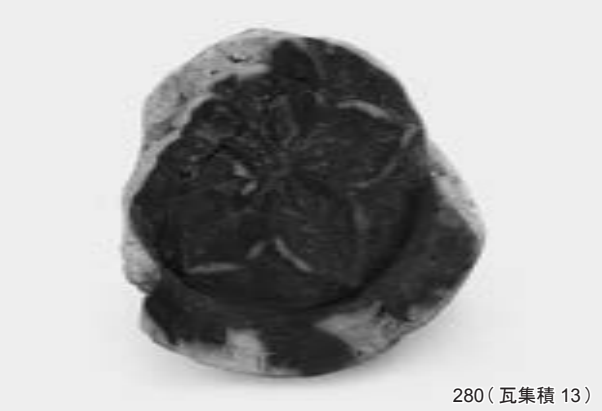
2　鬼瓦(292)裏面の龍頭

3　鬼瓦(291)底面

4　瓦集積15出土軒平瓦

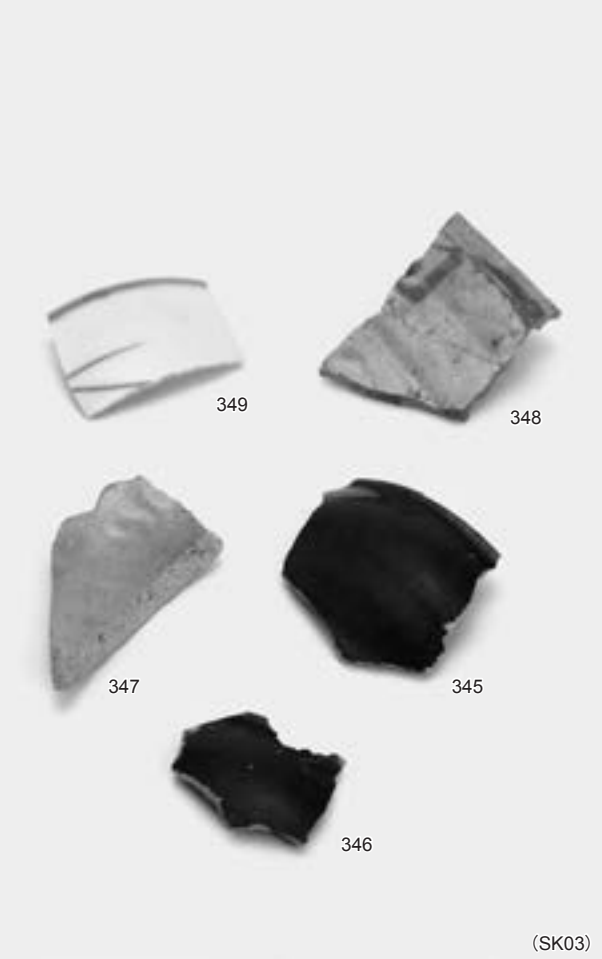
1　SD03 出土遺物





2　瓦集積出土遺物

1　瓦集積19出土遺物



2　御城米蔵西出土遺物（１）

352

380

382

388

384

397
396

御城米蔵西出土遺物（２）

報　告　書　抄　録

書名（ふりがな）	浜松城跡 17　（はままつじょうあと 17）
編著者名	和田達也　長谷川敦章　坂下俊介　白鳥嶺
編集機関	浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652　浜松市中区元城町103-2 TEL（053）457-2466
発行機関	浜松市教育委員会
発行年月日	2023年３月17日

遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浜松城跡（はままつじょうあと）	静岡県 浜松市 中区 元城町	22131	01-04-14	34度 42分 45秒	137度 45分 30秒	(26次調査) 2019年６月20日～ 2020年３月19日	2,000㎡	確認調査
						(35次調査) 2020年６月１日～ 2021年３月19日	1,500㎡	
						(43次調査) 2021年６月１日～ 2022年３月18日	1,088㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浜松城跡	城跡	戦国時代 安土桃山時代 江戸時代 明治・大正時代	石垣 堀跡 瓦集積 柱穴 土坑 溝跡 礎石 庭園	土師質土器 瓦 陶磁器	本丸北東隅石垣と、本丸東堀跡の検出により本丸の規模が判明。 二の丸御殿の建物基礎及び庭園遺構を検出。

要約

浜松城公園長期整備構想に関わり、令和元年（2019）から３年間にわたり旧元城小学校跡地を対象として、遺跡の残存状況や内容を把握するための確認調査を実施した。

本丸、御誕生場、二の丸、御城米蔵、御城米蔵西をはじめとした近世浜松城の構造や特徴を示す石垣や堀跡、段差、二の丸御殿の礎石や礎石据付穴、庭園、瓦集積等の遺構や遺物が良好な状態で残存していることが明らかになった。また、近世浜松城の遺構の下層には、引間城の時代を含めた戦国時代以前の浜松城に関わる遺構や遺物が埋没していることが明らかになった。

浜松城跡 17

2023 年 3 月 17 日

発　　行　浜松市教育委員会

編集　浜松市市民部文化財課
（教育委員会の補助執行機関）
〒430-8652　浜松市中区元城町103-2

印　　刷　中部印刷株式会社

Hamamatsu Castle

The 26th·35th·43rd excavation report

A Report of Archaeological Investigation
on 16th-19th Century Castle in Western Shizuoka,Japan

March,2023

Hamamatsu Municipal Board of Education